

モンゴル帝国の遺産

【学部生】

高秀柄、吉川侑希

【大学院生】

二本柳誠一、佐々木真友美、菅沼孝陽、杉由紀、倉元貴子、
阿達敏洋、禹幸玉、山中眞太郎、佐藤力、小柳愛理、須貝直行

【指導教員】

金美徳、平石隆司

2025 年 1 月 25 日

はじめに

インターゼミ・アジアダイナミズム班は、2017 年より、「モンゴル帝国」の歴史を考察することによって、激動の現代世界を読み解き、未来に向けた示唆、視点を得るべく研究を続け、本年度で 8 年目となった。

ゼミ生が議論し、執筆している間も、ロシア・ウクライナ、イスラエル・パレスチナでは戦闘が続き、おびただしい数の尊い命が失われた。また、2024 年は世界的な「選挙の年」であり、日本を含め、各国で重要な選挙が行われた。多くの国で「移民」が争点となり、その排斥や受け入れ停止を掲げる政党が躍進したり、政権を獲ったりした。このような「右傾化」「排他的なナショナリズム」「ポピュリズム」や、「戦争」「紛争」は、民族、宗教の違いに対する軋轢や不寛容にひとつの原因が求められる。

13 世紀にユーラシア大陸を支配したモンゴル帝国は、少数民族が多民族を包含した広域支配を実現した、歴史上稀有な統治機構である。そこでは多民族、多宗教がひとつの大きな枠組みを形成するために、様々な工夫がなされた。そのメカニズムを解明するべく、2017 年より始めた研究であるが、年々その重要性は高まっているというべきであろう。

各年の論文テーマは、2017 年度が「モンゴル帝国とユーラシア興隆史」、2018 年度が「モンゴル帝国の興隆と衰退」、2019 年度が「モンゴル帝国と朝鮮半島」、2020 年度が「パンデミックのユーラシア史とポストコロナ～モンゴル帝国史を起点としたペスト(黒死病)の欧州と日本の中近世史～」、2021 年度が「倭寇とモンゴル帝国史～海洋の渡海民と大陸の遊牧民～」、2022 年度が「華人華僑とモンゴル帝国史」である。この活動は、2017 年度から 2022 年度の論文をもとにした書籍「モンゴル帝国とユーラシア史」として、2023 年 3 月に多摩大学出版会より出版された。2023 年度のテーマは「モンゴル帝国の衰退から見る 宗教と統治～ロシアと中国の視点から～」であった。

本年度は、前年度の研究成果を受けて、衰退したモンゴル帝国がユーラシア各地に残した「遺産」にスポットライトを当てた。その結果、研究対象の領域は、北東アジア、中央アジアから、西アジア、インド、トルコにまで及んだ。ゼミ生一同、あまりの広さに驚きつつ、それぞれに分担したテーマを選んで探求し、全体で議論を重ねたが、モンゴル帝国の遺産が後世、そして現代に与えた影響の大きさと重要性にあらためて気づかされる結果となった。

アジアダイナミズム班では、これからもグローバルな視点で歴史を見つめ、理解し、歴史が現代にどのような影響を与えたかを研究することによって、ゼミ生それぞれが現代社会の課題解決に貢献することを目指していきたい。

目 次

はじめに.....	232
目 次.....	233
図目次.....	240
表目次.....	242
研究目的・方法	243
研究背景.....	243
第Ⅰ部 モンゴル帝国とティムール朝.....	247
第1章 モンゴル帝国からティムール朝に至る統治システムの変遷	247
第1節 モンゴル帝国での支配体制	247
第1項 遊牧民集団体制	247
第2項 中央政府に存在したケシク(近衛集団)	248
第3項 維持されるモンゴル共同体	248
第2節 モンゴル帝国での徴税・財政体制	249
第1項 徴税体制	249
第2項 税制の特徴.....	249
第3項 銀貨の発行.....	250
第4項 塩による財政運営	250
第3節 ティムール朝への継承	252
第1項 モンゴル帝国からティムール朝への変遷	252
第2項 ティムール朝税制の継承と発展	253
第3項 遊牧民と定住民への統治システムの違い.....	253
第4項 塩の取引券価値が下がった時の影響.....	253
第4節 結論.....	254
第2章 中央・西アジアにおけるモンゴル系の支配と現代イランへの影響の有無	256
第1節 はじめに	256
第2節 イル・ハン朝(1260～1353 年).....	256
第1項 イル・ハン朝の建国と、モンゴル帝国内の位置付け	257
第2項 イル・ハン朝の支配の特徴.....	258
第3項 イル・ハン朝の文化とラシードウッディーンの集史	258
第4項 「イランの地」という領域概念の定着	259

第5項 イル・ハン朝の支配構造の変化	260
第3節 ティムール朝 (1370～1507 年).....	260
第1項 ティムール朝の建国と統治の特徴.....	260
第2項 ティムール朝時代の文化	263
第4節 サファヴィー朝 (1501 年～1736 年).....	264
第1項 イスラム神秘主義の教団から王朝へ	264
第2項 サファヴィー朝はどのように王権を強化したか	265
第3項 サファヴィー朝に見られるモンゴル支配の影響.....	267
第5節 遊牧民支配という視点から見るイラン地域.....	268
第6節 近代以降のイランにおけるモンゴルの影響の有無.....	268
第7節 結論.....	270
第Ⅱ部 モンゴル帝国とムガル帝国	272
第1章 ムガル帝国創設者バーブルから見るインドとモンゴル帝国	272
第1節 バーブルの回想録と人物像	272
第2節 インド征服の背景	275
第1項 中央アジアでの拠点喪失と避難先の必要性.....	275
第2項 インドの経済的な豊かさと潜在的な豊かさ	276
第3項 イスラム教徒王国の救援要請.....	277
第4項 ティムールの遺産の再興	278
第3節 ムガル帝国成立にみるモンゴル帝国の影響	279
第1項 血統的なつながりとムガルという呼称	279
第2項 モンゴル帝國的支配の踏襲.....	280
第4節 結論.....	281
第2章 宗教政策から見るムガル帝国の繁栄と衰退	283
第1節 アクバル帝	283
第2節 アウラングゼーブ帝.....	284
第3節 宗教政策	284
第4節 結論.....	286
第3章 モンゴル帝国がムガル帝国に与えた影響.....	287
第1節 モンゴル帝国とムガル帝国の宗教政策の共通点	287
第2節 ムガル帝国の統治に与えた血縁の影響	289
第3節 ムガル帝国における法制度の多様性と統一	290

第4節 タージ・マハルから見るモンゴル帝国との文化的融合	292
第5節 ムガル帝国の衰退	294
第1項 ムガル帝国の衰退要因	294
第2項 インド大反乱(セポイの乱)	295
第6節 現代のモンゴルとインドの関係	297
第1項 ソンボ文字から見るモンゴルとインドの関係	297
第2項 仏教文化を通じたモンゴルとインドの人的交流	298
第3項 モンゴルの第三の隣国としてのインド	298
第7節 結論	299
第Ⅲ部 モンゴル帝国とオスマン帝国	301
第1章 モンゴル帝国から逃げて小アジアにできたオスマン・トルコの繁栄と海運	301
第1節 オスマン帝国	301
第1項 概要	301
第2項 アジアからのトルコ民族の移動	302
第3項 モンゴル帝国の勃興とトルコ民族	303
第4項 モンゴルによる支配と影響	303
第5項 モンゴルの影響とトルコ系国家の成立	303
第6項 オスマン帝国の成立の背景	303
第2節 オスマン帝国の特徴	304
第1項 オスマン帝国の人種	304
第2項 非世襲・能力重視の人材登用制度	305
第3項 オスマン帝国の背景	306
第4項 オスマン帝国の国家形態	307
第3節 海上帝国としてのオスマン帝国	307
第1項 海運の発展要因	307
第2項 大航海時代の影響	308
第3項 貿易と海のシルクロード	309
第4項 海上帝国としてのオスマン帝国	309
第5項 海運と海軍の相互作業	310
第4節 結論	311
第2章 オスマン帝国の起源と衰退及び文化形成	313

第1節 オスマン帝国の歴史、時代のうねり	313
第1項 オスマン帝国の誕生	313
第2項 帝国としての基盤と繁栄	313
第3項 帝国の終焉	314
第2節 文化形成とその歴史	315
第1項 宗教の自由化	315
第2項 中央集権体制	315
第3項 スーフィズム(イスラム神秘主義)	316
第3節 結論	317
第IV部 モンゴル帝国と中国	318
第1章 中国から見るモンゴル帝国の遺産	318
第1節 中国地域統一におけるモンゴル帝国の意義	318
第1項 元朝は、「中華」という地域において、初めて統一した国家である。	318
第2項 元の国境管理政策は、中国歴史上初めての統一政策である	320
第2節 多宗教・多民族融合におけるモンゴル帝国の意義	322
第1項 元朝の多宗教政策からなる中国のイスラム教	322
第2項 元朝の多民族政策	324
第3項 元朝第一階級の民族『モンゴル族』とその後	325
第4項 元朝第二階級の民族『回回族』とその後	326
第3節 中国の文化・貿易の交流におけるモンゴル帝国の意義	328
第1項 中国文化と西アジア文化の交流と発展	328
第2項 言語の交流・貿易交流	329
第4節 結論	331
第2章 モンゴル帝国と清朝共通の統治理念としてのチベット仏教	332
第1節 チベット仏教の成立と展開	332
第1項 チベットの地勢と古代インド神話におけるチベット観	332
第2項 チベット仏教の揺籃としての古代チベット帝国	332
第3項 後伝チベット仏教と四大宗派の成立	334
第4項 インドにおける密教の成立とイスラムによるインド仏教の滅亡	334
第2節 モンゴル帝国とチベット仏教	335
第1項 モンゴル帝国の拡大とチベット仏教	336
第2項 クビライ・ハーンとパクパの師弟関係	336

第3項 アルタン・ハーンとダライ・ラマ3世によるモンゴルのチベット仏教化	338
第3節 清朝とチベット仏教	339
第1項 第2代皇帝ホンタイジのモンゴル継承	340
第2項 第3代順治帝とダライ・ラマ5世の会見	341
第3項 ダライ・ラマの廃立に苦慮した第4代康熙帝	343
第4項 華夷思想を論破した第5代雍正帝の「大義覺迷録」	344
第5項 「文殊菩薩皇帝」としてモンゴルと漢地に君臨した第6代乾隆帝	348
第4節 チベット仏教と現代の中華世界	350
第1項 清朝崩壊後のモンゴルとチベット仏教	351
第2項 中華民国の成立とチベット	352
第3項 亡命ダライ・ラマ政権と中華人民共和国	353
第5節 結論	354
第3章 モンゴル帝国の軍事力・経済政策が後世に与えた影響	356
第1節 モンゴル帝国がユーラシア世界から吸収した遊牧騎馬国家の歴史	356
第1項 遊牧騎馬国家の始まり	356
第2項 「陸と騎射の時代」の始まり	357
第2節 モンゴル帝国が歴代の遊牧国家から継承し進化させた軍事力、経済政策	360
第1項 軍事拡大の時代「陸の帝国」	361
第2項 経済・経営の時代「陸海の帝国」	363
第3節 異民族国家モンゴル帝国の後継、清朝の支配が現代の中国に与えた影響	365
第1項 清朝の領土拡大が後世に与えた影響	366
第2項 「海と火器の時代」における清朝の遺産	369
第4節 結論	372
第V部 モンゴル帝国とシルクロード	374
第1章 モンゴル帝国の交易ネットワークと陶磁器の発展	374
第1節 世界の羨望の的であった中国の磁器	374
第1項 中国で作られる磁器とはどのようなものだったのか	374
第2項 中国磁器の原料「カオリン」	375
第2節 世界のやきもの作りの東西の柱	377
第3節 モンゴル帝国期の中国陶磁の変化	378

第1項	モンゴル帝国(元朝)以前の中国陶磁	378
第2項	青磁と龍泉窯	378
第3項	景德鎮窯	381
第4項	モンゴル帝国(元朝)支配後の中国磁器の変化	383
第5項	青花磁器の誕生	385
第4節	中国と世界の陶磁器を変える契機となったモンゴルの支配	389
第1項	海の道(「陶磁の道」「海のシルクロード」)とモンゴル帝国(元朝)以前の陶磁流通	389
第2項	血縁が関わっていたモンゴル帝国期の陶磁流通の変化	390
第5節	ヨーロッパでの磁器の発展	392
第1項	欧州での中国趣味(シノワズリー、チャイニーズ・マニア)の背景 ..	392
第2項	中国磁器の輸出の変化	392
第3項	中国趣味(シノワズリー、チャイニーズ・マニア)	393
第4項	ついにマイセンで磁器が作られる	393
第6節	モンゴル帝国の遺産としての陶磁器	395
第7節	結論	395
第2章	シルクロードの歴史から見るツーリズムの起源	397
第1節	シルクロードの歴史	397
第1項	はじまり	398
第2項	突厥時代からイスラム化	398
第3項	モンゴル帝国時代	398
第4項	ティムール朝時代	399
第2節	シルクロード貿易	400
第1項	貿易品	400
第2項	ソグド人	400
第3項	キャラバン商人	400
第4項	恩恵	402
第5項	終着点	403
第3節	モンゴル帝国の遺産とツーリズム	403
第1項	モンゴル帝国の遺産	403
第2項	ツーリズムの起源	405
第4節	結論	406

第3章 モンゴル帝国の食文化	407
第1節 モンゴル料理の特徴.....	407
第1項 「白い食べ物」-乳製品.....	407
第2項 「赤い食べ物」-肉製品.....	407
第3項 香辛料.....	408
第4項 その他の食材.....	408
第2節 モンゴル帝国の食生活の特徴.....	409
第1項 動物源主体の食生活.....	409
第2項 草原での農耕作物.....	409
第3項 宮廷料理.....	410
第3節 周辺諸国の料理の特徴.....	410
第1項 ムガル帝国の料理(北インド料理).....	410
第2項 オスマン帝国料理(トルコ料理).....	411
第4節 三か国料理の共通性と相違性.....	412
第5節 その他エリアに与えた影響.....	413
第1項 朝鮮半島での肉食の普及.....	413
第2項 ヨーロッパの食文化への影響.....	413
第3項 日本への食文化の影響.....	413
第6節 結論.....	413
おわりに	414
フィールドワーク記録	416
フィールドワーク(1):モンゴル大使館	416
1) 開催日・場所.....	416
2) 内容.....	416
フィールドワーク(2):中央ユーラシアにおけるテュルク・モンゴル系遊牧諸部族の歴史と現在	421
1) 開催日・場所.....	421
2) 内容.....	421
3) Q&A セッションの質問と回答.....	423
4) 資料「中央ユーラシアにおけるテュルク・モンゴル系遊牧諸部族の歴史と現在」.....	425
参考文献一覧	431
【書籍】	431

【論文】.....	434
【Web】.....	437
最終発表スライド.....	440
執筆担当.....	458
謝辞.....	459

図目次

図 1 アジアダイナミズム班 2024 年度 論文テーマ「モンゴル帝国の遺産」.....	243
図 2 千戸制 モデル図.....	248
図 3 イル・ハン国 額面 2 ディルハム(労働者の日当レベル).....	250
図 4 モンゴル時代における銀の還流.....	251
図 5 1287 年発行の紙幣 元鈔.....	252
図 6 イラン地域の政権の推移.....	256
図 7 ティムール朝の最大時の版図.....	262
図 8 アクバル帝 (Emperor Akbar, 1556-1605).....	288
図 9 Fatāwā al-Hindiyya.....	292
図 10 タージ・マハル.....	293
図 11 インド大反乱(セポイの反乱)150 年の切手.....	296
図 12 ソヨンボ文字があしらわれたモンゴル国旗.....	297
図 13 オスマン帝国とサファヴィー朝の最大領域地図.....	302
図 14 オスマン帝国の最強軍隊イエニチェリ.....	306
図 15 中国歴史上秦、西漢、唐、元、明、清時代の領域.....	321
図 16 中国の歴代王朝変化.....	322
図 17 ラサ・ポタラ宮 ソンツェンガムポ像.....	333
図 18 パクパ像.....	338
図 19 アルタン・カーン像.....	339
図 20 順治帝とダライ・ラマ 5 世の会見図.....	343
図 21 チベット僧(ラマ)姿に扮した雍正帝像.....	347
図 22 承德市に乾隆帝が築いた「普陀宗乘之廟」.....	349
図 23 「普陀宗乘之廟」が模したラサ・ポタラ宮.....	349

図 24 「文殊菩薩皇帝」としての乾隆帝像.....	350
図 25 ボグド・ハーン.....	352
図 26 横浜中華街「関帝廟」.....	360
図 27 漢、唐、清の貨幣.....	365
図 28 カオリンの化学式.....	375
図 29 カオリンが産出する景德鎮の高嶺山.....	376
図 30 カオリンが産出する地盤の様子.....	376
図 31 重要文化財 青磁下蕪瓶（せいじしもかぶらへい）、龍泉窯、南宋（12～13 世紀）、高 23.1cm.....	380
図 32 重要文化財 青磁鳳凰耳花生（せいじ ほうおうおみみはないけ）、龍泉窯、 南宋（13 世紀）、高 28.8cm.....	381
図 33 白磁刻花牡丹文盤、景德鎮窯、北宋（11-12 世紀）、高 3.0cm、口径 24.2cm、底径 12.5cm.....	382
図 34 国宝・飛青磁花生（とびせいじ はないけ）、龍泉窯、元、14 世紀、高 27.4cm	383
図 35 青磁唐草文馬上杯（せいじからくさもんばじょうはい）、龍泉窯、元～明（14 ～15 世紀）、高 13.0 cm、東京国立博物館蔵.....	384
図 36 青花龍文象耳瓶、元、ロンドンのデイヴィッド財団蔵.....	386
図 37 青花騎馬人物文壺、景德鎮窯、元.....	387
図 38 青花瓜竹葡萄文盤、元、上海博物館.....	387
図 39 釉裏紅 菊唐草文 玉壺春瓶、景德鎮窯、明・洪武年間（1368～1398）、高 32.2 cm.....	388
図 40 東西交流の三つの道.....	390
図 41 ブルーオニオンのケーキプレート.....	394
図 42 シルクロード.....	397
図 43 キャラバン商人.....	402
図 44 ラバト・マリクキャラバンセライの「ブハラの間」.....	403
図 45 レギスタン広場.....	404
図 46 ティラカリ・メドセレの天井.....	405

表目次

表 1 アジアダイナミズム班 2017 年～2023 年 研究テーマ	243
表 2 歴史年表 モンゴル・北東アジア史、中国史、中央・西アジア史、インド史、日本史.....	244
表 3 イル・ハン朝の歴代皇帝.....	257
表 4 ティムール朝の系譜	263
表 5 サファヴィー朝の系譜.....	266
表 6 近代以降のイランの年表.....	270
表 7 オスマン帝国の人種、宗教、職種の一覧表	305
表 8 ティムール王朝と明朝の貢物貿易の一部抜粋	331
表 9 執筆担当.....	458

研究目的・方法

1. アジアダイナミズム班が目指す論文は、歴史の視点から「現代的意義」を見出す
2. 「文献研究とフィールドワーク」を中心に研究活動を行う
3. フィールドワークは「モンゴル大使館」や「専門研究者」にヒアリングを行う

研究背景

本研究は、モンゴル帝国史の7年間の研究を背景とし、8年目の研究テーマとして、「モンゴル帝国の遺産」を研究対象とする。

表 1 アジアダイナミズム班 2017 年～2023 年 研究テーマ

年度	研究テーマ	頁数
2017	モンゴル帝国のユーラシア興隆史	107
2018	モンゴル帝国の興隆と衰退	244
2019	モンゴル帝国と朝鮮半島	80
2020	パンデミックのユーラシア史とポストコロナ	119
2021	倭寇とモンゴル帝国史～海洋の渡海民と大陸の遊牧民～	106
2022	華人華僑とモンゴル帝国史	81
2023	モンゴル帝国の衰退から見る宗教と統治	139

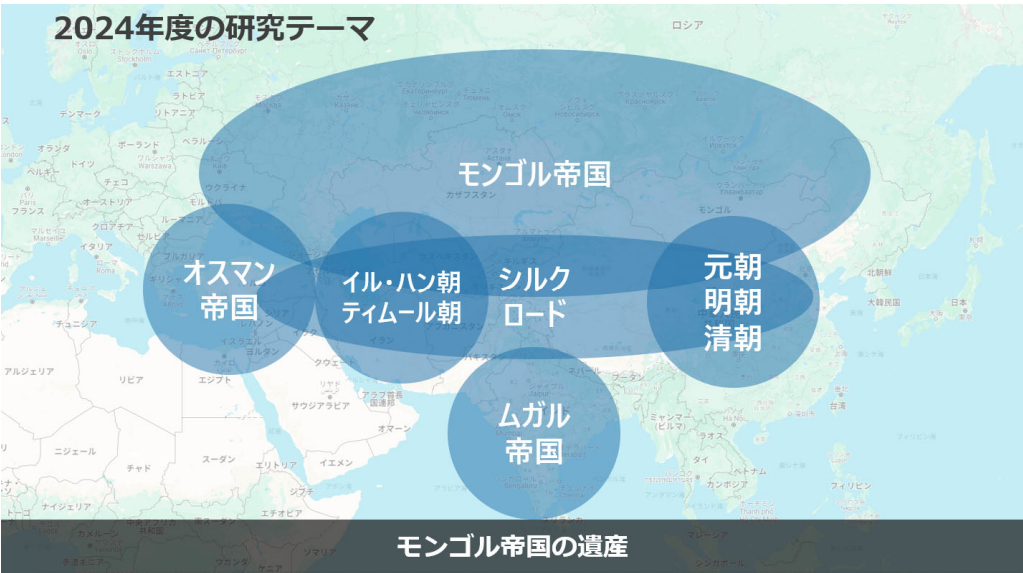


図 1 アジアダイナミズム班 2024 年度 論文テーマ「モンゴル帝国の遺産」

次に、本研究の背景となるモンゴル・北東アジア史、中国史、中央・西アジア史、インド史、日本史の歴史年表を示す。

表 2 歴史年表 モンゴル・北東アジア史、中国史、中央・西アジア史、インド史、日本史

年代	モンゴル・北東アジア史	中国史	中央・西アジア史	インド史	日本史
9-13 世紀	1155 年 チンギス・ハンの誕生 1206 年 チンギス・ハン即位 モンゴル帝国建国 1227 年 チンギス・ハン死去 1260 年 クビライ・ハーン即位	960 年 北宋建国 1126 年 金が北宋を滅ぼす 1127 年 南宋建国 1234 年 モンゴルが金を滅ぼす 1271 年 国号を元朝に改称 1279 年 元朝が南宋を滅ぼす	1260 年 チンギス・カンの孫のフレグが イル・ハン朝を建国		894 年 遣唐使廃止 1185 年 鎌倉幕府成立 1274 年 文永の役 1281 年 弘安の役
14- 16 世紀	1368 年 元がモンゴルに退く(北元) 1449 年 オイラートのエセン・カン 明の英宗を捕虜に(土木の変) 1482 年 韃靼ダヤン・ハーン即位 1542 年 韃靼アルタン・ハーン即位	1351 年 紅巾の乱 1368 年 朱元璋が 明朝を建国 1402 年 永楽帝即位(靖難の変) 1405 年 鄭和の大遠征開始 1572 年 万暦帝即位	1353 年 タガイ・テムルの死によりイル・ハン朝滅亡 1370 年 ティムールがサマルカンド征服、 ティムール朝建国 1393 年 バグダードを攻略 1398 年 デリーへ遠征 1405 年 明への遠征途中で死去 1501 年 イスマーイール 1 世が サファヴィー朝建国 1507 年 ティムール朝滅亡(モンゴル系の支配が終了)	1483 年 バーブルの誕生 1504 年 バーブルがカーブルを征服 1526 年 第 1 次パーニーパットの戦い ムガル帝国建国 1530 年 バーブル死去 1556 年 アクバル即位 1564 年 シズヤ(人頭税)廃止	1333 年 鎌倉幕府滅亡 1338 年 室町幕府成立 1350 年 倭寇が高麗の各地を襲う(倭寇の活動が激化) 1419 年 応永の外寇 1467 年 応仁の乱 1573 年 室町幕府滅亡

年代	モンゴル・北東アジア史	中国史	中央・西アジア史	インド史	日本史
			1587 年 サファヴィー朝アッバース 1 世即位		1587 年 豊臣秀吉バテレン追放令
17-18 世紀		1616 年 後金を建国(女真族ヌルハチ) 1636 年 国号を清朝に改称(ホンタイジ) 1644 年 清朝の中華支配開始 (李自成により明朝が滅亡、清の順治帝と摂政ドルゴン入関) 1662 年 康熙帝即位 1689 年 清朝とロシア：ネルチンスク条約を結び国境確定 1722 年 雍正帝即位 1735 年 乾隆帝即位 1759 年 清朝、新疆を併合	1736 年 サファヴィー朝滅亡 1796 年 ガージャール朝建国	1600 年 イギリス東インド会社設立 1605 年 アクバル死去 1658 年 シャー・ジャハーン：タージ・マハル完成 1679 年 シズヤ(人頭税)復活 1757 年 ブラッシーの戦い	1603 年 江戸幕府成立 1612 年 キリスト教禁止令 1639 年 鎖国
19-20 世紀			1804 年 第一次ロシア・ベルシャ戦争 1826 年 第二次ロシア・ベルシャ戦争	1803 年 第 2 次マラータ戦争勃発 1813 年 茶以外のインド貿易の独占権廃棄	

年代	モンゴル・北東アジア史	中国史	中央・西アジア史	インド史	日本史
	1911年 ボグド・ハーン政権誕生 1924年 モンゴル人民共和国成立 1931年 満洲事変 1939年 ノモンハン事件	1840年 アヘン戦争勃発 1850年 太平天国の乱勃発 1874年 光緒帝即位、西太后摂政 1894年 日清戦争勃発 1911年 辛亥革命 1912年 清朝が滅亡 中華民国成立 1937年 盧溝橋事件（日中戦争勃発） 1947年 国共内戦勃発 1949年 中華人民共和国成立	1828年 トルコマンチャイイ条約 1906-1911年 イラン立憲革命 1921年 コサック旅団のレザー・ハーンがクーデター 1925年 レザー・ハーンが皇帝に即位、パフラヴィー朝発足 1979年 イラン革命によりパフラヴィー朝崩壊、イラン・イスラム共和国成立	1817年 第3次マラーター戦争勃発 1853年 鉄道開通 1857年 インド大反乱（シパーヒーの反乱）ムガル帝国が事実上滅亡 1858年 イギリス東インド会社解散 インド帝国がイギリスの直接統治下に置かれる 1947年 インド・パキスタンがイギリスから独立 1950年 インド共和国が成立	1858年 日米修好通商条約 1867年 江戸幕府滅亡 1868年 明治維新 1894年 日清戦争勃発 1904年 日露戦争勃発 1910年 韓国併合 1941年 真珠湾攻撃(太平洋戦争勃発) 1945年 敗戦 1972年 日中国交正常化

第Ⅰ部 モンゴル帝国とティムール朝

第1章 モンゴル帝国からティムール朝に至る統治システムの変遷

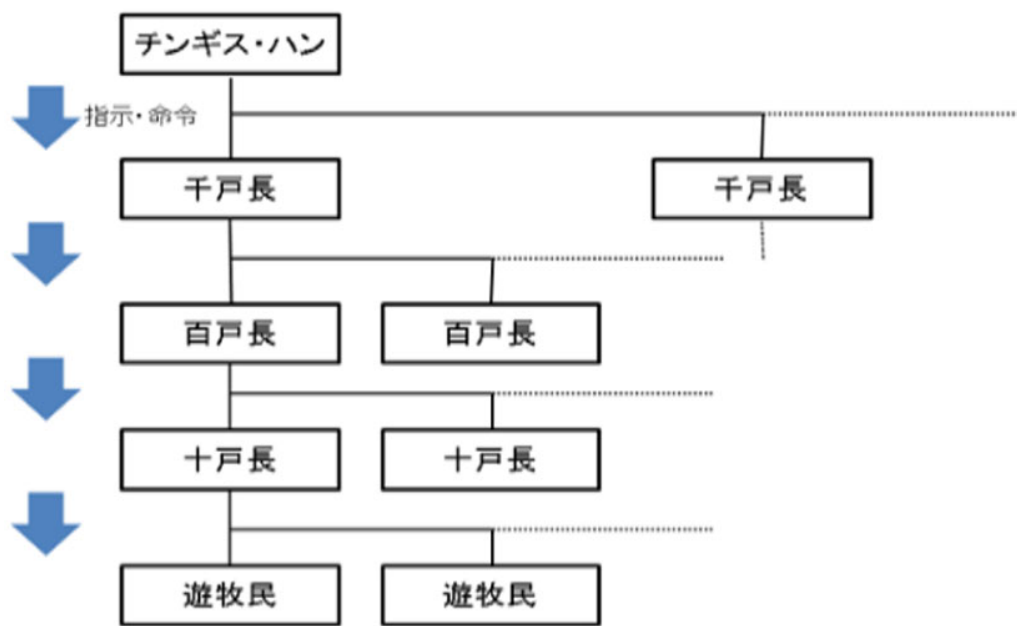
本章では、モンゴル帝国繁栄時の統治システム(行政、社会、経済)はどう形成され、ティムール朝ではどう継承されたのか考察する。

第1節 モンゴル帝国での支配体制

本節では、モンゴル帝国での支配体制を示す。モンゴル帝国における、連合国家構造はミンガン(千戸:せんこ)制度と呼ばれる騎馬集団を中心とした軍団システムを取り入れ、統治システムはケシク制度と左右両翼体制を使い、支配している。帝国の行動規範はヤサと言われる命令文で周知され、塩と銀による税收管理を有している。

第1項 遊牧民集団体制

「モンゴル帝国の組織構造は、牧民たちを95個の千戸群に再編成し、千戸の下にも、百戸や十戸という具合に、十進法体系で組織化していた。このやり方は草原国家の伝統であり、高原統合以前のタタール、メルキト、ケイレン、ナイマンなどの諸勢力でも、同じような組織になっていた。チンギスはそれを、すべて自分自身に引きつけた形で再編成し千戸長を任命した。」この新国家の構成員たちは、出身・言語・容貌が違っても、みなモンゴルであり、多民族混合のハイブリッド集団であり、いくつかのウルス(原義は「人々」、また犠牲的一族集団、のち転じて国家を指すようになる)を抱える多重構造の連合体として出発した。チンギスは、この新国家の統率と掌握方法として、周辺国家への対外戦争を繰り返す事によって、牧民たちに戦利品獲得の期待に応えることによって、心を一つにまとめた(杉山、1996、p.42)。



出所: 世界史日本史研究室 北の陣

図 2 千戸制 モデル図

第 2 項 中央政府に存在したケシク(近衛集団)

「一族にあたえられた合計二十四の千戸(ミンガン)のほかは、すべてチンギス・カンとその末子に直属した。これらもまた、東西の左右両翼に展開した。「右翼」、すなわち西方の千戸グループは、高原中央のハンガイ山からアルタイ山にかけての西部方面におかれた。両翼の中央に、チンギスに直隷する一万のケシク、すなわち近衛軍団がいたケシクとは、もともとモンゴル語で「恩寵」(神の恵)を意味し、モンゴル皇帝の恩寵をうけることから「ケシクテイ」といったとも、あるいはトルコ語で「当番、番直、宿直」などを意味し、それがモンゴルにもそのままいれられて、遊牧君主を輪番で護衛することをいったとも言われる。」遊牧民のあいだでは、離合集散が激しいだけに、いっそう人と人との結びつきが重視される。ケシクは、モンゴル新国家の各部分をチンギスにつなぎとめる重要な役目をはたした。一面でみれば近衛軍であったが、また一面では中央政府でもあり、さらに一面では幹部養成機関でもあった。(杉山、1996、p.79)

第 3 項 維持されるモンゴル共同体

「帝室をはじめ、各地にわかれすむ貴族・諸将は、だれもみな創業者チンギス・カンのさだめたおなじヤサ(ジャサ、ジャサク、ヤサクともいう。モンゴル時代ないしはその後、法令・法典・軍律などの意で使われた命令文)と伝統のなかで生きていた。」その内容は対外国書やモンゴル王家間の書簡をはじめ、各種の布告、諭旨、叙任、旅行証明、保護特

許、免税免役など多岐にわたる。ついにさだまった成文法をもつことがなかったモンゴル帝国では、こうした各種の命令を文書化して発給し、それがすべての法上の根源となった。そうした命令文書は、目でみえるモンゴル支配のかたちといってもいい。モンゴル帝国が「分裂」したといわれているクビライ時代以後も、クビライとその後継者の命令文書だけが「ジャルリク」と呼ばれていたことがはっきりとわかる。(杉山、1996、p.225)

第2節 モンゴル帝国での徴税・財政体制

第1項 徴税体制

カラ・コルムに置かれた中央政府は、華北・中央アジア・イランの三大属領に対して、それぞれ徴税業務を行う『総督府』を設置し、徴税の際の強制執行力と、徴税対象となる所轄地域の反乱防止のため、それぞれの地域の各種軍隊の上に軍政統括本部を置いていた。これがモンゴルの占領地政策である。その統治方法は、モンゴルとしてはあまり立派とはいえない程度の出自の人物を中心に、モンゴルに準じるウイグルやキタン族の有力者を幾人か、総督府の長官クラスに据える。それに中央派遣のイラン系ムスリム財務官僚を組み合わせたうえで、在地の有力者をピックアップして下部組織とした。いったん組織化された後のモンゴルの軍事力は強力であった。モンゴル帝国は、戦争を自己目的に組織が勝手に拡大再生産してゆく、一種の自動装置のようになった。人間の輪と領域は、急速に広がっていった。(杉山、1996、p.71)

第2項 税制の特徴

モンゴル帝国は、広範囲にわたる多様な文化圏を統治したため、地域ごとに異なる税制を採用した。特に、商業活動を奨励するために商人に対する優遇措置が多く見られた。例えば、商人に対する税率を低く設定し、治安を維持して貿易を奨励することで、経済的な繁栄を図った。モンゴル帝国の税収システムは、その広大な領土と多様な被支配民の経済活動に依存しており、戦利や貢納が税収の中心だったが、商業税や地租も重要な収入源となっていた。

また、シルクロードの整備はモンゴル帝国の広範囲な支配と密接に関連する。モンゴル帝国の勢力拡大に伴いシルクロード沿いの地域が安定し、交通・通信が容易となった。チンギス・ハンはシルクロードを利用して世界貿易を規制した。チンギス・カンの「Ikh Zasag」(イクザグ)法には「たとえ敵国のものであってもモンゴル人の領土を通過する貿易団は攻撃してはならない」と規定される。商人は兵士に守られ、宮殿で商品を高値で買い取られ支えられていた。(2024/8/20 駐日モンゴル大使館意見交換会より)

第3項 銀貨の発行

モンゴル帝国では、銀貨が主要な通貨として使用されていた。特に、元朝(モンゴル帝国が中国に設立した王朝)では、銀が広く普及しており、交易や税の支払いに銀貨が用いられていた。モンゴル帝国がシルクロードを支配することで、東西間の貿易が活発になり、銀は其中で重要な取引手段として機能した。中央アジアから中国に至るまで、銀は広範囲にわたって流通し、商取引の基盤となった。銀は金と同様に、価値が比較的安定しており、異なる地域や文化圏での交換手段として信頼されていた。そのため、モンゴル帝国の広大な領土内での取引において、銀が共通の価値基準として機能した。

「全領域に「オルトク」という一種の会社組織が作られ、共同出資による大きな資本力をつかって、さまざまな商業行為が行われた。オルトクは歴代のモンゴル宮廷にこいこみ、ある地方の徴税を請負、はては銀納にくるしむその納税者たちへ超高利で銀を貸しつけることまでやってのけた」。雲南地方はすでに日本を上回るユーラシア最大の金銀産地であった。そのうえ、銀については、より多くの産出が見込まれる状況であった。なお、このうち雲南では、金銀の鉱山開発が急激にすすみ、それにともなって都市が発達したと言われている。(杉山、1996、p.187)



表図柄:コーラン一節『信仰告白』

裏図柄:ガザン・ハン名銘

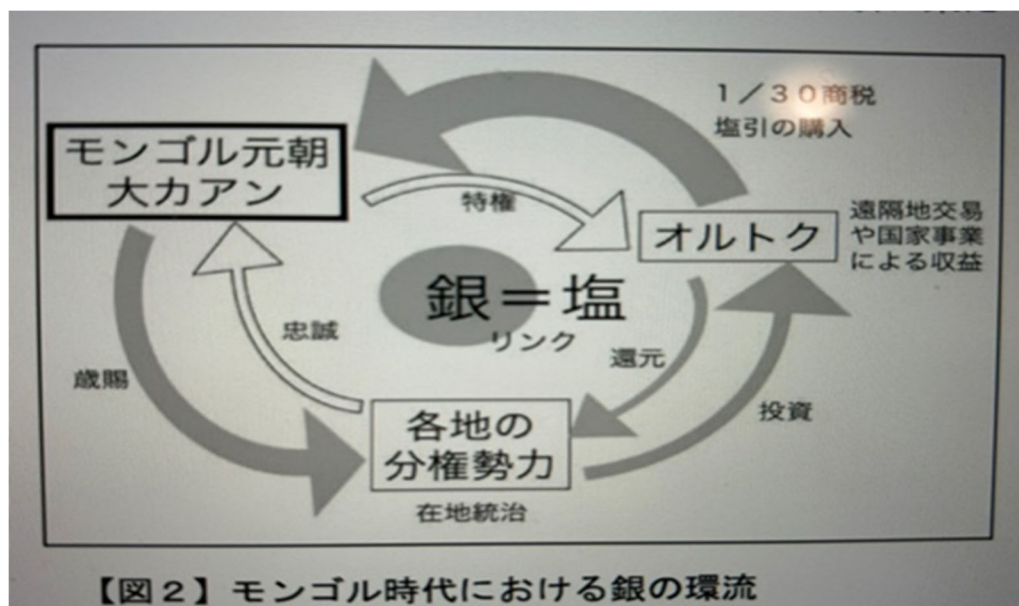
出所:ティアラインターナショナル

図3 イル・ハン国 額面2ディルハム(労働者の日当レベル)

第4項 塩による財政運営

クビライ・ハーン政権は、中国の伝統的な塩の専売制を受け継ぎ、塩を使い中央財政を支える柱と定めた。地方財政を農民からの徴税によって成り立たせる一方で、中央財政は塩の専売による収入と、その他の商税(売上税)でまかなうこととした。「クビライ政権時の財政運営は、極端に重商主義であった。中央政府の収入の80%以上が塩の専売利潤であった。ただし、政府が塩そのものを売買していたのではなく、紙に印刷された塩の引換、販売許可証である塩引(えんいん)を販売した。加えて、中央政府の収入の10%ないしは15%前後は商税であった。これを当時モンゴル語で『はんこ』を意味する『タム

ガ』といった。政府機関が商税を徴収した際、その受取証に認め印を押したため、結果として商業税を意味することになったのである。『タムガ』という言葉は、モンゴル全領域で共通の用語となった。塩引収入と商税収入を合計すると、90%から95%となってしまう。ほとんど、農業生産物に期待していないが、農業生産物から得られる税収はジャムチ（その広大な領域を管理・維持するために駅伝制）の維持費などの地方財政にふりあてられ、中央には上がってこないシステムになっていた。」中国では専売制の結果、塩は高価な商品であった。その取引券である塩引は、ある種の有価証券であり、実質上は高額な紙幣の役目をはたす。（紙に印刷された塩の引換、販売許可証）塩引の発行メリットは商人に塩引を購入させ、流通と販売の一部を外部委託させ、専売制のコストダウンを進め、ユーラシア共通通貨である銀を国庫に確保し、塩と銀を結びつけ帝国経済を維持することになる。（杉山、1996、p.280）



出所：愛媛大学教育学部紀要 第62巻, p245～253, 2015年

図4 モンゴル時代における銀の還流



出所: 日本銀行金融研究所貨幣博物館

図 5 1287 年発行の紙幣 元鈔

図 5 は、1287 年に発行された「至元鈔」二貫の新札の銅版拓本である。縦 28.3cm の大きさで、中央に「偽造者は死刑に処す」とある。大きなサイズにしたのは、すぐにボロボロになることを見込み、新札と取り替えるための手数料を取ったからといわれている。しかし宮廷の奢侈生活による出費も増大し、次第に交鈔が乱発されて価値が下落し、民衆生活を苦しめるようになって、元朝の滅亡を早めたとされている。

第 3 節 ティムール朝への継承

第 1 項 モンゴル帝国からティムール朝への変遷

クビライ・ハーンの死後、帝位をめぐる争いが続き、元の政治・経済は混乱しチンギス・ハーンの子孫が支配するチャガタイ・ハン国が分裂した。混乱していた中央アジアは、モンゴル帝国の再興を目指す軍人ティムールによって統一された。その首都サマルカンドは繁栄を極める。ティムール朝は現在のウズベキスタン中央部に勃興したモンゴル帝国の継承政権の一つで、中央アジアからイランにかけての地域を支配したイスラム王朝(1370 年—1507 年)である。始祖ティムールは、チャガタイ・ハン国に仕えるバラバス部族の出身で、言語的にテュルク化し、宗教的にイスラム化したモンゴル軍人(チャガタイ人)であった。ティムール朝は繁栄を続けたが、その死後息子たちによって帝国は分割され、急速に分裂に向かって縮小し、15 世紀にはサマルカンドとヘラートの 2 政権が残った。

16 世紀初頭にウズベクのシャイバーニー朝によって中央アジアの領土が奪われるが、ティムール朝の王族の一人であるバーブルはアフガニスタンのカーブルを経てインドに入り、19 世紀まで続くムガル帝国を打ち立てた。(2024/8/20 駐日モンゴル大使館意見交換会)

第2項 ティムール朝税制の継承と発展

ティムール朝は、モンゴル帝国の税制のいくつかの側面を引き継いだ。特に、農業税や貢納、商税などの基本的な税の枠組みが継続された。また、帝国の安定と財政を強化するために、税制を改革した。例えば、土地の収穫高に基づく地租(ハラージュ)や、都市部の商業活動に対する税が導入された。固定資産に対しても税(カラチャ)が徴収された。銀はティムール朝でも重要な通貨として使用され続けた。モンゴル帝国時代からの銀の流通と取引の慣習は継承され、特に大規模な取引や国際貿易において銀が使用された。ティムール朝では、塩の生産と流通が厳しく管理され、政府は塩に対して税を課した。これにより、塩は帝国の重要な財政収入源の一つとなる。塩の生産地では特に厳しい管理が行われ、その供給と価格が統制された。

第3項 遊牧民と定住民への統治システムの違い

1. 遊牧民の統治

遊牧民は部族を単位とした社会であったため、従来の部族制度を活用した。カリスマ的支配者であるチンギス・ハンやその後継者が軍事的・政治的指導力を発揮し、遊牧民を統率した。軍事組織: 10人、100人、1000人単位の「十進法」に基づく軍事的編成が、統治と秩序維持の基盤となる統治方法であった。

2. 定住民の統治

行政制度の導入を重視し、定住地域では、現地の官僚制度を利用しつつ、新たな税制や行政区画を整備した。

宗教や文化に対する寛容政策を採用し、支配下の民心を安定させた。定住民には農業生産物や手工業品に主に課税し、徴税制度を徹底した。このように、遊牧民には従来の伝統を尊重しつつ軍事的統制を行い、定住民には現地の制度と新たな統治方法を組み合わせ合わせた柔軟な政策を採用したことが、広大な領域を支配する要因となった。

第4項 塩の取引券価値が下がった時の影響

モンゴル帝国で紙幣(交鈔)が発行され、その中でも塩の取引券(塩引)が重要視された。当時ヨーロッパには紙幣はなかったため、元で紙幣が使われていることはマルコ・ポーロを驚かせたと『東方見聞録』にある。同書には、元の紙幣の発行の様子が記録されている。それによると、

「桑(正しくはコウゾ)の樹皮を煮詰めて紙をつくり、それを小さく裁断して紙面に金額を印刷し、ハンの朱印を捺す。「こうやってこの紙幣ができあがると、カーンは一切の支払いをこれで済ませ、治下の全領域・全王国にこれを通行せしめる。流通を肯んじなけれ

ば死刑になるので、だれ一人としてこれが授受を拒む者はいない。実際のところ、どの地方でもどんな人でも、いやしくもカーンの臣民たる者ならだれでも、快くこの紙幣での支払いを受け取る。というのも、彼らはどこへ行こうとこの紙幣で万事の支払いができる」。(マルコ・ポーロ、2000、p.244)

しかし、これらの価値が下がった際には、商業や経済に以下のような影響があった。

「元は、南宋を制圧(1276年)すると、宋の発行していた紙幣(会子)を交鈔(中統鈔)に交換させ、宋銭の流通を禁止し政府に回収した。南宋の領土が編入されると、その経済力を継承するための、交鈔の増発が行われた。その後、急速に紙幣の濫発が進み、その価値は下落し、経済が混乱したので、1287年には新紙幣の至元鈔を発行し、価格の安定を図った。しかし、その後も濫発傾向は治まらず、14世紀にはその価値は約3分の1に下落した。」(愛宕・寺田隆信、1998、p.179～182)

具体的影響としては、以下のようにまとめられる。

- ・ インフレーションの発生

塩札や交鈔の乱発により、通貨の信用が低下し、インフレが発生した。塩や銀などの実物資産の需要が高まり、物々交換が再び活発化した。

- ・ 交易の停滞

紙幣の信用低下により、商人たちは紙幣を拒否し、金銀や商品そのものを取引の基準とした。商業活動が鈍化し、特に遠距離交易(シルクロード)が影響を受けた。

- ・ 経済の分断

地域ごとに取引基準が異なり、経済の統一性が損なわれた。中央政府による経済統制が弱まり、地方勢力が独自の貨幣や取引制度を採用することもあった。

- ・ 社会的不安の増大

経済混乱が農民や商人の生活に直接影響を与え、反乱や社会的不安を助長した。経済の不安定化が、最終的に帝国全体の分裂を加速させる一因となった。モンゴル帝国の広域経済を支える紙幣制度は画期的であったが、乱発や管理の失敗により信頼が失われ、商業・経済の基盤を揺るがす結果となった。

第4節 結論

ティムール朝はモンゴルの千戸制度を参考にしつつ、自身の統治に合わせて再編した。千戸制度の軍事的役割は一部継承されたものの、行政的には伝統的なイスラム統治の仕組み(州総督や地方行政官)が重視されるようになり、モンゴル式の影響は次第に薄れた。代わりに、ティムール朝は部族的な統制と軍事組織を統合し、中央集権的な支配を強化した。モンゴル帝国の税制はティムール朝でも維持されたが、イスラム法に基

づく財政システム(ザカートやハラージュ)と組み合わせることで改良された。モンゴル帝国では、塩やその他の特産品が紙幣代わりに使われ、これがティムール朝に継承されたかについては記録が曖昧だが、中央アジアでは塩が重要な貿易品として広く流通していた。ティムール朝では、モンゴル帝国時代から続く経済基盤を利用しつつ、銀を中心とした貨幣経済を発展させたが、紙幣の使用はほとんど見られず、現物経済や金銀の取引が中心であった。貨幣の価値暴落は、軍事遠征や政情不安に伴う課題として続いたが、ティムール朝はその影響を最小化するために、質の高い銀貨の鑄造や交易の維持に努めたと考えられる。また、商業活動への国家の関与が強まり、交易路や市場の保護・管理を国家が主導したため、オルトクのような独立性の高い商人層の役割はモンゴル帝国時代より縮小したと考えられる。

第2章 中央・西アジアにおけるモンゴル系の支配と現代イランへの影響の有無

第1節 はじめに

現代の中央アジアから、イラン、イラク、アフガニスタンにかけての中東地域の一部では、イル・ハン朝(1260～1353年)、次いでティムール朝(1370～1507年)と、モンゴル系の支配が続いた。本章の前半では、この地域におけるモンゴル系の支配はどのようなものだったかを明らかにする。

章の後半では、ティムール朝の後に現代のイラン・イスラム共和国に該当する地域を支配したサファヴィー朝に注目する。サファヴィー朝は、イスラム教シーア派の12イマーム派を国教と定め、「イラン」という意識を地域に根付かせたという点で、現代のイランの基になった部分が多いとされる。非モンゴル系であるサファヴィー朝において、それ以前のモンゴル系の支配の影響はどのように残り、または残らなかったのだろうか。また、モンゴル系支配との共通点や違いはどのようなものだったのだろうか。さらに、現代のイランに残る影響があるかどうかも探ってゆく。

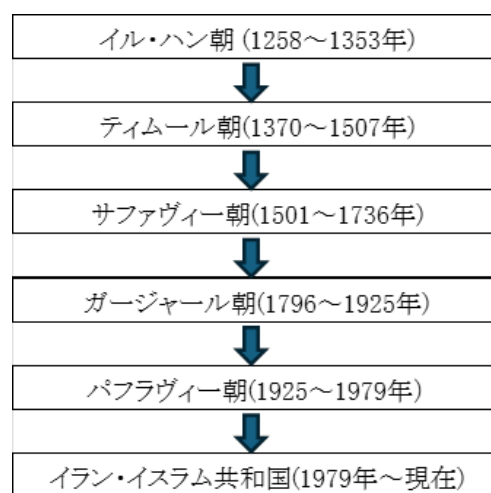


図6 イラン地域の政権の推移

第2節 イル・ハン朝(1258～1353年)

本節では、チンギス・ハンがイラン地域に進攻した後に孫のフレグが建国したイル・ハン朝について、それ以降のイラン地域に及ぼした影響を主眼に論じる。

第1項 イル・ハン朝の建国と、モンゴル帝国内の位置付け

1218年、シル川北岸の街オトラル(現在のカザフスタン南部)で、チンギス・ハンが派遣した商人使節団450人が虐殺される事件がきっかけとなり、1220年にチンギス・ハン自身が軍を率いて侵攻した。チンギスは1224年春に帰還するまでに多くの都市を制圧し、イラン西北のホラーサーンにイラン総督府(アム河行省または阿母河等処行尚書省)を設置した。1353年には、チンギス・ハンの孫で、4代皇帝モンケの弟であったフレグが西征を行い、1255年にイラン総督府を指揮下に置いた。モンケが死去した後の後継争いがおこる中で、フレグはモンゴル帝国に戻らず、1258年にイラン地域でイル・ハン朝を建国し独立した。

13世紀後半のモンゴル帝国は、モンゴル皇帝を盟主として戴くものの、モンゴル高原と中国本土を治めるクビライ家の元と、ジョチ家、チャガタイ家、オゴデイ家、フレグ家などによる緩やかな連合体に変化した後、徐々に各家が完全に独立し解体していくが、イル・ハン朝もその一つであった。

「イル・ハン」とは、「服属民のハン」の意味で、フレグが当地域で名乗った別名である。そのため、イル・ハン朝を「フレグ・ウルス」と表記することもある。イル・ハン朝の版図は、現在のトルクメニスタン、アフガニスタン、イラン、イラク、トルコ東部、コーカサス地域南部等の広大な地域に広がり、6代目ガザン帝の時代に最盛期を迎えた。1330年台に入ると、権力争いから何人もの皇帝が擁立され分裂していく。最後に残った10代目タガイ・デミュルが1353年に没し、イル・ハン朝は100年を迎えることなく終了した(表3)。

表3 イル・ハン朝の歴代皇帝

代	名	在位期間	
1	フレグ	1260	1265
2	アバカ	1265	1282
3	テグテル	1282	1284
4	アルガン	1284	1291
5	ゲイハトゥ	1291	1295
6	バイドゥ	1295	1295
7	ガザン	1295	1304
8	ウルジェイトゥ	1304	1316
9	アブー・サイード	1316	1335
10	アルバ・ケウン	1335	1336
11	ムーザー	1336	1337
12	ムハンマド	1336	1338
13	サティ・ベク	1338	1339
14	スレイマーン	1339	1343
15	アヌシルワン	1343	1343
16	タガイ・デミュル	1338	1353

出所: 参考文献より筆者作成

第2項 イル・ハン朝の支配の特徴

モンゴルの支配者らは宗教的には寛容であったことで知られる。過去のアジアダイナミズム班の論文で研究した中国本土やロシア等と同様に、イランにおいても「自分たちの宗教を強制したり、他宗教を弾圧したりすることはなかった」(井谷、2020、p.101)。

フレグはモンゴル王族による支配を確立する一方で、現地の定住民であるペルシャ人を官僚として活用し、行政上ではペルシャ語の使用が中心であった。フレグは宰相としてシャムス・アッディーン・ジュヴァイニーを取り立て、またシーア派の学者であったナスィール・アッディーン・トゥースィーを側近として迎え、マラーガに天文台を建設させた。

モンゴルの支配者たちにとっては、モンゴルの伝統的な宗教や文化を支配地域で強制するという発想は薄く、むしろ自分たちが現地の文化や学問を取り込み、現地化していったことがうかがえる。例えば7代目ガザンは自らイスラム教に改宗し、ハンの他にスルターンを名乗った。ガザンは次項で述べるように、ラシードウッディーンを宰相に取り立てて内政改革を行い、ラシードウッディーンに長大な歴史書を編纂させた。9代目アブ・サイードからは、モンゴル名すら持たなくなっている。

対外関係としては、東西関係を重視した。元からは実質的には独立していたが、形の上では宗主として維持し、「西のビザンツ帝国とは友好関係を維持し、さらに西方の西欧諸国とのあいだにも同盟や連携を呼びかける試みをおこなった」(井谷、同、p.89)。その理由として、羽田は「成立まもない当時のイルハン国は、その領土の南北で、エジプトのマムルーク朝、キプチャク草原のジョチ・ウルスという強敵に対抗しなければならなかった」(羽田、2020、p.89)からだと指摘している。

第3項 イル・ハン朝の文化とラシードウッディーンの集史

モンゴル人がイラン地域を治めるにあたってペルシャ人を活用した代表的な例の一つが、前項で触れたラシードウッディーン(ラシード・アッディーン、またはラシードウッディーン・ファズルッラー・ハマダーニー)である。ラシードウッディーンは、1256年にイスマーイール派の砦がフレグに攻め落とされた際にモンゴル軍に下り、イル・ハン朝の宮廷に仕えるようになった。ラシードウッディーンは、7代目ガザンの在位時に宰相となり、続くオルジェイトゥ、アブー・サイードと3代の皇帝に仕えた。

宰相としてのラシードウッディーンは領土の拡大、内政の安定に力を発揮した。国外に対しては、辺境の反乱、エジプト、シリアなど強力な外敵との対立、中央アジアからの侵略などの難局にあたりながら、領土を拡大し、国境の安定に寄与した。内政面では、法律の制定と施行、人民救済のための施策、ウラマー(イスラム教の学識者)の保護、科学と産業の普及などに力を注いだ。経済政策では、税制改革を行い、地方君主による小作農への圧政の予防、農業や産業の振興を促した。ラジャブザーデは、「その結果、モンゴルの西征によって荒廃したイランは、彼の宰相時代に経済的に発展した強国へと変貌した」と評価する(ラジャブザーデ、2010、p.70-71)。

文化面では、ラシードウッディーン自身が多くの著作を残している。編纂した『諸史の集成(集史)』(1310 年完成)は、第 1 巻がモンゴルの歴史、第 2 巻が世界史となる大部のものであるが、歴史書の他にも、医学書、農学書、神学書など幅広い書籍を残した。また、タブリーズ北東の山麓に学術都市ラシード区をワクフ(寄進財産)として創設した。図書館やイスラム学の研究所などを擁する都市で、ラシードウッディーンはここで集史をはじめとする自身の著作の写本を作成させ、特に集史の写本をモンゴル帝国の各地に送ったとされる。

ラシードウッディーンの施策によって政治経済面が安定したことで、イル・ハン朝では、寺院や学校といった公共施設の建築が広まったほか、美術面ではミニアチュール(細密画)の技法が洗練され、ミニアチュールを挿絵とした書籍が多く製作された。「集史」など歴史書の写本の他に、11 世紀の詩人フェルドゥスィーの叙事詩「シャー・ナーメ」の写本がシーラーズで製作されており、主要都市でミニアチュールを使った書籍が広まっていたことがうかがわれる。井谷は、「工芸品、建築物以外の具体的な造形表現を拒絶するイスラム文化のなかで、イランが魅力ある独自の絵画芸術を発達させる出発点は、モンゴル支配時代に遡れる」(井谷、2020、p.104)と位置付けている。

第 4 項「イランの地」という領域概念の定着

「イーラーン・ザミーン Irānzamīn」というイラン地域を指す言葉が定着し、歴史書、地理書に使われるようになったのもイル・ハン朝時代であった。川口は、イーラーン・ザミーンという領域の概念について次のように述べている。

この「イーラーン・ザミーン」が指す領域はかつてのサーサーン朝の領域「エーラーン・シャフル」とほぼ重なり、西はティグリス・ユーフラテス河流域、北はカフカース山脈とアム河、東はインダス河流域、南はペルシャ湾、アラビア海に囲まれた地域で、そこには現在の国名でいえば、パキスタン、アフガニスタン、イラン、イラク、シリア、トルコ、アゼルバイジャン、アルメニアの全部または一部が含まれることになる。ティムール帝国史料に現れる「イラン」とは、まさにこのイル・ハン朝に生まれた領域概念「イーラーン・ザミーン」を踏襲しているのである。(川口、2014、p.74)

また大塚は、「フレグ・ウルスが成立すると、イランとはチャガタイ・ウルス(チャガタイ・ハン国)が支配する地、トゥラン(トゥーラーン)の対義語であるという視点が登場した」(大塚 2017、p.110)とする。「イラン」と「トゥラン」については、既に、11 世紀のフィルダウスィーの叙事詩「王書(シャー・ナーメ)」で、アム河より北のトゥランと、南のイランとの対立関係として描かれているが、モンゴル王族の分家間の対立と絡めて語られるようになったというわけである。「モンゴル王家」という一体感が失われ、フレグのイル・ハン朝すなわちイラン地域の独立性が強調されていたことが分かる。

歴史的には、イーラーン・ザミーンとほぼ同じ概念がサーサーン朝(225～651 年)時代に存在した。北東のホラーサーン、東のパローチスターン、北西のアゼルバイジャン、西

はメソポタミアに至る広範な地域が「エーラーン・シャフル(アーリア人の国)」と呼ばれた。時代を経てエーラーンがイーラーンに変化し、エーラーン・シャフルとほぼ同じ領域がイル・ハン朝時代に「イーラーン・ザミーン」として再定着したといえよう。

井谷は、これが現代のイランのアイデンティティに引き継がれているとし、「モンゴル支配時代以後、近代を迎えるまでの伝統的なイランの地理概念を明確に示しており、現在のイランのアイデンティティの基盤ともいえる」(井谷、2020、p.104)と指摘している。

第5項 イル・ハン朝の支配構造の変化

1300年代に入ると、モンゴルの支配者らが実質的な権力を失い、名目上のカンになっていったことが指摘されている。井谷は、「アブ・サイード(9代目。在位1316～1335年。筆者注)以降に即位したモンゴルの支配者たちは、(中略)実質的な権力をもっていなかった」(井谷2020、p.97)とする。

しかし、名目上とはいえカンの地位そのものが揺らぐことはなかった。井谷は、モンゴル王族の血筋が支配者の条件として広く認識されていたとして次のように指摘する。「ハサン(6代目ムハンマドを擁立、筆者注)もチュパン家の小ハサン(13代サティ・ベクを擁立、筆者注)も、自らの傀儡としてフレグの子孫のうちの誰かを君主としていただく姿勢を示しており、自身がとってかわってハンになろうとはしなかった。(中略)この事態は14世紀前半のイランでは、モンゴル人の有力者であっても、チンギス・ハン家出身以外の人物には、支配者が備えるべき血統的な権威をもつことが困難であった状況を示している」(井谷、2020、p.97)

モンゴル王家の血筋が支配者としての正当性を与えるという点については、杉山が、実質的な支配者がモンゴル王族の女性を嫁として迎えることで支配の正当化を行う構造が、ユーラシアの広範囲で長期にわたって見られると主張している(杉山、2016、p.271～307)。アジア・ダイナミズム班の2011年の研究では、歴代の高麗の王族がモンゴル王族の女性を嫁に迎えることで政権の安定を図ったことが指摘されている。杉山の表現を借りれば「媚殿たち」が支配する構造は、続くティムール朝でも見られた。

第3節 ティムール朝(1370～1507年)

第1項 ティムール朝の建国と統治の特徴

モンゴル貴族のバルラス家の出身の軍人であったとされるティムールは、東西に分裂し混乱していたチャガタイ・ハン朝で支配地域を拡大し、1370年にオゴデイ系の血を引くソユルガトミシュをカンに擁立し、実権を握ってティムール朝を創始した。

ティムールは、1336年頃にケシュ(現在のウズベキスタン、サマルカンドの南)で生まれたとされる。父のタラガイは、没落して貧しかったとも、地域の有力者であったとも、チャガタイ家に仕えた有力者であったとも、諸説ある。川口は、ティムール朝時代および後世の歴史家が、ティムールの地位を高めるため、または貶めるために、様々な記述を残したと示唆している(川口、2014、p.134)。

ティムールの名が歴史に現れたのは、1360 年春、チャガタイ・ハン朝が分裂してできた東チャガタイ・ハン朝(モグーリスタン・ハン)の君主であったトゥグルク・テムルの第一次マー・ワラー・アンナフル遠征において軍功を立て、報奨を与えられた時である。一時的ではあるが、このとき東西のチャガタイ・ハン朝が再統一された。このとき、ティムールは自身の故郷であるケシュ地方を所領として与えられ、その後もティムールは、モグーリスタン勢力と対立したり同盟したりを繰り返しながら勢力を拡大していった。

ティムールがカンに擁立したソユルガトミシュは、ティムールの配下の武将であり、軍事的能力を高く評価されていたとされる。ティムールはソユルガトミシュをカンの位につけ、その前で国事を協議するクリルタイ(大集会)を行い、チンギス・カンのヨスン(道理)とヤサ(軍律)を復活させることを宣言した。

ティムール自身がカンの位を持つだけでなく、ソユルガトミシュを擁立したのは、前節で述べたようなチンギス・カンの血筋を持つ者だけが君主になる資格を持つという考えによるものであった。久保は、「ティムール朝の軍事力を担い、その政権の成立母体・支配階級となった、いわゆる「チャガタイ(族)」の人々の間では、依然として「チンギス・カンのヤサ」と称されるモンゴルの慣習法や、モンゴル時代からの部族的組織が重視されていた」(久保、1997、p.148)とし、また川口も「「チンギス・ハン直系の子孫をハンに擁立して傀儡化し、チンギス・ハンのヨスンとヤサの復興を高らかに宣言することで、自身の権力の正当性を確保しようとしたのである」と指摘している(川口、2014、p.55)。

さらにティムールは、チャガタイ家のカザン・スルターンの娘であるサライ・ムルク・ハースムを第一夫人に迎え、それ以降、女婿を意味するキュレゲンと、軍事・行政を指揮する者の意味であるアミールを名に取り入れ、「アミール・ティムール・キュレゲン」と名乗るようになる。実質的には既に権力を握っていたが、チンギス・カンの血筋を活用することでその権力を正当化したわけである。1370 年には諸将から臣従の誓約を受け、名実ともに中央アジアの最高権力者となった。ティムールの子孫は母方からチンギス・カンの血統を受け継ぐこととなったが、後継者らはティムールと同様にカンは名乗らず、自らは補佐役の王となって実質的な権力を握る形を継承した(杉山、2016、p.280)。

ティムールはモンゴルの政治体制の多くを踏襲し、行政面でもモンゴルおよびイル・ハン朝の体制を踏襲した。例えばジャムチ(駅伝制)を継承し、駅ごとに馬、飼料を備えるなどである。こうした継続性から、川口は、ティムールの時代はむしろ 13～14 世紀のモンゴル時代の一部または延長としてとらえるべきだとも主張している(川口、2023、p.296)。

ティムールは、息子や一族、腹心の部下を知事として主要拠点に置き地方分権体制を取るとともに、自身は征服活動を続け、転戦を繰り返した。1402 年には、アンカラの戦いでバヤズィット一世のオスマン帝国軍を撃破し、西アジア地域をほぼ平定した。要請を受けたものも含めてティムール自らが出征、または軍を送った地域は、「東では東トルキスタン(ほぼ現在の新疆ウイグル自治区)、西ではアナトリアの西部、北ではロシアのモスクワ付近、南では北インド(ガンジス河流域)」(川口、2014、p.6～7)と、広大な地域に及んだ。

1404 年 11 月末、ティムールは 20 万人の大軍勢を率いて東方遠征に出発した。川口は、ティムールが北インド遠征、7 年戦役と次々に戦いを続けながらも、東方遠征に向け

て周到に準備をしていたとする。後継指名者である孫のムハンマド・スルターンを大軍とともに遠征途上のモグーリスタンへ派遣し、そこで開墾と植民、要塞の建設などを命じていた。近い将来ここを通過することになる遠征軍の補給の確保と、人員の補充に役立てようとしたとみられる。その一方で、明から来た使節を勾留し、明に対する敵意を露わにもしていた。(川口、2014、p.101～102)。

しかし、例年にない厳しい寒さの中で行軍は大きく遅れ、1405 年 2 月、オトラル(現在のカザフスタン南部)でティムールは高熱を発し、病没した。ティムールの死後は、後継者争いによって次第にティムール朝は支配地域を失っていった。15 世紀中盤になると、サマルカンドを中心とするサマルカンド政権と、ヘラートを中心地とするヘラート政権に分裂する。そして 1501 年、シャイバーニー・ハーンが南下してサマルカンド政権を滅ぼし、続いて 1507 年にヘラート政権を滅ぼし、ティムール帝国は終焉を迎えた。



出所:WIKIPEDIA <https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=45029224>

図 7 ティムール朝の最大時の版図

表 4 ティムール朝の系譜

代	名	在位期間					
1	ティムール	1370	1405				
2	シャー・ルフ	1409	1447				
3	ウルグ・ベク	1449	1450				
4	アブドゥーッラティーフ	1450	1451				
5	アブー・サイード	1451	1469				
分裂							
サマルカンド政権				ヘラート政権			
代	名	在位期間		代	名	在位期間	
6	アフマド	1469	1494	6	フサイン・バイカラ	1469	1506
7	マフムード	1494	1495				
8	バイスィングル	1495	1496				
9	アリー	1496	1497				
10	バイスィングル	1497	1497				
11	バーブル	1497	1498				
12	アリー	1498	1500	7	バディ・ウザマーンとムザファル・フサイン の共同統治	1506	1507

出所: 参考文献より筆者作成

第 2 項 ティムール朝時代の文化

ティムールの死以降、社会は安定しなかったが、文学や思想、建築や科学などの文化面では重要な作品が多く誕生した。ティムールは、征服した土地の学者、職人、技術者、芸術家などをサマルカンドへ連れ帰ったが、彼らの交わりから新しい融合文化が生まれたのである。

ティムールの死後はヘラート(現アフガニスタン)がティムール朝の中心地になったが、王子たちは各自の宮廷を「一種のサロン」とし、パトロンとなった。王族、有力者、ウラマーらは、獲得した富を「モスク、マドラサ(学院)、墓廟などの宗教建築、住居、隊商宿、市場、公衆浴場などの世俗建築、それに水利施設や製粉所、病院などの公共施設の建築にしばしば費やした」(羽田、同、p.115-116)。その結果、「ティムール朝時代にイラン／イスラーム建築は頂点に達したと言われる」(羽田、同、p.116)

詩人として名高いハーフェズ(ハージェ・シャムスッディーン・ムハンマド・シーラーズィー、1326-1390)は、イル・ハン朝最終期の 1326 年に生まれ、ティムール朝建国から 20 年後の 1390 年に没した。抒情詩においてペルシャ文学史上の最高詩人とも称され、「イランを含む東洋に印刷技術が輸入された後、『ハーフェズ詩集』は最も印刷されたペルシャ語の本で、28 の言語に翻訳された」(イラン文化センター)とされる。ゲーテ、プーシキンらの文豪らもハーフェズを愛し、ハーフェズについて書き残している。ゲーテの西東詩集(1819 年刊行)はハーフェズの影響を受けて書いたといわれ、原題 West-östlicher Divan のDivanは、ペルシャ語で詩集を意味する。ゲーテは同作品以外でもハーフェズについての礼賛を多く書き残している。

また、ティムール朝第 3 代皇帝のウルグ・ベクは、精密な天文表を作った天文学者としても後世に名を残した。

第4節 サファヴィー朝 (1501 年～1736 年)

第1項 イスラム神秘主義の教団から王朝へ

イラン地域におけるモンゴル系の支配はティムール朝で終了した。次に興ったサファヴィー朝は、ムガル帝国、オスマン帝国という2つの帝国に挟まれながらも、200年以上にわたって大きな戦乱がない状態を維持し、繁栄した王朝となった。

サファヴィー朝は、イスラム神秘主義のサファヴィー教団の教主イスマーイールが、イラン西部のテュルク系勢力であった白羊朝の政治的混乱に乗じて挙兵し、首都タブリーズ(現アゼルバイジャンの都市)で創始した。1510年には、ティムール朝を滅ぼしてイラン高原東部を手中に収めていたシャイバーニー朝を下し、支配地域を拡大した。

サファヴィー教団は、イル・ハン朝時代から200年続く教団であった。白羊朝を含めてそれまでイラン地域を支配したモンゴル系またはテュルク系の遊牧系の軍人ではなく、イランの定住民であった点がそれまでの政権と大きく異なる点である(羽田、2020、p.121)。

軍事力を持たない宗教集団が王朝の成立に不可欠な軍事力を得たのは、白羊朝の遊牧部族の一つであるキジルバシュの支持を獲得し、共に進軍したためであった。サファヴィー家は白羊朝王家と婚姻関係を持っており、「サファヴィー朝初代シャーのイスマーイールの祖母と母は白羊朝の王女。つまり母方は、伝統的な軍事支配者層であるトルコ系遊牧民の血を引いていた」(後藤、2010、p.88)。つまり、サファヴィー家は白羊朝王家の一員でもあり、キジルバシュが従うべき正当性を持っていたために協力を取り付けられたわけである。後藤は、サファヴィー家の血統が持つ正当性が、他の「有力部族の支援を取りつける上で有利に働いた」(同)と指摘している。サファヴィー家は定住民である宗教集団を核にしてはいたものの、広義の意味においては、サファヴィー朝は遊牧民(に支えられた)支配だったということもできよう。

また、イスラム神秘主義の一派であったサファヴィー教団が力を得たのは、モンゴル系の支配下において、モンゴルがもともと持っていた自然崇拝と、イスラム神秘主義に共通性が多かったためだという指摘もある。後藤によれば「イル・ハン朝以降のモンゴル系、トルコ系遊牧民は、徐々にイスラムに改宗、その際に、彼らが本来持っていた素朴な自然崇拝と多くの共通性を有するイスラム神秘主義を通じて、その信仰を受け入れていった」(後藤、同、p.88)とする。そして、民衆の間でもイスラム神秘主義が定着していたため、教団はその支持を基にして権力を拡大することができた。「モンゴル支配の時代、一般のイスラム教徒住民の拠り所はスンナ派ではなく、身近で活動するイスラム神秘主義社やその教団であった。教団教主らは、教団信徒の信仰心や忠誠心を支えに世俗の遊牧系支配者に政治的影響力を行使しようとするようになったが、みずから世俗支配の野心を持ち、最終的に世俗権力獲得に成功したのがサファヴィー教団であった」(後藤、同、p.87)のである。

第2項 サファヴィー朝はどのように王権を強化したか

それまでのモンゴル系、テュルク系遊牧民政権と同じく、サファヴィー朝においても、遊牧民系部族が軍事面を、ペルシャ語を使う都市民が行政面を担当する統治体制は変わらなかった。ペルシャ語を母語とする都市名家出身のタージークと呼ばれる人々は、「裁判業務や初期業務、徴税・俸給支払いの実務に長けた司法や行政の専門家」(羽田、2020、p.128)であり、遊牧民を主とする軍人たちは、「彼らの協力なしには征服地の実際の統治をおこなうことは不可能だった」(同)。

特徴的だったのは、少数派であるイスラム教シーア派(12 イマーム派)を国教と定め、統治を強化したことである。これが現在のイランとその周辺地域の宗教・文化的な特徴に繋がっているとされる。

イスマーイール1世がシーア派を選んだのには、いくつかの理由があった。第一に、教団の教主としてのサファヴィー家の権威を、王家としての権威へと転換する目的があった。シーア派はイスラム共同体の指導者として預言者ムハンマドの血統を持つ子孫を重視するため、教団創始者の血統であるイスマーイールが教主位を継ぐことと親和性があった。シーア派は、預言者ムハンマドの従兄弟で娘婿にあたる4代目カリフのアリー(初代のイマーム＝指導者)の血統である者が共同体の指導者であるべきという思想を持ち、この点で他のイスラム派と異なっている。シーア派は、行方不明となった12代目のイマームを「神隠れイマーム」とし、信徒の苦難の時代に救世主として復活するとしている。

イスマーイール1世は、イラク南部、ダマスカス、ペルシャ湾南部などイスラム世界各地からシーア派の聖職者を集めた。「こうして集められたシーア派ウラマーたちは、それぞれの出身地、特にオスマン帝国の支配地でスンナ派のウラマーによって抑圧されていた存在で、イランにおいてようやくその抑圧から解放された」(宮田、2023、p.75)。イスマーイールによって安堵の地を得たシーア派聖職者たちは、イスマーイール1世が「神隠れイマーム」の代理であるとして、統治の正当性を積極的に支えるようになる。その結果、「サファヴィー一族はサイイド(ムハンマドの子孫、筆者注)ではなかったが、王朝の成立の頃までには、彼らもサイイドであると周囲から信じられるようになっていた」(後藤、同、p.90)。

第2に、イスマーイールが王位を得るにあたって支えとなったキジルバシュの一族を抑制する目的もあったとされる。王の権力の正当性をキジルバシュが与える当初の構造を廃し、キジルバシュへの依存を解消することに加えて、戦いの後に敵の頭蓋骨で乾杯するといったキジルバシュの風習が定住民の反発を招くという判断があったとされる。これは、シーア派の中でも穏健派とされる12イマーム派を選んだ理由でもあった。

表 5 サファヴィー朝の系譜

代	名	在位期間	
1	イスマーイール1世	1501	1524
2	タフマースプ1世	1524	1576
3	イスマーイール2世	1576	1578
4	ムハンマド・ホダーバンデ	1578	1588
5	アッバース1世	1588	1629
6	サフィー1世	1629	1642
7	アッバース2世	1642	1666
8	サフィー2世	1666	1694
9	スルターン・フサイン	1694	1722
10	タフマースプ2世	1722	1732
11	アッバース3世	1732	1736

出所: 参考文献より筆者作成

第2代の王となったシャー・タフマースプ(在位 1524-1576)は10才で即位したが、即位後の混乱期を抑えて対外的な戦いで勝利し、政権が安定した後は王権強化策を実施した。タフマースプは、タブリーズからやや内陸に位置するカズウィーンに首都を移し、市内に王宮地区を設け、チェヘル・ソトゥーン宮殿を建設した。カズウィーンに首都を移した背景には、オスマン帝国との国境に近いタブリーズから内陸部に離れるといった目的のほか、ホラーサーンとアゼルバイジャンの中間に位置しており、「イラン高原全体を支配する強い意志を示したもの」(羽田 同、p.135)でもあったとされる。

後藤はまた、王宮を建築することは、定住社会を重視する思想への転換であったと指摘する(後藤 2010、p.92)。サファヴィーの一族だけでなく、モンゴル系を含めてそれまでのイラン支配者は遊牧系であり、都市を核とする定住地を支配する際にも、自らは定住せずに季節移動、遠征を繰り返し、通常は都市郊外の庭園や牧草地に天幕を張って生活していた。タフマースプも同様であったが、あえて王宮を設けたのには、王宮で様々な宮廷行事を行うことで王権をアピールする狙いがあった。

こうして建設された王宮では、歴代シャーの即位式が行われるようになり、シーア派の宗教行事も定着していった。例えばノウルーズ(春分の日に行う新年の祭りで、1年で最大の祭り)は、現代でもシーア派を信仰する地域では新年の祭りとして盛大に行われている。従来は野外で行っていたが、チェヘル・ソトゥーン宮殿を建設後は宮殿で盛大に行われるようになった。

シーア派の宗教者の権力も定着していった。サファヴィー朝初期、シーア派の聖職者らは「王政の財政に依存していた」(宮田、2024、P.76)こともあり、王の支配に対して従順であった。しかし、社会が安定するにつれて、宗教税である5分の1税(ホムス)や喜捨(ザカート)などの管理を行うようになり、経済的に王の権威から自立するようになる。また、「結婚、離婚、葬儀などをとり仕切る合法的な権限を与えられ、「判事」の性格をもつようにもなった」(同、P.77)。

第3項 サファヴィー朝に見られるモンゴル支配の影響

第1項で述べたように、サファヴィー朝の王たちはモンゴル系ではなかったため、モンゴル王族の血筋を権力の正当性の証として使うことや、ティムール朝に見られたようなクルタイの開催といった「モンゴル支配的なもの」は急速に薄れていった。しかし、統治構造や遊牧民的な文化の多くがサファヴィー朝にも受け継がれたことが分かっている。

統治体制は、前述したように、遊牧民系部族が軍事面を、ペルシャ語を使う都市民が行政面を担当する構造であり、ティムール朝まで続いたモンゴルの支配と同じ構造を踏襲していた。

また、王宮を建てた後も王族は完全には定住せず、都市の外に長期に天幕を張って過ごすほか、他の都市へ移動、滞在、遠征していた。後藤は、ドイツ人医師ケンペルがスレイマーン1世(8代シャー)統治下の1684年から1688年6月までサファヴィー朝のバンダレ・アッバース(現在のイラン南部の都市)に滞在した際の滞在記『ペルシャの大王の宮廷にて』を引用し、サファヴィー朝後期になっても君主が騎馬での行軍の習慣を保持していたことを指摘している(後藤、2014、p.44)。ケンペルによれば、「ペルシャ王の騎馬行進は3分類でき」、第1は王が限られた随員とともに気晴らしに出かけるもの、第2が狩や国賓の出迎えなどの祝祭行事に参加する際の壮麗な遠出、第3が夏営やペルシャの都市に長期滞在するための大規模な移動だという。

後藤は、アッバース1世(5代目シャー)がカスピ海南岸を支配下に収めた後に、首都イスファハーンと結ぶ街道を整備し、それが少なくともスレイマーンの時代まで続いていたことによって大規模な移動が可能になったとする(後藤、同)。また後藤は、同時期にイスファハーンを訪れたフランス人商人ジャン・シャルダンの紀行から「トルコ帝国内の街道筋では、隊商宿は一つとして見当たらない。というも、トルコでは千人単位の人々が大隊をなして旅し、軍隊さながらに各々がテントを持っているからだ。ペルシャ帝国内に入れば隊商宿はいたるところにある」(後藤、2014、p.48)と引用しているが、このことは、モンゴル帝国の駅伝制ジャムチと類似した道路インフラの構築と維持のノウハウが、ティムール朝を経てこの時代にも受け継がれていたことを示唆するだろう。

モンゴル系の文化が継承された他の例としては、中国起源でモンゴル系が持ち込んだ十二支は、タスマースブ時代に外交文書、歴史書などに採用された。十二支の使用は、起源である中国からモンゴル帝国を経て広がり、「トルコ暦」とも称される。後藤は、「公式記録へはヒジュラ暦を使うのが自明であったイスラム世界において、非イスラム起源の暦を王朝正史の記述に採用したのは、大胆な文化政策であった」(後藤、2010、p.94)と指摘している。また、この時代に、十二支の新年元旦(立春)が、古代ペルシャ時代からの新年の祝い「ノウルーズ」に統一され、盛大に祝うようになった。

また、イル・ハン朝時代、シャーの同義語である「パードシャー」、領土については前節で触れたように「イーラーン・ザミーン」といった呼称が用いられていたが、タフマースブ1世は「シャー」の呼称、地域の呼び名「イラン」を取り入れ、イル・ハン朝時代の文化を部分的に活用しながら統治に融合させていった。

現代のシーア派の分布をみると、イスラム教全体に占めるシーア派の比率は約 10%とされるが、イラン・イスラム共和国においてはシーア派が国民の約 8 割を占める。サファヴィー朝が支配したイランに隣接する地域、例えばアゼルバイジャン共和国では、民族としてはトルコ系だが、宗教はシーア派が主であり(外務省、アゼルバイジャン基礎データ)、サファヴィー朝の版図であった影響とされる(宮田、同、p.74)。現代のイランとその周辺地域を特徴づける要素の少なくない部分が、サファヴィー朝時代に形成されたといえる。

第 5 節 遊牧民支配という視点から見るイラン地域

ここで、テュルク化したモンゴル系の支配、その後の非モンゴル系支配という分け方から少し視野を広げてみたい。モンゴル系に限定しない「テュルク(トルコ)系遊牧民」という視点で見ると、イル・ハン朝の前にも、テュルク系のセルジューク朝(1038～1194 年)があった。セルジューク朝は、イスラムに改宗した テュルク系遊牧民であり、イラン東北部のホラーサーンで支配を確立した。また、ティムール朝の混乱期に並行して興った黒羊朝(カラ・コユンル、1375～1469 年)、白羊朝(アク・コユンル、1378 頃～1508 年)なども同じく遊牧民による政権である。

後藤によれば、トルコ系、モンゴル系の遊牧民出身者が主要な支配者層を形成するという構造は、セルジューク朝以降の西アジア・イスラム諸王朝に広く共通する傾向であり、エジプトのマムルーク朝(1250～1517 年)、アナトリアのオスマン帝国(1299～1922 年)、インドのムガル帝国(1526～1858 年)なども同様であった(後藤、2010、p.84)。特にイラン地域については、「中央ユーラシアの草原地帯から西アジアに進出する騎馬遊牧民の經由地となったイラン高原は、最もその影響を大きく受けるとともに、後年までその影響が持続し、一八世紀以降に建国されたアフシャール朝(1736-1796)やカージャール朝(1779-1925)なども、トルコ系遊牧部族の出身者によって建国された。一方で、もともとこの地に住んでいたペルシャ語を母語とする都市の定住民は、官僚や学者などの知識人として遊牧民の統治を支える」(同、p.84-85)構造が長期にわたって続いたとする。

遊牧民の軍事支配と、定住民の行政という組み合わせは、モンゴル帝国において行政面を「色目人」と呼ばれたペルシャ人が担っていたことと共通している。ペルシャ人が持っていた行政能力、科学知識、歴史書等に見られる記述・編纂力といった幅広い「知」の力は、どのような支配の下にあっても重要な役職を担うことを可能とした。知の力を磨くことが、個人のみならず民族を生き延びさせる最上の策であることを示唆しているといえないだろうか。

第 6 節 近代以降のイランにおけるモンゴルの影響の有無

近現代のイランにおいて、過去のモンゴル系支配の影響はどの程度残っているのだろうか。近代以降のイランの文化とモンゴルの関連について直接的に論じた日本語の文献を見つけることができなかったため、社会や文化の核となるような大きな影響はないということもできそうである。近藤は、「より大きなペルシャ文化やイランという国家の間に、テュルク的過去は王朝史や民族史において副次的な役割しか果たすことがなかった。その

意味で、テュルク的過去が国家や民族の形成に大きな役割を果たしてきた中央ユーラシアとは大きく異なると言える」(近藤、2023)とし、ペルシャ文化の継承者という意識が非常に強いため、モンゴル系および遊牧民系の支配があったことは、単に過去の歴史的な出来事としてとらえられているとする。

その背景として、19 世紀後半以降、英・露・仏との不平等条約に始まる列強国の支配が強まっていく中で、イスラム教伝播以前から続くペルシャ文化や、イランという地域に根差したイラン人としての自覚といったナショナリズムが高まっていった経緯が挙げられよう。羽田は、他民族国家でもあるイラン・イスラム共和国においては、シーア派(12 イマー・ム派)の信仰が国民の一体感を生み出す最大の要因であると指摘している(羽田、2020、p.135)。

八尾師は、1900 年代初頭の立憲運動に源流を持つ 4 つの思想の潮流がイラン・ナショナリズムを支えているとする(八尾師、2020、P195-196)。その中で、文化面に関する 2 つの思想が、現代のイランのアイデンティティを理解する上で示唆に富む。1 つは、「イランの文化的・民族的伝統はイランがイスラーム化する以前から受け継がれたもの」(八尾師、2020、p.195)という古代礼賛ナショナリズムである。19 世紀以降のイランが経験した屈辱は、アラブ人の侵入とイスラーム化にあるという考えで、1921 年のレザー・シャー・パフラヴィーのクーデターとその後の体制を支えた。もう 1 つが、「西洋の侵略に対してイラン民族が一致団結して立ち向かうための強固な基盤を提供しうるのは唯一イスラーム的紐帯のみである」(八尾師、2020、p.196)というイスラーム的ナショナリズムで、1978 年のイラン革命での主導的役割を果たした。

また、現代のイランにおけるモンゴル系支配の影響が薄いことの傍証の一つとして、フィールドワークで学んだウズベキスタンのバフシの風習も挙げられよう。お話を伺った中部大学・人文学部の和崎聖日准教授によれば、現代のバフシには 2 種類ある。1 つがバフシと呼ばれる女性の霊媒師が祈祷により病気を治療する風習だが、これらは「イスラームの装いをしたテングリ信仰(シャーマニズム)」(同氏)であり、モンゴル支配時代からの風習が形を変えて残った例だという。もう 1 つが、口承文芸・叙事詩を音楽とともに歌い語る吟遊詩人で、担い手は主に男性である。ウズベキスタンのバフシ芸術は、2017 年にユネスコの無形文化遺産に認定されている。

和崎准教授によれば、どちらもウズベキスタンの旧遊牧民系ウズベク人の村落に存在するもので、都市やペルシャ系定住民の村落には存在しない。注目すべきは、イランから東へ離れるほどバフシが多くみられることである。吟遊詩人のバフシが謳う叙事詩の中には、18 世紀のイラン出身でトルクメン(テュルク系民族、現代のトルクメニスタンの人口の 6 割を占めるとされる)で有名な詩人となったマフトゥームクリによるものがあるが、前述したように現代のイランではバフシそのものが継承されていない。

表 6 近代以降のイランの年表

年	出来事
1796 年	ガージャール朝建国
1804 年	第一次ロシア・ペルシャ戦争
1826 年	第二次ロシア・ペルシャ戦争
1828 年	トルコマンチャーイ条約
1906-1911 年	イラン立憲革命
1921 年	コサック旅団のレザー・ハーンがクーデター
1925 年	ハーンが皇帝に即位、パフラヴィー朝発足
1979 年	イラン革命によりパフラヴィー朝崩壊、イラン・イスラム共和国成立

出所: 参考資料より筆者作成

第 7 節 結論

本章では、中央アジアにおけるチンギス・ハン以降のモンゴル系 2 王朝、それに続いた非モンゴル系のサファヴィー朝とそれ以降のイラン地域の統治や文化の流れを追いつつ、モンゴル系統治の特徴と、後に残した影響を検証してきた。

統治構造については、まずイル・ハン朝からティムール朝にかけて、モンゴル系遊牧民族が政治・軍事を担う一方で定住民であるペルシャ系が行政を担う構造が続いたこと、そして定住民から興ったサファヴィー朝でも同様の構造が引き継がれたことが分かった。各王朝の末期では継承争いや戦乱が続いたため、行政の構造も混乱したであろうことが想定されるが、次の王朝でもペルシャ系定住民に行政が任された理由は何だろうか。遊牧民族の統治では、トップであるカンが定住しないため、その時々カンが存在する場所が王座となったのに対し、徴税や法の施行といった行政は土地と定住民に紐付いたものといえる。前王朝の行政構造がある程度残っていたためにそのまま継承されたのか、前王朝での成功例を踏襲して新たなペルシャ系定住民に任せたのか、他に行政を司る知識と技能を持った人々がいなかったからか、はたまた他の理由があったのであろうか。明確な理由を明らかにすることができなかったため、引き続き調べていきたい。

文化面では、各王朝が広範囲から学者、聖職者、技術者、芸術家などを集めたことから、現代まで残る建築を含めて歴史書、絵画などの融合文化が生まれたことがわかった。また、現代のイランでシーア派が主流である理由もサファヴィー朝に見出すことができた。

現代のイランにおいて、300 年超にわたってモンゴル系に支配されたことによる「モンゴルのなもの」の直接的な影響が残っていないとしても、「イラン」という地理的アイデンティティや絵画、祭りなど、イランを形づくる要素の少なくない部分が、モンゴル系の支配期

間に起源を持つことが分かった。イランとそれに関わる国際関係を重層的に理解する上でも、モンゴル帝国がユーラシア大陸の各地に残した「遺産」の視点は有用であった。

第Ⅱ部 モンゴル帝国とムガル帝国

第1章 ムガル帝国創設者バーブルから見るインドとモンゴル帝国

1526年から1858年までインドを支配したムガル帝国の創設者はザヒールッディーン・ムハンマド・バーブルである。父はティムールの血をひくアブー・サイード・ミルザーの息子であり、母はチンギス・カンの子孫で、ユヌス・カンの孫に当たる。つまりバーブルは「両親をつうじて、内陸アジアが生んだ二人の征服者、ティムールとチンギス・ハン両者の血を引く、誇り高き王子」(間野、2013、p.4)であり、彼自身がモンゴル帝国の遺産ともいえる。また、『ムガル』Mughalなる語は、モンゴルを意味する近世ペルシャ語の語彙 Muğul ~ Muğul が近代インド諸語の語彙として取り込まれ、転訛した形である」(眞下、2000)というように、ムガル帝国という名称もモンゴル帝国とのつながりを表わす。本章では、バーブルの人物像に焦点をあて、なぜインドを征服したのか、モンゴル帝国の影響は受けていたか、受けていたとすればムガル帝国創設にあたり、どのような影響を与えていたのかについて探る。

第1節 バーブルの回想録と人物像

バーブル(ペルシャ語でトラの意味)は、1483年、中央アジアのフェルガーナ地方の中心都市アンディジャーンにティムール朝の王子として生まれる。彼の人物像と当時の背景については、彼が残した回想録『バーブル・ナーマ』に詳細に記されており、ムガル帝国研究では欠かせないものと考ええる。まず、この記録が如何なるものなのかについて触れておきたい。『バーブル・ナーマ(バーブルの書)』とは通称で、本来は『ワカーイー(出来事の記事)』と呼ばれた。文書は彼の母国語のチャガタイ・テュルク語で記されており、16世紀のペルシャ語訳に始まり、19世紀以来、イギリス、フランス、インド、ウズベキスタンなど各国で出版されてきた。全体は、フェルガーナ章、カーブル章、ヒンドウスターン章の3部からなり、恋愛や敵愾心といった心情、敬虔なイスラム教徒である彼の飲酒に纏わる話などの秘すべき体験を率直に綴っているほか、当時の政治、経済、社会、文化、活動拠点の地理的状況についても記述されている。この回想録についてバーブルは、

「わたしは不平を言うために、これを書いたのではない。たんに真実を書いただけだ。自分をよく見せようとして書いたこともない。実際に起こったことを書きつづっている。……中略……これを読む人びとが、余のことを大目に見てくれるように。これを聞く人びとが、余に非難を浴びせることのないように」(ロビンソン、月森訳、2009、p.176)

と記しているが、この一文からも事実と心情を併せ持つ記述が垣間見える。この回想録について、ロビンソン(2009、p.176)は、「ムガル帝国の皇帝たちから高い評価をうけ、帝国を運営するうえでの精神基盤となった。」と記している。また、間野は、

十五―十六世紀の中央アジア・アフガニスタン・インドの政治・社会・地理・文化の諸状況を生々しく伝える貴重なドキュメント、歴史研究のための、無比の資料……中略……特に中央アジア遊牧民族出身の君主が残した稀有の回想録として、その価値は絶大である。(間野、2009、p.93)

と記述しており、クローも、

数ある物語作者のどんな優れた想像力をもってしても描きえないほどのバーブルの冒険譚が、一冊の本に収められている。……中略……ただ単に、並外れた彼の生涯や、子の書がなければ断片しか知ることができなかったであろう歴史上の大事件——チンギス・カーンとティムールの末裔によるインド征服——の数々のエピソードを物語っただけでなく、巧まざる文体と細部へのこだわり、……中略……五百年を経た今日でも読んで楽しく、しかも世界文学の傑作の一つに数えあげられる作品である。(クロー、2001、p.13-14)

と、評価している。この回想録の価値として、ペルシャの歴史家フィリシュタは「トルコ語で著した自伝は、その格調の高さと真に迫る描写をもって世界的な賞賛を浴びている」と述べている(宮原引用、2015、Mahomed Kasim Ferishta、p.65)が、バーブルがトルコ語、すなわちチャガタイ・テュルク語で著したことについて、当時一般的であったペルシャ語の歴史書の文書が修辞に走っており、簡潔で明晰な文書を好んだバーブルの好みに合わなかったことが考えられると間野は述べている。ペルシャ語にも十分通じていたにもかかわらず、あえてチャガタイ・テュルク語を選定したことからも、文書へのこだわりはかなりのものであったことが窺える。また、間野(2013、p.5)は「バーブルは人間的にも極めて魅力に富む人物で、バーブルの故国ウズベキスタンでの人気は日本での織田信長の人気に匹敵する。」と、その人気にも触れ、『バーブル・ナーマ』が後世でも読まれ続けたことを著している。日本では1998年に間野英二氏による翻訳本が出版され、やっと世界的な有名著書を読むことができるようになったといつてよい。しかし、原本については約半分が散逸し、目にすることができないというのは非常に残念なことである。

次に彼の人物像についてみていきたい。フィリシュタは、

彼は慈悲心にあふれた主君だった。あまりにも心が広く、ときに行き過ぎではないかと思えるほどだった。行為の人物に敬意を払い、恩知らずなふるまいや反逆行為を

許すこともめずらしくなかったので、悪に対し善をもって対処することを信条しているようにも思われた。その結果、彼に敵意を持っていた者が骨抜きにされ、彼の徳を賛美するようになっていった。彼は……中略……毎日、礼拝を欠かすことがなかった。詩や散文や音楽の腕前にかけては、彼と肩を並べ得る者はほとんどおらず……後略(フィリシュタ、ロビンソン引用、2009、p.65)

と、記しており、インドの革命家ジャワーハルラール・ネルーは、

インドに新しい時代と、新しい帝国——ムガル帝国——のいしずえを築いた。……中略……チンギスとティムールの血をうけていたバーブルは、ふたりの偉大さと、軍事的才覚もいくらかうけついでいた。しかしモンゴル人は、チンギスの時代からみれば、はるかに開化されていたし、バーブルはきわめて教養もふかく、およそ愉快的な人物であった。かれには宗教主義とか、宗教的偏見というものはなく、かれの祖先たちが日常茶飯のこととしていた破壊行為に手を染めなかった。かれは、芸術、文学を熱愛し、みずからペルシャ語の詩人であった。(ネルー、大山訳、2002 p.116)

と、述べている。バーブルの文書へのこだわりは先にも述べたが、上記からも芸術や文学への造詣が深いと考えられる。それに関しては、書物好きが高じ、他国を征服後に最初に図書館に行って優れた書物を奪ったことや、バーブル文字と呼ぶ新しい文字を発明したというエピソードが存在する。また、慈愛心と他者への敬意という点については、若いころのバーブルの助言者は母方の祖母であったこと、トランスオクシアナの政務に母の教えを引用したこと、バーブルの姉妹や身内の女性たちが楽に暮らせるように食料や必需品を支給したこと、妃のマハムと娘がカーブルからアーグラにやってきたときは、長い道のりをわざわざ迎えに行ったことなどのエピソードがあり、ロビンソン(2009、p.174)は、「女性に対しての敬意を表す描写が目立つ」と記している。当時の女性の地位については明確ではないが、これらも特徴的な人物像を表わすエピソードといえる。また、息子のフマーユーンに対しては、手紙を簡潔明瞭に書くこと、帝国と孤立は両立しないこと、人の意見をよく聞き入れることといった教えを手紙に書き綴っている。そして、フマーユーンが瀕死の病にかかった時、回復を願い神アッラーにバーブルの生命を捧げることを誓い、フマーユーンは病から回復し、代償としてバーブルが重い病に陥ったというエピソードからも父親としての威厳と愛情の深さを感じる。また、主君として、軍人としての人物像も窺えるなか、クローは、「誠実」「第一級の戦略家」「大胆かつ慎重」「勇敢」「寛大」「卓抜した武人」「優れた外交家」「強健な体質」といった表現をしており、ロビンソン(2009、p.173)は、「度量の大きさは名君の特徴だが、バーブルはその点では、間違いなく評判が高かった」と記している。これらからバーブルという人物を鑑みると、政治的手腕、軍事的才能、人道的倫理性、文化的影響力に長けていると考えられる。このように人物像に

迫ることで、なぜインドを征服したのかという理由についてもより背景がみえてくると考える。次節にて、インド征服の背景に焦点をあてる。

第2節 インド征服の背景

バーブルは、1505年、1507年、1519年、1520年、1524年、1525年と、6回にわたってインド遠征を行い、1526年にムガル帝国を建立した。当時のインドについて、回想録には下記のように書き綴っている。

ヒンドゥスターンは長所の少ないところである。人々の中に美しい者は見られない。楽しい交際もお互いの行き来もない。才も知力もない。礼儀作法もない。寛大さも恵み深さもない。芸術や手仕事においても、整然さも形も、縦横のシンメトリカルな線もない。名馬もない。すぐれた犬もない。ぶどうもメロンも、うまい果実もない。氷もない。冷たい水もない。バーザールにも、よい料理もよいパンもない。公共浴場もない。マドラサもない。……中略……大河や谷や溪谷の中を流れている水の澄んだ川を除いて、庭園や建物には人工的な水路がない。また建物には、快適さや自然環境の良さ、秩序や調和がない。(間野、1998、p.226-228)

このような無い無い尽くしのインドになぜ侵攻したのかは疑問である。よって、次項にて、その背景を探っていく。

第1項 中央アジアでの拠点喪失と避難先の必要性

バーブルの生涯を時代区分に分けると、中央アジア時代(1482～1504年)、アフガニスタン時代(1504～1526年)、インド時代(1526～1530年)の3つに分けられる。これは、バーブルが生まれ故郷のフェルガーナ州東部の都市アンディジャー(現在のウズベキスタン)から移動していることを意味している。バーブルが活動した時代に中央ユーラシアに興亡し、バーブルと大きな関わりを持った政治勢力は、現在のカザフスタン、ウズベキスタン、キルギスの一部と中国の新疆ウイグル自治区の一角を支配したモグーリスタン・ハン国、ティムール朝北方の草原遊牧地帯に勃興した遊牧テュルク人ウズベク国家のシャイバーン朝、アゼルバイジャン地方のアルダビール(現イラン北西部)を本拠としたシーア派・サファヴィー教団の創始者の末裔シャー・イスマールが創設したイラン王朝のサファヴィー朝、北インドを支配したデリー・スルターン諸王朝の最後の王朝でアフガン人のローディー部族・バフルール・ハンが建国したローディー朝、そして、ティムール朝の5つがあげられる。

当時のティムール朝については、ティムールの次男ウマル・シャイフ・ミールザーの子孫・スルターン・フサイン・ミールザーがアフガニスタンとイラン東部を支配したヘラート政権と、バーブルの祖父スルターン・アブー・サイード・ミールザーの長男・スルターン・アフマド・ミールザーが中央アジアを支配したサマルカンド政権の2つに実質的に分裂して

いた。これらの勢力はバーブルの覇権争いに複雑に絡んでいった。バーブルの父が川への転落事故で突如亡くなってしまい、11歳にしてティムール朝フェルガーナ領国の君主にならなければならなかった直後、ティムール朝のサマルカンド政権とモグーリスタン・ハン国の君主、どちらもバーブルのおじである両者がフェルガーナを併呑する目的で進攻してきた。

これを皮切りに、バーブルも戦乱の中に踏み出していく。バーブルは3回サマルカンド入城を果たしたが、ウズベク族のシャイバーン朝による圧力と度重なる戦いの結果、短命政権に終わり、フェルガーナ地方もシャイバーニー・ハンの手落ちることになる。サマルカンドとフェルガーナの奪還を放棄した理由について、間野(2013、p.32)は、「バーブルはなおも中央アジアにとどまって機会到来を待ったが展望は開けなかった」こと、「絶望のあまり一時は中国(西辺のトゥルファン方面を指すと思われる)方面へ出奔することまで考えた」こと、「もはや頼るべき親族も帰るべき故郷も失われた。そのためバーブルは、やむなく中央アジアでの活動にみきりをつけ、アフガニスタン西北部、ホラーサン方面へ転出を決意した」ことを記している。また、クローは、

彼はカーブルを制すると直ぐに、「予行演習」のためにインドの諸都市を何度か襲った。特に、一五〇四年には、ハイバル峠を越えたが、インダス河を越えずに、そのまま北進しコハートに向かった。……中略……二年後にヒンドゥスターン平野にまで達したが、それは実際には逃亡とも言えるものであった。というのも、モハメッド・シャイバーニーの率いるウズベク族が到来し、カンダハールを攻囲したという情報が入り、バーブルは高官を集め、彼らに、「敵はわれわれよりはるかに強い。ここで肝心なことは、彼らとわれわれの距離を十分とることである」と要約した。諸侯の意見が分かれた。どこに行くのか。こうしてインドを選ぶに至ったというわけだ。(クロー、2001、p.27-28)

と、述べている。つまり、中央アジアを失いアフガニスタンに入ったが、アフガニスタンからの避難先として代わりの拠点を求める必要があり、インドの視察を行ううちに侵攻へと変化していったことが読み取れる。

第2項 インドの経済的な豊かさと潜在的な豊かさ

1505年の最初のインド遠征の背景については、第1項でも述べたが、間野は、

カーブルは、モグール(モンゴルという語のペルシア語化した形)らに加わって多勢となったバーブルの軍勢を養うには十分な土地ではなかった。このためバーブルは、1505年1/2月、略奪と戦利品獲得を目的に第1次ヒンドゥスターン遠征に向かい、この時初めて、中央アジアとは全く異なったインドの風物を目にして、驚異の思いを禁じ得なかった。(間野、1998、p.226-228)

と述べており、このことを受け宮原(2015)は、「バーブルのインド遠征はあくまでも略奪と戦利品獲得が目的であったことは明らかである」とし、また「インドのもつ潜在的な豊かさに気づきはじめ、次第にこの地にティムールを再興する新たな帝国を打ち立てたいと思うようになったのではないか」と考察している。では、潜在的な豊かさとはどういったものであろうか。

バーブルは回想録に記述されているインドの欠点については、第2節冒頭で記述した。これについて、ネルーは、「バーブルも、このないないづくしには、すっかり書きくたびれてしまったにちがいない」(大山訳、2002、p.119)と著している。しかし、回想録には、インドの長所についても、「大きな国である。金銀が豊富である。雨季の気候は非常に快適である」そして「もう一つの長所は、あらゆる種類の職人が無数・無限にいるという点である」と記されている。また、ムッラー・シャラフ著の『勝利の書』で、ヒンドゥスターンの石工たちがモスクワで働いていたことやインドの各地のバーブルに関係する建物で1491名の石工たち働いていたことを記している。また、北インドのガンジス川流域は農業が盛んであり、灌漑をしなくても農作物が十分採れることにも触れている。このようにインドの経済的資源は、バーブルが新たな帝国を築くための基盤として魅力的だったことが考えられる。

第3項 イスラム教徒王国の救援要請

当時のインドの北部には、イスラム教徒の支配者が多く存在し、特にローディー朝がデリーを支配していた。クローは、

当時インド半島で勢力を張っていたイスラーム諸国もヒンドゥー諸国も、豊かな財宝を有していたとはいえ、かつてないほどの分裂状態であった。さらに、ごく稀な例外を除けば、真の戦闘員に乏しく、また新しい戦争形態に適した技術や戦略で立ち遅れていた。この巨大なインドは、当時、五つのイスラーム教徒の王朝と二つのヒンドゥー教徒の王朝によって治められていた。その筆頭が、デリーの帝国であり、強力なローディー朝がここを治めていた。(クロー、2001、p.26)

と、記している。ローディー朝内での対立や不安定な政治状況により、君主イブラーヒームのおじでパキスタン中東部の都市ラーホール総督を務めていたダウラト・ハンから、バーブルに救援要請が届いた。フランシス・ロビンソンは「インドではアフガン系のローディー朝に対して、かなりの反発があるのはあきらかで、バーブルにしてみれば願ってもない好機といえた」という。間野は、「バーブルはこれまでの略奪を目的としたインド遠征とは性格を異にするインド遠征を計画することになった」(間野、2013、p.45)としている。バーブルは、ローディー朝との対決をめざした第5次のインド遠征を行い、第6次、つまり1526年のパーニーパットの戦いで、バーブルは火器を用いるなどの巧みな戦術で、わ

ずか1万2000の軍勢で、1000頭の像を擁する10万のローディー軍に勝利する。間野は、「バーブルの軍中には半年におよんだ遠征につかれ、カーブル帰還を望む声が充満していた。バーブルは苦勞してえたインドを放棄することの愚を懸命に説き、部下たちを翻意させることに成功した」(間野、2013、p.47)と述べており、インドに腰を据えて治める政策に変化したことが分かる。ダウラト・ハンの求めに応じるかたちでのインド進出が政治的正当性を得るための口実ともなり得たという背景があることが分かった。

第4項 ティムールの遺産の再興

インドへの遠征はバーブルにはじまったことではなく、ティムールも1398年に騎兵の大軍を率いてインドに侵攻している。ティムールのインド侵攻について宮原は、チョプラ著の『インド史』を引用し、

デリー滞在わずか10日余りで、恐ろしいほどの略奪と虐殺、破壊の限りをつくし、膨大な戦利品と多数の捕虜と優れたインド人職人・技術者を引き連れ、サマルカンドに帰還した。彼のインド侵攻は、後の歴史家から「有史以来最大の虐殺事件」と言われ、その結果、当時のトゥグルク朝に甚大な被害を与え、トゥグルク朝崩壊の原因になったといわれる。(チョプラ、三浦訳、1994、p.103-104)

と、記している。第2項で記したように、当初は略奪と戦利品獲得が目的であったのは間違いないであろう。しかし、バーブルは回想録で、「ヒンドゥスターンを求める気持ちがやみがたかった」と記しており、ロビンソンによれば士官たちの反対意見を打ち負かし、最初のインド遠征に着手したという。そこまで執着した理由を単に略奪と戦利品獲得だけで片付けてもよいのだろうか。クローは、

カーブルの庭園から受ける無上の悦び、野原のチューリップの光景にうたれる歓喜、こうした悦楽に浸るひまもなく、バーブルは次の計画に取りかかった。それは、ティムールの末裔が一世紀以上前に支配していた、インドを征服することである。この思いは彼にずっとつきまとってきた。(クロー、2001、p.26-28)

と、記しており、さらに、

彼の心を捕らえて放さなかったのは、父祖伝来の所領地をはじめとするサマルカンド周辺の中央アジアに、一大帝国を建設する計画であった。バーブルはインド遠征を続けてはいたものの、単なる襲撃程度でしかなく、それも一五二五年頃に限られていた。当時、バーブルは、ウズベック族の脅威に晒されており、同盟を結んでいたペルシャのシャー・イスマーイールが一五一四年にオスマン・トルコに敗れたため、自分の夢が、当時の状況からして実現不可能なことを理解し、しばらくの間は、ティ

ムールの遺産を引き継ぐことは断念せざるを得なかったというのが実情である。しかしながら、彼は、生涯、自分の故郷、つまり中央アジアから目を逸らすことはなかった。彼は、一旦インドに腰を落ち着けた上で、敵を制圧しつつ、次第に大部隊を集集し、当時中央アジアで彼しか備えていなかった大砲を持って、サマルカンド征服の大遠征に乗り出そうと考えていたのであろうか。(クロー、2001、p.26-28)

と、記している。第2項では、インド遠征を繰り返すなかで、次第にティムールを再興する新たな帝国を打ち立てたいと考えるようになったのではないかと記述したが、バーブルが誕生した頃には、中央アジア・アフガニスタン・イランを支配したテュルク系イスラム王朝のティムールは、すでにイラン西部の支配権を失っており、政治的には衰退が目立っていた。この背景からすると、かつてティムールがインドに遠征を行い、デリーを征服して帰還したように、バーブルもインドで領土を確立することがティムールの威光を再び高めると考えた可能性もある。また、インド征服までの間にスパイを送り込み、敵の軍隊と組織についても知りつくしていたことからティムールを意識したインド征服の可能性は高いと考える。

第3節 ムガル帝国成立にみるモンゴル帝国の影響

第2節よりバーブルのインド征服の理由について、当初の目的は相続財産であるサマルカンドを奪還することだったが、1項から4項に述べた要因が重なり、中央アジアからインドへ進出する決断を下したといえる。そして、モンゴルを意味するムガルの帝国建立に至るが、本節ではバーブルが、モンゴル帝国にどのような影響を受けたのか、また、どのようなモンゴル帝国の遺産を受け継いだのかを考察する。

第1項 血統的なつながりとムガルという呼称

バーブルのモンゴル帝国との血統的なつながりは、序論に記したとおりである。またペルシャ語でモンゴルを意味するムガル帝国の国の命名について、バーブル本人が名付けていたのであれば、モンゴル帝国を意識したのは間違いないが、彼自身がムガルと名乗ったという記録はない。モンゴル帝国は、モグール、チャガタイが東西に各々ハーンを戴いて分裂し、バーブルはティムール朝のチャガタイとしての立場に立つ一方、母親はモグールのハーン家出身で、バーブルの活動の様々な局面にモグールが登場し、支援している。その点からもムガルの呼称について、インド征服軍にモグールが多数いたことを起源とする説やバーブルないしその後継者たちが、自らの王朝の誇るべき血脈をハーン家やモンゴル族にまで遡らせて主張したとする説など、多数の研究者が仮説を提示している。眞下(2000、p.2-15)は、バーブルが回想録にて、モグールに対する敵意と不信感を隠さない事実を指摘し、プレ・ムガル帝国時代のインド・ペルシャ史料、ムガル帝国のオーソリティのもとに作成されたインド・ペルシャ史料、地方史にかかわるインド・ペルシャ史料、ヨーロッパ諸語資料を用いて、用語法、すなわちヒストリオグラフィーの立場からムガルという呼称について研究し、下記のように述べている。

「ムガル」朝集圀は成立の當初より、北インド住民によって *Mughul* と呼ばれていた。ただし 16 世紀前半、「ムガル」朝の成立前後の歴史記述において、*Mughul* なる用語は、ただ「ムガル」朝集圀のみを指したものではない。それは 13 世紀以來、北西高地からの侵入者全般について、種族にかかわらず、北インドの住民が用いた他稱である。……中略……「ムガル」朝自身は末代まで、*Mughul* を自稱することはなかった。この王朝自身としては、モンゴル系譜を誇る必要はなく、ティムール期の後裔としての立場を表明するだけで十分であった。なぜなら、北インドに成立したこの王朝政権は、モンゴル、チンギス・ハーン家との系脈の繋がりが尊重される中央アジアのような社会環境に、もはやいなかったからである。でありながら、この王朝がティムール朝以來惰性的に持ち合わせてきたモンゴル系譜は偶然にも、北インド住民の上記の用語法に一種客観的な根拠を與える ことになったものと考えられる。(眞下、2000、p.2-15)

このことからモンゴル帝国の血を引くという系譜とその時代に使用されていたムガルという用語が、たまたま一致したということがいえる。

第 2 項 モンゴル帝国的支配の踏襲

3 度目のサマルカンド征服時において、間野は、バーブルのモンゴル帝国の遊牧的な資質に下記のように言及している。

シャイバーニー・ハンがサファヴィー朝のシャー・イス マーイールとトルクメニスタンのマルヴ付近で戦い敗死するという大事件が勃発した。その情報をえたバーブルはただちに中央アジアをめざしてカーブルを出発した。厳冬の雪におおわれたヒンドークシュ山脈を馬で越すという想像を絶する遠征であった。中央アジアにたいしてなおいだくバーブルの熱い想いとバーブルの移動を苦にせぬ遊牧民的資質をうかがい知ることができるであろう。(間野、2013、p.42-43)

バーブルは、戦いにおいても騎馬戦術や機動力を重視したモンゴル軍的な戦術も大いに活用したとされ、1526 年のパーニーパットの戦いでは、モンゴル帝国由来の騎馬戦術と火器を組み合わせ、ローディー朝に対して優位に立った。しかし、この戦術的要素は、ティムール朝の戦闘と重なる部分が大いとも考えられる。また、支配方法の例としてあげられる「首の塔」と「みな殺し」について、1505 年の第 1 次インド遠征の際に敵対したアフガン人に対して攻撃し、ほとんどの者の首を取り、若干を生擒にした。そして、最終的には生けどりにて連行されてきた者をも首を打たせ、野営地に首の塔を建てたという。これについて間野は、『首の塔』は、切った敵の首を漆喰でかためて塔にしたもので、このような恐ろしい塔はティムール時代にも征服地に見せしめのために建てられた(間

野、2013、p.82)と記述している。また、1519 年のバジャウル城の明け渡し要求に応じなかったバジャウルの住民についてバーブルは、

バジャウル住民は、われらの敵であり、イスラーム教徒の敵であった。……中略……このため、私は彼らをみな殺しにし、女や子どもたちを全員捕虜にした。おおむね 3000 人以上の者が処刑された。……中略……捕虜となっていた若干のスルターンたちや首長たちは処刑された。私はスルターンたちの首と若干の首をこの勝利の知らせとともにカーブルに送った。(間野、2013、p.82-83)

と、記している。そして、首の送付や首の塔が抵抗する者に対する警鐘とみせしめ的手段として使用され、抵抗しない場合は、住民の生命・財産を保障する代わりに生命の代償金を徴収して、さらに別に税を課したという。このことについて間野(2013、p.85)は、

チングス・ハンやティムールといったバーブルの祖先たち以来の伝統である。バーブルはそれに従ったのである。バーブルは抵抗した敵のみな殺しや首の塔の建設については、なんの良心の阿貴もなく、当然のこととして記している。現代の私たちにはやはり違和感を禁じえない。しかしバーブルは祖先以来の伝統に従ったにすぎず、これらの行動は戦乱の世のつねであった。(間野、2013、p.85)

と、記述している。このことから、ティムールが受け継いだモンゴル帝国の伝統をバーブルも習わしとして自然に受け継いだものと思われる。

第 4 節 結論

バーブルの人物像を知るところを起点に、彼がなぜインドを征服したのか、モンゴル帝国の影響は受けていたか、受けていたとすればムガル帝国創設にあたり、どのような影響であったのかについて文献調査を行ってきた。インド征服の背景には、中央アジアでの拠点喪失と避難先の必要性、インドの経済的な豊かさと潜在的な豊かさ、イスラーム教徒王国の救援要請、ティムールの遺産の再興といった目的が確認できた。そして、ムガル帝国建国におけるモンゴル帝国の影響については、ムガルという呼称、そして、モンゴル帝国的支配の踏襲においてもモンゴル帝国の直接的な影響は確認できず、むしろ、ティムール朝の影響を強く受けていることが分かった。そのティムールとの関係について間野は、

バーブルがインドに創設したムガル朝は、バーブルをはじめティムールの子孫たちが君臨した王朝である。それゆえ、ムガル朝を「インドのティムール朝」ないし「後期ティムール朝」と呼ぶこともできる。そのように見るならば、ティムール朝は十六～十九世紀、新天

地インドでなおもその命運を長らえたともいえる。ムガル朝の君主たちも自らがティムールの子孫であることをなによりも誇りにしていた(間野、2013、p.9)

と、述べている。しかしながら、バーブルがモンゴル帝国、および、ティムールの遊牧民的な動きから一線を画す点についても無視できない。クロー(2001、p.14)は、「ティムール軍は申し分なく、ほとんど遊牧民と変わらなかった。バーブルは、この遊牧民的な無政府状態に終止符を打った。」と述べている。ティムールにも存在していた遊牧民的動きから定住にシフトし、恒久的な帝国を築くことを目指した点において、ティムールと同様の勢力範囲の拡張や模倣ではなく、新しい帝国を築こうとしたものと考えられる。バーブルは、1504年にカーブルとガズニーを攻略して、彼以前のティムール家の誰も持つことのなかったパディシャー(皇帝)の称号を授かることになる。そして、ティムールが成し遂げられなかったインド征服を成し遂げる。このことについてバーブルは、

バーブルはインド征服における自分の功績を明確に把握していた。彼はこう書いている。「預言者(ムハンマド)の時代から、インド征服を成し遂げた者は、余のほかに2人しかいない。カズナ朝のマフムードとゴール朝のシハーブッディーン・ゴリー(ムイズッディーン・ゴリーとも呼ばれる)である。だが、余の功績はこの2人の功績とは比べものにならない。」(ロビンソン、2009、p.171)

と、自負している。

第3節の1項で述べたように、ムガル帝国という名称は、北インドの住民が用いた北西高地からの侵入者全般についての他称ではあったが、偶然とはいえ、後世にはモンゴル帝国との関連を連想させるものとして定着している。眞下(2000、p.2)は、同論文にて次のように述べている。

しかるにこうした呼称は、それが自稱であれ他称であれ、それを用いた者たちの概念の表明である。そうした概念は同時代の記録に定着されるに相違ない。よって、呼称を追跡するこの種の問題は、用語法すなわちヒストリオグラフィーの立場の問題に還元できることになる。言い換えれば、16世紀前半北インドの *Mughul* が13世紀のモンゴルに種族上起源するか否かは、さしあたり問題にはならない。(眞下、2000、p.2)

バーブルは、モンゴル帝国を意識せずともティムールからモンゴル帝国の伝統を引継ぎ、ティムール朝を超えた功績を自負しているが、後世には「後期ティムール朝」や「モンゴル帝国の子孫による建国のムガル帝国」という概念や見解も存在する。それは、ムガル帝国がモンゴル帝国の遺産を受け継ぎながらも、インドとの融合を通じて独自のアイデンティティを確立していった帝国であるという現代の我々が持つ概念の表明であるともいえるであろう。

第2章 宗教政策から見るムガル帝国の繁栄と衰退

本章では、モンゴル帝国がムガル帝国を経由し現代のインドに与えた影響はどのようなものか、という問題意識に基づいて、調査した結果を示す。

特に、宗教的影響として、宗教寛容政策を採用し、ヒンドゥー教とイスラム教の対立をやわらげ、融和を目指した理由や、文化的影響として、タージ・マハルなど当時の名残は現代のインドにも残っているが、建築、言語、文学、料理、音楽、芸術などの分野で、イスラム文化とヒンドゥー文化の融合はどのようにおこなわれたのか、考察する。

第1節 アクバル帝

アクバル帝(在位 1556～1605 年)は、ムガル帝国第3代皇帝として13歳で即位し、その4年後に親政を開始する。彼の治世はムガル帝国の基盤を築き、繁栄をもたらした時代である。アクバルは、1565年に新都アグラを建設し、非イスラム教徒への人頭税(ジズヤ)を1564年に廃止するなど、ヒンドゥー教徒との融和を図る政策を積極的に進めた。これにより、宗教的対立を和らげ、インドの統一を推し進めることに成功した。さらに1576年にはベンガル王国を征服、北インドをほぼ平定、ムガル帝国の領土を拡大した。また、1580年に中央アジア系貴族の反乱を平定し、イスラム教徒とラージプート豪族層を結集させることで、より強固な国家基盤を築き上げた。その後、晩年には北部デカンも支配下に収めるなど、広大な領土を手中に収めたことが特徴である。

アクバルはムガル帝国を発展させるためにヒンドゥー教徒勢力との融和を重視し、軍事制度や官僚制度を整備した。特に土地制度や税制、貨幣制度の改革を行い、国家の安定と経済基盤を強化する施策を講じた。これらの改革が後のムガル帝国の繁栄を支える柱となり、アクバルが「アクバル帝」として称賛される所以である。また、彼の政治手腕は、国の安定だけでなく、インド文化の多様性を尊重することで統治においても深い影響を与えた。

1556年にアクバルが即位した当初、ムガル帝国の支配領域はパンジャーブの一部に限られ、デリーやアグラには独立勢力が存在していた。これにより、彼は独自の統治体制を築き始め、権力の掌握に向けた一步を踏み出した。その後も乳母の一族であるアドハム＝ハーンが宰相を殺害する事件が発生したが、アクバルは厳格な対応を見せ、アドハム＝ハーンをヴェランダから突き落とす刑に処した。このように宮廷内の勢力を掌握していったアクバルは、1568～70年代にラージプート諸侯との同盟を進めつつ、敵対勢力を次々と征服していった。結果として1605年の没年には、北インドの大半(現在のパキスタン、バングラデシュを含む)をその支配下に収めることとなった。

アクバルの政策の中で特筆すべき点は、中央アジア出身の高官を抑えつつ、1562年にラージプート族の女性と結婚することで、ヒンドゥー教徒との協調を図ったことである。この結婚は、宗教的な対立を乗り越え、インド全体の統一を推し進める重要な一步となっ

た。また、1564 年には非ムスリムに課されていた人頭税を廃止し、イスラーム教徒とヒンドゥー教徒の対立を超越した新たな宗教的理念「ディーネ＝イラーヒー」を自ら説き、包括的な支配体制を確立しようとした。こうした政策によって、多様な文化と宗教を受け入れる姿勢を示し、インド全体の一体感を生み出すことに成功した。

1562 年 1 月、アクバルはラージャスタンのアジメールにある聖廟へ参拝する途上で、アンベールの王ビハリー＝マルから臣従の誓いを受ける機会を得た。この時、王は長女をアクバルに嫁がせる申し出を行い、これを受け入れたアクバルは帰路に結婚式を挙げた。アンベールの王は、ムガル皇帝に臣従した最初のラージプート王となり、これをきっかけにアクバルのヒンドゥー教徒との融和政策はさらに深化していったのである。

アクバルの治世における数々の改革と征服活動は、ムガル帝国の統一と繁栄を支える大きな柱となり、インド史上屈指の強大な王国を築き上げることに寄与した。

第 2 節 アウラングゼーブ帝

アウラングゼーブ帝(在位 1658～1707 年)はムガル帝国第 6 代皇帝であり、彼の治世は帝国の最盛期でありながら、その後の衰退の始まりを象徴する重要な時代であった。アウラングゼーブは、三代前のアクバル帝が築いたヒンドゥー教徒との融和政策を大きく変更し、インドにおけるイスラム教徒支配のあり方は新たな局面を迎えた。アウラングゼーブは熱心なスンナ派イスラーム信徒であり、ヒンドゥー教徒との融和を拒絶し、イスラムの厳格な教義に基づく政策を進めた。具体的には、1679 年にジズヤ(人頭税)の復活を強行し、ヒンドゥー寺院のモスクへの転換などを推進した。これにより、インド全土で非イスラム教徒層からの反発が高まり、各地で反乱が相次いだ。

アウラングゼーブの統治政策は、短期的にはムガル帝国の版図を拡大し、南インドへの遠征を成功させたことで領土は最大となった。しかし、その強硬な宗教政策は非イスラム教徒層をますます遠ざけ、デカンのマラーター王国やパンジャブのシク教徒の反乱が勃発することとなった。彼の治世末期には、これらの反乱がムガル帝国の力を分散させ、求心力を低下させる要因となった。アウラングゼーブが 1707 年に 89 歳で没すると、帝国の統治機構は弱体化し、各地の州太守(総督)は次第に独立の道を歩み始め、ヒンドゥー勢力を中心としたラージプート諸王国が帝国から離反していった。さらに、農村部においてはザミンダールと呼ばれる徴税権を持つ地主層が農民を支配する形態が広まり、中央集権体制が瓦解していった。

第 3 節 宗教政策

アウラングゼーブの政策とは対照的に、ムガル帝国第 3 代皇帝アクバル帝(在位 1556～1605 年)は帝国の基盤を築いた皇帝として知られている。アクバルはムガル帝国の創始者バーブルの死後の混乱から帝国を再建し、ヒンドゥー教徒との融和をはかりな

がら内政の安定を目指した。その象徴的な施策の一つが、ジズヤの廃止である。ジズヤはイスラム政権下で非イスラム教徒に課された税であり、これを廃止することで宗教間の不平等を軽減し、ヒンドゥー教徒との対立を緩和した。アクバルはヒンドゥー教徒の王女と婚姻し、優秀な人材であれば宗教を問わず高級官僚に登用するなど、寛容で公平な統治を行った。これによって、彼の治世は安定し、中央集権体制が強化された。

また、アクバルは中央集権化を進めるため、すべての官僚を等級づけして支配階層を組織化し、軍制の整備や北インドの統一も達成した。さらに、土地の測量や税制の整備などを行い、首都をデリーからアグラへ遷都することで統治の効率化を図った。これらの施策により、ムガル帝国は繁栄を遂げ、安定的な発展を可能にした。

アウラングゼーブの強硬政策は、短期的には支配地域の拡大をもたらした一方で、長期的には帝国の不安定化と衰退を招いた。対照的に、アクバルの融和政策はムガル帝国の発展を支え、中央集権体制の強化に寄与した。二人の皇帝の政策は、ムガル帝国の歴史を大きく形作るものであり、その影響は後世にまで及んだ。結果として、宗教政策や統治方法がムガル帝国の運命を左右する要因であったことが理解される。歴史の流れを考察する際、両者の統治姿勢の違いを踏まえることは不可欠である。

アクバル帝は、異なる宗教間の調和を重視した政策を打ち出した。彼はイスラム教徒でありながら他宗教を尊重し、ヒンドゥー教徒やその他の宗教の信者に寛容な姿勢を示した。彼がそのような宗教政策をとった背景には、ムガル帝国内の多様な民族と宗教を統治する必要性があったことが挙げられる。ムガル帝国は広範囲に及び、ヒンドゥー教徒が多数派を占めていたため、異教徒への過度な抑圧は帝国内の分裂を招く危険性があった。このため、アクバル帝はヒンドゥー教徒への人頭税を廃止し、異なる宗教信者の登用を進めることで、彼らの忠誠を得ようとした。また、アクバルはディン・イラヒーと呼ばれる新しい信仰体系を創設し、イスラム教、ヒンドゥー教、ゾロアスター教、キリスト教などの要素を取り入れ、宗教間の融合を図った。一方、6代目のアウラングゼーブ帝は、厳格なイスラム教徒であり、イスラム法(シャリーア)の適用を推進した。

アウラングゼーブの時代になると、帝国は財政的な困難に直面し、また内部対立が激化していた。このような状況下でアウラングゼーブは、帝国の求心力を高めるため、イスラム法を基盤とした政策に転換した。彼は、かつてアクバルが廃止したジズヤを再導入し、ヒンドゥー教徒に対する抑圧的な政策を取り、ヒンドゥー教の寺院を破壊し、ヒンドゥー教徒の祭礼を禁止するなど、イスラム教徒優位の政策を強化した。この背景には、アウラングゼーブがイスラム教徒としての正統性を強調し、帝国の宗教的純潔を守ろうとする意図があった。

アクバル帝の宗教政策の特徴としては、異なる宗教の知識人や学者と頻繁に議論を交わし、宗教的な対話を促進した点が挙げられる。彼はファテール・シークリーにイバーダット・ハナ(宗教会堂)を設立し、様々な宗教の代表者と意見交換を行った。これは、当時のムガル帝国がいかに多様な価値観を包摂しようとしていたかを物語る。アクバルの政策は、宗教的寛容が国家の統治に有益であるという彼の信念に基づいており、特に宗教の異なる臣民を統合するための手段として重要視されていた。

一方で、アウラングゼーブの政策の転換は、彼の個人的な信仰と国家の安定への懸念が複合した結果であるとされる。アウラングゼーブ帝はイスラム教の正統派とされるハナフィー法学に忠実であり、イスラム法を国家の基盤と見なしていた。さらに、彼は父シャー・ジャハーンから王位を奪った際、自らのイスラム教徒としての正統性を強調する必要があったと考えられる。このため、アウラングゼーブは、帝国内でのイスラム教徒の優位性を強化する政策をとり、異教徒への課税を再導入することで、イスラム教の価値観を再び前面に押し出した。アウラングゼーブの宗教政策は、ヒンドゥー教徒の反発を招き、彼の死後、帝国内で宗教対立が激化する原因となった。

第4節 結論

このように、アクバル帝とアウラングゼーブ帝の宗教政策の違いは、帝国内の状況やそれぞれの個人的な信仰、統治理念に深く根ざしており、アクバル帝は宗教的寛容を通じて多様な宗教・文化を統合することで国家の安定を維持し、広範な協調を図ることにより帝国の繁栄をもたらした。一方で、アウラングゼーブ帝はイスラム教の正統性を強調し、厳格なイスラム法に基づいた国家統治を進めることで、短期的には権力基盤を強化し支配を安定させたものの、非イスラム教徒に対する圧力や宗教的偏向が内部分裂を引き起こし、長期的には帝国の弱体化を招いた。このように、アクバル帝が異なる宗教信者との調和を重視し帝国内の多様性を受容したのに対し、アウラングゼーブ帝は宗教的一体性を追求して支配の正統性を確立しようとした点に両者の政策の根本的な違いが見られ、これらの方針の違いがムガル帝国の繁栄とその後の衰退に対して決定的な影響を与えたと言える。

第3章 モンゴル帝国がムガル帝国に与えた影響

本章では、宗教政策、血縁、法制度、文化的側面という4つの観点から、モンゴル帝国がムガル帝国に与えた影響を考察する。特に、モンゴル帝国の遺産がムガル帝国にどのように具体的に受け継がれ、その後のインドの歴史にどのような影響を与えたのかを明らかにする。また、ムガル帝国の衰退から現代インドへの変遷、さらに、現代におけるインドとモンゴルとの関係性に関して考察する。

第1節 モンゴル帝国とムガル帝国の宗教政策の共通点

本節では、「第2章 宗教政策から見るムガル帝国の繁栄と衰退」で示された内容を一部振り返りつつ、モンゴル帝国とムガル帝国の宗教政策の共通点を探る。

Gier(2006)によると、モンゴル帝国、特にチンギス・ハンの時代は、宗教的寛容性が高かったという。

チンギス・ハンの息子たちはネストリウス派キリスト教徒の女性と結婚し、オゴデイ・ハンの首都カラ・コルムでは、道教寺院、仏教寺院、モスク、教会が建てられた。これは当時世界で最も宗教的に開放的で寛容な都市であったと考えられている。また、モンゴル帝国は、征服地の人々に対して宗教の自由を認めた。チンギス・ハンやその後継者たちは、被征服民の宗教を尊重し、改宗を強制しなかった。この宗教的寛容性は、広大な帝国を効果的に統治するための実用的な政策でもあった。異なる宗教の共存を認めることで、征服地の人々の反発を抑え、統治を容易にした。

このモンゴル帝国の考えは、世俗的な国際法の概念を最初に実行したものとされる。つまり宗教に基づかない法体系の導入によって、多様な宗教の共存を可能にしたといえよう。しかし、この寛容性は時代とともに変化した。例えば、イル・ハン国では、仏教やネストリウス派キリスト教の統治者の下で宗教的迫害が行われた時期もあった。モンゴル帝国の宗教的寛容性は、同時代の他の征服者、特にティムール朝を興したティムールのような残虐な征服者と対照的であった。(Gier, 2006)

一方、ムガル帝国では、第3代皇帝であり1556年から1605年まで統治したアクバル帝(Emperor Akbar)が、宗教的寛容政策をとっていた。アクバル帝は自身の宮廷にあらゆる宗教の代表者を歓迎し、彼らと友好的な対話を行ったとされている。この政策は、単なる統治の手段を超えて、異なる宗教間の相互理解を深めることを目的としていた。また、その宗教政策は、モンゴル帝国の伝統的な宗教的寛容性を引き継ぎつつ、インドの多様な宗教的背景に適応させたものであった。アクバル帝は、ヒンドゥー教徒、イスラム教徒、ジャイナ教徒、仏教徒など、様々な宗教の信者たちを平等に扱い、彼らの知恵を尊重していたという。宗教的寛容政策は、多様な宗教が共存するムガル帝国の統治において重要な役割を果たし、アクバル帝が治めていた時代は、ムガル帝国の最盛期の一つとされ、文化的、経済的にも繁栄を遂げた時期であった。この宗教政策は、後の時代にも影響を与え、インド亜大陸における宗教的共存の模範となった。しかし、後の皇帝たちは

厳格なイスラム政策を採るようになり、アクバル帝の寛容政策からの逸脱が見られるようになった。(Gier, 2006)



出所:<https://sweetinstitute.com/emperor-akbars-legacy-fostering-inclusivity-and-mental-well-being/>

図 8 アクバル帝 (Emperor Akbar, 1556-1605)

アクバル帝が治めていた頃のムガル帝国では、イスラム教とヒンドゥー教を中心とする様々な宗教の共存が可能となっていた。例えば、デリー南西のイスラム教徒のメオ族は、ディワリやダシェーラといったヒンドゥーの祭り、クリシュナの誕生を祝い、同地域のミナ族は、イスラム教徒でありながらハヌマーンやシヴァ神の一形態を崇拝し、また、デリー北部では、カーリー女神とアッラーの両方に祈りを捧げるイスラム教徒がいる、と言う状況が見られた。さらに、ヒンドゥー寺院の巡礼者からの収入がイスラム教徒の統治者にとっても重要であったことは、宗教間の経済的相互依存関係があったことを示している。(Gier, 2006)

しかし、この融合は常に平和的であったわけではないという。寺院の破壊や強制改宗など、宗教間の緊張も存在した。特に、1658年から1707年までムガル帝国を統治した第6代皇帝であるアウラングゼーブ帝 (Emperor Aurangzeb) の時代には、アクバル帝の宗教的寛容政策から逸脱し、より厳格なイスラム政策が採られ、融合に制限が加えられた。例えば、ヒンドゥー僧侶たちの伝統的な宗教実践の権利を擁護したが、同時に新しい寺院の建設を制限したり、不信心者の学校と礼拝所を破壊せよ、と命じたりもしたという。尚、寺院破壊には政治的動機があったとする解釈として、一部の寺院破壊は、不忠実なヒンドゥー官吏への罰として行われたという見方がある。この厳格な政策は、多様な宗

教が共存するムガル帝国の統治を困難にし、帝国の衰退につながったとされる。(Gier, 2006)

第2節 ムガル帝国の統治に与えた血縁の影響

ムガル帝国の統治者たちは、自らをティムールの直系の子孫であると主張し、それを帝国の正統性の根拠としていた。この血統意識は、公的な場での儀式や祝祭を通じて定期的に強調された。Sood は以下のように述べている。

公的な表示は、ムガル帝国がティムールの直系の子孫であることを強調するために使用された。記念日は、この事実を臣民に思い出させる好機となった。サムガル (Samugarh) の戦いの勝利から2年目に、[アウラングゼーブは]世界の征服者、アミール・ティムールの慣習に則って祝った。誰も、高貴な者も卑しい者も、これほどの輝きで目を輝かせるような方法で祝ったことはなかった。(Sood, 2021, p13)

この記述は、ムガル帝国の統治者たちが、ティムールとの血縁関係を公的に誇示することで、自らの権威を強化しようとしていたことを示している。ティムールは、その征服者としての名声と、その妻がチンギス・ハンに始まるモンゴル皇帝の血統である地位から、尊敬の対象となっていた。さらに、軍事戦略においてもモンゴルの影響が見られ、以下のよう

に述べている。

バーブルは、戦闘においてチンギス・ハンに関連する軍事原則 [トゥーラ, ラサム (tūrah, rasam)] を使用したことが注目される。これらはおそらくティムールを経由して伝えられたものだろう。(Sood, 2021, p13)

これらの事例は、ムガル帝国がモンゴル帝国の伝統を継承し、それを自らの統治の正統性と効果的な統治手法の源泉として活用していたことを示している。つまり、モンゴル帝国の影響は、単なる血統の問題を超えて、統治の実践や軍事戦略にまで及んでいた。このように、ムガル帝国はモンゴル帝国の遺産を積極的に取り入れ、それを自らの統治の基盤として活用していた。この継承関係は、中央アジアからインド亜大陸に至る広大な地域における政治的・文化的連続性を示すものであり、モンゴル帝国の影響力の持続性を示す重要な事例であると言える。

第3節 ムガル帝国における法制度の多様性と統一

Lefèvre(2017)は、16-17 世紀のムガル帝国における法制度の多様性と統一に関して以下のように考察している。

ムガル帝国では、主に3つの法体系が並存していたという。イスラム法「シャリーア(sharia)」、ヒンドゥー法「ダルマ(dharma)」、そして行政法「ザワービト(zawabit)」である。この法の多元性について以下のように述べられている。

少なくとも3つの(補完的で場合によっては競合する)規範的枠組みがムガル帝国内で共存していた(シャリーア、ダルマ、ザワービト)。そのいずれも、1650年代の王朝の最盛期までに、顕著な標準化を達成していなかった。(Lefèvre, 2017, p.119)

特筆すべき点として、これらの法体系は互いに排他的ではなく、むしろ相互補完的に機能していたところだ。例えば、ヒンドゥー教徒がイスラム法廷「カーディー(qazis)の法廷」を利用する事例が以下のように確認されている。

ヒンドゥー教徒は、公証登録の目的で、訴訟における主張を支持するため、あるいは自分たちに有利な判決を得るために、シャリーアやカーディーの法廷に躊躇なく訴えた。(Lefèvre, 2017, p.118)

また、皇帝による法的権威の確立過程として、アクバル帝の時代に重要な転換点があった。1579年の「マフザル(mahzar)」(宗教的布告)の発布により、皇帝は最高の法的権威として位置づけられた。Lefèvreによると、以下のように述べられている。

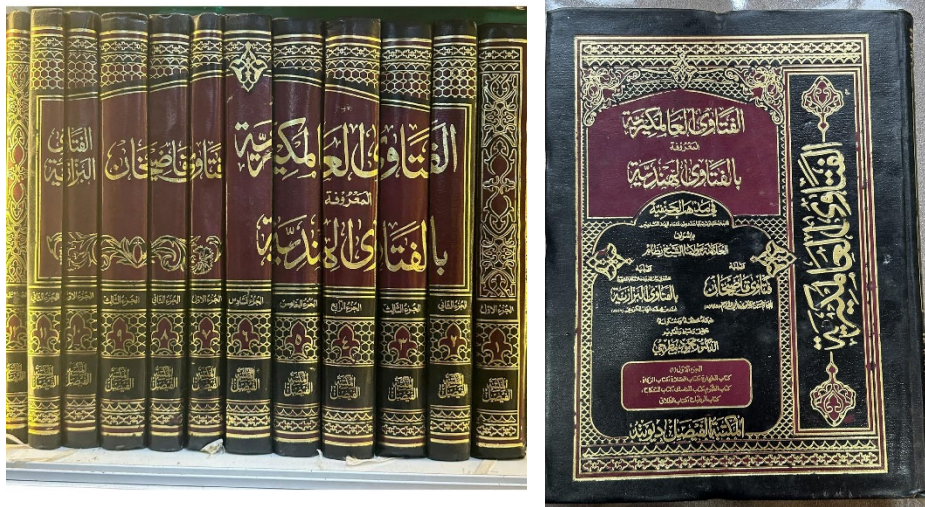
ムガル帝国の君主たちは、政治的な便宜を図るためにイスラム法の内的な多様性(およびそれに伴う矛盾や曖昧さ)を操作することもあったが、より一般的には、イスラム法を自分たちの領地内に確立しようと努める中央権力の障害とみなす傾向が強かった。そのひとつが、支配者に法を与え、帝国の最高の法的権威とすることであった。この選択肢は、アクバルによってその治世の後半に開始された。実際、彼が「イジュティハード(ijtihad)の時代の到来」と述べているのは、1579年に有名なマフザル(mahzar)が公布されたことを直接指している。マフザルとは、帝国の主要なウラマー(ulema: 神学者)によって署名された文書で、君主の地位がムジュタヒド(muftahids: イスラム法解釈者)よりも上位であることを宣言し、それによって君主の支配をイスラム法学者の支配から解放するものである。しかし、このような主張はムガル帝国領内にとどまらず、より広いイスラム世界へと拡大し、サファヴィー朝やオスマン帝国の競争相手を理論的に凌駕する法学的・宗教的権威をアクバルに付与した。(Lefèvre, Corinne, 2017, p.121)

この過程は、ジャハーンギール(Jahangir)帝の時代にさらに発展を見せた。‘Abd al-Sattar ibn Qasim Lahauri (1619 年以降没)による「マジャーリス・イ・ジャハーンギーリー(Majalis-i Jahangiri)」には、法の問題に対するジャハーンギールの深い関心と、法の領域における彼の野心が帝国の法の専門家の階級の中から引き出したさまざまな反応の十分な証拠を示しており、王朝の法的イデオロギーと政治について考えるための良い事例研究となっている。

法制度の標準化・体系化への試みとして、アクバル帝が法的権威の問題においてウラマーに対する皇帝の優越性を確立することに成功し、その後継者であるジャハーンギール(Jahangir: 在位 1605-1627 年)とシャー・ジャハーン(Shah Jahan: 在位 1628-1658 年)がそのような力の均衡を維持する能力を持ったことで、アウラングゼーブ帝は法学者に対してより柔軟で融和的な態度を取ることができ、イスラム法制度の標準化というプロジェクトを彼らに託すことで、顕著な進展を見せた。ファターワー・イ・アーラムギーリー(Fatawa-i ‘Alamgiri: 1664-1672 年)の編纂は、その代表的な例として、ムガル・インドで生産された最大のハナフィー(Hanafi)法学の集大成となったと言われている(Lefèvre, Corinne, 2017, p.127)。

この法典編纂の目的について同時代の記録として以下の記述がある。

アウラングゼーブの崇高な心は、一般ムスリム大衆がハナフィー派の神学者(ウラマー)の法的決定や判例に従って行動するようにすることに捧げられたが、現存する法典に見られるこれらの裁定が、カーズ(qāzis)やムフティー(muftis)の間の意見の多様性や、伝統の弱さ(すなわち、重みや権威のなさ)、古代の権威者の宣言の矛盾のために混乱しているのを見て[...], この皇帝の心は、ハナフィー派の神学者(ウラマー)の法的決定や判例に従って行動するようにすることに捧げられた、また、古代の権威者の宣言は矛盾していた。信仰の庇護者であるこの皇帝の心は、著名な神学者やヒンズー教の有名な学者からなるシンジケートが、帝国図書館に収集されていた法学に関する長い権威ある書物を調べ、ムフティーたちの裁定を抜き出し、それらすべてから 1 冊の包括的な書物を編纂し、すべての人が(自分のケースに関する)権威ある裁定を簡単に見つけることができるようにする、ということに向けられた[...]。この本の作成には約 200 万ルピーが費やされ、「ファターワー・イ・アーラムギーリー(Fatawa-i ‘Alamgiri)」と題され、他のすべての法学書から独立したものとなった。(Lefèvre, 2017, p.137)



出所: <https://amzn.in/d/bCHW56p>

図 9 Fatāwā al-Hindiyya

事実、ファターワー・イ・アールームギーリー (Fatawa-i 'Alamgiri) は、ファターワー・アル・ヒンディーヤ (Fatāwā al-Hindiyya) として知られるイスラム教徒社会で、重要なハナフィーの権威として急速に評判を高めた。

以上より、ムガル帝国の法制度は、多様性を維持しながらも、徐々に体系化・標準化への道を歩んでいったと言える。特に注目すべきは、この過程が単なる法の統一ではなく、既存の多様な法体系を調和させながら、帝国全体の統治システムを確立しようとする試みであった点である。これらの法制度改革は、現代インドの法制度にも影響を与え、特に多様な法体系の共存という特徴は、現代インドの法制度にも見られる重要な要素となっている。

第 4 節 タージ・マハルから見るモンゴル帝国との文化的融合

タージ・マハルは、17 世紀にムガル帝国第 5 代皇帝シャー・ジャハーン (Mohammad Shah Jahan, 1592-1666) によって建設された、インドを代表する建造物である。この壮大な建築物は、皇帝が最愛の妻ムムターズ・マハルの追悼のために建てたものと言われている。

タージ・マハルの特徴は以下の通りである。

- a) 建築様式: イスラム建築、ペルシャ建築、およびインド建築の要素が融合している
- b) 材料: 主に白大理石で建設され、半貴石による装飾が施されている
- c) 構造: 中央のドームを持つ対称的な設計で、四隅にミナレット(尖塔)がある
- d) 庭園: チャハルバーグ(四分庭園)の様式を採用している



出所:<https://www.hotholiday.jp/taj-mahal/>

図 10 タージ・マハル

タージ・マハルの建設には、約 20 年の歳月と 2 万人の職人が費やされたとされる。その美しさと壮大さから、世界遺産に登録され、世界新七不思議の一つにも選ばれている。重要な点として、タージ・マハルはムガル帝国の権力と富の象徴であるだけでなく、モンゴル系の血統を反映しており、ムガル帝国とモンゴル帝国の歴史的な繋がりを示している点にある。以下にその繋がりについて示す。

タージ・マハルとモンゴル帝国とのつながりは、多層的かつ深遠なものである。まず、血統的な観点から見ると、タージ・マハルを建設したシャー・ジャハーンは、モンゴル帝国の創始者チンギス・ハンの子孫であることが挙げられる。シャー・ジャハーンの父方の祖先は、ムガル帝国の創始者バーブルに遡り、バーブルはティムール(タメルラン)の子孫を自称していた。ティムールはティムール朝の建国者であり、チンギス・ハンの子孫であったチャガタイ・ハン国のカザン・ハーンの娘サライ・ムルク・ハーンムを正妃としていた。さらに、シャー・ジャハーンの母方の祖先は、モグーリスターン・ハン国の出身で、チンギス・ハンの直系と主張していた。

建築様式の面では、タージ・マハルにモンゴル帝国時代の影響が見られる。モンゴル帝国の拡大により、中央アジアの建築様式がインドに伝わり、また、モンゴル帝国がペルシャを支配したことで、ペルシャ建築の要素がムガル建築に影響を与えた。タージ・マハルの装飾に見られる幾何学的なパターンは、モンゴル美術の特徴を反映している。文化的シンボリズムの観点からも、タージ・マハルにはモンゴル帝国時代からの影響が見られる。例えば、チャハルバグ(四分庭園)の様式は、モンゴル帝国時代にペルシャから伝

わったものである。また、花や植物のデザインはモンゴル美術の影響を受けており、建築物全体の構造が宇宙を表現しているという考え方は、モンゴルのシャーマニズムの世界観と関連している。政治的象徴としても、タージ・マハルはムガル帝国の権力と富を表すと同時に、モンゴル帝国の遺産も体現している。その壮大さは、モンゴル帝国時代の広大な領土支配の伝統を反映しており、様々な文化要素の融合は、モンゴル帝国時代の多文化主義的な統治方針を継承している。さらに、タージ・マハルの建設には、モンゴル帝国時代に促進された技術と知識の交流が貢献している。中央アジアやペルシャから伝わった建築技術が使用され、白大理石の使用など、モンゴル帝国時代に広まった建築材料の知識が活かされた。

このように、タージ・マハルはムガル帝国の象徴でありながら、その根底にはモンゴル帝国との深いつながりが存在している。この建造物は、ユーラシア大陸を横断する文化交流と権力の継承の歴史を体現しており、インド亜大陸とモンゴル帝国の歴史的な関係性を物語る重要な証左となっているのである。

第5節 ムガル帝国の衰退

第1項 ムガル帝国の衰退要因

Metcalf (B.D.)とMetcalf (T.R.)によると、ムガル帝国の衰退は、複雑な要因が絡み合っ

て引き起こされた歴史的な出来事であったと考察されている。その主要な原因の一つは、アウラングゼーブ帝の統治方針にあった。彼の厳格なイスラム政策はヒンドゥー教徒との対立を深め、デカン地方への長期にわたる遠征は帝国の財政と軍事力を著しく消耗させた。これらの政策は、帝国の基盤を徐々に弱体化させていった。

同時に、中央集権体制の弱体化も大きな要因となった。広大な領土を効果的に統治するための行政システムが時代とともに機能不全に陥り、地方の総督や領主たちが実質的な独立を果たすようになった。これにより、中央政府の統制力が著しく低下した。

経済面では、長期の戦争による財政負担、過度の課税、そして国際貿易の変化により、帝国の経済基盤が揺らいだ。さらに、1707年のアウラングゼーブ帝の死後、有能な後継者の不在と王位継承をめぐる争いが、帝国の安定を損ない、帝国の衰退が加速した。

外部からの圧力も無視できない要因であった。ペルシャやアフガニスタンからの侵攻が帝国を弱体化させた。1739年にはペルシャのナーディール・シャーがデリーを襲撃し、多大な被害をもたらした。その後、アフガン人の勢力が拡大し、1748年と1757年にはアフマド・シャー・アブダリーがデリーを攻撃した。デリー周辺では、アフガン人のロヒッターやアーグラのジャート族による脅威も増大した。18世紀半ばまでに、パンジャーブを含む北インドの大部分は混沌と混乱に陥っていた。また、マラーター、シク教徒、ジャート族な

どの勢力が台頭し、帝国の領土を蚕食していった。マラーター同盟は 1761 年のパーニーパットの戦いでアフガン人に敗北するまで、勢力を拡大し続けた。この敗北後、マラーター勢力は 4 つの独立した国家に分裂した。

同時に、ヨーロッパ諸国の技術革新に追いつけず、特に軍事面での近代化が遅れたことで、東インド会社などの欧州勢力に対抗する力を失っていった。

社会的には、宗教対立の深刻化やカースト制度の硬直化により、社会の一体性が失われていった。また、長年の安定により官僚制度が硬直化し、汚職が蔓延するようになったことで、効率的な統治が困難になった。

これらの要因が複雑に絡み合い、18 世紀を通じてムガル帝国は徐々に衰退していった。このような状況下で、イギリス東インド会社が徐々に力をつけていった。1803 年までに、ムガル皇帝は名目上の支配者に過ぎなくなり、デリー周辺の地域のみを支配するようになった。そして、かつて小さな貿易団体に過ぎなかった東インド会社が、インド亜大陸の新たな支配者としての地位を確立していったのである。

最終的に、1857 年のインド大反乱(セポイの乱)後、イギリス東インド会社によって帝国は完全に解体され、インドはイギリス帝国の直轄植民地となった。この衰退過程は、大規模帝国の維持の難しさと、社会的・経済的・技術的变化への適応の重要性を示す歴史的な例となっている。ムガル帝国の衰退は、単一の要因ではなく、複数の問題が相互に影響し合って引き起こされた複雑な歴史的プロセスであったと言える。(Metcalf, 2006, p.29-35)

第 2 項 インド大反乱(セポイの乱)

Metcalf (B.D.)と Metcalf (T.R.) によると、1857 年のインド大反乱は、イギリス支配に対するインドの反抗として、近代インド史上最も重大な出来事の一つであったとされている。

この反乱は、ベンガル軍のセポイ(インド人兵士)による軍事反乱として始まった。反乱の直接的な原因は、新しいリー・エンフィールド式小銃の使用に関する問題であった。この銃の装填には、牛や豚の脂が塗られた紙包みを歯で破る必要があり、これはヒンドゥー教徒とイスラム教徒の双方にとって宗教的タブーであった。

5 月 10 日、ミーラトの兵士たちが反乱を起こし、デリーに向かって行進した。そこで彼らは、ムガル帝国の老齢の皇帝バハードゥル・シャーを擁立しようとした。反乱は急速に北インド全域に広がり、ビハールからパンジャブに至る広大な地域がイギリスの支配から離れた。反乱は単なる軍事反乱を超え、農民や地主、商人など様々な集団が参加する広範な蜂起となった。特に、東部ガンジス平原の地域で強い支持を得た。しかし、統一された戦略や指導者の不在が反乱の弱点となった。

イギリスは、パンジャブで征服した地域からの兵士を含む大規模な軍事力を動員して反乱を鎮圧した。鎮圧作戦は極めて残虐なものとなり、イギリス軍と民間人は無差別に暴力を振るった。デリーは再占領され、略奪された。ムガル皇帝は廃位され、ビルマに流

刑となった。反乱の結果、東インド会社の統治は終わりを告げ、1858年8月2日、インド統治法によってイギリス王室の直接統治が始まった。この法律は、東インド会社のすべての権限をイギリス王室に移譲した。

反乱は、インドにおけるイギリスの統治方法を大きく変えることとなった。イギリスは、インドの伝統的な指導者や制度との協力を重視するようになり、急進的な社会改革の試みを控えるようになった。また、インド軍の再編成が行われ、カースト別の部隊編成や、特定の「戦闘民族」の重用など、新たな軍事政策が導入された。

1857年の反乱は、インド人とイギリス人の双方に深い心理的影響を与えた。イギリス人にとっては、インド統治の脆弱性を露呈させる出来事となり、インド人にとっては、後の独立運動の精神的な源泉となった。しかし、この反乱の解釈は今日に至るまで論争の的となっており、「反乱」「民族解放戦争」「第一次独立戦争」など、様々な呼称が用いられている。(Metcalf, 2006, p100-107)



出所: <https://note.com/umahazi2014/n/n2f865f08d507>

図 11 インド大反乱(セポイの反乱)150年の切手

第 6 節 現代のモンゴルとインドの関係

第 1 項 ソヨンボ文字から見るモンゴルとインドの関係

Gopal(2019)によると、ソヨンボ文字は、1686 年にモンゴルの聖人かつ学者であるザナバザルによって創作されたという。この文字システムの名称自体が、サンスクリット語の「スヴァヤンブー」(Svayambhu)を変形したもので、「自ら生じたもの」という意味を持つ。ソヨンボ文字は、サンスクリット語のデーヴァナーガリー文字とチベット文字を基にしており、モンゴル語のハルハ方言に適するよう追加の記号や印が加えられている。現在でも、モンゴルでは宗教的な目的でこの文字が使用され、深い尊敬の念を持って扱われている。ソヨンボ文字の中で最も重要な要素は、ソヨンボのシンボルである。このシンボルはモンゴルの国章であり、国旗にも使用されている。ソヨンボのシンボルの構成要素には、陰陽のシンボルと、サンスクリット語の「オーム」(創造の原初の音を表す)が含まれており、これはインドの古代の精神的伝統の中心的な概念を表している。



出所: <https://www.world-national-flags.com/country/asia/mongolia.html>

図 12 ソヨンボ文字があしらわれたモンゴル国旗

ソヨンボ文字とそのシンボルは、モンゴル帝国とムガル帝国、そしてインドとの深い文化的つながりを示す重要な例である。まず、ソヨンボ文字の創作は、モンゴルにおける仏教の影響を反映している。仏教はインドから中央アジア、チベットを経てモンゴルに伝わった。次に、ソヨンボ文字がサンスクリット語のデーヴァナーガリー文字を基にしていることは、インドの文化がモンゴルに与えた影響を示している。さらに、ソヨンボのシンボルに見られる陰陽や「オーム」の要素は、東洋の様々な思想や宗教の融合を表しており、これはムガル帝国時代に見られた文化的融合の精神と通じるものがある。また、ソヨンボ文字の名前の由来や、そのシンボルに込められた宇宙観は、インドの哲学的概念と深く結びついている。加えて、ソヨンボ文字がモンゴルの国家のシンボルとして使用されていることは、ムガル帝国時代に見られた文字や言語の政治的重要性と類似している。このように、ソヨンボ文字は、モンゴル帝国とムガル帝国、そしてインドの間の文化的、精神的、政治的なつながりを象徴する重要な要素であり、これらの地域間の長期にわたる相互影響の証拠となっているのである。(Gopal, 2019, p.56-60)

第2項 仏教文化を通じたモンゴルとインドの人的交流

モンゴルとインドの仏教を通じた交流は、7-8世紀にまで遡る。当時、モンゴルの僧侶たちはラクダやヤクを使ってヒマラヤを越え、インドのナーランダ大学で仏教を学んでいた。この関係は13-14世紀のモンゴル帝国時代にも継続し、その後、満州国時代にもチベット仏教(ラマ教)を通じた交流が続いた。

17世紀後半以降、モンゴルの高位のラマたち(初代ハルハのジェブツンダンバ、チョインザド・ラマ・ダンビドンメ、ジェドルのハンバ・アグワーンハイダブ、聖ザヤ・パンディタ、ラミーン・ゲゲーンなど)が、インドで学んでいた。

20世紀には、社会主義時代の70年間、仏教は抑圧されたが、1970年にウランバートルにアジア仏教平和会議が設立され、これによってモンゴル・インドの宗教的つながりが維持されることとなった。

1990年の民主化革命後、インドは再びモンゴルの仏教復興に重要な役割を果たした。特に、第19代クショク・バクラ・リンポチェ(著名な仏教ラマ)が1990年から2003年までインド大使としてモンゴルに駐在し、仏教知識の再活性化、100以上の寺院の再建、ウランバートルのペトゥブ僧院と宗教学校の設立、数百人のモンゴル僧のインドでの訓練、そしてダライ・ラマを含む仏教教師たちの受け入れを支援した。

現在、約300人のモンゴル僧がドレプン・ゴマン僧院大学、セラ・ジェイ僧院大学、ダラムサラの仏教学校などで学んでおり、ピーク時には800人以上に達することもある。彼らは最長24年間にわたって仏教哲学を学ぶ。

このような深い歴史的・文化的つながりは、現代の両国関係における重要な基盤となっている。モンゴルの政治指導者は「仏教の遺産とリンポチェのモンゴルでの存在により、他の社会主義国とは異なり、モンゴルの民主主義への移行が平和的に行われた」と述べているという。(Naranzul & Mendee, 2022, p.178-179)

第3項 モンゴルの第三の隣国としてのインド

Pradhan(2021)は、モンゴルの地政学的ジレンマと第三の隣国政策に関する考察を以下のように示している。

モンゴルの地政学的位置づけは、その歴史的変遷において劇的な変化を遂げている。13世紀から14世紀にかけて、モンゴル帝国は世界最大級の領土を有する帝国として、現代の30カ国に相当する領域を支配していた。しかし、現代のモンゴルは、かつての帝国としての栄光から一転し、2つの大国に挟まれた地政学的困難に直面している。(Pradhan, 2021, p.42-47)

特に、ソビエト連邦との関係において、1930年代にソビエトとその傀儡であるモンゴル人民革命党(MPRP)による反宗教運動と政治的弾圧の波の中で、数万人を虐殺する粛

清政策が実施された歴史的経験から、モンゴルは現代のロシアとの関係においても慎重な姿勢を維持している。(Pradhan, 2021, p.48)

中国との関係においては、元朝崩壊後、モンゴルは万里の長城の北に撤退を余儀なくされた歴史を持つ。現代では中国の経済的影響力の増大に直面しており、中国の商品やサービスが国内市場に氾濫し、大規模な建設プロジェクトの契約や、シルクロードと一帯一路(BRI)プロジェクトを通じて、地域全体が中国の直接的な影響圏に入っている状況にある。(Pradhan, 2021, p.49-50)

このような地政学的制約を克服するため、モンゴルは多角的な外交関係の構築を試みている。具体的には、欧州連合(EU)との関係強化、日本との協力関係の模索、NATOとの連携可能性の検討などが進められている。また、スイスの永世中立政策をモデルケースとして参考にしている点も特徴的である(Pradhan, 2021, p.53-54)。

インドが第三の隣国として有望視される背景には、1955年からの外交関係の樹立、仏教を通じた文化的紐帯、相互友好協力条約の継続的な締結(1973年、1994年、2001年、2004年)という歴史的・文化的基盤が存在する。さらに、2015年のモディ首相のモンゴル訪問を契機に、インドはモンゴルに10億ドルの信用供与を実施し、モンゴル石油化学精製所プロジェクトを支援するなど、具体的な協力関係を構築している(Pradhan, 2021, p.57-58)。

戦略的な観点からは、インドにとってモンゴルとの関係強化は、中国の真珠の首飾り戦略や一帯一路に対する戦略的カウンターバランスとして機能する可能性を持っている。しかしながら、地理的な距離や実際の影響力の限界など、課題も存在している(Pradhan, 2021, p.60-61)。

このように、モンゴルの地政学的ジレンマは、その歴史的経緯と現代の国際関係が複雑に絡み合って形成されており、第三の隣国政策は、この制約を克服するための現実的な外交戦略として位置づけられる。その中で、インドは歴史的な文化的紐帯と現代の戦略的利害の一致により、有力な候補として注目されている。

第7節 結論

モンゴル帝国がムガル帝国に与えた影響として、宗教政策、血縁、法制度、文化的側面において重要な遺産が確認できる。宗教政策においては、アクバル帝が実施した宗教的寛容政策がモンゴル帝国の統治理念を踏襲したものであり、これによりヒンドゥー教徒とイスラム教徒の対立を和らげ、帝国の安定的発展を実現した。一方、アウラングゼーブ帝の厳格なイスラム教政策への転換は、帝国衰退の一因となった。血縁面では、ムガル帝国の統治者たちはティムールの直系子孫であることを強調し、それを帝国の正統性の根拠とした。これは公的な場での儀式や祝祭を通じて定期的に示された。法制度においては、イスラム法、ヒンドゥー法、行政法という3つの法体系が並存し、相互補完的に機能した。文化的側面では、タージ・マハルに代表される建築様式にモンゴル帝国時代の影響が色濃く残されている。特に、建築物の装飾に見られる幾何学的なパターンはモ

ンゴル美術の特徴を反映している。また、チャハルバグ(四分庭園)の様式は、モンゴル帝国時代にペルシャから伝わったものである。

このように、ムガル帝国はモンゴル帝国の遺産を受け継ぎながら、インドとの融合を通じて独自のアイデンティティを確立していった。それは現代のインドの文化的多様性の基盤となり、また、インドとモンゴルの外交関係にも影響を与え続けている。

第Ⅲ部 モンゴル帝国とオスマン帝国

第1章 モンゴル帝国から逃げて小アジアにできたオスマン・トルコの繁栄と海運

本章では、オスマン帝国について述べる。オスマン帝国は、中世から近世にかけて存在した強大なイスラム帝国である。その起源と成り立ちは非常に興味深く、今日のトルコ共和国にも影響を与えている。オスマン帝国は、13世紀末にアナトリア半島に誕生し、長い歴史を経て発展し、広大な領土を持つ帝国へと成長した。部族から君侯国、帝国へと発展・拡大したオスマン家。アナトリア半島の片田舎に生まれた小国が、どのようにして広大な領土を持つ大国までに成長をしたのか、その要因は何であったのか、そこに海運の影響がどのようにあったのかを、明らかにする。

第1節 オスマン帝国

第1項 概要

まずはオスマン帝国の総称であるが、日本では、1990年頃までオスマン＝トルコとされ、セルジューク＝トルコに対するオスマン＝トルコ、というふうに認識されていたが、現在は専ら「オスマン帝国」とされている。

その理由として、彼らがそう自称したことはないこと、トルコは、バルカン半島に進出してからは多民族国家となっており、トルコ人が多数派だったわけではないことが認識されたことがあげられる。「オスマン」という呼び方は、1876年制定の憲法に「オスマン国(デヴレティ・オスマニエ)」と明記されてからで、それ以前は「至高の国家(デヴレティ・アリエ)」などと書かれていた。しかしこれは、オスマン王家のことを指すとされ、歴史的には「オスマン朝」と書かれていた。

以上のことから現在では研究者の中で「オスマン帝国」が定着している。もっとも「帝国」にふさわしい国家になるのは、1453年のメフメト2世の頃からであり、それ以前は「オスマン侯国」というのがふさわしいと言われている。

以上のことから600年続いた国家を一言で言えば「オスマン帝国」という呼称に落ち着くことになり、ここではその流れをくんで「オスマン帝国」と呼ぶことにする。

オスマン帝国は、現在のトルコを中心に、14世紀から20世紀初頭まで続いた大帝國である。地理的には、オスマン帝国の最大領土は、北はハンガリー、西はアフリカのアルジェリア、南はエジプト・イエメン、東はアジアのインドに至るなど、広大であった。全盛期といえるスレイマン1世の時代には、人口は1,500万人に達していた。

それ以前に存在していた巨大帝国としてモンゴル帝国が挙げられるが、モンゴル帝国が150年余りだったの対して、オスマン帝国は623年間存続した。

オスマン帝国は、1299 年にトルコ高原の小さな部族連合が結集して成立した。初代のスルタンであるオスマン 1 世が率いるこの部族連合は、徐々に周囲の都市や地域を征服し、拡大を続けた。以下の図は、16 世紀オスマン帝国が最も領土を拡大していた時期のものであるが、黒海、地中海、欧州の 1 部、ペルシャ湾の地域まで、広大な範囲で領土を広げていたことがわかる。



出所：世界の歴史まっぷ

図 13 オスマン帝国とサファヴィー朝の最大領域地図

オスマン帝国の起源を探るには、中央アジアからのトルコ民族の移動とその後の歴史を理解することが重要である。特にモンゴル帝国の影響は、トルコ民族の歴史において重要な役割を果たした。次項以降では、オスマン帝国の起源とモンゴル帝国との関連性について詳述する。

第 2 項 アジアからのトルコ民族の移動

トルコ民族の起源は中央アジアにあり、遊牧民として生活していた。紀元前 2 千年紀にさかのぼるトルコ系の部族は、長い歴史の中で西に移動を続け、9 世紀から 10 世紀にかけてイスラム教を受け入れるようになった。この過程で、セルジューク朝が誕生し、トルコ民族はさらに西方への移動を続けた。

モンゴル帝国の支配と征服活動により、中央アジアのトルコ民族は大規模な移動を余儀なくされた。この移動の過程で、多くのトルコ系部族がアナトリア半島（現トルコ領）に定住するようになった。セルジューク朝が崩壊した後の混乱期

には、さらに多くのトルコ民族がアナトリアに移住し、後にオスマン帝国の基盤を形成した。

第3項 モンゴル帝国の勃興とトルコ民族

13世紀初頭、チンギス・ハン（1162年 - 1227年）によってモンゴル帝国が築かれた。モンゴル帝国は驚異的な軍事力を誇り、短期間で中央アジア、ペルシャ、ロシア、中国を征服し、この過程で、多くのトルコ民族がモンゴルの支配下に置かれ、彼らの社会構造や文化に大きな影響を受けた。

トルコ民族とモンゴル帝国の関わりは、次の2つの側面から検討ができる。1つ目に軍事的関係である。トルコ民族の中には、モンゴル帝国の軍隊に加わり、共に戦う者もいた。特にキプチャク人やタタール人は、モンゴル帝国の西方征服において重要な役割を果たし、彼らはモンゴルの騎馬戦術を学び、自らの軍事力を強化した。2つ目に、文化的な影響である。モンゴル帝国の支配下で、多くのトルコ民族がモンゴルの文化や宗教、行政制度を取り入れた。モンゴルの法律や行政システムがトルコ民族の社会構造に影響を与え、後のオスマン帝国の基礎となった。

第4項 モンゴルによる支配と影響

モンゴル帝国の西方進出に伴い、多くのトルコ民族が支配下に置かれた。これらのトルコ系遊牧民は、モンゴルの戦力に組み入れられ共に征服活動を行った。トルコ民族の中には、モンゴル帝国の軍隊に加わり、彼らの戦術や組織を学ぶ者もいた。

例えば、トルコ系のキプチャク人は、モンゴル帝国の西征において重要な役割を果たしたが、キプチャク人は、中央アジアの草原地帯に広がる遊牧民であり、騎馬戦術に優れていた。彼らはモンゴル軍の精鋭部隊として活躍し、ロシアや東欧の征服に寄与した。

第5項 モンゴルの影響とトルコ系国家の成立

モンゴル帝国の支配下での戦乱や社会的変動により、多くのトルコ民族が中央アジアから西へ移動を余儀なくされた。これにより、アナトリア半島（現在のトルコ領内）へと流入するトルコ系部族が増えた。特に、セルジューク朝が崩壊した後の混乱期には、多くのトルコ系部族がこの地域に定住し、オスマン帝国の基盤となった。

第6項 オスマン帝国の成立の背景

オスマン1世（在位1299年～1326年）は、アナトリア半島の辺境地帯で独立した国家を築き上げた。彼の名にちなんでオスマン帝国が成立し、その後、彼の後継者たちは領土を拡大し、ビザンツ帝国と対峙しながら勢力を強化した。モンゴル帝国の支配と影響を受けたトルコ民族は、独自の国家を形成した。オスマン帝国の創設者であるオスマン1世は、モンゴルの戦術や行政制度を参考にしながら、自らの領地を拡大していった。ムスリム・トルコ系である彼らは、キリスト教徒の戦士集団も取り込んで勢力を増していく。

モンゴル帝国の影響は、オスマン帝国の軍事組織や行政構造にも見られる。オスマン帝国の成功の1つには、モンゴル帝国から学んだ戦術や行政制度の影響を受けていたことがあげられている。

建国当時は「帝国」とはいえない小さな武装集団であったが、第2代君主のオルハン(在位 1323/24 年 - 1362 年)の時にバルカン半島に進出し、その後も拡大を続け、1453 年に第7君主のメフメト2世(在位 1444 年～1446、1451 年～1481 年)がコンスタンティノープルを征服し、大きな力を持つようになる。

オスマン帝国は強大なイスラム帝国であり、君主であるスルタンが教主カリフの地位を兼ねる体制をとり、イスラム教世界の盟主として16世紀に全盛期を迎え、ヨーロッパ＝キリスト教世界に大きな脅威を与えた。17世紀末からはヨーロッパ諸国の侵攻、アラブ諸民族の自立などによって領土を縮小させ、次第に衰退した。19世紀になると近代化をめざす改革に失敗し、第一次世界大戦でドイツと結んだが敗れ、1922年に滅亡するまで6世紀に及び続いた。

以上の通り、トルコの起源とモンゴル帝国の関わりは非常に深く、モンゴル帝国の支配と影響を受けながら、トルコ民族は中央アジアからアナトリア半島へと移動し、独自の国家を築き上げた。この過程で学んだ知識や技術が、後のオスマン帝国の成立と繁栄に大きく寄与した。トルコの歴史におけるモンゴル帝国の影響は、現代のトルコ文化にもその名残を残している。モンゴル帝国の支配下に置かれた時期は、トルコ民族にとって重要な転機となった。彼らはモンゴルの影響を受けつつも、自らの文化や伝統を維持し、新たな地での生活を切り開いた。この時期の経験は、後に強大なオスマン帝国の成立につながり、トルコ民族の歴史において重要な役割を果たした。

第2節 オスマン帝国の特徴

第1項 オスマン帝国の人種

オスマン帝国は、多民族・多文化の帝国であり、以下のように様々な人種や民族が共存していた。オスマン帝国は、これらの多様な民族が共存することで、文化的な豊かさと多様性を持っていた。オスマン帝国では、非ムスリム(キリスト教徒やユダヤ教徒)はムスリムと同等の権利を持っていなかった。例えば、非ムスリムは軍事や行政の高位に就くことができず、特定の税を支払う義務があったが、彼らは信仰の自由を認められ、自治権を持つコミュニティを形成することができた。

表 7 オスマン帝国の人種、宗教、職種の一覧表

人種・民族	宗教	主な職種
トルコ人	イスラム教（スンニ派）	スルタン、パシャ、ウラマー、軍指導者、官僚
アラブ人	イスラム教（スンニ派）	学者、医師、商人、官僚
クルド人	イスラム教（スンニ派）	農民、兵士、商人
ギリシャ人	ギリシャ正教	商人、職人、農民
アルメニア人	アルメニア教会	商人、職人、医師
ユダヤ人	ユダヤ教	商人、金融業者、職人、医師
スラブ人	東方正教会	農民、兵士、職人

出所：世界史の窓から筆者作成

この表は、オスマン帝国における主要な人種・民族、宗教、そして彼らが従事していた主な職種を示しているが、オスマン帝国は多様な民族と宗教が共存する多文化社会であり、各グループがそれぞれの役割を果たしていた。オスマン帝国の寛容な政策は、多様な宗教と民族が共存する社会を実現し、長期間にわたって安定した統治を維持する要因の1つとなったことを示している。

第2項 非世襲・能力重視の人材登用制度

オスマン帝国の強さの理由として挙げられるのが、世界から恐れられたスルタン直属の近衛部隊「イエニチェリ」である。イエニチェリは才覚あるキリスト教徒の少年を徴用し、英才教育の“デヴシルメ”という制度により成り立った。徴用された人の全てがイエニチェリになれるわけではなく、体格が良く戦いに向いている者がイエニチェリに採用され、容姿端麗・聡明・賢明な者は宮廷侍従や官僚、地方官に採用され、能力重視の人材登用制度になっていた。鉄砲や大砲などの武器を積極的に取り入れて活躍したイエニチェリは、近代軍隊の先駆けといわれている。イエニチェリの存在は、周辺諸国にとって非常に大きな脅威となった。

イエニチェリは、世襲が一般的な制度であった時代に、結婚が禁止され、1代限りの能力主義の人材登用制度であった。唯一の忠誠者がスルタンで、この忠誠心がイエニチェリの強さでもあった。

イエニチェリの給料は高く、免税権やボーナスなど一般の人よりも経済的に優遇されていた。この制度は、世襲による硬直化、腐敗を防ぎ、オスマン帝国が長期にわたって安定した統治をする要因の1つとなった。



出所: TUR KISH

<https://turkish.jp/turkey/%E3%82%AA%E3%82%B9%E3%83%9E%E3%83%B3%E5%B8%9D%E5%9B%BD/>

図 14 オスマン帝国の最強軍隊イエニチェリ

第 3 項 オスマン帝国の背景

オスマン帝国は、エジプトと北アフリカを征服した 16 世紀初頭以降、地中海の半分以上を長らくその影響下においていた。

オスマン帝国が、トルコ系ムスリムの遊牧民を中心として西北アナトリアに成立したことによって「陸の帝国」のイメージが強く定着しているように思われるが、オスマン帝国は「陸の帝国」であると同時に「海の帝国」でもあった。オスマン帝国は、黒海、地中海、紅海、ペルシャ湾に囲まれ、長大な海岸線を有していた。首都のイスタンブールは、他の欧米諸国の首都とは異なり、直接海に面した港湾都市であった。海上交通は、オスマン帝国のインフラを整える交通手段として重要であったし、国の勢力を伸ばす上で、軍事的にも、経済的にも重要な位置を占めていた。

沢井(2022)によると、コンスタンティノープルを陥落させてビザンティン帝国を滅ぼしたメフメト 2 世は、クリミア半島の Caffa を攻略し、アドリア海を隔てたイタリア半島のオトラントを一時的に占領した。バヤズィスト 2 世は、オスマン艦隊を強化した。セリム 1 世やスレイマン 1 世の時代になると、地中海東部の制海権を握っただけでなく、大航海時代に突入していたポルトガルとインド洋の覇権を競い、インドや、インドネシアの西端にあるスマトラ島にまで艦隊を派遣した。

沢井(2022)は、海上帝国としてオスマン帝国の発展を支えたのは、帝国内のキリスト教徒臣民であったとし、その事実として、その際に用いられてきた海事用語には、イタリア起

源のことが多いとしている。つまり、オスマン帝国をトルコ系のムスリムの遊牧民的國家としてのみとらえることは、一面のみをみることになるであろう。

第4項 オスマン帝国の國家形態

オスマン帝国は、ヨーロッパ諸國とは異なった國家形態をもっていた。特徴として、以下の3つがあげられる。

1つ目は、「イスラム教國」である。従来のイスラム國家と同じく、他の宗教に対しては租税を納めるかぎりにおいて、その信仰を認めるという寛容策がとられていた。メフメト2世以降は、ギリシャ正教・アルメニア教會・ユダヤ教の3教団に自治が認められた。オスマン帝国では、政治権力者であるオスマン家の家長(スルタン)が、同時にイスラム教世界の統治者であると認識されていた。つまり、オスマン帝国の君主は、単に帝国の権力者にとどまらず、イスラム世界の中心とも意識された。

2つ目は、「中央集権体制」である。オスマン帝国は、スルタンといえどもイスラム法の規制を受ける宗教國家であった。他宗派、他民族への寛容策をとっていたが、同時に専制國家としての中央集権体制の維持、強化に努めていた。具体的には、スルタンの直轄地は州・県・郡に分けられ、州には総督、県には知事、郡にはイスラム法官を中央から派遣されていた。直轄地以外には、現地の有力者を太守に任命し、統治させた。黒海北岸あたりでは、属國として支配した地域もある。また官僚制度も存在し、官僚機構の頂点にいた大宰相は、スルタンを補佐し、実質的な政治にあたったとされている。

3つ目は、「柔軟な専制」である。オスマン帝国は、前に述べたが、トルコ民族による征服王朝であり、支配層はトルコ人であったが、アラブ人、エジプト人、ギリシャ人、スラヴ人、ユダヤ人など、多数の民族、複合的な多民族國家であった。広大な領土と多くの民族を統治するために、中央集権的な統治制度を作り上げたが、支配下の民族に対しては、イスラム教以外の宗教を認め、イスラム教への改教を強制しなかった。宗教的集団を1つの統治集団として、支配下の民族にも一定の自治をみとめたことは、國家形態において、多様な人種を含んだ國家を統治する上で、重要な政策であったといえよう。鈴木(1992)は、このような國家形態を「柔軟な専制」とし、オスマン帝国は、中央集権的な専制國家ではあったが、支配下の民族に対して、宗教、政治的な一定の自治を認めていたことが特徴だとしている。

第3節 海上帝国としてのオスマン帝国

第1項 海運の發展要因

オスマン帝国における海運の發展要因は、以下の3つがあげられる。

1つ目は、地理的な位置である。オスマン帝国は地中海と黒海の間に位置し、これらの海域を通じて貿易を行うことができた。2つ目は、政治的安定があげられる。オスマン帝国は安定した政治体制を持ち、商人たちにとって安全な環境を提供した。その結果、国際貿易に影響して、オスマン帝国はヨーロッパとアジアの間での貿易を促進し、特に

香辛料、絹、陶器などの商品を取引した。陸路のシルクロードが有名であるが、船により 1 度に大量の品を輸送できることは、当時のオスマン帝国にとって、有用であり、オスマン帝国は「海のシルクロード」を通じて、地中海やインド洋での海運業を発展させ、国際貿易の一翼を担った。3 つ目は、技術革新である。オスマン帝国は船の建造技術や航海術の改良に力を入れ、より大きな船を建造し、長距離の航海を可能にした。

第 2 項 大航海時代の影響

近代に入り、蒸気船が出現し、世界の歴史において交通革命がおきた。資本主義的世界経済システムにおいて、中枢となりえるか、帰属するかは、制海権にかかっていた。大航海時代のヨーロッパ人にとって最大の脅威は、当時どのヨーロッパ諸国よりも巨大で裕福、先進的なオスマン帝国であった。

オスマン帝国は、1453 年に古代ローマの名残であったビザンティン帝国の首都コンスタンティノープルを制圧した。この出来事によってヨーロッパ人は、オスマン帝国がシルクロードを支配したらアジアとの貿易が途絶えてしまうと懸念して、大航海時代の引き金になった。

オスマン帝国の誕生は、周辺諸国にさまざまな影響を及ぼすことになる。

アジアとヨーロッパを結ぶ道として、陸路のシルクロードがあったが、インド洋を経て、紅海からエジプトに抜ける海路のほうが、ずっと早くて効率的だった。エジプトに入ると、アジアの品々が隊商によってアレクサンドリアへと運ばれ、そこでベネチア商人によって、海路でヨーロッパへと運ばれた。ベネチア商人は、どの国よりも裕福になったが、それは、世界を半周するほどの交易網の最後の 1 つの地域にしか過ぎなかった。

大航海時代に喜望峰経由の「新航路」が発見されて以降、アジアからヨーロッパに至る商業ルートは地中海を迂回するようになった。次項で述べるように、地中海世界とともにオスマン帝国が衰退にむかったという説も古くから存在する。

しかしながら、澤井(2022)は、オスマン帝国のギリシャ系市民による商業活動を分析したグリーンは、17 世紀以降の地中海では、従来に増して、活発な交易が行われていたことを明らかにし、16 世紀後半は、イスラム帝国経由で、イエメン、エチオピア原産のコーヒーが、ヨーロッパに広まっていったことは、旧来の貿易ルートが存在し、健在であったということを示唆しているとしている。

大航海時代の花形商品である「香辛料」の交易は、17 世紀後半に入ってからイスタンブールに商業区が新設された。この商業区は、オスマン帝国の経済の中心として機能し、多種多様な商品が取り引きされた。これは、大航海時代以降の地中海の商業活動が、それ以前と比べて遜色なく活発化していたことを示す証拠といえよう。

第3項 貿易と海のシルクロード

オスマン帝国は、16～17世紀にかけて、地中海、インド洋の海運業を発展させた。この時期、オスマン帝国は「海のシルクロード」として知られる貿易ルートを支配し、ヨーロッパとアジアの間での貿易を活発に行った。

オスマン帝国は、東西貿易ルートの要所に位置しており、特にシルクロードの海上ルートは重要であった。絹、香辛料、陶磁器などが主要な貿易品として取引されていた。イスタンブールやイズミルなどの港湾都市は、貿易の拠点として栄え、多くの商人が集まった。

海の道と呼ばれる海上交易は、海路によって中国、東南アジア、インド、アラビア半島、ソマリア、エジプト、ヨーロッパをつないでいた。陸路に比べ船での交易品の大量輸送が可能で、航海技術の発達などにより、中世以降は陸路での移動に代わり、船での交易が主流となった。

シルクロードは、もともと古代から中世にかけて、東アジアと地中海地域を結ぶ主要な交易路であったが、モンゴル帝国の時代に、この交易路はさらに発展し、海上交易も活発化した。インド洋を経由する海上シルクロードは、東南アジア、インド、中東、アフリカ東海岸を結び、特に、アラビア商人やインド商人が、この交易に大きく関与した。

モンゴル帝国の広範な交易ネットワークは、シルクロードと海上交易の発展と、ユーラシア大陸全体の経済、文化、技術の交流を促進し、歴史においても大きな影響を与え、オスマン帝国は、その遺産を引き継ぐ形で、更に交易の範囲を広げ、海上は輸送方法として重要な存在になっていく。

第4項 海上帝国としてのオスマン帝国

澤井(2022)によると、大航海時代の影響により、地中海世界は衰退にむかったという議論は古くからあり、その最も代表的なものは、ウォーラーステインによる「世界システム論」であるが、世界はそんなに単線的なものではなかったことを示唆している。

ウォーラーステインによる「世界システム論」は、16世紀から現代に至るまでの世界経済の発展を分析するための理論である。この理論では、世界を一つの統合されたシステムとして捉え、その中で国々や地域が異なる役割を果たしていると考えられる。主要な構成要素は、以下の3つである。

1つ目は、コア(中心)地域である。定義は、高度に発展した産業と技術力を持つ地域で、経済的に最も強力で、世界経済の中心に位置する。高い付加価値を持つ製品を生産し、富の集中度が高く、政治的にも強力で、軍事力や影響力を持つのが特徴である。現代のアメリカ、ドイツ、日本などが、例えられる。

2つ目は、セミペリフェリー(半周辺)地域である。定義は、コアとペリフェリーの間位置し、工業化が進んでいるが、経済的な不均衡が存在する地域で、一部の産業では

コアに近いが、他の部分ではペリフェリーに近く、貿易や製造業で重要な役割を果たすのが特徴である。現代の中国、ブラジル、メキシコなどが例えられる。

3 つ目は、ペリフェリー(周辺)地域である。定義は、主に原材料や労働力を提供する地域で、経済的に最も弱く、世界経済の周辺に位置し、低付加価値の製品や原材料を生産し、経済的な利益が少ない。政治的な影響力も低いのが特徴である。現代の多くのアフリカ諸国、東南アジアの一部などが例えられる。

世界システムの形成の視点でみると、大航海時代(15 世紀～17 世紀)は、ヨーロッパ諸国が新たな航路を開拓し、アメリカ大陸やアジア、アフリカと結びついた時期であり、この時期に世界システムが形成されたといえよう。その経済的影響は、先に述べた貿易ネットワークの拡大や、ヨーロッパがアジアの香辛料やアメリカの銀、アフリカの奴隷を取引することで、世界的な貿易ネットワークが拡大したと言われている。富の集中からみると、ヨーロッパのコア地域に富が集中して、これが後の産業革命の基盤となったと言われている。その過程での、オスマン帝国の役割をみてみると、戦略的な位置から、オスマン帝国はヨーロッパとアジア、アフリカを結ぶ重要な交易路に位置しており、商業活動のハブとして機能していた。

オスマン帝国は中間地域としてセミペリフェリーの機能を持ち、コアとペリフェリーを結ぶ役割を果たした。これにより、技術や文化の交流が促進され、オスマン帝国の誕生により、近隣諸国に逃げた人々により、また新たな文化が近隣で花開いた。

軍事的影響で見ると、オスマン帝国は強力な海軍を持ち、地中海や紅海の制海権を掌握し、これにより、交易ルートの安全を確保し、経済活動の安定をもたらした。そして、オスマン帝国は軍事技術を発展させ、これがさらに帝国の拡大と維持に寄与した。これは次の項で、詳しく述べる。

第 5 項 海運と海軍の相互作業

オスマン帝国最初の官営汽船、すなわち、政府直営の船社が運航を始めたのは、1844 年で、日本では江戸時代でまだ鎖国をしていた。オスマン帝国における近代海運業の育成は、商業汽船を海軍が直接経営するという特異な形式であった。つまり、ナショナル・フラッグが海軍の付属機関であったために、軍事史として扱われ、社会経済史の専門家の興味を、あまりそそるものではなかった。海軍の監督下に運営された官営汽船は、「特別局」と呼ばれた。特別局は、首都のイスタンブール港、周辺海域航路の独占権と帝国内のすべての港への汽船運航権を持っていた。すなわちオスマン帝国におけるナショナル・フラッグであった。小松(2002)は、特別局の実態があまり知られていない理由は、海軍がこれを経営したという特異性にあると示している。

19 世紀にオスマン政府は、海運組織を創設し汽船の運航を始めた。その目的はオスマン帝国における近代的な汽船海運の育成、海上交通手段の発展、対外競争力の獲得であった。当初は海運業界よりも一歩リードしていた海軍が、人材と施設と技術を提供した。

しかしながら、株式会社の設立を最終目的とする特別局の民営化は、結局なされなかった。小松(2002)は、その原因として、次の3つをあげている。1つ目は、市場原理に疎い軍人の経営への過剰な介入、2つ目は、無計画な船団拡張による財政圧迫、3つ目は、特別局による私物化、つまり海軍と強固な繋がり、海軍と運命共同体となっていく。海軍が商業汽船を直接経営することは、違和感を感じるが、当事者は、違和感なくこれを受け入れた。

小松(2002)は、オスマン帝国の海運におけるナショナル・フラグの育成は、草創期から帝国の終焉に至るまで終始一貫して、民営化論者と官営論者の対立の中に置かれていたと示している。それは、政治的、経済的上昇を果たした非ムスリムの主としてアルメニア人の経済官僚と資本家と、伝統的なムスリムのエリート官僚・軍人・商人の対立であり、経済的・社会的利益を優先する考え方と、軍事的・国家的利益を優先する考え方の対立でもあったと示している。

アルメニア人をはじめとする非ムスリムの官僚・資本家は、西欧キリスト教世界との間に、経済的な活動から、独自のネットワークを築いており、世界経済の動向に敏感であったのだろう。「民営化」、すなわち、「自由競争」は、西欧的な資本主義で、外国資本の進出を更に促進し、オスマン帝国の経済支配を、外国勢に奪われる危険にさらす可能性をはらんでいた。オスマン帝国の近代海運の育成は、民営自立から、軍事貢献へ話題が移り、民営化論争は、本来の目的からはずれ、ついに現実化はしなかった。

19世紀末は、世界史上海軍が飛躍的に発達した時代で、造船、電機、通信など新しい技術が生まれた。木造船に代わって、蒸気船が到来し、船舶の航行でスピードと安全性が著しく発展した。国際情勢と時代の波は、オスマン帝国をそのままにしておくことを許さなかった。

第4節 結論

オスマン帝国は、広大な領地を持っていたが、太平洋の向こう側まで勢力を拡大しなかった理由は、すでに強固な国力を形成していたからである。スペイン人がアメリカ大陸を目指し、ポルトガル人が喜望峰周りの航路を発見したのは、いずれもすでに強固な地位を築いていたオスマン帝国の存在があったからである。

高収益のアジア貿易を支配し、世界の中心に強固なポジションを持っていたオスマン帝国は、地中海を遠く離れたアメリカを発見する必要がなかった。オスマン帝国の国力は、すでに強大で、ヨーロッパのキリスト教国の海軍と地中海で戦いつつ、同時に、インド洋の制海権をめぐって、ポルトガルと戦えるほどであった。

オスマン帝国の海軍と海運業の発展は、帝国の近代化において不可欠な要素であった。本章では、様々な研究資料をもとに、その重要性を論じた。また、貿易と海のシルクロードがもたらした影響についても触れた。

ヨーロッパ人にとって、最大の脅威は、オスマン帝国であった。オスマン帝国は、1453年に古代ローマの最後の名残であったビザンティン帝国の首都コンスタンティノープルを制圧してから、他にも直接的にヨーロッパの存続を脅かす存在であった。

その強さは、ギリシャからハンガリーまでの広大な領地をとったうえに、1529年と1683年のウィーン包囲で、キリスト教世界全体をも脅かした。現在への遺産として、コーヒーは、この1683年のウィーン包囲でヨーロッパにもたらされたという説がある。その猛威は、陸上の支配にとどまらず、ギリシャからモロッコまで地中海沿岸の3分の2を占め、世界最大の海軍を持っていた。

16世紀の地中海の制海権は、ベネチア共和国が後退し、オスマン帝国とスペインのハプスブルク家の戦いの抗争になっていた。1538年オスマン帝国は、ベネチアやスペインなどキリスト教国の連合艦隊に攻撃を仕掛け、ギリシャ東岸のプレヴェザ沖で大勝した。これによって制海権を西地中海(クレタ島、マルタ島、キプロス島は除く)にも拡大し、地中海は「オスマン帝国の海」と化した。

1500年代のオスマン帝国の海軍は地中海で敵なしで、1571年にレパントでキリスト教連合軍に敗北したものの、長い間、手ごわい相手として存続し続けた。

1571年スレイマン1世の死後、オスマン海軍がキプロス島を攻略する。スペイン・ヴェネツィア・ローマ教皇が連合艦隊を編成し、レパントの海戦でオスマン海軍に勝利した。

スペインが地中海の制海権を得たものの、オスマン海軍は迅速に再建され、1574年にチュニスを征服して、制海権を回復した。オスマン海軍の地中海支配は、17世紀まで続き、明確な衰退は18世紀からである。

オスマン帝国は、はるか大西洋にまで及び、1585年にカナリア諸島、1618年にマンデイラ、1625年に英国南部の港町まで襲撃が行われている。1627年にオスマン帝国の海軍は、北米にまで遠征していた。他方で、このころ、オスマンの海賊たちは、英国から20キロ離れた沖合拠点置いて、周辺諸国の港を襲撃してまわった。

オスマン帝国の時代は、激しい征服争いが続いた時代であったが、強固な国力を築いてからは、ヨーロッパ、中東で中心的な存在であり続けた。多種多様な人種を含みながら、駆けぬいたオスマン帝国、その存在は現代の在り方のモデルケースになると言えよう。オスマン帝国において、多くの研究が存在するが、文献の存在が限られていることもあり、まだ解明されていない点が多く、今後さらに研究を進めていきたい。

第2章 オスマン帝国の起源と衰退及び文化形成

本章では、オスマン帝国の誕生から繁栄、衰退、文化形成を軸とし、モンゴル帝国との関係について考察する。

第1節 オスマン帝国の歴史、時代のうねり

本節では、オスマン帝国という列国の誕生の経緯からその繁栄、衰退というひとつの帝国の時代の流れについて考察していく。

第1項 オスマン帝国の誕生

オスマン帝国は、西暦1299年、東ローマ帝国とルーム・セルジューク朝の国境地帯、アナトリア北西部ソユット(ビレジク)に、テュルク系の遊牧部族長「オスマン1世」がまとめた集団が起源である。これ以降、君主はオスマン家出身者が継承していった。そして最初にオスマン帝国を統治したオスマン家は、オスマン帝国の皇帝(スルタン)の家系として続いたテュルク系のヨーロッパ・アジアの皇帝家である。13世紀末にアナトリア半島北東部を支配したオスマン1世から始まり、36代皇帝メフメト6世が廃位する1922年までオスマン帝国に君臨し、今日に至るトルコ人(オスマン人)を形成した。

第2項 帝国としての基盤と繁栄

オスマン帝国は、誕生して約30年が過ぎた1326年に、ビザンツ帝国の重要都市ブルサを落として首都とし、1354年以後バルカン半島に進出した。そして、1361年頃アドリアノーブル(現エディルネ)を征服して首都を移した。

余談ではあるがバルカン半島とは、ヨーロッパの南東部にあり地中海に突き出た半島のこと。古代から現代まで、さまざまな国が支配権を争ってきた地域でもある。民族や宗教が混在し、それらが国境と一致しない混乱の時代も長く続いた。中世にオスマン帝国の支配が続いた後、民族紛争が勃発するなどして第一次世界大戦のきっかけともなった場所で、「ヨーロッパの火薬庫」とも呼ばれていた。現在では分離独立も進み、独自の魅力を持つ新たな観光スポットとしても注目されつつある。

話を戻すが、1453年にメフメト2世の率いるオスマン軍はコンスタンティノーブルを攻略してビザンツ帝国を滅亡させると、この都をイスタンブールと改名し、国内各地からトルコ人、ギリシャ人、アルメニア人などを移住させて新しい首都建設を行った。

そして、16世紀中頃にはイスタンブールの人口は約50万に上り、ヨーロッパで最も大きな都市となったのである。15世紀末、オスマンはアナトリアとバルカンを平定、16世紀にはいとシリア方面の領有をめぐるエジプトのマムルーク朝と対立した。マムルーク

はエジプトを中心としたイスラム王朝で奴隷身分の騎兵やその子孫から構成された朝廷だが、1517年にセム1世率いるオスマン軍に敗戦を期しマムルーク朝は滅んでしまった。それに伴い、メッカ、メディナの両聖都の保護権を獲得しスルタンはスンニ派イスラム教徒の指導者カリフの地位も手中にしたのである。スレイマン1世は、父であるセリム1世の死を受けて第10代スルタンとなった。その後、1526年のモハーチの戦いでハンガリーを支配下におき、1529年9月にはウィーンを包囲攻撃によってヨーロッパ諸国を震撼させ、ヨーロッパに大きな影響を与えた。スレイマン1世の艦隊は、1538年にプレヴェザ沖の海戦においてスペイン・ベネチア・ローマ教皇の連合艦隊に勝利して地中海を掌握した。

さらにチュニジア、アルジェリアの領土も獲得。東側ではバグダード、バスラ、メソポタミアも征服し、黒海、紅海、ペルシャ湾の制海権も獲得し、全方位に広がる国際貿易ルートを支配下におさめることで繁栄を極める。17世紀にはアフリカ・中東・ヨーロッパにわたって最大の領土を築き、東はアゼルバイジャン、西はモロッコ、南はイエメン、北はハンガリーまで広く支配した。これがオスマン帝国の完成形であり、最大勢力を誇った時期である。

第3項 帝国の終焉

1683年の第2次ウィーン包囲に失敗してハンガリーの大半を失うと、続く18世紀にはエジプトやシリアなどで地方豪族が台頭し、中央集権にはころびが生じるようになる。

18世紀後半、ナポレオンに占領されたイギリスと結んで奪還したオスマン帝国だったが、その混乱の中、傭兵隊を率いたムハンマド・アリーがエジプト総督となってエジプトの実権を握った。ムハンマド・アリーはオスマン帝国の命を受け、アラビア半島のワッハブ王国を制圧した他、1821年に始まったギリシャ独立戦争を鎮圧する為、出兵した。その後、列強の干渉によりギリシャは独立を果たすが、エジプトは出兵の見返りにシリアの領有を要求する。これを拒否しオスマン帝国と2度にわたってエジプト・トルコ戦争を戦った。

また、ギリシャ独立戦争やエジプト・トルコ戦争をきっかけに、オスマン帝国は東地中海や黒海周辺の利権を争うイギリス・フランス・ロシアといった列強の介入を招く事となった（東方問題）。こうした事態に対し、オスマン帝国は行政組織等の西欧化を目指すタンジマート（恩恵改革）を実施するが、十分な成果は上がらなかった。1853年に始まったロシアとのクリミア戦争では、イギリス・フランスの支援によって勝利はしたものの、その戦費によって財政が破綻してしまう。1876年には、改革派の宰相ミドハト・パシャが起草したイスラム世界初の近代憲法であるミドハト憲法が發布される。時は流れ、第一次世界大戦での敗戦が続いたオスマン帝国最後の皇帝メフメト6世は、1918年に連合軍に対して降伏した。イギリス、フランス、イタリア、ギリシャの連合軍はイスタンブールを占領し、メフメト6世はその支配下に置かれ傀儡政権化した。1920年8月、連合軍側が講和条約としてセーブル条約を押し付けてきたが、内容はオスマン帝国の領土をほぼ奪い、軍備の制限、治

外法権の維持、財政はイギリス、フランス、イタリア 3 国の共同管理下に置くという苛酷なものだった。しかし、メフメト 6 世は連合国による一身の安全と財政保障を密約条件として、事実上祖国の滅亡を意味するこの条約に調印してしまった。それに対して、ムスタファ＝ケマルを中心とするアンカラ政府が受諾を拒否した。ムスタファ＝ケマルは、当初スルタンへの忠誠を表明していたが、ギリシャ軍の侵攻に対してアンカラにトルコ大国民議會を招集して新政府樹立を諸外国に通告すると、それを越権行為として激高したメフメト 6 世は、ムスタファ＝ケマルたちに欠席裁判で死刑を宣告したのだ。ケマルの指導をするトルコ国民軍がギリシャ軍の侵攻を撃退して、1922 年にローザンヌで新たな講和条約締結の會議を家裁することとなり、その會議にメフメト 6 世も送られたのだが、それにトルコ側が猛反発して「連合国はまだスルタンを正式代表と見なし、手を組むことによって救国独立戦争の成果を骨抜きにしようとしている。トルコを守るにはスルタンを倒すしかない」と、国民は初めてスルタン制そのものを退ける声をあげた。國民會議では、満場一致で訂正廃止が可決したが、メフメト 6 世は英国へ亡命し、それをもって 600 年ほど続いたオスマン帝国は終焉を迎えるのであった。

第 2 節 文化形成とその歴史

第 1 項 宗教の自由化

オスマン帝国は多民族国家であるため、宗教も多彩である。ただ、支配者層は主にイスラム教徒の人々で構成されていて、常にイスラム教徒の優位が守られていたとはいえ、他の民族や宗教に対する圧政や弾圧はほとんどなかったとされている。オスマン国内には 3 つのイスラム教徒の主要宗派、10 以上のキリスト教派に加えてユダヤ教徒も多く居住していた。ヨーロッパでフス派やルター派、またユダヤ教徒に対する弾圧があったとき、多くの人がオスマン帝国の領内に移住したほどであった。背景には、かなりの程度自治を認めるオスマン帝国の統治政策があり、人々はほとんどの場合、オスマン帝国に税を納めながら、同じ宗教や文化の人たち同士で小さな社会を作って生活することができたのだ。この共存体制は、フランス革命とナポレオンの影響で民族主義が高まり、ギリシャ王国を筆頭にいくつもの民族が独立のための戦いを始めるまで続いた。

第 2 項 中央集権体制

オスマン帝国では、強大な権力を有するスルタンを頂点として、整備された官僚制度を持つ中央集権体制がとられていた。行政区や地方には、高等教育を受けた行政官やトルコ系の騎士を従えた軍政官らを派遣した。軍政官や騎士には、税を徴収できる領地が与えられる軍事封土制をとった他、キリスト教徒の子弟をイスラム教に改宗させて、イエニチェリと呼ばれる常備歩兵軍に編成するなどの施策で、強大な軍事力を支えた。

ただ、オスマン帝国の弱体化の原因は、繁栄を支えた中央集権体制の緩みにあった。第1には、スルタンが、遠征をはじめ軍務・政務に直接たずさわらなくなりハレムの皇后や宦官が国政に介入し、大宰相をはじめとする官僚の間には、賄賂・コネ・奢侈などの悪弊が横行した。このような状態は「魚は頭から腐る」というトルコの諺によく示されている。第2は、火器の需要がますます高まり、イエニチェリ（歩兵軍団員）の数は16世紀の1万から4万に増大し、逆に地方のシパーヒー（騎士）は度重なる遠征の負担に耐えきれずティマール（封土）を手放すものが増え、ティマール制の機能は低下した。第3に、このことは軍事制度の問題にとどまらず、財政を圧迫し、地方の行政・財務機構の変化をもたらした。政府はティマール制にかわり、税の徴収を請負制（イルティザーム）にきりかえることによって、財政の改善をはかった。徴税請負人は農民や遊牧民に対ししばしば過酷な徴税をおこない、徴税権の終身請負や世襲によって、富を蓄積した。さらにチフトリキと呼ばれる大土地を所有し、小作人や農業労働者を用いて市場向けの商品作物の栽培・経営をおこなうものも現れた。18世紀にはバルカン・アナトリア・シリアの各地に、このようなかたちで富を蓄積し、地方の官職を握る有力家計が形成された。地方の社会秩序は、これらの名士（アーヤーン）によって維持される反面、政府と土地名士、あるいは名士間の争いも激しくなっていた。

第3項 スーフィズム（イスラム神秘主義）

ムハンマドの創始した、アッラーへの絶対服従を説くイスラム教の教えが西アジアに広く浸透すると、その教義や日常の信仰生活の規範をコーランとハディースに求めるイスラム法学者ウラマーの権威が高まっていった。その論議は次第に律法主義、形式主義になり、民衆の現世的な欲求から離れていく傾向が出てきた。そのような状況に飽きたらず、神との一体感を求めて禁欲と苦行を重ねる人々が現れた。彼らがスーフィーといわれ、その思想や行動がスーフィズム（神秘主義）と言われるようになった。まず、スーフィーという言葉はアラビア語で羊毛を意味する「スーフ」に由来する。初期のイスラム修道者は粗末な羊毛の衣服を身に着け、贅沢と世事を拒否することを意味していた。ただ、この神秘主義は、スンニ派・シーア派を超えた動きであり、宗派ではない。神への絶対帰依を目指す修道者であるスーフィーは、世俗から離れて厳しい修行と神秘主義な儀式を執り行っていたのではじめは少数であったが、その弟子や信奉者が増えると、尋常ではない精神力を持った聖人としてあがめられるようになった。10世紀のはじめには、各地に「スーフィー修養所」（イランではハーンガー、トルコではテッケ、アラブではリバートあるいはザーウィヤと言われた）が設けられ、神秘主義に精通した者が教育や指導に当たるようになった（ゴードン、1994）。また、始まりは8世紀ごろイラクのクーファだが9世紀ごろに都市のウラマーにもスーフィーが現れ、10世紀ごろにはイラクを中心にイスラムが広まった。理屈ではなく感覚に訴える教えが広く受け入れられ、アラブ人以外にイスラム教が広まっていくうえでもスーフィーの活動は大きな導因となった。スーフィーの思想や活動は、当初は保守的なスンニ派のウラマーたちに非難されていたが、11世紀末のセルジューク

朝で高名なウラマーであったガザーリーがスーフィズムとの融合を説き、広く認められるようになった。イランではスーフィーを、托鉢を意味するデルヴィーシュ(またはダルヴィシュ)ともいっている。

第3節 結論

オスマン帝国は、13世紀末から20世紀初頭まで約600年にわたり存続した多民族帝国であり、その統治システムと文化的特徴から、以下の重要な特質が明らかとなった。

第1に、オスマン帝国の統治体制は、強力な中央集権制と柔軟な地方自治の組み合わせによって成り立っていた。スルタンを頂点とする官僚制度と軍事封土制により強大な軍事力を維持しつつ、各地域の民族や宗教に対して一定の自治を認める寛容な統治を行った。この統治方式は、広大な領土を効率的に統治する上で極めて有効であった。

第2に、宗教的寛容性が帝国の安定性を支えていた。支配者層はイスラム教徒であったが、キリスト教やユダヤ教など他宗教に対する寛容な態度を維持し、むしろそれらを積極的に包摂することで帝国の多様性と活力を維持した。この宗教的寛容性は、当時のヨーロッパと比較して際立った特徴であった。

しかし、18世紀以降、この統治体制は次第に綻びを見せ始める。中央集権体制の弛緩、官僚の腐敗、軍事制度の機能低下、そして財政の悪化が相互に関連しながら帝国の衰退を加速させた。さらに、フランス革命以降の民族主義の台頭は、帝国の統合を根本から揺るがすこととなった。

最終的に、第一次世界大戦での敗北を契機として帝国は崩壊するが、その歴史的遺産、特に多民族・多宗教の共生という統治モデルは、現代のグローバル社会における多様性の包摂という課題に対して、重要な示唆を与えていると言える。

第Ⅳ部 モンゴル帝国と中国

第 1 章 中国から見るモンゴル帝国の遺産

本章では、中国人の視点から、中国の領土・多民族・多宗教、文化・貿易交流におけるモンゴル帝国の意義と遺産を考察する。本章で引用している中国語文献は、筆者が翻訳したものである。

中国史において、モンゴル帝国とその後の元朝は、唐・五代の末期から遼・宋・金の時代にかき、複数の政治勢力が併存し分裂状態にあった「中華」という地域を再統合し、統一された多宗教・多民族の巨大な国家を形成した。元朝統一の国境管理政策・多宗教・多民族の政策は、明朝・清朝・現在の中華人民共和国に至るまで、大きく影響を与えた。

第 1 節 中国地域統一におけるモンゴル帝国の意義

本節では、中国史におけるモンゴル帝国(元朝)の認識及び中国史各時代の地域範囲を示す。元朝は、中国史上、初めて統一した国家であり、その領域は元朝以前の中国王朝の中で、最も広大であった。北から南、東から西と、「中国」という地域を統一し、かつ統一した国境管理システムの構築は、中国の歴史に大きな影響を与えた。

第 1 項 元朝は、「中華」という地域において、初めて統一した国家である。

本項では、中国歴史上各時代の地域範囲(図 15)及び王朝変化(図 16)を示す。

歴史上の中国は、漢、唐、宋、晋、元、明、清といった一連の政権変化に伴い、その領土範囲は、異なる王朝の間だけでなく、同じ王朝の時代の中でも常に変化していた。「中国」という定義の中でも、領土範囲は常に変化し、唐・五代の末期から遼・宋・金の時代にかけては複数の政治勢力が併存し分裂状態にあった。杉山は、「モンゴル帝国の大元ウルスは、中国の分裂状態を終わらせ、南北を統一し、「中華」という枠組みでいうならば、小さな中華から大きな中華への大転換をもたらし、中国史において、「中華」地域を再統合し、さらにはるかに巨大化させた」と述べている(杉山、2016、p.293)。

周期は《中国疆域沿革史》において以下のように述べている。

「紀元前 221 年、秦の始皇帝は六国を滅ぼし、中国史上初の統一王朝を樹立した。秦始皇の王朝が始まる時は、北は遼東万里の長城から南は長江流域までの領域であった。秦始皇は満足せず、北と西の領域を占領し、亡くなる直前の領土は、

北は河濤、銀山、遼河の下流域、南はベトナム北東部、西は龍山、四川省西部、雲南省、貴州省、朝鮮半島の東側まで拡張した。」(周、2007、p.27-36)。

618 年唐朝建立後、その領土は大幅に拡張した。唐太宗李世民的時代に、現在の中国の内モンゴルを含むゴビ砂漠の南の地域(歴史的に茂北と中原北部との間の緩衝地帯)を占領し、西はペルシャのトーチャー地方までその勢力を伸ばしていた。そして 645 年から高句麗征伐をはじめ、668 年に高句麗を占領していたが、地元住民の激しい抵抗と羅唐戦争の終結により、677 年新羅と大同江を境に大同江の南に退却したのである。宋朝時代、中華の領土は、遼、西夏、宋で分裂し、宋(歴史上は南宋と呼ばれている)の領土は秦嶺山脈の大山関から淮河の南、岷山より東の地域に限定されていた。このように、元朝以前の中国地域は政治勢力の分裂と交替が繰り返され、図 15 で示すように、秦・西漢・唐の時代も元朝より大きい地域を占領した政権はなかったのである。元朝は、前王朝の領土を上回る、陸と海の広域を統一させ、広大な中国地域を確立したのである。

『元代の歴史』では、「中国の歴史上、漢、隋、唐、宋の時代が最も繁栄したが、領土の広さは元に及ばなかった。漢は北帝であり、隋は東夷を征服できず、唐は西栄、宋王は「朔墨」から出発し西域、西夏は女真族を滅ぼし高麗を建国した。その後、長江の南に進み、『中国』と名乗る領域は、北は銀山山脈、柳沙山脈、西は川、東は遼作、南は海まで広がった。」(『元史』巻 58 地理1)と記載している。

中国通史の記載では、

「1351 年には、中国民間道教である白蓮教が紅巾の乱をおこし、元朝を滅亡させた。1368 年、朱元璋が営田(現在の江蘇南京)で皇帝と称し、明朝を建国した。1421 年、明の成祖皇帝は首都を北京に移し、戦争を繰り返し、東と南は海、北はモンゴル砂漠、東北は外興安山脈の北、西北は新疆の哈密尾、西南はチベットと雲南まで征服した。当時、中国北部と北西部はオアラ、タタール、イリバリなどのモンゴル政権によって支配されていた。明朝の後期は、対外に拡張する慣行を放棄し、漢と唐の「四蛮を守る」という国境統治戦略を継承した。明朝は国境地帯に多数の軍隊を駐留させ、守備隊の形で各地に守るという形をとった。」(姜、2010、p.40-49)

とも述べている。清朝末期は、外国勢力の侵略により、一連の不平等条約を結び、中国の領土の形も大きく変化した。その後、中華人民共和国で修正・廃止などを行い、現在にいたるが、モンゴル帝国の領域は、「中国」だけでなく、西から南まで膨大である。モンゴル帝国の歴史から考察すると、「中国」は戦争で拡大した東アジアの一部地域に過ぎないが、「中国」という地域の歴史から考えるならば、政権主導者がモンゴル族であっても、巨大な統一国家の誕生に貢献したと言える。

モンゴル帝国と長いその後の歴史の中、チンギス・ハンの孫でモンゴル帝国の第5代皇帝に即位したクビライ・ハーンが1271年に現「中華」地域を統一し、「大元大モンゴル国」と称した。そして、杉山は、『元』とは、モンゴル帝国時代の「中国王朝」としてとらえられることも多い」と述べている(杉山、2016、p.40-43)。

また、中国歴史における元朝の意義を姚大力はこう述べている。「元朝の政治支配の中心地を含む元朝領土の中核地域、その統治下にある人口の大部分が今の中国に位置している。」「中国の歴史の連続性は元朝でも中断されていない。特別な点は、皇帝の玉座に座っていたのがモンゴル人だったということだ。」(姚、2018)。

中国史におけるモンゴル帝国の元朝は、4000年の長い歴史の中の一つの王朝として記録され(中国歴史朝代順序)、中国人にとって元朝は、中国歴史の一部であると認識している。「中華」という領域は、長い歴史の中、王朝の変遷を繰り返し、その都度領域範囲が変化するようになった。また、同じ王朝の中でも、戦争を繰り返し、領域範囲の変遷を繰り返してきたが、元朝時代がもっとも広域の統一であった。

第2項 元の国境管理政策は、中国歴史上初めての統一政策である

元朝以前の中国王朝は、「抑制の統治」で国境を統治し「羈縻之治」の戦略である。(中国語でJIMIと読む)、『史記・司馬相如伝・蘇隠』には、「羈」は馬の頭を指し、「縻」は牛の手綱を指す。「羈縻之治」とは拘束・制御を意味する。抑制政策が実施された地域は名目上朝廷に従属していたが、実際には地元の先住民指導者自身が統治していたため、馬の頭が牛の手綱で統治することを意味する。時代の変化とともに、北と南はランダムに統治し、規則及び統一性がなかった。

漢朝は西漢と東漢の官制度があるが、中央官制と地方官制に分かれていたが、秦朝時代に実行していた制度でもあった。中央集権を強化するための中央政権の三官九人制と地方の郡と州の並列システムである。三官九人制とは、軍事を管理する大尉、全国政治を管理する首相、国家監察事務を管理する検閲官(中国語で「御史大夫」と言う)で皇帝の実務を補助する三公で構成されたのである。帝都長安の周辺は中央直轄地として郡県制を施行しながら、地方には一族・功臣を諸侯王、諸侯として封じる封建制を併用し、後々地方勢力となっていた。中央と地方間の連携システムはなく、地方は封建制を採用したのである。

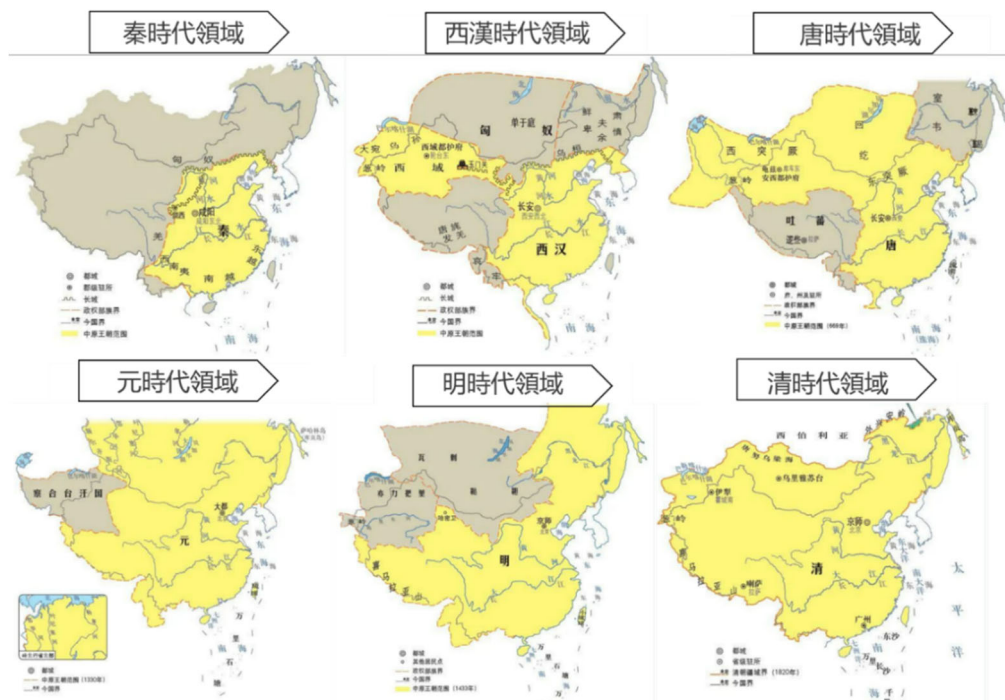
それに比べ、元朝は、国境を管理する上で2つの重要な特徴を持っていた。元朝の国境管理政策の特徴について、方は以下のように述べている。

「特徴の1つは全国の省制の実施であり、もう1つは、国境地域では形式上の管理システムを実施した。国政の総責任者として中州が設置され、各地に興中州が設置され、徐々に常設の統治機関へと発展していった。元朝は、首都(北京)周辺地域の中州直属の「腹里」(現在の河北省・山西省・山東省の総称である)に加え、元朝軍が占領・支配した多数の軍事駐屯地を拠点とし、江蘇省、浙江省、雲南省、湖

広省、陝西省を設置した。四川省、甘肅省、江西省、遼陽市、嶺北市、正東省など 10 の省があり、省の多くが国境地帯に位置し、中央政府と地方政府の分断を避けるために統合されていた。元朝は中央政府に玄正院(寺)を設置し、全国の仏教事務を担当し、吐蕃地方を統治した。」(方、2002、p.15-23)

元朝はチベット、西域、雲南、嶺北などの国境地帯を基本的に直接管轄し、全国で統一した多民族国家政策を実施した。これは過去の中原王朝では達成が困難だった政治的成果であり、前王朝とは異なる元朝の歴史の特異性でもある(乌云、2022 年 5 月 9 日 第 2401 期)。元朝は吐蕃地区に多島宣威部、多干士宣威部、ウスザンナリ・スグル孫宣威部を設置し、宥和部、徴兵部、元帥邸、万湖邸で構成された。国境地域にも官僚制度を適用し、待遇、権利、義務の点では内陸の官僚と同じものであった。官僚には、その地域の人を広く登用し、その管理下でトルコ軍人も派遣し、治安を担当させながら、農業などの開発活動に参加させたのである(方、2002、p.15-23)。元朝は、中原の北部遊牧民によって設立された最初の多民族統一中央集権王朝であり、統一統治国家として、その後の中国史においても大きく影響したと考えられる。

以下に中国歴史の各時代の地域範囲(図 15)及び中国歴代王朝(図 16)を示す。

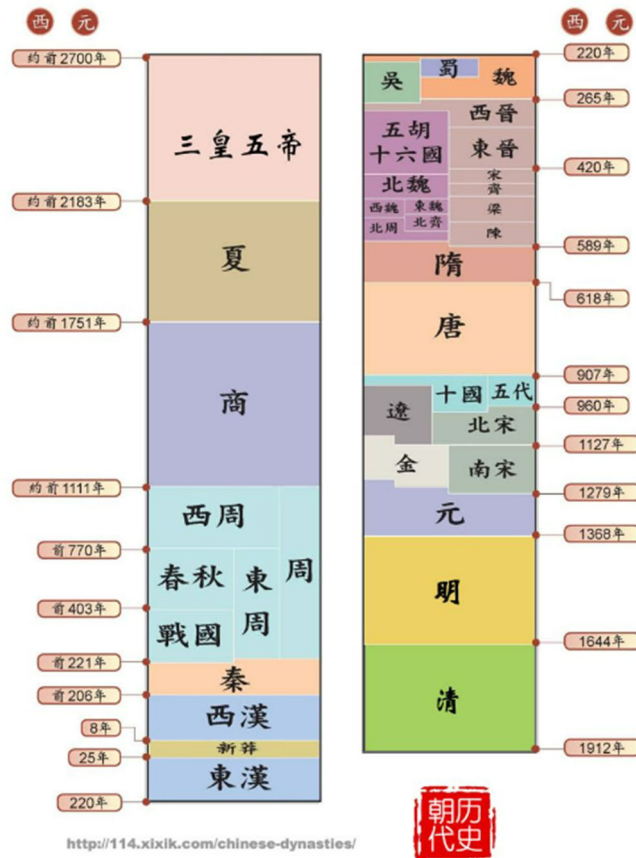


出所:《中国版图的历史演变》中国测绘学会 2020 年

《中国历史朝代顺序》<http://114.xixik.com/china-dynasties/>

図 15 中国歴史上秦、西漢、唐、元、明、清時代の領域

中國歴史朝代演進圖



出所:《中国历史朝代顺序》 <http://114.xixik.com/china-dynasties/>

図 16 中国の歴代王朝変化

第 2 節 多宗教・多民族融合におけるモンゴル帝国の意義

中国は多宗教・多民族国家ではあるが、歴史上、宗教の勢力が世俗王権を超えたことはない。古代から自然の力を信仰し、鬼や祖先を信仰する原始的宗教が存在したが、道教が生まれ、宗教の主流となった。その後、世界三大宗教の仏教・イスラム教・キリスト教が中国に入り、白蓮教を含む民間宗教も多数発生し、多宗教体制として今に至る。

本節では、宗教・民族におけるモンゴル帝国の影響を考察する。

第 1 項 元朝の多宗教政策からなる中国のイスラム教

モンゴル帝国の元朝の時期は、宗教面では、チベット仏教を包容し、伝統的な道教と漢民族の仏教の上に位置づけした。しかし、元朝は全ての宗教に寛容で、キリスト教を含

む多くの信仰が生まれ、拡張していった時代でもあった。モンゴル帝国時代、チベット仏教に関する考察は、本部第2章で詳しく説明する。本項では、モンゴル帝国の統一により、中国にイスラム教が大量に流入し、急速に発展した時期であるため、イスラム教を中心に考察する。白は、モンゴル帝国によるイスラム教の中国への伝播について以下のよう述べている。

「1218年、チンギス・ハンは西アジアへの遠征を介した。これは西アジアのイスラム諸国と中国の回教(イスラム教)にとって、新時代の発端である。中国のイスラム教の発達、西アジアのイスラム教国の崩壊の結果、イスラム教徒が降伏または捕虜となり、モンゴル族とともに東にきたからである。そして、モンゴル族が西アジア征服後、中国と西の交通が開通し、イスラム教徒が商業や官職を求め中国に移動した。」(白、1983、p.170)

イスラム教徒の中には、アラブ系、ペルシャ系、トルコ系が含まれ、西アジア、中央アジアから『陸のシルクロード』で中国に流入すると同時に、西アジア、北アフリカ、東アフリカからは『海のシルロード』で中国に流入した。

モンゴル帝国の統一により、約数百万のイスラム教徒が中国に流入した他に、イスラム教に改宗した人も約15万人いたとされる。イスラム教を信仰する多くのアラブ人、ペルシャ人、トルコ人が中国に移住させられ、元朝時代の「セム族」の主体として、モンゴル人以外のイスラム教の主力構成員になった。中国のイスラム教の研究者によれば、元朝の中国のイスラム教徒は百万以上に達したと推測されている(周、2002、p.71-77)。

元朝時代、イスラム教徒が活動する地域も拡大した。元朝以前の時代の中国イスラム教徒はアラブ商人が多く、主に首都や経済が発展した沿岸都市に居住していた。元朝統一により、中国の陝西、甘肅、宁夏、新疆、河南、山東、雲南など広い範囲で、イスラム教の兵士が住むようになり、イスラム教の教義が伝播するようになった。その中では、クビライ・ハーンの孫であるアナンダはイスラム教を信仰し、彼の管轄区である陝西、甘肅、宁夏にはイスラム教が広く分布し、新疆地区では【喀什嗣王托】和【乐铁木汗】がイスラム教へ改宗したため急速に伝播するようになった(何、1994、p.104)。また、元朝は海路を通じ、イスラム商人に依存し、海外貿易を行ったため、現広州、泉州、寧波、杭州など七か所に市の海運課を設置した。結果、元朝のイスラム教は、内陸から辺境、沿岸地域まで広く分布し、「大分散・小集中」の形態で居住していた。元朝時代のイスラム教徒は、行政の中心的役割を担い、権力と富を持っている一方、イスラム教の兵士たちが、軍事生活から農牧生活に転換し、定住するようになってから、「中国人意識」が覚醒したとされている(何、2013、p.237)。

明朝は、イスラム教と力を合わせ、元朝を滅亡させたため、朱元璋は以下のような文章を発表した。《明太祖実録》二十六巻の記載では、「例え、モンゴル族、セム族は中華民族ではないが、礼儀を知り臣下となる意欲のある人々は、中華の人々と何ら変わらない」と、何は論じる(何、2013、p.238)。

明朝建国後、イスラム教に対し、尊敬と寛容政策を実施し、イスラム教徒の利益を保護する体制だった。一方、儒教を信仰し、独占統治を行うため、一定の制約もかけている。明朝の初期は、イスラム教の創設者ムハンマドを高く評価し、“宣教聖人”と呼んでいた。イスラム教の宗教活動に便宜を図り、清真寺を多く建てていた。《イスラム教史》には、イスラム教には免税措置をし、精鋭な人を政府の要職にも登用したと記載している(何、2013、p.240)。

一方、中央アジアのティムール王朝(1370-1507)では、イスラム教は対外進出の象徴であり、精神的支えでもあった。スーフイーの首長たちが、ティムールを積極的に支援したのは、まさにイスラムの役割であった。1380年代以降、ティムールはイランやそのほかの地域にも進出していたが、侵略後は強制的にイスラム教を信仰させた。ティムールは、イスラム教徒には寛容、キリスト教徒は奴隷とし、キリスト教徒の商店や教会などは破壊し、商業貿易に大きな打撃を与えた。ティムールはイスラム教の旗の元で戦ったとはいえ、彼の軍隊の主力はモンゴルの遊牧民で構成された騎兵隊である。ティムール王朝では、イスラムとモンゴルのバランスを保ちながら、両方とも自分の支配に役立つように、コントロールしていた。张文徳は以下のように考察している。「ティムールの時代にイスラムの影響が深まったのは、ティムール朝の支配層が遊牧生活から定住生活へと移行し、中央アジアにすでに存在していたイスラム文化の伝統を深化させたからである。」(張、1995、p.44)。

イスラム教は、610年ごろにアラビア半島の都市メッカの商人ムハンマドにより創始された。中東で生まれた一神教だったが、2020年時点で、信者は18～20億人に達し(DeSilver, 「World's Muslim population more widespread than you might think」. Pew Research Center)、2021年時点で中国においては、約3,000万人がイスラム教を信仰していることが知られている。モンゴル帝国以前にも、イスラム教のアラブの商人達が中国に流入したものの、大規模な移動はモンゴル帝国の影響であると考えられる。モンゴル帝国の西から東、北から南への統一により、イスラム教が、東アジアの中国で繁栄し、中央アジア地域の各地域にも拡散できたと考察する。

第2項 元朝の多民族政策

元朝民族政策研究者卢如平によれば、元朝では四階級制度を実施し、モンゴル族、セム族(色目人)、漢族、南方族を分けた(卢、2018、第2期)。

第一階級には、モンゴル族であり、チンギス・ハンと同じ一族のモンゴル族とテュルクとして知られるモンゴル族で分けられた。第二階級には、セム族である。陶宗儀の『瑞巖路』によれば、セム族はチンチャ族(钦察)、タンウー族(唐兀)、アスー族(阿速)、トゥバ族(图八)、カンリ族(康里)、ウイグル族(畏兀儿)、フイフイ族(回回)、ナイマン族(乃蛮)、キシミエ族(乞失迷儿)など31種類あるとされている。第三階級に、漢族が入り、「漢爾」としても知られている。『周坑録』第1巻の「氏族」には、漢族に契丹族、高麗族、女真族、朱音街族、朱緑王耶族、朱文族、朱池街族、渤海族の8種類がいと記録され

ている。元朝の「漢族」には2つの意味があった。1つは前晋時代の漢族と、淮河以北の契丹族、女真族などの民族を指す。もう1つは雲南省と四川省の人々を指し、モンゴル族の支配者によって征服された地域を指した。第四階級には、南方族で、「野蛮人」、「ナンジアシ人」、「新福人」としても知られている。元代の江蘇・浙江・江西・湖広の三省と河南省南部の各民族の人々で、最終的に元朝によって征服された南宋時代のさまざまな民族グループの人々である。実際、漢族と南方族のほとんどは漢族であり、モンゴル族の統治者は分割統治の目的を達成するために、征服順序に基づいて漢族と南方族に分け、漢族を利用して南方族を抑圧した。

元朝のモンゴル族は“国族”とされ、《元典章》卷42《刑部・諸杀》の記載では、モンゴル族が漢族を殺害した場合は、57回の杖打だけで、死人は遺族に金を払って燃やして埋めるという規定になっていた。一方、モンゴル族が殺害された場合は、死刑が宣告され、主犯の全財産は剥奪されるという規定になっている。モンゴル族が重要な職務に付き、権力を持ち、軍事的な重要職務に漢族の登用は極力防止したと記載されている。明らかに、ルーツによる民族差別の一種であると考えられる。これによって、政治や法律、権利や義務においても不平等であったと考察する。また、四階級制度は、雇用行政上問題を抱えていた。漢族の統括部長はモンゴル族と同等の報酬であり、セム族よりも一段高い人もいた。

つまり、モンゴル帝国の統一は、広い領域の占領により、多宗教・多数民族の人々が共存生活を余儀なくされた環境であり、平等のダイバーシティではなかったと言える。

元朝時代の中国地域ではイスラム教を信仰する少数民族が10民族(回族、ウイグル族、カザフ族、トンシャン族、キルギス族、サラル族、タジク族、ウズベク族、ボウナン族、タタール族からなる)となり、すでに50民族が共存していた。

第3項 元朝第一階級の民族『モンゴル族』とその後

本項では第一級階級であるモンゴル族について考察する。

中国各民族の歴史沿革の記載では、モンゴル族の起源は東湖で、古代中国の古典では「蒙古」などと訳されていた。7世紀以前、モンゴル人の祖先はエルグン川流域に住んでいたが、12世紀には現在のオネン川、クルレン川、トゥーラ川、ケント山の東に分布していたという。1206年のチンギス・ハンによるモンゴルの統一後、「モンゴル」は部族の名前から、新しい民族共同体の名前に進化した。

元朝時代、モンゴル貴族が中原を占領すると、多くのモンゴル人が中国地域に移住してきた。元朝末期、政府の統治は腐敗し、軍備は枯渇し、社会紛争が深刻となり、1368年に『紅巾の乱』とともに、元朝が滅亡した。モンゴルの支配者はほとんどのモンゴル兵士と民間人を万里の長城の北(モンゴル高原)に退却させ、モンゴルの歴史は東モンゴル、西モンゴル、ウリヤーンハ・サンウェイなどのモンゴル勢力で一般的に「北元」として知

られている。モンゴル人は約 44 万人で、中国本土を統治していた明王朝と長く共存し、明王朝は彼らを「北蛮族」と呼んでいた(薄、1994、第 1 期)。

明朝に代わった後も、多くのモンゴル人が依然として内陸部に留まるか移住し、民族交流と統合が促進された。明朝初期に中国の内陸部に大量のモンゴル人が残っていて、北京やその周辺で居住していたモンゴル人は“達人”と呼ばれていた。高寿仙の《明代北京及北畿的蒙古族居民》では、元朝時代、全国の政治的中心地である大都市やその周辺地域にモンゴル人が集中した地域があり、元朝滅亡後大部分が北部に撤退したものの、一部はそのまま残留したと記載している。明朝は、北元のモンゴルと戦争する反面、内陸に残留したモンゴル人には寛容政策を実施した。例えば、《明史》巻 156 には、“李贤”(モンゴル名は“丑驴”)という人物は元朝の陸軍に所属していたが、モンゴル語と漢語に精通していたため、皇太子に付け、翻訳などを担当させたと書いてある。また、“金順”という人物も、本名は阿鲁哥失里だが明朝の将軍として登用したという。明朝で登用されたモンゴル人はそれ以外にも多いと知られている。

西欧では、モンゴル人は野蛮人としてステレオタイプ化された 13 世紀のままであり、狂気な略奪者としての印象が強いであろう。侵略と戦争が多く、残酷で野蛮な印象が強いと思われるが、13-14 世紀のモンゴル人がユーラシア文化に大きく影響を与えたことには間違いないだろう。

そして、対外的接触や交流において、陈垣は以下のように述べている(陳、2000、p.287)。「元の時代から広く門は開き、北西部の数千平方キロメートルの土地がこの国に加わった。セムの人々は中国の領土内で制限なく住めるようになった。」

中国におけるモンゴル帝国は、文化交流を促進し、外国人を受け入れることができ、「グローバリゼーション」の歴史における重要な初期時代であった。モンゴル人は、貿易や商業が得意であり、芸術を重視し、文化の交流も重視する民族である印象が強い。そして、現在の中華人民共和国に至るまで、中国の少数民族の一員として、共生共存している。

第 4 項 元朝第二階級の民族『回回族』とその後

元朝の第二階級民族には、チンチャ族(钦察)、ウイグル族(畏兀儿)、フイフイ族(回回族、以下回族という。)などが含まれている。現在の中華人民共和国の人口は、漢族が 90%以上、少数民族が約 1 億人で、総人口の 10%を占めている。55 の多種多様な少数民族が共存しているが、チワン族に続き、回族が 2 番目に多い。チワン族は主に中国の西南部に居住しているが、回族は全国のほとんどの県・市に居住し、その影響力が多大である。そのため、本項では、元朝の回族とその後について考察する。

邱树森の《中国回族史》の記載では、『回回族』の歴史をこう述べている。

「回族の先住民は唐と宋の時代にアラブとペルシャから来たイスラム教徒であり、その後の回族はモンゴル帝国と元朝時代に中央アジアと西アジアのイスラム教徒である。唐朝では、海外貿易が比較的盛んで発展し、多くのアラブ商人やペルシャ商人が泉州に転入した。南宋時代、金、遼、西夏の妨害によりシルクロードは遮断されたため、杭州、明州に商人達が集まったため、南東部沿岸の港にアラビアやペルシャなど20カ国以上の人々が中国に入ったとされる。西部地域のイスラム教徒は元朝の統治に貢献したため、南東海岸のアラブ人とペルシャ人も保護と優遇を受けた。南東海岸沿いの港にいるアラブ商人やペルシャ商人は非常に裕福で、土地を購入し、家を建て、寺院や学校を建て、中国に定住するようになった。」(邱、1996)

一方、中央アジアや西アジアのイスラム教徒は元朝の東征を命じられ、戦争に参加した後、国境や畑の警備に派遣されたため、農民として定住したものが多い。結果、南から東へと、中国の各地にイスラム教徒が移住し、共通の信仰・文化で結びつき、徐々に回族の民族共同体を形成した。元朝時代は回族形成の準備期であり、明朝時代こそ大まかに形成されたと考えられている。明朝に入っても依然多くの人々が回族に統合された。例えば、アラビア、ペルシャ、西トルコ人、東南アジア出身の「帰国回回」もあれば、華僑の「在留回回」もあって、彼らは明朝への「朝貢使節」の形で中国に入国することが多く、各国の使節団にはいつも数百の回族の人が参加し、中国に入った。その人たちが、そのまま中国に残り、イスラム教を信仰するため、回族として統合されることもあった。

元朝、明朝ともに、回族の商業は非常に発展し、生活において重要な位置を示している。『回回族』は常に商売が得意で、元朝から、回族商人は中国全土に広がり、明朝でも発展した。」と丁は述べている(丁、1983、p.79)。

元朝の回族の商業は、『海のシルクロード』を介し、大量の香辛料、医薬品、宝飾品を流通させたことで有名である。彼らがアラブ諸国から中国に輸入していたのである。したがって、元朝の回族商人は主に国家間の貿易で利益を得ていた。しかし、明朝に入ると、基本的な海の貿易を禁止したため、回族の貿易は衰退していた。明朝の回族は、元朝時の香料・宝石などから、牛・羊・皮革・毛などの畜産品やお茶、塩、粮などの生活必需品の貿易を行っていた。

《回族簡史》の編集版では以下のように記載している。

「明朝の恵会にはまだ海外貿易に従事する人々がいた。しかし、当時は度重なる海上禁制があったため、海外貿易は元朝ほどスムーズではなかった。回族の海外貿易の中心地である泉州市も明末には衰退し、金、丁、馬、迪、夏という五大姓が泉州近郊の村に新たな集落を形成した。」

「明朝には、北京の玄武門の外に何万人もの回族がおり、職業として牛を屠殺していた。その後、これは伝統産業となった。」(李等编写組、1978、p.15)

元朝、明朝ともに、回族は貿易が得意であり、商業で生活していたのである。彼らは、言語にも精通していた。南から東まで、各地域に浸透し、海岸から内陸部まで大規模な分散と小規模な集中で居住していたため、それぞれの言語、文字、異なる民族称号が次々と消失し、中国語が共通言語、共通文字になった。他の民族との違いは、イスラム教を信仰することである。そのため、イスラム教の信仰とは別に、中国本土に長く住んでいる人は、見た目も漢族と区別できないほど漢化されている。

本節では、元朝由来のモンゴル族、回族を主に取り上げたが、モンゴル帝国の統一により既に元朝では 50 の民族が確立したと言われている。イスラム教とともに、中国で少数民族共同体を形成した彼らは、内モンゴル、チベット、広西、新疆、雲南など、ロシア・北朝鮮・モンゴル・インド・ネパール・ベトナム・ミャンマーなどの隣接国境に居住している人と、内陸に居住している人で分かれた。内陸で居住している回族たちは、徐々に漢化されたが、辺境に居住している少数民族は自分達の信仰を守る姿勢も強く、隣接国の信仰に大きく影響される。

1949 年、中華人民共和国成立後、漢族を中心に 55 個の少数民族が認定され、56 個の民族となる多元一体の局面の多民族国家となった。

モンゴル帝国の統一は、中国地域においてモンゴル族をはじめ、回族も大量に流入し、多民族国家を形成したのである。

第 3 節 中国の文化・貿易の交流におけるモンゴル帝国の意義

本節では、モンゴル帝国の統一により、中国と西アジアの文化交流を考察する。

モンゴル帝国は東から西へ広大な一つの国として統一されたことで、東西の交流の道を切り開いたと言える。西のイスラム文化と中国の文化が同じ国土で、直接交流する機会を作ったため、相互的に影響しながら発展する結果となった。この時期から、中国の天文学、手芸技術、磁器工芸、絵画、医学技術が西に伝播し、また西アジアの地理学、手芸技術、繊維技術、制砲技術、建築技術、楽器、西洋医学、宗教・言語などが中国に伝播するようになった。

第 1 項 中国文化と西アジア文化の交流と発展

天文学は、元朝時代、中国と西アジア文化交流の重要項目である。1259 年、イル・ハンが天文台建設の準備のために東西から学者を招集した際、中国の天文学者も含まれていた。そして、13 世紀にイル・ハン国ですでに漢族が火薬や火の矢、火玉らの武器を発明していた。その技術は、宋朝時代、すでに中国国内の戦争に使われており、北部の様々な少数民族地域にも広がっていた。13 世紀以前、アラブ人はまだ火薬や銃器は作れなかった。モンゴル帝国の西遠征中、モンゴル兵は「毒入り火瓶」、ロケット弾、大砲、

爆竹、その他の銃器を使用していた。西方遠征隊には中国の投石器手や砲兵も入って、発火銃や発砲弩などの武器が使用された。火器の偉大な威力はアラブ人の注目を集め、モンゴル人が伝えた「火器」という武器を西アジアに伝えた。「バレル」と「ブラストガン」は改良され、火器の「モーターガン」や火砲の「馬砲」に発展したのである。その後、アラブ人とヨーロッパのキリスト教徒諸国との戦争を経て、ヨーロッパに広まった。また、この時期は中国の伝統的医学(脈学・病理学)とイスラム医学との交流においても重要な時期である。

そして、西の文化や貿易も中国に多く入ってきた。古代アラブ人は経緯度を明確に把握し、彩絵地図や世界地図の制作、区域地理、航海地理、地球の概念を持っていた。中国の地理学的知識は、モンゴル帝国時代にアラブから吸引したと言われている。中国地域では、元朝により国境地域が拡大され、特に西アジア(新疆ウィルグル地域)にまで広がり、行政分割も大幅に変化した。元朝建国後、多くの人を集め、支配地全域の統一した地図《元大一統志》を作成し、《元大一統志》には、各章の初めにカラーの地理図が描かれていた。また、《天下地理総図》も作成していたが、地理的範囲及び絵画技術は非常に高い技術力である。《元史》では、中国史上、初めて距離と面積の計算式を提言し、現代地理学の経緯線を説明していた。また人類の居住地である地球が球形であること、そして球面上の位置と大きさを図面で表していた(楊、1995、p.174)。

元朝時代の文化は、中国の建築文化に大きく影響した。大量の「回族」が西から入り、イスラム文化の中国への伝播により、アラブと中央アジアの建築文化が中国に流入した。元朝時代、中国北西部の新疆には清真寺や霊廟が次々と建設され、建築様式はほとんどがペルシャ混合またはトルキスタン混合様式である。海岸沿いにも多く現れ、清真寺のほとんどは中国とアラビアの混合様式の建物である。台湾学者馬明道は、北京の天壇もイスラムの職人によって建てられたのではないかと述べている(馬、1982、p.17)。この時期、イスラムの医学、数学、軍需品の製造技術など、イスラム世界を介して伝わった西洋の科学技術とイスラム教の食生活などの科学技術・文化も元によって中国に伝わった。

第2項 言語の交流・貿易交流

元朝は、一般的にモンゴル語と漢語を共通語として使用したと言われている。文字は、漢文とモンゴル文の「パスパ文字」で書かれていた。パスパ文字は、モンゴル帝国の大元ウルスで国師であったチベット仏教のラマ、パスパ(パクパ)が、クビライ・ハーンの命令を受けて、大元ウルスのすべての言語を表記するために、共用国語として作成したものである。佐口透は、「モンゴル帝国はペルシャ語(回語)を盛んに使用し、特に政治と文化面では、ペルシャ語がグローバル語の役割を果たした」と述べている。アラビア語はイスラム教の宗教用語として使われ、アラブ商人の間で、商業用語、学術用語として使われていた。

モンゴル語と中国語を融合させたのは、元朝だけでなかった。実はティムールと明朝の往来も、ペルシャ語・漢語・モンゴル語・チャガタイ語を併用したのである。張は以下のように述べている。

「ティムール朝と明朝の間に交した国書・表文などには二種類もしくは二種類以上の文字が使われていたのである。1394年、初めてティムール王朝の使者が明朝にきた時の表文(国書)には、原本はペルシャ語かほかの文字か不明である。《明実録》の国書は、漢文で記載し、漢文化レベルの高さを示してある。」(張、1995、p.169)

元朝滅亡後、明朝はティムール朝と親密な関係を持ち、朝貢貿易と外交政策を続けていた。明朝とティムール朝との接触は、朱元璋(1328-1398)とティムール(1336-1405)から始まっていた。朱元璋はティムールより少し早く王朝を設立し、ティムール朝が台頭した時、朱元璋はすでに万里の長城内に足場を築き、モンゴル帝国の残存勢力を万里の長城の外に追い出し、西域諸国が次々と降伏していた。そのため、ティムールも明朝に朝貢を始めた。ティムールの朝貢は明朝の国威によって強制されたものではあるが、彼の戦略だったかも知れない。明朝とティムール朝は、朝貢貿易を介し、互い意識し合っていたのではないかと推測する。

明朝にとって、西側の元残存勢力は国家威信の印として明朝に朝貢し、その威信を維持するために、相互貿易、寛大な商人、朝貢使節の優遇措置を利用し、西域諸国をなだめていた。明朝の支配者らは、朝貢貿易は『天の王国』の国際的地位を維持し向上させるための効果的な政治的、外交的、経済的手段であった。実際、明朝は「西域諸国に多大な利益をもたらした」貿易を行っていた。

明朝の初期は、北域の元の残存勢力との戦いや、内陸部の反乱の鎮圧など多くの戦争が行われた。軍隊は馬を必要としており、ティムール朝から貢物として送られた馬が多かった。輸入される馬はすべて西域からの優良馬であり、明の馬生産産業の発展には非常に有益であった。姚の記載によれば、「明朝は馬を専門的に訓練し、より多くの馬を繁殖させる」ために陝西省と甘粛省に興台埔寺を設立した(姚、1993、第2期)。表1の通り、戦争が多かった時期に、ティムール朝からの貢物の中に馬が多かった。張は、「馬の貿易は、明朝とティムール朝の貿易の中で最重要取引であり、ティムール朝は55回の貢物の中、ほぼ毎回馬が入っている」と述べている(張、2006、p.122)。

モンゴル帝国とその後の影響は、中国地域に建立した元朝だけでなく、中央アジアに建立したティムール王朝とも深い関係を持ち、中国の発展に貢献したと考察している。

第4節 結論

本章では、中国人学者たちの研究より、中国におけるモンゴル帝国の意義を考察してきた。モンゴル帝国の統一は、「中国」という地域に、巨大な統一国家を建国し、初めての統一した国家管理政策を設け、実施した。結果、中国地域における多宗教・多民族の共存と融合の時代を作り、中国と西・東南アジアの文化・経済貿易の交流を促進し、中国の発展に大きく貢献した。中国人にとって、「元朝」は中国史の一部で、偉大な王朝であり、元朝が残した国境地域・多民族・多宗教の統一体制は偉大な遺産である。

また、モンゴル帝国の統一により、中国・中央アジア・西アジアは、陸と海で繋がり、一つの国家の中で、文化・貿易の交流ができ、融合することができ、中国地域の経済発展にもつながったと考察する。

なお、中部大学の和崎聖日先生の話では、「ウズベキスタンでは、チンギス・ハンは悪党にされ、ティムールは英雄と認識されている」。同じように、モンゴル帝国に占領されたが、その地域の歴史的背景によって、モンゴル帝国の意義をどうとらえるかに相違があると考えられる。

今後、グローバル社会の発展のためにも、各地域におけるモンゴル帝国の遺産を深掘りすることでその地域を理解し、戦略にも応用できると考えている。

以下に、明朝とティムール王朝との貢物貿易の一部を表1に示す「张文德：『明与帖木儿王朝关系史研究』、中华书局、2006、p.266 記載の表を抜粋し一覧にした。

表 8 ティムール王朝と明朝の貢物貿易の一部抜粋

No	時期	ティムール朝→明朝	明→ティムール朝	<実録>
1	1387 年	馬 15 頭; 駱駝 2 頭	白金 18 錠	185 卷 p3
2	1389 年	馬 205 頭	白金 1100 錠	197 卷 p5
3	1390 年	馬 670 頭		199 卷 p2
4	1394 年	馬 300 頭		244 卷 p3
5	1395 年	馬 212 頭	紙幣	239 卷 p5
6	1396 年	馬 240 頭	紙幣	244 卷 p2
7	1396 年	馬 1095 頭	紙幣	245 卷 p7
8	1409 年	西馬 550 頭	彩巾(布類)	97 卷 p8
9	1419 年	西馬・ライオン	白金・金丝织品・磁器	210 卷 p1
10	1456 年	駱駝 7 頭・馬 247 頭等	白金など	236 卷 p2
12	1490 年	駱駝・馬等		36 卷 p2

第2章 モンゴル帝国と清朝共通の統治理念としてのチベット仏教

本章では、モンゴル帝国と清朝が、ともに少数の遊牧民族でありながら、多数派の漢民族を支配し、現在の中華人民共和国の領域とほぼ重なる広大な地域を、数百年にわたり統治し得た理由のひとつとして、「チベット仏教」が大きな役割を果たした意義について、史実を追いながらその詳細と、宗教としての特質、影響を明らかにしながら考察する。

第1節 チベット仏教の成立と展開

本節では、チベット仏教の成立過程と、その特質、歴史的展開を整理する。

第1項 チベットの地勢と古代インド神話におけるチベット観

本項では、本章の舞台となるチベットの地理的、宗教的な特質を示す。

チベットは、ヒマラヤ山脈の北、ユーラシア大陸の中央部に位置し、中華人民共和国のチベット自治区、青海省、雲南省、甘粛省、四川省のチベット自治県、新疆ウイグル自治区南部、インドのラダック、スピティ地方、ネパールの西北部、パキスタンのギルギット・バルティスタンにまたがる広大な地域で、平均標高 4,100 メートルの高原上にある。

チベット高原は、標高の高い西部は不毛地帯であるが、比較的標高の低い東部のカム地方、東北部のアムド地方は盆地で耕作が可能であり、チベットの人口の大半はこの地域に集中している。中央チベットに位置するラサは、高度こそ富士山より少し低い程度だが、森林もあり、大麦の栽培も可能で、チベットの首府となっている。

このような高地の存在は、ヒマラヤ山脈の南、古代インドに宗教的インスピレーションを与えた。仏教発生以前のインド神話では、世界の中心に「スメール山」という超高山が聳え、それを四大大陸が囲むという世界観であった。スメール山の頂上には神々の王インドラが住み、修業を極めた者だけが足を踏み入れることができる精神世界があるとされ、古代インドの行者はこの地を目指した。古代ギリシャ神話における、神々が住むとされたオリンポス山の存在に似ている。後世、中国僧玄奘は、このスメール山を仏教における須弥山、インドラを帝釈天に比定した。チベットは古代インドにおける諸宗教、バラモン教、仏教、ヒンドゥー教にとって聖地視されてきた(石濱、2023、p.3)。

第2項 チベット仏教の揺籃としての古代チベット帝国

本項では、チベット仏教を育んだチベットの歴史的背景を概観する。

チベットが歴史上に明確に登場するのは7世紀初頭である。それ以前のチベットは多くの氏族に分かれた分裂状態にあったことが、20世紀初頭に発見された敦煌や中央ア

ジアの古チベット語文書から推察されるが、7世紀にソンツェンガムポ(西暦 581 年?～649 年もしくは 650 年)がチベットを統一し、チベット帝国を樹立した。

ソンツェンガムポは、強大な軍事力を背景に唐に遣使し、皇女の降嫁を求めた。その結果、唐の太宗の皇女とされる文成公主がソンツェンガムポに嫁ぎ、仏教を持ち込み、ソンツェンガムポはチベットに 8 つの主要な寺を建てたとされている。また、インドからリッチャヴィ朝ネパールの有力者アンシュ・ヴァルマーの娘のチツンも王妃として迎え、両王妃がインド、中国からそれぞれ仏教をもたらし、チベット仏教の祖となったという伝承がある(岩尾、2010、p.29)

次の図像は、ラサ・ポタラ宮に祀られているソンツェンガムポ像で、向かって右が中国妃文成公主、左がインド妃チツンである。



出所:Ernst Stavro Blofeld - <http://en.wikipedia.org/wiki/Image:SongstenGampoandwives.jpg>, パブリック・ドメイン, <https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=2160286>

図 17 ラサ・ポタラ宮 ソンツェンガムポ像

ソンツェンガムポの死後、仏教は急速にチベットに普及し、8世紀には寺院は政治的、社会的にも一大勢力となった。唐から「吐蕃」と呼ばれたチベットの皇帝(ツェンポ)ティンデツィン(742年～797年または798年)は、仏教を国教とし、中心寺院としてサムイェー寺院を建設、仏教を利用した統治を行った(岩尾、2010、p.31)。

チベット帝国は、仏教をさらに発展させるべく、インドや中国から高僧を招聘した。インド最高の仏教学院、ナーランダ僧院に所属していた大乘仏教・中観派の僧シャーントラクシタ(漢名:寂護)(?-787年頃)が初めてチベットに戒律をもたらし、バドマサンバヴァ(漢名:蓮華生)が8世紀後半頃が密教をもたらし、ニンマ派を創始した。このふたりがチベット密教の開祖とされている(岩尾、2010、p.32)。

第3項 後伝チベット仏教と四大宗派の成立

本項では、チベット仏教の成立過程と展開について整理する。

9世紀にチベット帝国は後継者争いによって分裂するが、諸王の保護によって仏教はさらに発展した。王のひとりイェシェー・ウーが招聘した、インドのヴィクラマシーラ僧院の長アティシャ(982年～1054年)は、無上ヨーガなど、ヒンドゥー教タントリズムの影響の濃い、インドにおける新しい趨勢の仏教(次項で詳述)をもたらした。チベットの史書では、これまでの古代帝国期の仏教を「前伝仏教(ガダル)」、アティシャがもたらした新しい仏教を「後伝仏教(チダル)」と呼んで区別している(石濱・松川、2010、p.50)。

後伝仏教期に、ニンマ派、サキャ派、カギュー派、ゲルク派といった、現代にも存続するチベット仏教四大宗派が次々と成立した。

ニンマ派は、前項で触れたパドマサンバヴァが、自らの教説を地中や弟子の心に隠し、その教えが役立つ環境となったときに地中や弟子の化身から顕れたとする「埋蔵教説(テルマ)」を元にした修業を行う。

サキャ派は、開祖ドクミ(992年～1043年?)がアティシャとは逆に、自分からインドのヴィクラマシーラ僧院に赴き、その学びから同時代の密教行者の乱れた行いを糾すべく成立したが、後にモンゴル帝国への布教に成功し、13世紀後半から14世紀前半にかけてチベットの覇権を手にした。これは後述する。

カギュー派は、開祖マルパ(1012年頃～1097年)が密教經典のチベット語翻訳に携わりながら、インドを3回、ネパールを4回訪問し、108人の導師、行者のもとで学んだ。マルパとその一番弟子のミラレパは教団を作らなかったが、その教義は多くの分派を生んで広まった(石濱、2023、p.52)。

ゲルク派は、後にチベット仏教の主流となり、現代のダライ・ラマ、パンチェン・ラマもこの宗派である。開祖ツォンカパ(1357-1419)は、チベット仏教を体系化し、修業のカリキュラムを整理した。チベット仏教の教えは大きくふたつに分けられ、經典の理論を学び、僧同士の徹底したディベートで悟りを目指す「顕教」と、言葉では伝えられないため、師匠から弟子へと修業の実践で伝授する「密教」がある、しかし、両者は対立し、顕教を学ぶ者は密教を軽蔑し、密教を学ぶ者は戒律を守らず墮落しがちであった。ツォンカパは、まず顕教を行ってから密教に移るカリキュラムを提唱し、これによってチベット仏教は、論理的かつ包括的な哲学学問体系と、スピリチュアルで神秘的な精神修業をあわせもった普遍性を獲得した。ゲルク派は次第に他派を圧倒し、各地に広がっていったのである(石濱・松川、2010、p.59)。

第4項 インドにおける密教の成立とイスラムによるインド仏教の滅亡

本項では、チベット仏教の源流となったインド仏教の成立と滅亡について概観する。

前項まで、チベット密教は、インド密教の高僧がチベットに伝え、またチベット僧がインドを訪ねて学び、持ち帰って発展した流れを概観した。本項では、チベット仏教の本質となったインド密教がどのように成立し、また滅亡したかに触れる。

仏教の始祖ゴータマ・ブッダ(釈迦)は、インド古来の民族宗教であるバラモン教では人間の苦しみが救われないことに問題意識を持ち、悟りを開いて、新たな思想を創り出した。民族宗教であるユダヤ教の改革者として活動したイエス・キリストと同じ背景といえ、両者の教えは、受け継ぐ者により、教祖の教説の原型を留めないほどの拡大解釈を経て、民族を超えて受け入れられる普遍性を獲得し、世界宗教へと変貌した。

ゴータマ・ブッダの教えは、キリスト教と同様、後世様々に解釈され、宗派に分かれて広まっていった。主要な流れとしては、中国、朝鮮半島、そして日本等に伝わった大乘仏教(北伝仏教)と、スリランカ、ミャンマー、タイ、カンボジア、ラオス等に伝わった上座部仏教(南伝仏教)のふたつが挙げられる。

一方、古代のバラモン教は、中世初期に「タントリズム」と呼ばれる宗教運動によって、ヒンドゥー教として新たな地平を開き、インド民衆に広まっていった。

インドに残った仏教は、ヒンドゥー教に圧迫されつつ、存続のためタントリズムを積極的に取り入れて、「密教」として変貌していった。

タントリズムとは、「タントラ」と呼ばれる聖典に基づき、新しいスタイルのヨーガ(瞑想法)、マントラ(真言)、ムドラー(印契)、マンダラ(神々の図像)を使用し、儀式、秘法の実践によって、迅速に目的の達成、超自然的な力の獲得、最終的な解脱を得ようとするものである(種村、2010、p.210)。

インドに残った仏教は、タントリズムを取り入れることによって「密教」となり、一部中国に伝わって独自の発展を遂げ、さらに最澄、空海によって日本に伝えられ、天台宗、真言宗として平安仏教を形成するが、その後もインドで独自に深化し、チベットに伝わったのである。

しかし、インドでは、民衆の支持はヒンドゥー教に集まり、仏教としてはベンガル地方のナーランダ僧院、ヴィクラマシーラ僧院の学僧に細々と受け継がれるのみとなった。

そして、イスラム教徒であるマムルーク朝の将軍ムハンマド・バフティヤール・ハルジーにより、ナーランダ僧院は 1193 年に、ヴィクラマシーラ僧院は 1203 年に破壊され、インドの仏教は滅亡した。インド仏教は、結果的にチベットにのみ残ったことになる。

チベット仏教は、教祖ゴータマ・ブッダが活動した地、インドに最後まで残った仏教の直接的な承継者として、正統性を纏ったのである。

第 2 節 モンゴル帝国とチベット仏教

本節では、モンゴル帝国とチベット仏教との密接な関りについて概観し、後世への影響を考察する。

第1項 モンゴル帝国の拡大とチベット仏教

本項では、発展途上のモンゴル帝国とチベット仏教との邂逅について整理する。

モンゴル高原を統一し、ユーラシアに覇を唱えたチンギス・カン（成吉思汗）の死後、後継の皇帝（カーン）はさらに勢力圏を拡大していった。モンゴル帝国第2代皇帝のオゴデイ・カーンは、その息子コデンに西夏の故地を与えた。コデンは1239年にカム地方からチベットに侵攻、仏教寺院を焼くなど征服活動を行った。

これに対し、当時チベットで豪族たちの支持のもと権威を確立していたサキヤ派の座主、サキヤ・パンディタ＝クンガ・ギェルツェン（1182年～1251年）は、1247年にパクパとチャクナというふたりの甥を伴ってコデンの本拠地涼州に赴き、コデンと会見した。

モンゴル帝国は、被征服地の王に対し、宮廷に伺候すること、王子を人質として差し出すことを要求していたが、この会見はその義務を満たすものであった。また、モンゴル人はあらゆる宗教の聖職者を尊重し、モンゴル帝国の繁栄を祈らせていたので、この会見は、チベットがモンゴルに服属することになったことを示すとともに、モンゴル帝国がチベット仏教によって祝福されたことも意味する。

実際、コデンはサキヤ・パンディタによってチベット仏教の灌頂（インドの王が即位の際、僧によって水を頭に注いで祝福される儀式。密教においては、阿闍梨から弟子に法門を伝授する儀式。）を受けた。サキヤ・パンディタはコデンの侍僧となってモンゴルの支配地に仏教を広めながら、1251年に蘭州で入寂した（石濱・松川、2010、p.62）。

第2項 クビライ・ハーンとパクパの師弟関係

本項では、漢地において元朝を開き、モンゴル帝国の最盛期を現出したクビライ・ハーンと、チベット仏教の高僧パクパとの政教相互依存関係について概観する。

サキヤ・パンディタの没後、その跡継ぎとなった甥のパクパ（1235年～1280年）は、王子コデンの没後もその宮廷に留まっていたが、1253年に雲南遠征の途上であったモンゴル帝国の王族クビライに招かれ、その侍僧となった。当時クビライはモンゴル帝国の後継者の地位にはいなかったため、チベット仏教の支持を得て優位に立とうとした可能性がある。

この後、パクパはクビライに灌頂を受け、クビライから「金剛阿闍梨」として師事されることになった。そして、クビライはこれより3度にわたってパクパに灌頂を受け、第1灌頂の返礼としてチベットの13地域、第2灌頂の返礼としてチベット全土、第3灌頂の返礼として中国の地をパクパに寄進したとされる。

これによって、モンゴルの君主が施主（供養する者）、チベットの宗教指導者が応供（供養を受ける者）、すなわち「寺と檀家」の関係が確立する。灌頂儀礼において、導師は本尊と一体になって弟子に本尊の力を授け、その後の学習や指導において弟子は師の言葉に従うことが求められる。チベット仏教はモンゴル帝国にとって欠かせない統治原

理となったとともに、チベットはモンゴルによって特別に保護される地域となったのである。

クビライは1260年にハーンに即位したが、それは実力をもって先代モンケ・ハーンの後継者アリクブケから位を奪った形であり、正統性を欠いたものだった。パクパはチベット仏教のイデオロギーをもって、クビライのハーン位の正当化を試みた。

すなわち、パクパは1267年に大都の崇天門に金輪を掲げ、その金輪に四方から金線を張った。古代インドでは、仏法を護り、世界の繁栄をもたらす無限の統治権をもった「転輪聖王(てんりんじょうおう)または転輪王)」という王が存在するとされ、仏教でも受け継がれている。転輪聖王には4等級があり、スメール山(須弥山)を中心とした東西南北4つの大陸のうち、鉄輪王は1つ、銅輪王は2つ、銀輪王は3つ、金輪王は4つ全てを支配するとされる。パクパは、転輪王のうち最上級の金輪王、すなわち、武力を使わず全世界を支配する聖王にクビライをなぞらえたのである。

また、パクパは大名殿のクビライの王座の上に白い天蓋を置いたが、この天蓋は、傘が雨や太陽から人を護るように、都市や国家を厄災から護るとされる「白傘蓋仏(サマヤ)」を表わすもので、この天蓋は年に1度王座の上から降ろされて輿に乗せられ、大都の街を練り歩いた。これは大都最大の祭りとなった。この儀礼は従来の中国仏教にはなく、チベット仏教によってクビライの徳を讃える民衆参加型の祭典となったのであった。

さらに、パクパはクビライの長子チンキムを施主として大都にチベット式の白い仏塔を建て、大都の街に数々のチベット寺院を建立した。従来の中国仏教は弾圧されなかったが、少林寺に残る1261年に建てられた碑文には、パクパが全中国の仏教界を牛耳る旨、クビライの勅書が刻まれている。

パクパは、クビライ即位の翌年、1261年にモンゴル帝国の国師に任じられ、チベット、旧西夏領の行政権を委ねられる。モンゴルには独自の文字がなかったため、クビライはパクパにモンゴル独自の文字を作成させ、1269年に勅令により制定された。1270年にはパクパは帝師と大宝法王の称号を授けられ、クビライは1271年に国号を「大元」と改めて漢地を含む支配を完成させる。クビライの統治はパクパと二人三脚で実現されたものであり、皇帝・王とチベット高僧との政教相互依存の関係は、後世にわたって、チベット、モンゴル、満洲において統治モデルとなった(石濱・松川、2010、p.66)。

次にパクパ像を示す。



出所:パブリック・ドメイン, <https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=1264382>

図 18 パクパ像

第 3 項 アルタン・ハーンとダライ・ラマ 3 世によるモンゴルのチベット仏教化

本項では、北走し、分裂したモンゴルが、チベット仏教を利用することによって勢力を盛り返し、また現在のダライ・ラマを生み出した状況について概観する。

元朝は、1368 年に皇帝トゴン・テムルが、明朝を建てることになる朱元璋の軍に追われ、大都を放棄して北のモンゴル高原に敗走し、漠地を失った。その後、クビライの直系王統は断絶し、モンゴル帝国は分裂する。チベットにおいても、モンゴル帝国を後ろ盾としていたサキヤ派が権力を失い、カギュー派系が力を持った。16 世紀にチンギス・カンの血統のダヤン・ハーンがモンゴル高原の再統一を行い、その 11 人の子供はモンゴル諸地域に分封された。

ダヤン・ハーンの孫のひとり、アルタン・ハーンは、南モンゴルを支配し、明朝の領土にもしばしば侵攻して、1542 年にトゥシェート・セチェン・カーンというハーン号を名乗った。アルタン・ハーンは、祖先の英雄クビライの業績に倣い、チベットからゲルク派の高僧、ソナム・ギャツォを招聘し、これに師事した。

ソナム・ギャツォはこれを受け、次のように使者に回答したという。

『祈願の力によって、遠い昔にカーンと私はめぐり会って、私はあなたの供養を受ける僧となり、あなたは私の施主となった。そして、東方の暗黒の地に仏の教えを広めようとの祈願を立てた。誓いの言葉は成就する。』(石濱・松川、2010、p.70)。

すなわち、ソナム・ギャツォは自分の前世はパクパであり、アルタン・ハーンの前世はクビライであるとしたのである。これは、クビライ同様、実力でハーンの座についたものの、チンギス・ハーンの直系子孫ではなく傍系であったため、正統性に不安のあるアルタン・ハーンにとって、まさに渡りに船であった。アルタン・ハーンはソナム・ギャツォより灌頂を授かり、「梵天にして大いなる力の輪を回す法王」という称号と、それを刻んだ銀印を

授けられた。アルタン・ハハーンはソナム・ギャツォに「持金剛仏(ヴァジラダラ)にして善なる輝く福德の海」という称号と、それを刻んだ金印を奉った。この称号の「福德の海」はソナム(福德)ギャツォ(海)をそのままモンゴル語に訳したものであり、その後、ソナム・ギャツォとその転生者たちは「ヴァジラダラ・ダライ・ラマ(高僧)」と呼ばれ、一般に「ダライ・ラマ」と称されるようになった。

チベット仏教では、観音菩薩信仰から、高僧は死後、赤子となって転生するとされており、ソナム・ギャツォは先代に2代の転生者がいたことから、「ダライ・ラマ3世」と呼称されるが、実質的には初代のダライ・ラマである。

これ以後、歴代のダライ・ラマはモンゴルでの布教に力を入れ、チベット仏教はモンゴル人、さらに東の女真族にまで浸透してゆく。

以下にアルタン・カーン像を示す。モンゴルの支配者であるが、数珠を持ち、信仰深い仏教徒の姿で表わされている。



出所:チベット遺産基金

<http://www.tibetheritagefund.org/pages/projects/mongolia/mongolian-history.php>

図 19 アルタン・カーン像

第3節 清朝とチベット仏教

本節では、少数民族(女真族)である清朝が、チベット仏教を利用して、故地満洲、モンゴルと漢地、さらにチベット、新疆ウイグルを支配し、統治に成功した理由について考察する。

第1項 第2代皇帝ホンタイジのモンゴル継承

本項では、満洲に起こった女真族国家の後金が、第2代皇帝ホンタイジによって、チベット仏教を利用したモンゴル支配に成功し、モンゴル帝国の正統な後継国家・清朝を樹立させた状況について概観する。

現代の中国東北部には、古代からツングース系の諸民族が興亡したが、隋唐期に高句麗と対立し、その滅亡後にその遺民と渤海国を建てた靺鞨族が有力であった。渤海国は10世紀に契丹族の遼に滅ぼされ、その遺民は女真(ジェシェン、女直)族と呼ばれた。12世紀に女真族は金を建国し、遼を滅ぼし、漢地に侵攻して北宋を滅ぼし強大となったが、13世紀にモンゴル帝国が勃興すると、チンギス・カンの猛攻を受けて遷都、さらに第2代カーンのオゴデイによって滅ぼされた(増井、2002、p.54)。

元朝が明朝によって漢地から追われると、明朝は北方のモンゴルを牽制する上で、女真の各部族にそれぞれ差のついた官職を与えたり、朝貢や馬市の特権を与えたりして招撫しつつ、部族同士を分断させる政策を取った。女真族は、馬の放牧、クロテンなどの毛皮、薬用人参などの狩猟採集物資を明朝と交易することが経済基盤であったため、明朝から特権を得るべく、各部族は対立しがちであった(石橋、2000、p.65)。

このような明朝の巧妙な分断政策もあり、女真族は遼東半島の「建州女直五部」、松花江流域の「海西女直四部」、黒竜江(アムール川)流域の「野人女直三部」に分かれたまま、時には激しく抗争して統一国家を樹立できていなかったが、明末に建州女直マンジュ部のアイシンギョロ(愛新覚羅)・ヌルハチ(1559-1626)が建州女直五部を統一した。

元朝、明朝期に、モンゴルに広まっていたチベット仏教は、女真族にも浸透し、特にマンジュ部は文殊菩薩を信仰して、自らの部族名を「文殊(マンジュ)」と称した。この「マンジュ」に漢字を充てたのが「満洲」であり、ヌルハチが女真を統一すると、女真に代わる民族名、「満洲族」となっていた。それゆえ、「満洲」とは民族名であって地名ではなかった。これが地域の名称となったのは、近代日本が日露戦争以後、満洲族の故地、遼寧省、吉林省、黒竜江省の「東三省」に勢力を拡大するにあたり、その地を満洲(満州)と呼んだことに由来する(平野、2007、p.104)。

ヌルハチは祖父、父が明軍によって殺されたことから、明朝に恨みをもち、女真族を統合して明朝に対抗する動きに出た。明朝はそれを警戒して圧迫するが、かえって女真の統一機運を助長することとなり、ヌルハチは1616年に全女真を統合し、かつての金朝を復興し、カンに即位した。ヌルハチはチベット仏教における文殊菩薩の化身とされ、権威付けされた。ヌルハチはチベット僧アルダルハン・ナンソに師事し、行軍の際に、チベット寺院に宿営しないこと、寺院を汚さないこと、その財産を没収しないことを軍紀に定めた。(石濱・松川、2010、p.83)。この国は金朝と区別して「後金」と呼ばれる。そして、ヌルハチは明朝の討伐軍をサルフの戦いで破り、さらに攻撃を行う中で傷を負い、1626年に死去した。ヌルハチは後世、清朝の初代皇帝とみなされ、太祖の廟号を奉られた(石橋、2000、p.82)。

後を継いだ第2代カンのホンタイジは、衰えたとはいえ強大な明朝と対峙するにあたり、先に、強大な騎馬戦力を保持したモンゴルを支配下に置くことを目論んだ。モンゴルでは、アルタン・カーンの死後、統一が乱れ、各地に立ったカンが抗争しており、チベット仏教のゲルク派がさかんに各カンに布教活動を行っていた。やがて内モンゴルは、元朝の正統な後裔であるダヤン・カーン直系の、チャハル部のリンダン・カーンが統一した。リンダン・カーンはチンギス・カンから数えてモンゴル帝国の第40代カーン、北元としては第26代皇帝にあたる。

リンダン・カーンは北モンゴル(ハルハ・モンゴル)も服従させたが、1634年にチベット遠征の途上で病死した。ホンタイジはこの機にモンゴルに侵攻し、1635年にリンダン・カーンの遺児エジェイを降して、その手から、元朝皇帝に伝わる伝国の玉璽「制誥之宝」と、クビライの帝師であったパクパが鑄造した聖なる仏像「ハマーカーラ尊」を手に入れた。ホンタイジはこれでモンゴル帝国、元朝の正統な後継者の証を手に入れたのである。

これに基づき、翌年1636年に、内モンゴル49旗の王侯による大会議が開かれ、ホンタイジにモンゴル人共同のカーンとして「ボグド・セツェン・カーン」の称号を贈った。ホンタイジは都の瀋陽に天壇を築き、改めてモンゴル帝国の支配者カーンと、かつて漢民族を支配していた元朝の後継者である皇帝に即位したことを宣言し、国号を「大清ウルス」に改めて「神武英明皇帝」と称した。そして、マハーカーラ尊を祀るチベット仏教寺院、「一切のものに勝利する寺」として実勝寺をムクデンに建立した。これは、チベット仏教によって世界を統治したモンゴル帝国・元朝の復興、クビライを継承した仏教イデオロギーによる政治の復活を宣したものである(石濱・松川、2010、p.83)。

ホンタイジは明朝に代わって皇帝となったと称し、明朝の朝貢国である朝鮮にも服属を要求した。儒教国で「小中華」ともいわれる朝鮮は、女真族を蛮夷とみなしており、また豊臣秀吉の朝鮮侵攻に対し援軍を送ってくれた明朝に恩義があるため、これを拒絶したが、1636年にホンタイジは一気に鴨緑江を越えて南下し、漢城(現在のソウル)を占領した(丙子胡乱)。朝鮮は屈辱的な降伏を強いられ、清朝の朝貢国となった。しかし、仏教王国であった高麗を倒して建国し、儒教を統治イデオロギーとした李朝朝鮮は、以後清朝によるチベット仏教の押し付けに苦しむこととなる(平野、2007、p.117)。

第2項 第3代順治帝とダライ・ラマ5世の会見

本項では、モンゴル、朝鮮を支配した清朝が、入関後、漢地支配のため、どのようにチベット仏教を利用したかについて考察する。

清朝第2代皇帝ホンタイジ(太宗)が1643年に急死すると、その子の順治帝(世祖)が即位するが、まだ幼年であったため、叔父のドルゴンが摂政となった。1644年、明朝に反旗を翻した李自成率いる順軍が北京を陥落させ、崇禎帝を自害に追い込むと、山海関で清朝を防いでいた將軍吳三桂は、清朝に臣従して山海関を開き、清軍を招き入れ

た。ドルゴン在北京に攻め入って李自成を滅ぼし、清朝は明朝に代わって漢地全土を支配下に収めた(平野、2007、p.120)。

ドルゴンは北京入城後、さっそく紫禁城の北に、今も残るチベット仏教の仏塔「北海の白塔」を建立し、元朝と同様にチベット仏教を通して統治することを示した。(平野 2007 p.123) 摂政ドルゴンの死去後、順治帝の親政が始まると、この慶事を祝ってゲルク派の僧ノムンハンが、北京に尊勝塔 1 基と 2 つのチベット寺院を建立した。これらの仏教建造物は、北京の王城を守護する象徴的な場所に位置している。

さらに順治帝は、遠くチベットから、法王たるダライ・ラマ 5 世を北京に招いた。この招聘は、かつてクビライがパクパを招いた故事の再現が目的であった。招聘文書には「仏教に則った政治の伝統を絶やさないために、チベットから行者にして賢者なるものをお招きする」とした趣旨が書かれていた。しかし、儒教を尊重していた漢人の官僚はこれに反対し、ダライ・ラマを辺外まで迎えに行こうとした順治帝を止めた。漢人からしてみれば、世界の支配者である皇帝が一僧侶を迎えに城外に出るなど論外であった。しかし、満洲人、モンゴル人から見れば、施主であるカーンが応具の高僧を尊重するのは当然と考えられた。まだ漢地を支配して日が浅く、漢人の意向を無視できなかった順治帝は、会見に際し、ダライ・ラマを自分より少し低い座に迎え、帰国にあたっては属国の君主とみなす金印、金冊を与えた。これは中華思想にもとづくものである。ただし、食事は、儒教的儀礼からすれば先に皇帝が口にするべきところ、同時に行い、会見の場には転輪聖王の 7 つの宝(輪王七宝)を並べた。この順治帝とダライ・ラマ 5 世の会見から、清朝の君主が、ユーラシアの支配者「ハーン」と中華の支配者「皇帝」を兼務する葛藤が窺え、それは以後の皇帝たちにも受け継がれてゆく(石濱・松川、2010、p.85)。

以下に順治帝とダライ・ラマ 5 世の会見図を示す。順治帝(中央右)の方がダライ・ラマ(中央左)より若干高い席にいることが分かる。



出所:大紀元時報

https://hk.epochtimes.com/news/2019-12-05/85422852#google_vignette

図 20 順治帝とダライ・ラマ 5 世の会見図

第 3 項 ダライ・ラマの廃立に苦慮した第 4 代康熙帝

本項では、漢地における清朝支配を安定させ、帝国の最盛期を導いた康熙帝が、北方遊牧民族支配にチベット仏教を利用した状況について概観する。

1661 年に順治帝が 24 歳の若さで崩御すると、第 4 代皇帝として康熙帝が 8 歳で即位した。当初は 4 人の輔政大臣が政治を行ったが、16 歳で親政を始めるや、明朝の武将で清朝に降り、漢地平定の功により半ば独立国となっていた三藩の廃止に乗り出した。康熙帝は 9 年で三藩の乱を平定し、さらに台湾の鄭氏をも屈服させ、漢民族をあらためて実力で服属させることに成功した。そのため康熙帝は、4 代目でありながら王朝の始祖を意味する「聖祖」の廟号を贈られている(増井、2002、p.90)。

その康熙帝は、モンゴルでは強力なライバルとの抗争に苦しんだ。すなわち、ジュンガルのガルダン・ハーンである。康熙帝とガルダンは、モンゴルのハルハ部の支配を争った

が、その鍵はチベット仏教にあった。ハルハ部では、チベットのダライ・ラマ派の王侯たちと、北モンゴル独自の新しい「活仏」として信仰を集めていたジェムツンダムバを支持する王侯たちとの争いが生じていたが、ガルダンもダライ・ラマを支持し、ジェムツンダムバを圧迫した。この北モンゴル独自の活仏の系譜は、近代になってモンゴル独立時の元首となる。ジェムツンダムバ派の刺客がガルダンの弟を暗殺するに及んで、ガルダンはダライ・ラマの旗を掲げてハルハ部に攻め込んだ。

ジェムツンダムバを支持して北モンゴルを支配しようとしていた康熙帝はこれと衝突し、1696年には親征してガルダンを滅ぼし、ハルハ部は清朝に帰属した。チベット仏教の主導権争いが勢力拡大に直結していたのである。(平野 2007 p.141)

ただし、その後康熙帝はダライ・ラマとの提携に苦慮することになる。チベット摂政に擁立されたダライ・ラマ 6 世が放蕩な生活を送るようになると、モンゴルのラザン・カーンが摂政を殺害し、現ダライ・ラマを廃して「真のダライ・ラマ 6 世」を立て、康熙帝もこれを承認した。

しかし、廃位されたダライ・ラマ 6 世が拘束中に死去すると、東チベットの人々はその生まれ変わりとして「ダライ・ラマ 7 世」を擁立し、清朝に承認を求めた。康熙帝は深刻なジレンマに直面するが、ジュンガルのツェワン・アラプタンがラサに侵攻してチベット人に危害を与えると、ラサに軍隊を派遣して正式にチベットを版図に収めた。

そして、モンゴル人、チベット人の支持を得るために、自ら擁立した「真のダライ・ラマ 6 世」を否定して、「ダライ・ラマ 7 世」を承認した。康熙帝は政治的な体面を失ったが、チベット仏教徒の希望を容れたことで、現地では「文殊菩薩皇帝」としての威信は高まることになった。ダライ・ラマを支配者の都合で廃立することは民心を得ることができず、あくまでも民衆が認めたダライ・ラマを尊重、保護することで、モンゴル、チベット両地を平穩に統治できることを、康熙帝、そして清朝は認識したのである(平野、2007、p.143)。

第 4 項 華夷思想を論破した第 5 代雍正帝の「大義覺迷録」

本項では、夷狄が中華を支配するべきでないとする漢人学者に対し、みずから「大義覺迷録」を著し、満洲族が漢地を支配することの正当性を論証した雍正帝の論理と、その影響について考察する。

1722 年に康熙帝が在位 61 年をもって崩御すると、第 4 子の雍正帝が第 5 代皇帝として即位した。雍正帝の在位は約 13 年と短い、寸暇を惜しんで政務に励み、一切を自ら決裁した独裁皇帝として知られる。

雍正帝は熱心なチベット仏教徒であり、モンゴルの活仏チャンキヤ・ホクホトに師事し、政務の多忙を縫って教義問答に没頭、皇子時代の北京の邸宅をチベット仏教寺院に改装し、現在では北京で最も重要な仏教寺院「雍和宮」となっている。(平野 2007 p.160)

一方で雍正帝は漢文化の愛好者でもあった。宮崎市定は名著『雍正帝 中国の独裁君主』で次のように評言する。

雍正帝にとっては、中国を完全無欠に統治することが至上命令であった。彼の行動も信念もすべてはここから出発する。中国を統治するには中国流の独裁君主にならなければならない。そのうえ独裁君主制の理論的根拠を提供するものは漢文化に外ならない。しかして雍正帝自身、四十五年の部屋住みの間に、十分に漢文化の素養を身につけた。禅学の如きも彼にあっては漢文化の一種として教養の中に取り入れられたのであった。漢人国家の独裁君主として臨むには、自らも人後に落ちない中国風の文化人でなければならない。(宮崎、1996、p.174)

清朝の代々の皇帝は、モンゴル帝国の遺産である、遊牧民族統治と漢民族統治の両立を目指した。それは、遊牧民族と漢民族の優劣ではなく、双方の優れた点を融合させることにあった。元朝、清朝のように、少数の遊牧民族が多数の漢民族を統治する場合、ともすれば遊牧民の質朴な気風が華美な漢文化に取り込まれ、軟弱化してしまう恐れがある。征服者が被征服者に、文化的に「逆征服」されてしまう事例は、古代ローマ帝国とギリシャの関係にもみられる。

雍正帝は、漢民族特有の「中華思想」を克服することに意を注いだ。中華思想とは、漢地を文化の進んだ世界の中心、「中華」「中原」「中国」とし、周囲の諸民族を野蛮な「夷狄」として蔑む世界観である。

当時、漢民族の知識階級は、表向きは辮髪にして、武力による清朝支配に屈していたが、底流には中華思想があり、明末の朱子学者呂留良の思想をひそかに支持していた。呂留良は、朱熹が物事の是非を判断する基準として「義理」を重んじ、その中でも最も重いものが「華夷の別」であるとしている、と唱えていた。清朝は明朝の官僚の登用試験、科挙を受け継いでいたが、その試験は朱子学の知識を問うものであり、呂留良の説は女真族の清朝が「中華」を統治する正統性を揺るがすものであった。

儒者である曾静が『知新録』を著し、皇帝となり得る真の人間は、陰陽が合致して正しさと徳に溢れた漢人の「中土」「中国」にしか生まれ得ず、周辺地域は「傾き、陰しく、邪な僻地」とし、その住民は言語や文字が漢民族と通じないため「禽獸」だと決めつけた(平野、2007、p.166)。

曾静は捕らえられたが、雍正帝は、単に彼を処刑したのでは漢の底流にある中華思想を改められないと考え、彼と直接対面し、『知新録』に書かれた思想の間違いを全て論破した。曾静は全面的に誤りを認め、雍正帝は自らその問答を『大義覺迷録』という著書にまとめ、出版した。雍正帝の思想は「中外一体」であり、武力や弾圧ではなく、論理と心情で納得させなければ、漢民族を心服させることはできないと考えたのである。

雍正帝はその書の中で、「夷狄の名は本朝の忌むところにあらず」と、満洲民族はあえて夷狄であることを恥じないと宣言した。さらに儒教の古典を引用し、「舜は東夷の人であり、文王は西夷の人である」と、儒者の崇める古代の聖人たちも夷狄出身であることを示した。そして、さらに次のように論じる。

(曾静の著書『知新録』には)中土(中国)は正を得て陰陽が徳を合わせているので人であり、四塞(中国の四方)は傾き陰しく邪僻なので夷狄であり、夷狄の下には禽獣がいる、とある。禽獣とは、住む場所が荒遠にして語言文字が中土と通じないからであるという。夷狄は中国に生まれたものではないとすれば、人で外地で生まれた者は人となることはできないではないか。(本来ならば)人と禽獣は同じ天地の中にあって同じ陰陽の気をうけ、その霊が秀でた者が人となり、偏異した者が禽獣となるはずである。ゆえに人心は仁義を知り、禽獣は倫理がない。どうして土地の中外を以て人と禽獣の別を分けることができるのか。もしその通りなら、中国は陰陽の和会する地である以上、ただ一種類を生むのみであるべきで、多に禽獣を並び育むべきではないのである。

(『知新録』では)天下一家・万物一源と言っておきながら、一方で、中華の外の方方は全て夷狄であり、中土にやや近いところはなお人としての気があるが、遠くなると禽獣に他ならない、とある。天下一家・万物一源であるのにどうして中華夷狄の分があるのか。中華と夷狄は異なる二つの天地にいとでも言うのか。(平野、2004、p.82)

さらに雍正帝は「大義覺迷録」で、人材の登用、活用について、次のように宣言している。

人を用いるにあたっては、ただ適当であるか否かを弁じるべきであって、満であるか漢であるかを論じてはならない。我が太祖高皇帝(ヌルハチ)は、開国当初より満漢を兼用したので、規模は宏遠となり、内外は帰心した。けだし漢人の中にも、用いることが出来ない人物がいるものの、用いることが出来る人物も多い。三藩の変乱の際、漢人でも奮勇して尽力し殉節した者は少なくない。どうして漢人は用いるべきでないとと言えるのか。満洲の中には用いるべき者がいるものの、用いるべきでない者も多い。例えば賄賂を貪り法を壊し上を顧慮せず私を営む輩のことである。どうして満洲であるからといってこのような者を用いることが出来ようか。(中略)例えば満洲は騎射に長じ、漢人は文章に長じているのであり、西北の人は果決に余りあり、東南の人は穎慧においてやや勝る。ただ必ずしも強同しなければ、実に相助けることが出来るというのが理である。言語・嗜好・服食・起居のごときに至っては、各々その適当なところを得させるべきである。それは即ち、天下の大にして各省が異なり、一省の中でも各府州県が異なることのようなものであり、どうして満漢の違いだけに限定されようか。朕は臨御以来、四海を以て一家と為し、万物を以て一体と為してきたのであり、用人にあたっては必ず国計民生に裨益することを期してきたのだ。総じて満漢の分別の見はなく、ただ天下を以て公と為すを知るのみである。中外の諸臣は皆宜しく深く朕の懷を体せよ。(平野、2004、p.85)

ここに雍正帝自身の言葉で示された人材活用の理念は、まさに現代のダイバーシティ・インクルージョンの考え方といってよい。民族、出自の別なく、有能な者は活用し、無能な者は排除するという実力評価主義である。そして、公の利益という点では「強同」(強制的に同じにする)されるが、個々の習俗、生活習慣についてはこれを尊重するとしている。モンゴル帝国の支配者たちはこのような言葉を残していないが、民族、宗教の別を超えて人材を登用し、小異を認め大同を目指したモンゴル帝国の統治理念そのものである。清朝は、多民族国家の統治をモンゴル帝国の遺産として学び、実践知として活かしたのである。

以下に、チベット僧(ラマ)姿に扮した雍正帝像を示す。



出所: Royal Academy of Arts, part of the The Three Emperors, 1662 - 1795 exhibition which ran from 12 November 2005 - 17 April 2006 in London. Website might be taken down at some point in future., パブリック・ドメイン, <https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=773988>

図 21 チベット僧(ラマ)姿に扮した雍正帝像

第5項「文殊菩薩皇帝」としてモンゴルと漢地に君臨した第6代乾隆帝

本項では、現在の新疆ウイグル自治区にあたる地域を征服し、清朝の最大版図を築いた乾隆帝が、いかにチベット仏教を利用した統治を行ったか、その舞台として現代に残る熱河離宮(避暑山荘)と、帝が築いたチベット仏教寺院群(外八廟)について概観する。

雍正帝が1735年に57歳で崩御すると、太子密建の法により乾隆帝が24歳で清朝第6代皇帝として即位した。乾隆帝の時代に清朝は最盛期を迎え、度重なる外征の結果、最大版図を実現した。乾隆帝は10回の外征に成功したことを「十全武功」と誇り、「十全老人」と号した。この版図が、外モンゴルを除いて、ほぼ現在の中華人民共和国と重なる。しかし、この時期を絶頂として清朝は衰退に向かうことになる。

清朝は1687年以降、三次に渡りモンゴル系オイラート部のジュンガルと戦っていたが、1755年に乾隆帝がこれを征服し、「イスラム教徒の地」を意味する「回疆」、あるいは「新しい土地」を意味する「新疆」と呼んだ。多数のイスラム教徒が清朝の支配に入ることになり、乾隆帝はこれを懐柔するべく北京にモスクを建設した。

一方、これまでジュンガルと支配権を争っていたチベット支配も確立し、乾隆帝はチベット仏教の大施主として、また自身を「文殊菩薩皇帝」「転輪聖王」としてアピールすることに力を入れた。

その取り組みを今もビジュアル的に体感することができるのが、「承德」の地である。ここは北京から万里の長城を超えた熱河にあり、康熙帝が夏の離宮としてここに「避暑山荘」を建設した。康熙帝は、近くの狩場「木蘭囲場」で大軍事演習を催したり、モンゴルの王公を招いてモンゴル式のゲルで大祝宴を催したりし、ここで中央ユーラシア騎馬民族の支配者カーンとしての実を示していた。

乾隆帝はジュンガルを討滅すると、この離宮の周囲に、チベットのラサにある主要な寺院を模した建築を建て始めた。まずラサで最も由緒あるサムイェ寺院を模した普寧寺を建設し、1771年には60歳を記念して、ダライ・ラマの宮殿であるポタラ宮を模した「普陀宗乗之廟」を築いた。これは「小ポタラ宮」とも呼ばれる。さらに70歳記念として「須弥福寿之廟」を建設し、ここにダライ・ラマに次ぐチベット仏教第二の活仏であり、阿弥陀如来の化身とされたパンチェン・ラマ6世を招いた。

パンチェン・ラマ6世との会見にあたり、乾隆帝は完全に対等の儀礼を用いた。パンチェン・ラマが乾隆帝に初めて対面した際、跪拝しようとする、自らチベット語で「ラマ(上人)は跪拝されないよう」と伝えたと言われる。順治帝がダライ・ラマ5世と会見した際、儒教の漢人への配慮から、いくぶん目上の態度を取ったのに対し、乾隆帝はパンチェン・ラマを師として敬う儀礼を採り、ラマに叩頭し、戒を受けた。そして、儒教国家で「小中華」を自認する朝鮮使節にもパンチェン・ラマへの拝礼を強要し、使節がこれを拒むと、「朝鮮は礼を知っているが、臣下は礼を知らない」と怒り、これを聞いた朝鮮使節は悔しさに号泣したと伝わる。乾隆帝は改めてパンチェン・ラマより、「文殊菩薩皇帝」「転輪聖王」として祝福された。乾隆帝は漢地よりも、外征で新たに獲得したモンゴル、チベットでの

支配確立を図ったと考えられる。乾隆帝が承德に築いたチベット仏教寺院は 8 件に及び、万里の長城の外、という意味で「外八廟」と呼ばれる(平野、2007、p.192)。

以下に承德市に乾隆帝が築いた「普陀宗乘之廟」の画像を示す。



出所 : Gisling https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Putuo_Zongcheng_Temple.jpg

図 22 承德市に乾隆帝が築いた「普陀宗乘之廟」

また、比較のため、「普陀宗乘之廟」が模したラサ・ポタラ宮の画像を示す。



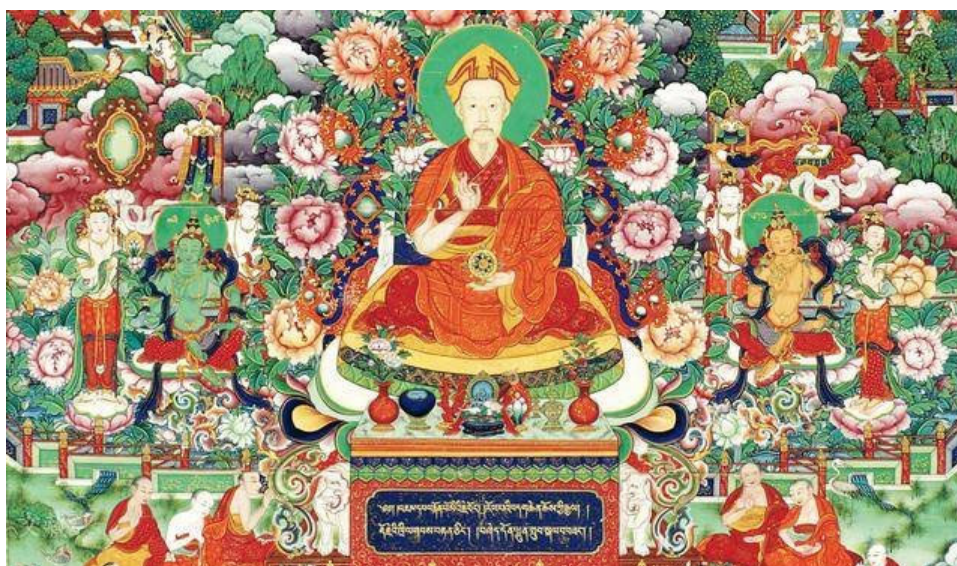
出所 : Gerd Eichmann https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Lhasa-Potala-nachts-16-mit_Springbrunnen-2014-gje.jpg

図 23 「普陀宗乘之廟」が模したラサ・ポタラ宮

ただし、乾隆帝はあくまでもチベット仏教を自らの権威、権力の源泉として扱ったのであり、チベットの地の政治的な支配権までダライ・ラマ、パンチェン・ラマに委ねたわけではなかった。「活仏」は亡くなると、赤子として転生するとされており、遺言などから子供を探し当て、生前の記憶や行動から、生まれ変わりと認定し、後継者とするのであるが、政治的思惑が影響すること恐れ、乾隆帝はこれに介入する。帝は「金瓶くじ引き制度」を考案し、後継者選定に第三者の意志が介在しづらいようにした。中華人民共和国政府はこの乾隆帝の介入をもって、チベットを中国本土が支配する歴史的根拠のひとつとしている(平野、2007、p.203)。

清朝が統治のためチベット仏教を利用したのは乾隆帝が最後である。以後、清朝の衰退とともに、チベット支配も混迷してゆく。

以下に、「文殊菩薩皇帝」としての乾隆帝像を示す。



出所: 故宮博物院 <https://www.dpm.org.cn/collection/religion/231036.html>

図 24 「文殊菩薩皇帝」としての乾隆帝像

第 4 節 チベット仏教と現代の中華世界

本節では、チベット仏教を利用することによって、漠地のほか、モンゴル、チベット、満洲、新疆ウイグルを支配し得た清朝が、辛亥革命によって崩壊した後、現代に至る政治状況について考察する。

第1項 清朝崩壊後のモンゴルとチベット仏教

本項では、1911年の清朝崩壊後、その支配を脱したモンゴル国が、大国に挟まれた厳しい国際情勢に翻弄されながら、チベット仏教をひとつのアイデンティティとして国を保った状況について概観する。

清朝が衰退してゆくと同時に、チベットはネパールのグルカ王国の侵入を受けたが、これを清朝に頼らず自力で退けたことで、清朝の影響力には陰りが生じた。一方、19世紀に入ると、ダライ・ラマの夭折が続き、政権は不安定となった。そこに、インドを植民地化した英国がラサに侵攻し、ダライ・ラマ13世は亡命した。清朝から派遣されていた駐蔵大臣は無力であった。しかしダライ・ラマ13世は英主であり、モンゴル、ロシア、中国を回って影響力を強め、辛亥革命で清朝が倒れると、チベットの君主として帰国した。(石濱2023 p.148)

一方、モンゴルの王侯は、清朝の衰退をみて、モンゴルの活仏ジェブツンダンパ8世を国王として独立させる構想を練っていた。ダライ・ラマ13世は、亡命中モンゴルを訪れたが、モンゴル人はジェブツンダンパ8世を、格上であるダライ・ラマ13世に会わせるのを拒否した。戒律に厳格なダライ・ラマ13世も、愛人を持ちシャンパンを飲酒するジェブツンダンパ8世を非難し、ここに同じチベット仏教を奉じていたモンゴルとチベットは袂を分かつこととなった。

辛亥革命が起き、清朝が倒れると内モンゴルの王侯はジェブツンダンパ8世を国王(ーン)として独立を宣言した。ジェブツンダンパ8世は以後ボグド・ハーンと称される。チベット人である活仏がモンゴル国王となった理由は、モンゴル社会では王侯より活仏の方が権威が高かったことと、モンゴルの初代と第2代活仏がチンギス裔であったことが挙げられる。王妃となったジェブツンダンパ8世の愛人テンジン・ドンドグラムも、チンギス・ハンの末裔であった(石濱、2023、p.170)。

モンゴルはロシア革命の勃発後、その影響を防ごうとした中華民国に占領されるが、ソ連が成立するとその援助で再独立を果たす。ボグド・ハーンは、共産主義政権のもとでの立憲君主制という妥協的な地位で復位したが、1924年に死去すると、共産主義政権はその転生を認めず、社会主義国家のモンゴル人民共和国が成立する。ソ連崩壊後、1992年に社会主義を放棄して「モンゴル国」となり、現在に至る。

モンゴルの国旗には、現在もかつてのモンゴルで使われていたソヨンボ文字によるボグド・ハーンの制定した国章が配されている。現在、チンギス・ハン尊崇を国のアイデンティティにするべく取り組んでいることが、アジアダイナミズム班の今回のフィールドワーク、モンゴル大使館訪問で知ることができたが、国章を制定したチベット仏教の活仏、ボグド・ハーンにもチンギス裔原理が残っているのである。

以下に、モンゴル最後のハーンとなったチベット人ボグド・ハーン(活仏としてはジェブツンダンパ8世)の画像を示す。



出所:パブリックドメイン:マルザン・シャラヴ画

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Sharav_bogd_khan.jpg#/media/File:Sharav_bogd_khan.jpg

図 25 ボグド・ハーン

第 2 項 中華民国の成立とチベット

本項では、清朝に代わって成立した中華民国と、チベットの関係について概観する。

辛亥革命が起これと、前項のようにモンゴルは独立したが、チベットにはまだ清朝軍が駐留しており、チベットゲリラとの市街戦となった。英国の仲介で、清朝軍がインド経由で中国に送還されると、ダライ・ラマ 13 世は帰還し、政権を回復した。1913 年にはモンゴルとチベット間で相互承認条約が締結され、モンゴルはダライ・ラマ 13 世をチベット元首、チベットはジェブツンダンパ 8 世をモンゴル元首と認めた。条約では、両国が協力して仏教を広めること、経済的、政治的に助け合うこと、貿易を盛んにすることなどが定められた(石濱、2023、p.170)。

ダライ・ラマ 13 世は布告を發布し、「中国とチベットの歴史的な関係は『高僧とそれを後援する施主』の関係であり、主従関係ではない」ことを宣言している。これは後に「独立

宣言」とも呼ばれるが、もともとチベットは独立国であったので適切ではなく、中華民国との「断交宣言」であるという見方もある(石濱、2023、p.174)。

これに対し、中華民国は、チベットは元朝以来中国の支配下にあるという主張であった。東チベットの国境について、チベットと中国で紛争が起こった際、調停者の英国は、チベットに対する中華民国の宗主権を認め、外チベットについてはダライ・ラマの自治とすることとした。チベット政府は不満であったが、事実上の独立を維持することとなる。

第3項 亡命ダライ・ラマ政権と中華人民共和国

本項では、チベットを武力で制圧した中華人民共和国と、その支配に対する亡命ダライ・ラマ政権の運動について概観する。

ダライ・ラマ 13 世は 1932 年に薨去し、摂政が置かれ、ダライ・ラマ 14 世となる幼児を探索した。占いやシャーマンのお告げにより、青海省タクツェル(タクトセル)の地に生まれたラモ・トンドゥブという童子が見出された。この童子は、高僧に対し、ダライ・ラマ 13 世が生前呼んでいたのと同じように「セラ・ラマ」と呼びかけ、またダライ・ラマ 13 世の遺品を、他の物品の中から「自分のもの」として選びだしたため、ダライ・ラマ 13 世の転生者、ダライ・ラマ 14 世として認められた。

1950 年 10 月に人民解放軍がチベットに侵攻し、占領した。国連は朝鮮戦争対応に追われ、チベット問題を傍観することになり、チベット政府は中国への併合協議への調印を余儀なくされた。中国政府はチベットへの圧迫を強め、チベット人と漢人との衝突が繰り返されるなど、不穏な情勢となった。1959 年の正月行事で、ダライ・ラマ 14 世は、護衛をつけずくようにとの条件つきで観劇に招待された、それが市民に伝わると、民衆がダライ・ラマを守るべくラサリ(ラサ)離宮に集結し、人民解放軍と衝突する事態となった。ダライ・ラマはこれ以上の流血を避けるためにインドに亡命した。

ダライ・ラマ 14 世はインド北部にチベット亡命政府を樹立し、その長として非暴力でチベットの高度な自治権を得るべく活動し、1989 年にノーベル平和賞を受賞した。ダライ・ラマ 14 世は、チベット自治区は中華人民共和国の一部であることを認めており、独立の考えはないとしている。

また、ダライ・ラマ 14 世は、2013 年に政治上の権限を、選挙で選ばれるシキョン(政治最高指導者)に移譲し、チベット亡命政府(ガンデンポタン)は民主化した。ダライ・ラマ 14 世は、「チベットとチベット人の守護者にして象徴」と位置付けられている(石濱、2023、p.189)。

第5節 結論

本節では、多民族を包含した広大な国家が、その統一を維持するために、宗教を統治イデオロギーとした歴史的な意義と、チベット仏教の特質について考察して結論とした。

宗教は人間の心を救い、人生の支えとなり得るものであるが、一方で、異なる宗教同士、あるいは同じ宗教でも宗派の対立によって、戦争、内戦、テロなど、大惨事を引き起こすこともあるのは、歴史や現代の国際情勢を見ても明らかである。

また宗教は、統治の道具としても利用されてきた。崩壊しかかった古代ローマ帝国は、それまで弾圧していたキリスト教を国教とすることで延命した。西ローマ帝国の滅亡後も、ローマ教皇の権威はヨーロッパの統一感を支え、さらに大航海時代はカトリックの世界への布教という側面を持っていた。

イスラム教は世界宗教の中では遅くに成立したが、瞬く間に大帝国を築いた。モンゴル帝国も西半分はイスラム化し、その後のティムール、ムガル帝国、オスマント帝国もイスラムを統治理念とした国家である。

キリスト教、イスラム教の内部対立の歴史は凄惨である。キリスト教は中世には陰惨な異端弾圧、近世にはカトリックとプロテスタントの血で血を洗う宗教戦争を引き起こした。今も続くロシア・ウクライナ戦争にも、ロシア正教とウクライナ正教の対立という側面も見出される。イスラム教も、スンニ派とシーア派の対立が現代まで続いている。

一方、仏教については、同じ世界宗教でありながら、歴史を見渡してみても、他の宗教との激しい対立や、宗派同士の流血を伴う抗争はあまり見られない。キリスト教、イスラム教と同様、政治権力と強く結びついて発展してきたにもかかわらず、である。日本中世の僧兵同士の抗争や、一向一揆なども、対立というより、政治運動や権力への抵抗という側面が強い。

これまで概観してきたように、史上空前の大帝国を築いたモンゴル帝国、そして、その後継国家として、現在の中華人民共和国の版図を概ね平和裏に統治した清朝は、信教の自由を認めながら、チベット仏教の理念を統治イデオロギーとして採用した。それはチベット仏教そのものが排他的でなく、かつ多くの民衆の心をつかんだからである。

なぜチベット仏教が部族、民族を超えて支持されたのか。それは、チベット仏教の、論理的な学問体系と、神秘的なタントリズムをあわせもつ魅力にひとつの理由があるかもしれないが、仏教そのものの理念に本源的な要因があると考えられる。これについて、寺島学長は『人間と宗教 あるいは日本人の心の基軸』で次のように指摘している。

紀元1世紀頃の世界を見渡すと、この頃「救済の宗教」が動き始めたことがわかる。ユダヤ教から普遍的愛を語るキリスト教が登場したごとく、自己の解脱を目指す「ブッダの宗教」（初期仏教）から他者の救済をも視界に入れた大乘仏教が登場した。人類史的に言えば、定住革命から約8000年を経て人間社会の政治的関係が複雑化し、部族、民族を超えた国家体制たる「帝国の登場」（ローマ帝国、クシャーナ帝

国、古代イランのパルティア帝国など)という局面を迎え、人々の心に部族・民族を超えた「救済」を求める志向が芽生えた。人間の内なる世界に厳しく向き合い、弟子たちを突き放すように「自燈明」(自らを照らせ)と言いつつ入滅したブッダの思想は、大乘、つまり「衆生救済の大きな船」に向かい始めたのだが、それを必要とする「救済を求める心」が存在していたといえる。(寺島、2021、p.80)

チベット仏教は、自らを救済するブッダ由来の原始仏教と、あらたに「衆生救済」を目指して生まれた大乘仏教の要素を合わせ持つことによって、多民族を包含した「帝国」の統治イデオロギーとして機能したのではないか。チベット仏教は、モンゴル帝国が残した統治理念の遺産なのである。

第3章 モンゴル帝国の軍事力・経済政策が後世に与えた影響

本章では、モンゴル帝国が軍事力、経済政策を中心にどのようなユーラシア世界、遊牧国家の歴史を継承し、進化させたかを紐解き、清朝、現代の中国にどのような影響をあたえているのかを示す。

世界の歴史を俯瞰し象徴的な言葉で表現すれば「陸と騎射の時代」、「海と火器の時代」、「地球化の時代」と区分することができる。モンゴル帝国は、ユーラシア世界の様々な歴史を吸収し、巨大なコングロマリットとなった。二段階を経て成長したモンゴル帝国は、それまでの歴史、「陸と騎射の時代」の幅広い国家パターンを継承し、更に時代を進化させ「海と火器の時代」へのバトンを繋ぎ、「地球化の時代」にも影響を与える「世界史の分水嶺」であり、「貯水池」でもあったといえることができる。(杉山、1997、p.356)

ユーラシア大陸の25%を占める中国の歴史は、漢民族と北方遊牧民との対立と融合の歴史でもある。中国王朝の歴史において異民族王朝として五胡十六国、北朝、五代、遼朝、金朝、元朝、清朝がそれにあたり、隋朝、唐朝も遊牧王朝とする見解が強く中国王朝の半分は異民族王朝だった。モンゴル帝国も含めた夷狄、胡族と言われた異民族王朝がどのような中華を創造してきたのかを考察する。

モンゴル帝国が軍事力、経済政策を中心にどのようなユーラシア世界、遊牧国家の歴史を継承し、進化させたかを紐解き、明朝を引き継いだ最後の異民族王朝の清朝が現代の中国、近代史にどのような影響をあたえているのかを考察していく。

第1節 モンゴル帝国がユーラシア世界から吸収した遊牧騎馬国家の歴史

本節では、モンゴル帝国が遊牧国家及び遊牧騎馬軍団の原型となる国家戦略、経済戦略においてどのような政策を継承していったのかを示す。

第1項 遊牧騎馬国家の始まり

本項では、遊牧国家に継承されていくスキタイ、アケメネス朝ペルシャの「帝国支配の原像」を考察する。

銃火器が戦争を根本から変えてしまう近代になるまで、遊牧民集団こそが地上で最良・最強の機動集団であった。紀元前800年頃に遊牧騎馬民が出現し、18世紀半ば頃まで2500年程度は遊牧騎馬軍団の時代であった。遊牧民族は軍事力を持ってオアシス地域を手に入れ「民族」を超えた遊牧民族国家をつくったのである。(杉山、1997、p.25)

遊牧民が中核となる国家、遊牧国家は紀元前 6 世紀頃に黒海の北側に広がるウクライナの大草原に「スキタイ」と呼ばれる集団が記録に現れることに始まる。古代ギリシャの歴史家ヘロドトスの「歴史」によれば紀元前 514 年頃の「ペルシャーギリシャ戦争」の直前にペルシャ帝国の大王ダイオレスが大掛かりに展開した北進作戦の相手として登場するのが遊牧国家のスキタイである。世界史上、アジアとヨーロッパの本式の最初の大会戦は、「スキタイーペルシャ戦役」であった。ペルシャは 70 万を超える兵力を持ってスキタイ遠征に仕掛けたが、騎馬による迅速な展開力と、騎射の威力を存分に活かしたスキタイ軍の戦術、戦法の前に失敗に終わった。この戦術、戦法は、後の遊牧騎馬軍団となる匈奴、突厥、そしてモンゴル帝国などにも引き継がれていくのである。

遊牧国家の原型ともいわれるスキタイ人の国家は以下の住民から構成されていた。

①農耕・通商・航海を行う都市住民

②商業風の農業経営民

③純粋農業民。農村住民

④草原地帯にすむ遊牧諸集団

⑤スキタイを固有名とする遊牧民の支配集団。ともに草原で天幕生活をする。④と⑤にはヒエラルキーがあり、④と⑤の全体で大型の遊牧軍事連合体を形成している。(杉山、1997、p.80、88)

帝国支配の原像と言われるアケメネス朝ペルシャはアーリア系の遊牧民集団だった。アッシリアーメディアーアケメネス朝ペルシャという流れを汲んだ多核国家であった。この世界帝国の建設者ダレイオス一世は壮大な構想をもとに驚くほど広範・多岐な国家・社会の建設事業を繰り広げた。人事運営上の中央管理体制、人種主義の薄い緩やかな連合体としての政治・行政組織、特定の宗教を押し付けることのない寛容な文化・社会施策、帝国全土にわたる緩やかな統一税制、統一量衡、幹線道路と駅伝制の整備、金銀貨幣の铸造と貨幣経済の本格導入、政府主導による通商・交易の活性化等である。

様々な人種、生業をもつ人達が、自分が所属すると意識する最大の政治、社会単位を中心に結成された大型、広域の政治連合体を国家と考える。スキタイ国家がいわゆる遊牧国家の源流をなし、アケメネス朝ペルシャは多様な地域社会を包み込んだ巨大国家のパターンの源流となった。遊牧国家でも、農耕国家であろうとも大型の国家が形成される場合、権力の核として移動性、集団性、機動性、戦闘性にとんだ軍事集団を持たなければ成立しない。また、権力や領域が大型になるために連合体の組織においては人種主義、地域主義を超えたハイブリッドな性格が際立っており、近現代でいう「国家」や「民族」の枠組みには当てはまらないのである。(杉山、1997、p.100－105)

第 2 項 「陸と騎射の時代」の始まり

本項では、東方の遊牧国家の原型であり漢民族に脅威を与えた軍事力を有する匈奴帝国、鮮卑拓跋部及び経済においてモンゴルに影響を与えるウイグル遊牧国家を考察する。

遊牧国家の形成は西方より東方が遅れていた。スキタイ型とアケメネス朝型の二種の国家パターンがゆっくりと東方へ伝わっていった。紀元前 4 世紀後半頃になると状況は急速に変化し、中国周辺においても遊牧民が、騎乗技術、各種の馬具を用い機動性、集団戦術を身に着け軍事化したため「長城」が築造されはじめた。遊牧民の軍事化が、「中国」統一への動きを促した。紀元前 209 年に高原統一を果たした匈奴帝国の冒頓と紀元前 202 年に項羽の楚をしのいで中原を平定し中華を統一した劉邦の漢朝が紀元前 200 年、白登山の戦いにおいて激突することになった。スキタイ国家の遊牧民の戦術を継承した匈奴帝国が勝利し、その後 70 年にわたる匈奴時代を開いた。漢朝は以後歴代の単于の嫁として王家の娘を送り、匈奴帝国に毎年貢物をするようになった。統一遊牧国家と統一農民国家との創業者どうしの戦いとして歴史上まれにみる戦いであった。(杉山、1997、p.108、109)

遊牧国家の全面勝利の世界史的な意味は「遊牧民の時代」の幕開け、「中央ユーラシアの時代」のはじまりでもあった。近代西欧型国家による「ガン・パウダーの時代」と「海洋の時代」がともどもに始まるまでおよそ 2000 年続くことになる。匈奴帝国は白登山の戦い後すぐさま天山以南のタリム盆地にある 26 国ともしるされる小規模のオアシス都市を制圧した。歴史上、経済、商業面において重大なエリアとなっていたオアシス都市にとって、軍事力に富む広域権力の遊牧民の単一主権国家は、政治、経済面のメリットもあり、安全な商圏の出現を意味する。オアシス都市の点と点を結ぶ遊牧民の軍事権力とオアシス民の経済力との相互補完の共生関係が成立する。オアシス地域を国家の中に取り込むことは、遊牧地域に近接する農・工・商業地域を包み込むことになりスキタイとの共通点ともいえる。匈奴帝国の東方の支配はマンチュリア全域であり、西方はタリム盆地・天山方面に至るまでを支配しており、「漢書」地理志の記述にある漢朝による朝鮮経営、西域経営についても匈奴帝国の影響下にあった後に漢朝の進出があったと示唆される。(杉山、1997、p.121－126)

匈奴帝国は、東方の遊牧国家の原型となった。生活様式、遊牧文化、戦闘技術等スキタイ以来の伝統も継承しつつ、整然とした軍事、政治、社会組織についてはプロトタイプとして、モンゴル帝国を含めその後の遊牧国家が継承していった。東の遊牧国家の原型となった匈奴帝国の特徴としては以下の 3 つがあげられる。

(1)十進法による軍事・政治・社会組織につらぬかれていたこと

(2)南面して左・中・右となる三大分割体制をしいていたこと。君主を中央に配置し左右両翼体制と言い換えることもできる。

(漢朝は首都長安を「内地」とし、それ以外を「属領」として従える内外の二重構造となっていた。また、モンゴル高原、トール河上流の狼居胥山、姑えん山の山麓に匈奴帝国以降、突厥、遊牧ウイグル、モンゴル帝国、いずれも本営が構えられた。)

(3)領民・分地をもつ 24 人の「万騎」たちによる連合権力体であること。多元、多民族のハイブリットな国家であったこと。(スキタイ国家から継承)

上記(1)、(2)は匈奴帝国の独創であり、(3)はスキタイからの伝統であった。大元ウルス、ジョチ・ウルス、フレグ・ウルス、チャカダイ・ウルスは勿論、後の遊牧国家の諸国家に踏襲された国家パターンであった。遊牧国家における連合体組織、多人種混合は必然であった。この国家パターンは匈奴帝国の以後 400 年の原像となり、2000 年にも及ぶ遊牧国家の源流となった。秦朝、漢朝と匈奴帝国の国家パターンが互いに交錯しあいながら中華と草原の新しい形をつくっていったのである。(杉山、1997、p.138－140)

前 1 世紀に匈奴帝国が東西 2 つに分かれ、東匈奴は漢朝と同盟を組み、西匈奴をカザフ草原あたりで撃破した。そして東匈奴が今度は南北に分かれた。南匈奴は後漢に臣属し、北匈奴は後漢、南匈奴連合軍に敗れ、西方へ移動し二世紀後半にはシル河下流域に達した。この北匈奴がローマ帝国を解体に追い込むことになったフン族であったのではないかという説がある。匈奴は現在中国語で「シェンヌ」と発音されるが、恐らくかつてはフンに近い発音だったとされる。(杉山、1997、p.172)

八王の乱(290－306 年)の時代に南匈奴の後裔、山西匈奴軍団の小王国の王子だった劉淵は、漢帝となり新たな時代を開いた。劉淵は匈奴帝国、単于王家冒頓の裔であり、漢朝の初代劉邦が宗室の娘を冒頓に嫁がせて以降、漢朝の劉氏の血が匈奴帝国の単于王室に流れることになった。劉淵は匈奴帝国の単于王家の血筋、撃鞬氏であって、漢朝の神聖な血脈である劉氏でもあった。劉淵が他界した後、311 年匈奴族の漢朝は晋朝を撃破し、晋朝という王朝は滅亡した。時代は異民族も漢民族も確固たるへだてなど現実的にはあり得ない状況となったのである。(杉山、1997、p.177)

4 世紀はじめから 5 世紀半ばまでの中華分裂時代を、鮮卑拓跋部が建国した代国は北魏という華北統一政権に成長したのち東魏と西魏に分裂した。その後北斉と北周と名を変え北周が隋朝から唐朝になっていく。代国から唐朝に至る国家を拓跋国家と呼ぶことができる。しかしながら、中国史においては李世民的唐朝こそが真の統一王朝であるという正統史観により「晋書」を作成したため、「五胡十六国」を載記として別枠に一括し、正統王朝の晋朝の付録のように扱った。「これら正史における華夷思想そのものが、初期唐朝の政治姿勢を濃密に反映している」と(杉山、1997、p.208)述べている。3 世紀以降の東アジアの歴史においては華夷の別に関係なく、草原と中華の枠を超えて再編と統合のうねりが繰り返され、テュルク・モンゴル族「拓跋国家」による支配が約 400 年間にわたり続いたことになる。

5 世紀初頭草原統一を果たした柔然国家の社崙が丘豆伐可汗(きゅうとうばつかかん)と名乗った。テュルク・モンゴル系をはじめとする中央ユーラシア、東方イスラムにおいても君主・王侯・首長等を表す言葉として使われ始めた初出とされる。

8 世紀初頭下降線に入った唐朝に対しウイグル遊牧国家やアッパーズ朝が中央アジアに手を伸ばした。ウイグルは事実上庇護下に置いた唐朝に対し銀を中心とする巨額経済支援を受ける和親契約を結んだ。唐朝は拓跋国家の伝統となった租庸調を根幹とする税体制から両税制による税收方法に変えざるを得なかった。これにより歴代の中華王朝において塩の専売が中央財政の根幹を占めるようになった。ウイグルは突厥以来テュルク国家と関係を深めるソグド商業勢力を有して唐朝を庇護国とした。唐朝において「絹

馬貿易」を活性化させ軍事力と経済力を兼ね備えた遊牧国家となった。また、幕営地に首都「オルド・バリク」と呼ばれる城郭都市を築いた。後にモンゴル帝国も同様に「オルド・バリク」付近に首都カラ・コルムを造営した。共に「人造都市、草原のメトロポリス」であり、支配者が住むためだけではなく、政権を保持するために集められた官僚、商人、工匠が住み、各種の物資、食料、兵器が備蓄された都市であった。(杉山、1997、p.253)

10 世紀半ばごろより草原はキタイ帝国となり、ウイグル同様、宋朝に朝貢させ巨額の銀・絹の歳幣により政府、国家の全体が潤った。キタイ帝国は、遊牧社会に農耕社会をつつみこみ「牧農複合国家」の構成となった。二重、三重の複合国家となった国内を、遊牧民と定住民の二体系に区分し国家、行政、社会体制を構築した。遊牧国家の枠組みに農耕国家のシステムも取り込みそれまでにない強力さと持続力を手に入れた。北宋から贈られた銀と絹は国際交易に転用され、首都の上京臨潢府には国際通商民に変じたウイグル商人たちの居住地を造営するほどになった。(杉山、1997、p.273－276)

12 世紀には東に女真の金朝、中央アジアにキタイの西遼、その中間に西夏、江南に南宋、西アジアに分立するセルジューク朝の諸国家の版図となった。



出所：横浜中華街「関帝廟」より著者撮影

図 26 横浜中華街「関帝廟」

第 2 節 モンゴル帝国が歴代の遊牧国家から継承し進化させた 軍事力、経済政策

本節では、ユーラシア世界の軍事力、経済政策を継承したモンゴル帝国がそれをさらに進化させ「世界の世界化」と「中国の巨大化」に影響を与えたことを示す。ユーラシア世

界史の観点においてモンゴル時代がひとつの帰着点であり、次の「地球世界史」の結節点になるものであった。

モンゴル帝国は、後にモンゴル高原と呼ばれることになる高原に遊牧民の政治連合体「イェケ・モンゴル・ウルス」、「大モンゴル国」が出現したことから始まった。

1206年に正式な即位式が行われ「チンギス・ハン」と称した指導者テムジン、第5代モンゴル皇帝となった「クビライ」により1260年を境に二段階で成長した巨大帝国となった。前期は、「軍事拡大の時代」。モンゴル高原を政治基地として、軍事中心に帝国運営され、拡大を続けた時期であった。領域は、東は日本海の沿岸から西はドナウ河口、アナトリア、東地中海沿岸までとなり「陸の帝国」として人類史上最大となった。

後期は、「経済・経営の時代」。クビライの国家構想の着眼はモンゴル伝統の「草原の軍事力」にユーラシア世界最大の中華経済力を合体させ、「ムスリムの商業力」を全面活用した経済支配という新方式であった。つまり、クビライが目指した国家戦略は軍事超大国であって経済超大国であり、かつ超大型の通商立国ということになり、現代のアメリカや中国に例えられる。多元複合のモンゴルは「海の帝国」の性格さえ持ち合わせ、「陸海の帝国」、「世界帝国」というべき超巨大帝国となったのである。(杉山、1997、p.314)

第1項 軍事拡大の時代「陸の帝国」

本項では、モンゴル帝国が世界最強の遊牧騎馬軍団を如何に形成し領土を拡大していったかを示す。

1206年「大モンゴル国」と命名した時に人種や民族の塊はなく、寄せ集め集団であったことがモンゴル拡大の鍵となった。チンギスは「大モンゴル国」を樹立したのち、金朝侵攻作戦後、西へ向かいホラズム・シャー王国、西夏打倒までの治世21年間の大半を対外遠征に費やした。この21年間によりモンゴルは組織化された強大な戦力と強固な「共同体」意識に裏打ちされた遊牧民国家へと成長した。モンゴルはユーラシアにおける草原の軍事力を史上最も広域かつ有効に組織化したのである。人種差別はほとんど存在せず、「イル(仲間)を増やす戦略」、仲間づくりがうまくいった。モンゴルは戦わない軍隊であり、戦争は彼らにとって他社を接收・吸収するキャンペーンかデモンストレーションに近かった。モンゴルに加わることで最低限の安全保障は得られた。「モンゴル」への所属意識を共通項としてユーラシア・サイズに広がったのである。「『モンゴルとは何か』という問いかけは、わたしたちに、では『人間の塊とは一体何か』と逆に問い直してるところがある。」(杉山、1997、p.311)は正に現在の世界情勢に突き刺さる問いのように感じられる。

領域の拡大につれて仲間を増やし、その仲間の中でも特に有力な仲間となったのがキタイ族とテュルク系勢力だった。

遊牧キタイ族は300年前に帝国を形成した先輩であり、金朝治下においても中間勢力として存在し、金朝の軍事力の最精鋭の機動部隊であった。軍事、政治の両面でモンゴルの頭脳とも教師ともなる存在であった。モンゴル支配の特徴として言及される駅伝制

は遼と西遼という、時代を前後する東西二つのキタイ帝国において全施行されていたものであった。

テュルク系勢力は仏教、通商王国の「天山ウイグル王国」、ムスリム王国の「天山カルルク王国」の二種であった。天山ウイグルは9世紀半ばに解体したウイグル遊牧国家の系譜をひき牧農複合型の通商国家を形成していた。民衆はかつて麴氏高昌国がオアシス文化国家の花を咲かせた土壌にあった。人種、言語、文化何れをとってもハイブリットな性格が際立っており、中央ユーラシアの諸要素がこの小国に凝縮しており、優秀な人材が集まった情報立国であった。1209年には大モンゴル国に近づき、チンギス家の娘を貰って駙馬(娘婿)になりモンゴル体制下で別格の「準王家」の地位を不動のものにした。モンゴル統治の教師といわれ、モンゴル王家の各地において師傅、参謀、行政官、財務官、企業家等の要職について活躍した。(杉山、1997、p.306－309)

モンゴル帝国は、南宋を接收して中国全土を版図に収めることで、モンゴル帝国の拡大の歴史の中で事実上初めて海への進出を果たしたのである。また、陸海をむすぶ物流ターミナルとして巨大新都市の大都を建設した。南北中国が海路で結ばれたのはモンゴル時代からである。現在の中国の巨大都市、北京、天津、上海が歴史上に登場するのはクビライの新国家建設事業が背景となっている。大都には莫大な開削費と維持費をかけ都市内部に港を造営したが、その理由は、陸上輸送より1/10のコストに抑えられる水上・海上輸送を増大させ、大都を中心にユーラシアの東西の物流を活性化させるためであった。明朝、清朝の時代には都市内港を維持する努力はしなかった。クビライ国家の着眼は、モンゴルの草原の軍事力と、ユーラシア最大の中華の経済力を合体させ、ムスリムの商業力を全面活用した経済支配という新方式であった。ユーラシア世界がモンゴル帝国を軸に平和共存と経済重視の時代へと向かった。

1267年、クビライは南宋への侵攻作戦を開始し、足掛け5年に及ぶ長期の滞在により長大な包囲網を設け、1274年に全面侵攻し圧勝、1276年に南宋国は全面降伏した。クビライの狙いは、南宋と江南社会のシステムを無傷のまま手に入れる事だった。江南エリアは8、9世紀頃からアラブ・イランの商船が頻繁に来航していた。その長い歴史の中で培われた江南エリアの海上艦艇は勿論、造船力、技術工学、航海技術等、海洋にかかわる知識・情報を引き継ぎ続けた。

人類史上商業にかかわる様々なシステムや知識・慣行、手形・証券、銀行等金融業、資本の運用、経営に至るまで、東地中海地域が圧倒的に進んでいた。8世紀半ばより、広域イスラム権力、アッバース朝が東方へ拡大、進出した。インド洋をおし渡るダウ船と航海技術の開発によりムスリム海商が西から東へ到来した。中東と中国がインド洋を通じてダイレクトにつながり、ユーラシアを東西に結ぶ洋上は500年に亘りムスリムたちの海となっていた。モンゴル帝国は海上進出に関して南宋国の後継国家であったが、方針が違った。海洋商業に関して南宋国は民間依存型であったが、クビライ政権は政府主導で組織化した。モンゴル帝国としては中東の東半をフレグ・ウルスが支配しており、大元ウルスを中心に海上進出と東西海洋貿易の掌握がなされた。人類史上初めて内陸と海洋が真にシステムとしてリンクした時代の幕開けであった。(杉山、1997、p.313－319)

第2項 経済・経営の時代「陸海の帝国」

本項では、クビライ時代以降の大元ウルスとモンゴル領を中心に世界規模で資本主義のもとになるいくつかの経済様相が国家レベル、民間レベルでも広く現れたことを示す。

クビライは、新国家方式により大元ウルスを中核として、ユーラシアと北アフリカをも巻き込んだ超広域の流通と国際通商を国家主導により創出しようとした。ハード面の基礎としては大都を中心とする陸・水・海にわたる巨大なユーラシア循環交通・運輸網の整備・拡大であった。軍事、政治面におけるボーダレスな状況は、経済、通商面を更に世界規模に拡大させた。モンゴルの支配を背景にしながら大都を軸にムスリム商業勢力(ムスリム≡ゾクド商人、ウイグル商人)が陸海を通じて国家政策のもとで銀をたずさえ世界を駆け巡った。また、モンゴル国家行政においてムスリム商業勢力は経営コンサルタント業から行政プロダクション業を担った。

モンゴル時代以前よりイスラム社会、テュルク系ウイグル社会にあった「オルトク」という営利組織体、現代でいう「会社」、「企業」はモンゴルの拡大と共に急速に成長していった。モンゴルの軍事力と公権力をバックにオルトク達はユーラシアの各地に出向いて各種の経済行為を行った。

クビライ政権の経済戦略の担い手であるオルトクが銀で交易したことにより、ユーラシアから北アフリカ全域が銀という共通価値で結ばれることになった。共通の交換手段としての歴史は金と銀が地域別に使用されていた。金本位制としてはローマ帝国からビザンティン帝国で使用され、銀本位制という意味では、古代ペルシャに端を発しイラン文明圏であったが、両方を受け継いだイスラム中東世界では銀を主としつつも金も使用した。インド世界では金・銀両方の伝統をもつ。中華では銅。超広域巨大帝国となったモンゴルにとって全域に共通する価値基準が必要だった。モンゴルと共生関係にある国際商業勢力のウイグルとムスリムが銀使用だったため、結果として銀が国際通貨となった。13世紀末期には、銀はどこでも通用する国際通貨となった。16世紀以降南北アメリカ大陸から大量の銀が到来し世界に価格革命と商業革命を引き起こし、グローバルレベルで資本主義経済、近現代への道が開かれていく。明代中後期、16世紀以降スペイン銀がやってきた時に銀経済に順応できた要因がここにある。モンゴルによる「世界の世界化」の始まりという現象の1つとして銀の国際通貨化がある。(杉山、1997、p.327-335)

クビライの経済政策、財務運営の特徴として「重商主義に傾注していたこと」と「通貨税の撤廃と大型間接税の施行」がある。

「重商主義」に関しては中央政府の歳入の80%が塩引(塩の引換券の売却代金)、15%前後がタムガ税(商税)であった。農産物等の直接税方式は全くとらず地方における財源に振り当てられた。塩の専売は唐朝の時代から始まったが、歴代の王朝政府は不当な高値で販売しその利潤を得ていた。塩引自体については過去の王朝の歴史を引き継いだものであったが、クビライは塩引の購入には銀との引き換えとした。大元ウルスの

塩引は、塩の現物を支給するだけでなく、銀という国際価値体系ともリンクさせた。塩引は銀の補助紙幣となった。経済がユーラシアと北アフリカの全域にわたって活性化することにより、モンゴル政府は銀不足に陥っていたため、銀不足を補うためのシステムとして有益であった。交鈔という紙幣もあったが、ジュシェン金朝、南宋でも活用しており、基本塩引同様、銀に換算されて活用された。(杉山、1997、p.339－344)

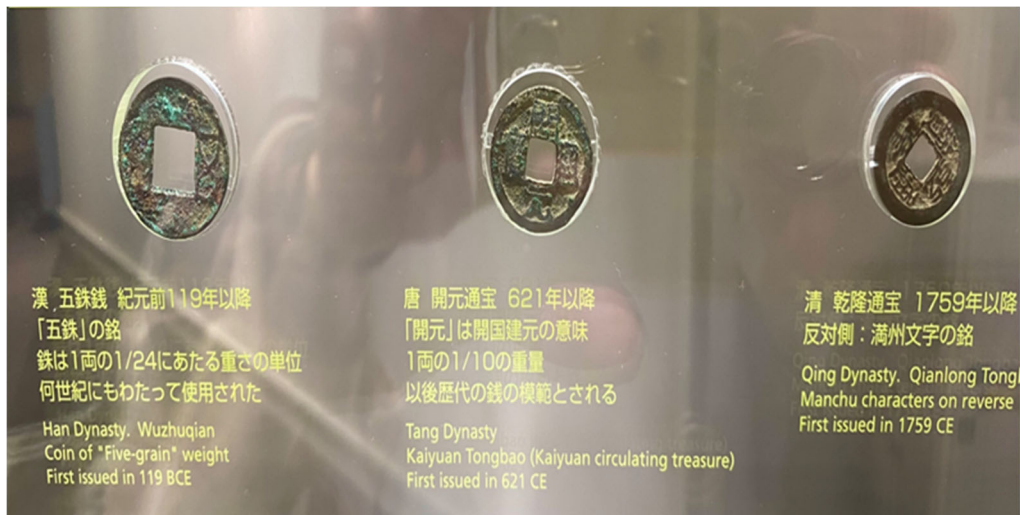
「通貨税の撤廃、大型間接税の施行」に関しては遠隔地交易と大商人の保護、育成策を重視し、従来、中華地域、ユーラシアの大半の地域にあった通貨税を撤廃し、売上税、所謂消費税 3%程度の商税を払う制度にした。遠隔地商人、オルトクにモンゴル帝室、貴族たちが出資、巨大株主となり、営利目的を遂げると利潤を還元した。モンゴルの武力を盾に交通運輸網をフル活用し、ユーラシア循環交通システムの心臓部に当たる大都に物資を送り込んだ。銀を媒介にした経済と政治が組み合わされた壮大な人と物のサーキュレーションとなっていた。

国家や政権が国家目的として経済利潤、通商による利潤の獲得に動いたこと、経済人という人々が歴史上に登場するのは 13 世紀までにはなかったことである。国家レベル、民間レベルにおいても資本主義のもととなる経済様相が世界規模で登場する転機となった。(杉山、1997、p.346－348)

アジアにおける「海と火器の時代」のはじまりは 19 世紀の後半であり、それまではアジア各国の遊牧騎馬軍団が支配する「陸と騎射の時代」であった。産業革命により近代化した西欧が、強力な火器と海軍力を軍事化しアジア諸国を中心に地球上の各地で植民地化と自国の権益拡大を目指し戦争を繰り返した時代が「海と火器の時代」と言える。19 世紀から 20 世紀は「欧米の世紀」であり「戦争の世紀」であった。第二次大戦以降アメリカ合衆国が軍事力と経済力で世界を支配する。

15 世紀末から 16 世紀に「陸と騎射の時代」から西欧の拡大による世界分割「海と火器の時代」、アメリカによる世界支配にいたる「地球化への時代」への転換期はあり、シンボリックな出来事としてはコロンブスから始まる大航海時代と言えるかもしれない。

近代になる前にユーラシアに生起した諸国家においては、支配者は遊牧国家もしくは移動型、被支配者は農耕型または定住型というパターンが多かった。「陸と騎射の時代」という意味では遊牧騎馬国家スキタイ以降のユーラシアの様々な国家パターンの歴史をモンゴルは取り込み、直接的には「ポスト・モンゴル時代」に影響を残している。また、中東と中華を結ぶ海の往来を活性化させ、海の時代を、ムスリム商人、ウイグル商人たちと発展させた資本主義のもととなる経済の仕組みをヨーロッパに継承させた。モンゴル帝国が支配したユーラシアの各地、それ以外の地域にも時代を超え、現在の民族、国家の枠を超えて「遺産」を残している。(杉山、1997、p.361－369)



出所:横浜ユーラシア文化館より著者撮影

図 27 漢、唐、清の貨幣

第 3 節 異民族国家モンゴル帝国の後継、清朝の支配が現代の中国に与えた影響

本節では、内陸アジアの満州人の帝国・清朝が漢人にとっては外国でしかなかったモンゴル、新疆、チベットも従えたことが近代中国の様々な矛盾を生じさせ、遺産を残したことを示す。

清朝末の政治家、ジャーナリストである梁啓超が「中国史序論」という文章を亡命中の日本で 1902 年に著した。日本の「東洋史」研究が二十四史の枠組みに現れた歴代の帝国の興亡を中心に記載していた事を範にし、東洋史にある「中国」という名称にかぶせて「中国史」と呼ぶことになった。当時清朝が支配していた範囲における各王朝の歴史を「中国史」という一貫した歴史軸で見ることになった。日本の神武天皇に習って、漢人の社会と文化を最初に創始した伝説上の帝王である「黄帝」が即位した年を「黄帝紀元」とし、中国 5000 年の歴史がスタートしたことになる。日本人の中国、東洋史が近代的な中国の歴史認識、中国ナショナリズムを創造した。朝鮮半島の人々も同時期に黄帝紀元に習って伝説の王、檀君にちなんで「檀紀(紀元前 2333 年)」を創出した。満州国をつくった日本は年号として「チンギスハーン紀元(成紀)」とした。(平野、2007、p.18、20、24、37、39)

華夷思想は、人間を「華」と「夷」に二種類に分類し、黄河、長江流域に在住していた「華」の側の文明、文化を「正しい」とし、それを持たない「夷」を排除するもしくは「華」に転換させる働きかけ＝教化を正当化し、その立場から秩序を構想する。古代文明以来地球上の様々な地域にあった「人間は本質的に不平等である」という考え方であった。伝統的な東アジアの地域秩序を規定した華夷思想では、1648 年ウェストファリア条約以降の近代国際秩序「すべての独立国は国力、規模の差はあっても独立国という意味で対等で

ある」という原則に相容れないものになっていた。華夷思想とは文化相対主義や多文化主義とはおよそ対極に位置するものである。現在の中華人民共和国には政府が認めた56の民族がある「統一多民族国家」であり、個々の民族の維持、発展をしてもらう立場をとりながらも、華夷の「漢化」思想とは矛盾がある。(平野、2007、p.70－72、77)

第1項 清朝の領土拡大が後世に与えた影響

本項では、異民族王朝である清朝が華夷思想と向き合い、どのように領地を拡大し支配をしていったのかを示す。

宋朝が完成させた科举制度は儒学知識とその応用力を試すことにより広く一般的に官吏を登用しようとするものであった。科举制度は元朝、明朝、清朝においても継続的に採用され、近現代の中国においても様々な独裁や縁故主義の誘惑と戦いながら実現した官吏登用制度と同様の考え方で実施している。科举制度にて学ぶべき儒学とは、「正しく、公共的な」価値であり、科举制度により士大夫という社会階層を固定化すること、「華」と「夷」という華夷思想とも矛盾している。(平野、2007、p.82－85)

清朝は圧倒的な大国である明朝の圧迫を退けるためにモンゴルと朝鮮を同盟者としての関係を求めるようになった。朝鮮としては豊臣秀吉の朝鮮出兵をきっかけに明朝への忠誠を新たにただけでなく、満州人をオランケとした華夷思想的な発想により対明同盟要求を拒否した。朝鮮は明朝への恩恵を感じながら朝貢を続け、儒学と文明を正しく発展させればよいのであり、儒学文明の漢人に対して恩返しするとし、清朝との同盟者としての厚遇を受ける機会を逃してしまった。一方で、近代において朝鮮は清朝との関係が朝貢国という立場になったがゆえに、朝鮮半島をめぐる日清対立の過程においては、自主国扱いされ植民地化の屈辱を経つつも独立を得ることに繋がる。これに対して清朝の建国時点での同盟者になった南モンゴル、清朝の「藩部」として組み込まれ、同盟者としての厚遇を受けることになるチベット、トルコ系ムスリムは独立の機会を逃し中国ナショナリズムの一部とされることになる。また、現代の偉大な漢民族を掲げる中国と韓国の間には歴史的認識問題による領土問題を抱えている。高句麗王朝を「中国の地方王朝であった」と位置づけ、白頭山＝長白山及び周辺の帰属をめぐる対立が現代の中国と韓国の間に残っている。(平野、2007、p.43、116、117)

清朝の権力政治、経済の重心という点から眺めると北京に権力を集中させ、モンゴルやチベットと清朝との関係を中心とした内陸アジアをめぐる問題を重要視していたと見ることができる。地政学的にみれば大元ウルス同様、漢民族社会が東アジアの「核」から内陸アジアの「周辺」へと移行したことを意味している。「中華」の価値を強調する明と清が支配した領域と同じ近代の中国では統治している領域に違いがあり、チベット、モンゴル、新疆、台湾も含めた国家統治に対し清がどのような論理を掲げ統一することができたのかを近代の中国は学ぶ必要がある。内陸アジアの人々が漢人と同じ一人の皇帝のもとに結びつけられたことは「中華世界」、「中華帝国」の力学とはほぼ関係がない。仏教を信仰する満州人が、モンゴル人の騎馬兵力を同盟者とするためにチベット仏教の保護者

となったことに要因がある。また、沿岸部の貧しい漢人は異民族支配から逃れ、かつ商業上の利益を求めて南洋へ活発に出かけ、現地社会と華僑・華人社会の複合社会とも言える今日の東南アジアの社会を形成していったのである。華僑・華人には、かつて文明の中心である黄河流域・中原辺りで住んでいたものの、大元ウルスの時代より戦乱に追われ、南下した「客家」の出身者がいた。客家には自分たちこそ漢人の正しい末裔であり、中華の本流との自負があった。後の太平天国事件の首謀者、教祖の洪秀全は客家出身者であった。(平野、2007、p.127、130、244)

モンゴル帝国時代に大元ウルスがチベット仏教を保護し、その後 16 世紀中頃にはアルタン・ハーンがチベット仏教に関心を注いだ。ダライラマとはモンゴル語で「大海の如き上人」という意味であり、アルタンから贈られた言葉である。ダライラマ四世はアルタン・ハーンの家系に連なるモンゴル人の子供から選ばれた。1637 年にグシ・ハーンが青海一帯を支配し、今日のチベット自治区に相当する地域を征服した。その征服地をダライラマに寄進し、ダライラマ五世が政府組織と独自の軍隊を整えていった。1959 年中国共産党によって崩壊させられるまで存続した。ホンタイジの遺志を継いで順治帝がダライラマ五世を北京に招き会談し、ダライラマとチベット仏教の保護者として認められた。よって、モンゴルの王公たちが満州人の皇帝をモンゴル共同のハーン「ボクド・セツェン・ハーン(神武英明皇帝)」として認めることになる。1735 年に即位した乾隆帝は、最大の脅威、ライバルであったジュンガルを 1759 年までに完全に打倒し、ジュンガル及びその支配下にあったタリム盆地、トルコイスラム教徒の地を「新疆」と命名し、版図に組み込んだ。清朝はチベット仏教の保護の座を目指し軍事力を用い、妥協を重ねてきた。信仰と政治の両面で圧倒的な力を持つ者は「転輪聖王」と呼ばれ、古代インドの「アショカ王」同様、歴代の清朝の皇帝もチベット人、モンゴル人からも転輪聖王として一目置かれることになる。一方で、清朝八期軍人駐蔵大臣の監督のもと地方政権となったことは、今日のチベット亡命政府から見た場合には否定的な歴史となる。「チベット亡命政府においては駐蔵大臣が清朝の国家主権を代表していた」と現代の中国政府に清朝の統治の正当性を言及する理由となったからである。(平野、2007、p.138、145－147)

乾隆帝が仏教の保護者・転輪聖王として内陸アジアのチベット仏教に受け入れられた時代、1792 年に「御製喇嘛説」という文章を著し、チベット仏教のあり方に対して徹底的な制約を加えた。パンチェンラマ六世の死による遺産相続に際し、弟のシャマルパ活仏はその遺産を受け継ぐためにグルカ王朝と結託した。シャマルパ活仏はグルカ王朝のチベット侵入に対する戦乱において占いを操作し混乱を招いた。また、モンゴルの最有力活仏の後継者選びにおいても占い操作があり、乾隆帝はチベット仏教の保護者だから故に宗教本来の目的から離れた行動に対し規制した。チベット仏教の様々な重要な事柄の決定に際し、予言や占いが活用されていた。乾隆帝は仏教の本来の在り方を守るために「仏の意思」という名の偶然性を介在させる必要性を感じ、「金瓶くじ引き制度」というくじびきを導入し、チベット仏教側も受け入れた。今日の中国政府がチベットの独立を阻止する理由として中華を支配した乾隆帝がチベットに対して国家主権を行使した歴史的な事例として「金瓶くじ引き制度」を重視している。1989 年にパンチェンラマ十世の

死去に際し、ダライラマ 14 世が中国政府のくじ引きよりも前に後継者を選出したことが問題となり、現代においても尚、中国とチベット亡命政府との間では鋭い対立は続いている。(平野、2007、p.200—206)

清朝は皇帝権力が特定の文化的価値を押し付けず、個別の宗教に則った社会の在り方を尊重する態度に徹しようとしたことが様々な民族からの服従と尊敬を得ることに繋がり、モンゴル帝国と同様、広大な地域を支配できた。清朝の統治の原則は、皇帝の支配を受け入れれば、既存の文化や社会の安定を保証するという実力主義であった。清朝の皇帝たちがチベット仏教を保護することを漢文で説明するときに儒学經典の一つ「易経」の中の「神道を持って教を設ける」を繰り返し用いている。個別の社会の在り方を尊重するという意味で漢民族及びモンゴル、チベット人に対しても向けられている言葉となっている。近現代の中国ナショナリストは「中華世界の主としての皇帝が、おくれた辺境の民を従順させるために、神秘的な宗教の力を借りて彼らを教化しようとしたのだ」(平野、2007、p.151)と解釈し、モンゴル、チベットを中国の一部として歴史的に実証するための言葉として位置付けている。しかしながら、今日でも未だに「中華」という概念がモンゴル語、チベット語、トルコ語東部方言には翻訳されていないことが、モンゴル人、チベット人を漢化させるために使用された言葉ではないことを物語っている。(平野、2007、p.151, 152, 158)

雍正帝は完全な「中国風の文化人」であり、完全な「チベット仏教文化人」であろうとした人物であった。雍正帝の天下支配の目的は、権力を保ちながら秩序のある社会をつくることにあった。いかなる社会や文化に属する人であろうと実行力に長けて課題解決できる人こそが真の支配者であり、権力を握る正統性を持つ民族であると考えていた。儒学思想や仏教思想、政治思想、宗教思想も真の権力者によって正統性を持って適切に広められ実践され、始めて意味を持つという思想を持っていた。(平野、2007、p.159—166)

雍正帝は曾静が唱えた「知新録」(注)に対し、「大義覺迷録」により朱子学の根本的な考え方である「天下一家」、「万物一源」に対し、華夷思想の中華と夷狄を区別する考えは自己矛盾であるとの批判を浴びせ、曾静の「知新録」を論破した。曾静は結果的には「大義覺迷録」を流布する人物となった。皇帝の実力と公正な支配に服して平和を享受する人々は全て臣民として平等であり、一君万民であることを強調するために「中外一体」という表現が生まれたと考えられる。漢人中心の土地＝中華十八省(中国)と満州人の故地や内陸アジアの藩部(外国)が、はっきり区分され、一帯の版図として強く自覚され始めた。近現代の中国の版図は華夷思想からではなく、華夷思想を否定した「大義覺迷録」により生まれるきっかけをつくることになった。(平野、2007、p.166-172, 174)

漢人の知的世界においてはただ「天下」のみがあり、「中国」の範囲は「中華」の文明の広がり方によって支配領域が決まるという思想となっていた。権力の区切り目、国境線のような一定の範囲を「中国」と呼ぶ発想がなかった。清による儒学者の民族差別を徹底的に封じ込めようとした言論統制の中から生まれた経世儒学により、チベットやモンゴルといった外国であったはずの清の藩部も含めた版図を受け入れる土壌が形成された。清の皇帝は、実行力と現実主義により、伝統的な「中華」が超えることができなかった漢人と

モンゴル高原の壁、「万里の長城」を超え、中外一体とした世界をつくりあげた。漢人の経世儒学者が政論の主流となり、清の支配領域の版図が中国としての版図に決定づけられていくのである。

一方で、19世紀初頭までにはグルカの侵入、白蓮教の乱等が勃発し、モンゴル遊牧騎馬軍団の漢化が進んだことにより軍事力の脆弱ぶりが露呈され、藩部の支配の根幹が揺らぎ始めていた。まさに大元ウルスの支配が約100年で終焉を迎えた頃、大都での生活が長くなるにつれ華美になり、モンゴル騎馬民族本来の資質を失ったことにも共通する状況にあった。

1820年代には新疆において「ジハンギールの乱」と呼ばれるムスリムによる反乱が発生した。実現には至らなかったが、天山山脈付近に漢人を移住させ、耕しながら武装して新疆を守るという屯田構想が述べられている。この構想は中華人民共和国の成立後、「新疆生産建設兵団」として実践された。同時代の日本にも輸入され、屯田兵として北海道開拓において北米開拓の経験と合わせ実践されることになった。（平野、2007、p.207－209、214、217、224）

注：天下を支配する皇帝の権力は漢人へと正しく引き継がれるべきであり、皇帝となりうる真の間人は陰陽が合致して正しさと徳に満ち溢れた漢人の「中土」、「中国」にしか生まれない。夷狄は禽獣と決めつけ、漢人の優越を強調した思想。

第2項 「海と火器の時代」における清朝の遺産

本項では、産業革命により近代化した西洋の国際秩序と軍事力に圧倒された清朝が、それに逸早く順応した日本との関係の中で、現代の中国にどのような遺産を残したのかを考察していく。

清朝が乾隆帝の遺産である現在の中国の版図を意識し守るべきものとしたのは、アヘン戦争から太平天国の時代においてアヘン戦争という外圧に刺激を受け、儒学的な社会をつくらうとする内発的な動きが高まったことにある。そして中国の近代化はアロー号戦争で北京が直接の戦場となり、その結果対等な外交関係として北京条約を締結させられたことによって近代東アジア国際関係が実質的に始まったと考える。そして1880年以降、近代国際法の論理によって清の国益を主張していくようになる。（平野、2007、p.262、263）

英国がアヘン戦争を仕掛けた要因にはアメリカ独立戦争の戦費を調達する目的があった。清朝との貿易において茶の輸入額が急増し、世界通貨であった銀が一気に流出し、それを回収する必要があった。植民地であったインドに対しては英国本土から製品の輸出が急増していたため、インドが銀不足となり清に対するアヘン販売に力を入れざるを得ない状況となった事にある。この戦争における清の軍事力は騎馬兵力中心であり、近

代兵器で固めた西洋の軍事力には全く敵わなかった。騎馬兵力が役に立たないことが、満州・モンゴル人の存在感を薄くすることになった。(平野、2007、p.239－241)

近代国際秩序である「すべての独立国は国力、規模の差はあっても独立国という意味で対等である」という主権国家システムにおいて曖昧な政治的立場にあった朝鮮、沖縄、台湾の所属を問題として日清戦争がはじまる。これに加え条約港を中心に形成された利益圏を確保しようとする欧米諸国との東シナ海を取り巻く戦いが始まる。(平野、2007、p.261)

1875年のマーガリー事件を契機に英国と清朝との間に芝罘協定を締結した。その協定の中に英国人が北京からチベットを経由でインドへと調査、通商を行うことを認めていた。これを受け清はダライラマ政権に対し英国の遊歴や通商を認めるよう要求を繰り返した。チベットは英国が隣国ネパール、ブータンというチベット仏教徒が多くいる地域で紛争を繰り返していたため英国を「仏教の危機」と見なしていた。そのため、ダライラマ政権は清朝の要求に抵抗を示し続け、清とチベットの溝が深まることになった。乾隆帝までの仏教保護の立場から19世紀の政治変動を通じて経世儒学の立場から西洋を評価し、チベット仏教には全く共感なくなり、同じ版図とは言えない関係になってしまった。これが現代の中国におけるチベット問題の根源となった。(平野、2007、p.278、281、282)

1871年に宮古島の船が遭難して台湾に流れ着き、東海岸に住むマレー系の原住民に琉球人が殺害された。これに対し日本は清朝が台湾に官僚を派遣していたため清朝に抗議したところ、台湾は未開の地であり、教化の及ばない化外の地であるため一切関知しないとの対応だった。この清朝の対応に際し、日本は近代国際法が定める無主の地に対し懲罰を行うという出兵理由を掲げ台湾出兵が実行されたのである。清朝の外交を担当していた李鴻章がその対応の挽回を図ったが、結果としては日本が琉球人に代わって復讐したことを認めてしまうことになり、日本は「琉球人＝日本人、琉球＝日本領」という図式を表明させることに成功した。1879年になると琉球藩を廃止して沖縄県を設置した。(平野 2007、p.284,291－293)

日本は欧米列強のみならず清朝までもが巨大な影響を日本周辺で与えることを阻止するために清朝と朝貢関係にあった自主的な国家はすべて独立国と位置付け、日本の影響力の確保、拡大を図った。日本は1871年の日清修好条規、1876年の日朝修好条規により日本、清朝、朝鮮は自主の国であり、対等であるという構図をつくった。清朝は朝鮮を属国とするべく外交上の自主権を持たない清朝の属国とし、国際的地位の格下げを図っていた。日本は甲午農民戦争に際し、朝鮮・閔氏政権が清軍の出兵を要請したことにより清朝との天津条約を根拠として日本は朝鮮に出兵することになった。また、朝鮮政府が清朝に依存することが、朝鮮の自主独立を定めた日朝修好条規違反であるという論理を組み立てた。それは日本が朝鮮の自主独立を確保するために清朝を撤退させるということの正当性を意味したのであった。1894年日本が軍隊を朝鮮に派遣し、閔氏政権を倒し大院君を擁立して甲午改革を開始した。結果として清朝と朝鮮の朝貢関係の存在を利用し、日本は日清戦争に突入した。清朝が壊滅的な敗北となり、世界帝国と

しての清朝の対面は完全に崩壊した。そして 1895 年に締結された下関条約では、二億両の賠償金、台湾・澎湖島・遼東半島の割譲、通商権益の拡大等が盛り込まれた内容となり、中国、日本、朝鮮の近代の歴史に大きな影響を残す結果になった。琉球、朝鮮においては、清朝にとっての既存の「天下」に組み込まれた華夷思想的な版図の矛盾が、近代国際関係の対等、平等の原則によって露呈され、清朝は崩壊したのである。(平野、2007、p.301、309、314)

日清戦争の敗北により、清朝の弱体化が露呈され、清朝の鉱山、鉄道等の利権を巡り、列強諸国が奪い合う国際紛争の原因となっていくのである。下関条約で規定された日本への遼東半島の割譲に関しては清朝の策略による三国干渉、とりわけロシアとの関係強化により阻止することに成功した。清朝の日本に対する怨恨がロシアに対する愛着となり、清露の蜜月の象徴となったのは鉄道利権である。ロシアは日英の脅威を念頭に黒龍江省と吉林省を横断してウラジオストクを繋ぐ短路線＝東清鉄道の建設を着手した。ロシアは 1898 年になると遼東半島の旅順と大連を租借し、ハルビンから大連に至る鉄道を建設した。その後、日本は日露戦争にて勝利するとこの東清鉄道の長春以南の経営権、沿線の付帯地や鉱山の管理権を手に入れるのである。これらを一体として運営する会社として南満州鉄道を設立した。南満州鉄道の技術力は、戦後日本で新幹線を走らせただけでなく、東北新幹線車両のライセンス生産という形で中国へ里帰りさせ、「和諧号」という列車を中国で走らせることになった。(平野、2007、p.317－319)

19 世紀の経世儒学以後の清朝の官僚や知識人においては国際秩序を学び、「乾隆帝の聖なる版図、領域」、清朝＝中国であることは自明であった。チベット、モンゴルの藩部の所謂少数民族にとってはその思想の形成のプロセスには組み込まれておらず、近代化を迫る清朝の対応に激しい反発を繰り返すしかなかった。清朝末以後の漢民族を中心とした中国ナショナリズムと周辺の民族との関係は古い帝国の器を近代国家へと導くことに当初から大きく挫折したのである。清朝末期における国家の概念として漢民族国家論に変えて「中華民族」という思想が浮上してきた。「中華民族」は、漢・満・モンゴル・チベットなど多数の民族を含んでおり、多数民族性を備えた単一民族という国家という概念である。しかし、孫文、毛沢東のようにその後も漢族への同化を積極的に押し付けることにより、少数民族との間に今も尚、遺産を残し続けている。

清朝建国から崩壊に至る 270 年の間でその性格が大きく変わった国家は多くない。「内陸アジアの帝国から近代東アジアの帝国へ」、「多文化帝国から『中国』の近代国家へ」と変転に満ちた歴史の幕を閉じた。近現代の中国が現在の巨大な領域を得るきっかけをつくり、漢人に対する「中華」への意識改革、中国史と近代を繋げて共通理解にしたこと等に関しては現代にも大きな影響をあたえ与えている。そしてその中で引き起こされた矛盾により現代にも影響を与えている課題は、日本への認識不足と対立の歴史により東アジアの諸問題に関し共通理解が出来ていないこと、内陸アジアとの民族問題、富国強兵の近代化を急ぐことに伴う問題等を残している。(平野、2007、p.344－346)

第4節 結論

紀元前 200 年頃から 2000 年近くアジアでは遊牧騎馬軍団が、圧倒的な軍事力を持って農工商地域を保護し、活性化させた時代が続いた。これは遊牧騎馬国家の国家戦略、軍事力、経済の 1 つの型であり、この多くをモンゴル帝国は吸収し進化させ、18 世紀半ばまで主流であった、ユーラシア大陸の多くの遊牧騎馬国家に多大な影響を与えた。中国王朝の歴史において異民族王朝においてのみ、広大なユーラシア内陸アジアを統治できたのは、遊牧国家として移動しているが故に多くの人々との交流があり、多様性を具備し、お互いを尊重する共存共栄の魂が根付いていたことに他ならないと著者は考える。

モンゴル帝国が広範な版図、領域を緩やかな統制により支配し、多種多様な人種、宗教、文化を超えた交流を図り、経済優先の政策を引いたことにより様々な人種が活躍できる国家体制となった。それにより世界規模でムスリム、ウイグル商人たちが活動し、銀が世界共通通貨となった。世界共通通貨が生まれ、世界規模の貿易が「海と火器の時代」、「地球化の時代」へと引き継がれていったことはモンゴル帝国の経済面における大きな功績と言える。モンゴル人、満州人も大元ウルス、清朝が滅亡する頃には、いずれも長江流域の豊かな土地から生まれた文化、華美な生活の中で教化され、「北京酔い」してしまったのではないかと考える。

寺島は著書「大中華圏」の中で「中国が抱えている三つの分断」を掲げている。1つは中華民国と中華人民共和国の分断、2つ目が沿岸部と内陸部の分断、3つ目が新疆ウイグル、チベットなどの西部周辺地域とその他地域との分断である。いずれもがモンゴル帝国の緩やかな統治、強大な軍事力と経済力を持った広大領域の支配が齎した遺産と著者は考える。1つ目は、清朝末期において「乾隆帝の聖なる版図≡モンゴル帝国支配領域」を西欧列強諸国から守るために「中国の富強」を目的とした中国国民党と中国共産党という党派が生まれたことに端を発している。2つ目は、モンゴル帝国時代に海運貿易を活性化させ北京、天津、上海といった巨大都市を創造したことにある。3つ目は、異民族国家ならではの緩やかな統治により、ウイグル、チベットなどの少数民族をこの版図に組み込んだことにより発生した問題である。漢人の官僚が近代化、国際秩序に直面した時に清朝末の中華民族思想を創造するが、そのプロセスに異民族を巻き込むことが出来なかったことにある。また、清朝及びその後の中国政権の華夷思想的な発想、少数民族の文化、宗教を尊重しない強制的な教化の姿勢が分断の原因と考える。(寺島、2024、p.167－172)

紀元後 2000 年の歴史の中で西欧優位な時代「海と火器の時代」、「地球化の時代」は僅か 200 年余りである。1800 年近くが遊牧騎馬軍団を中心としたアジアの時代であったといっても過言ではない。そして現代において経済的にはアジアが大きく飛躍しようとしている。だからこそ今、東アジア諸国がお互いの立場、更に第三者の立場から歴史認識を共有するためのコミュニケーションを密にし、相互理解することが必要な時であると考え。現代社会を生きる我々にとって地球が危機的な状況にある VUCA の時代に、国境を意識した利己的なナショナリズムではなく、それぞれの良い文化を尊重しつつ、利

他的な「地球人」になる必要性を著者は感じている。モンゴル帝国の緩やかな統治の中で多様性を認め、共存共栄を図るこのアイデンティティを地球規模で遺産として残したい。

第Ⅴ部 モンゴル帝国とシルクロード

第1章 モンゴル帝国の交易ネットワークと陶磁器の発展

本章では、モンゴル帝国がその広大な支配領域における活発な交易活動を通じ、様々な技術や文化・芸術の発展に寄与したという問題意識に基づき、中でも陶磁器（やきもの）の発展と世界への伝播について知見を深めた。

尚、本章では陶磁器が作られた時代という意味で、その地域と王朝名を使用して「元代」等と表記する。

第1節 世界の羨望の的であった中国の磁器

やきものの中でも中国で生まれた「磁器」（以後、中国磁器という）はかなり長い間他の国や地域では作ることができなかった。そのため、中国磁器は貴重品として珍重され、世界中に輸出され、献上品やコレクションにされた。また、各地でデザインを模倣した（磁器ではなく）陶器が数多く作られており、磁器は人々の憧れの対象であったことがわかる。

第1項 中国で作られる磁器とはどのようなものだったのか

磁器はカオリナイトと主成分とする磁土「カオリン」を1,300度の高温で焼いたもので、きわめて硬く、胎土は白く、軽く薄い、ガラス質の白いやきものである。軽くて薄いため表面の文様が半透明に内側からうっすら確認でき、たたくとチンチンと涼やかで高い音をする。磁器の材料や焼成方法は中国特有で、他の国々では割れやすくぼつてりした土器か陶器しか焼けなかったために、中国で生産される磁器はかなり長い間世界の羨望の的だった。この「カオリン」が磁器制作の重要なカギであった。

「磁器」とはカオリナイトと主成分とする磁土、カオリンを1,300度の高温で焼いたものである。きわめて硬く、胎土は白く、軽く薄い。表面の文様が半透明に内側からうっすらと認められ、敲くとチンチンと涼やかな音をする。その材料や焼成方法は中国のみのもので、他の国々では割れやすくぼつてりした土器か陶器しか焼けず、ペルシャ等の陶土は窯の中で800度以上になると崩れてしまう。明らかに磁器と土器、陶器の差はあった。中国磁器は中国の特産物として世界の人たちの憧れの的であった。（三杉、1992、p.8）

このような経緯と憧れから、自ら磁器を作り出そうという努力が各地で長年続けられ、ついに1709年ドイツのドレスデン近郊のマイセン窯で「磁器」が生み出された。しかし、それまで「磁器」は中国でしか作れない特別なものであった。

中国磁器が世界に輸出され、それらをたくさん持つことはシンボル・オブ・ステイタスであると喜ばれたが、本物がたとえ船で大量に運ばれたとしても絶対量には限りがあった。そのため、中国に頼らずそれと同じ磁器を自分たちで作ろうという試みは、中近東でもヨーロッパでも各地で行われた。最初、ボディは陶器であるが形とそれにほどこした文様を中国磁器風にしていたが、それでは満足することはできず磁胎そのものを作ろうと努力をつづけ、ついに一七〇九年、ドイツのドレスデン近郊のマイセン窯でヨハン・フリードリヒ・ベットガーという錬金術匠が磁器を作ることに成功した(三杉、1992、p.11)。

英語で『ボーン・チャイナ(Bone China)』とは欧米で牛骨を入れた真っ白な磁器を意味するが、中国を表す『チャイナ China』だけでも「磁器」を示す代名詞として使われ、通用するのはこのような歴史と背景のためであろう。

第2項 中国磁器の原料「カオリン」

フランスの宣教師が古来(漢の時代ともいわれる)より有名な陶磁器の産地である中国の景德鎮の磁器を調査し、磁器を作るための粘土を「カオリン」と命名した。磁器の製造に用いられる白土が景德鎮の高嶺(カオリン:Kaoling)から産出することに由来するとも言われている。

「カオリン」の本質は「カオリナイト(kaolinite)またはカオリン石」と呼ばれる鉱物である。風化により花崗岩や石英斑岩が分解された白色の微細な結晶が集まった、白色または灰色がかかった粘土鉱物で、ケイ酸アルミニウムの水和物を主成分とする。雲母や長石、石英が適当に混ざっており、粒子が細かく、高温度に耐える耐火性が高い一方で熱膨張率が低く、優れた白色度を持っているため、磁器の生成に適している。



(出所: [体質顔料の解説と化粧品に使用される体質顔料一覧](#) | [化粧品成分オンライン](#)より)

図 28 カオリンの化学式

前述のような性質に加え、非常に純粋で柔らかく、無毒で、皮膚に対しても安全であるため現在も「カオリン」は多岐にわたる産業で広く利用され、様々な特性を持つ製品に加工されている。例えば、セメント工業に使われるほか、紙の充填剤やコーティング剤、陶

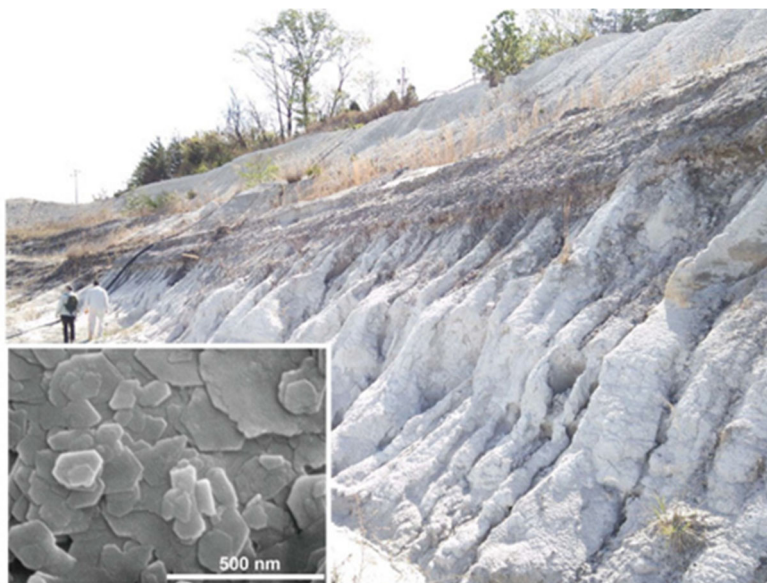
磁器の原料、塗料の添加剤。物質を吸着する性質を利用して汚染物質の除去や医薬品のキャリアへの活用、あるいは皮膚の清浄、吸油、またはマツト効果を目的として、メイクアップ製品、コンシーラー製品、化粧下地製品、洗顔料、頭皮ケア製品、ネイル製品にも配合されている。

磁器の生成において、粘土にわずかに含まれる鉄分が焼成により着色してしまうため、より美しく白い白色磁器を作ろうとする場合、不純物が少ない良質なカオリンが求められる。現在、日本では良質のカオリンがほとんど産出しないため、韓国やニュージーランドからカオリンを輸入して使用している。



(出所: [景德鎮:カオリン土と高嶺山](#) | [船橋茶文化資料室](#) より)

図 29 カオリンが産出する景德鎮の高嶺山



(出所: [「県の石」に瀬戸の「カオリン」が選ばれました！](#) | [新着情報](#) | [産業支援センターせと](#)より)

図 30 カオリンが産出する地盤の様子

中国文化の影響下にあった朝鮮半島や日本に於いてもカオリンの発見と磁器の生産の開始までには相当時間がかかった。朝鮮半島では現在も良質なカオリンを産出し輸出しているが、磁器を作れるようになったのは12世紀の高麗時代である。日本では、文禄・慶長の朝鮮出兵の際に鍋島直茂公が日本へと連れ帰ってきた朝鮮人陶工の李参平が1616年ごろによく九州の有田で磁石を見つけ、磁器を焼けるようになったのである。

第2節 世界のやきもの作りの東西の柱

古代から世界中でその土地その土地のやきものが作られてきたが、特に中国とペルシャがやきもの作りの東西の2つの大きな柱と言える。

東のやきもの作りの柱である中国における磁器の制作の技法は、他の国にはほとんど伝わらなかった。社会構成、宗教、文化など、政治、経済も含め近い関係にある、いわば中国の地方とも言える地域(朝鮮半島、日本、安南(今のベトナム北部))にのみに伝わり発展していった。

一方、西のやきもの作りの柱であるペルシャは、メソポタミアやバビロニアにおいて色彩的釉薬や筆書きの文様をほどこす技法が発生し、それが中近東を中心に東西に広がった。イスラム教が生まれてからはイスラム教の広がりとともにイスラム教文化圏にそれらの陶器が広がった。特にインドの中部や北部においては、16～19世紀のムガル帝国時代にイスラム教に色濃く染まり、アクバル帝はイスラム教の廟であるタージ・マハルを建てた。同様に、パキスタン、アフガニスタン、中央アジアの国々、サマルカンド、ブハラ、タシケントでもペルシャ文化を代表する青を主とするタイルやモザイクを貼ったイスラム教寺院やミナレットと呼ぶ尖塔が建てられている。

ペルシャは長い歴史の中で王朝名を変えながらバグダッド、ダマスカス、イスタンブール、アレppo(ハラブ)、カイロのような個性ある都市を作った。またイスラム教はエジプトからアフリカ北部を西に進み、モロッコ、ジブラルタル海峡を超えイベリア半島にまで影響を与えた。これらのイスラム教文化の影響を受けた地域では、アラビア文様の壺や皿、水差し等々が作られており、ペルシャ陶器の文様や技法がイスラム教の広がりとともに世界へ広がった。

磁器こそ焼けなかったが、中国の元の時代の染付や明の時代の色絵などもペルシャ陶器の影響を受けて発達したことを考えると、西のやきもの作りの柱であるペルシャ陶器が陶磁器の発展に於いて担った役割は大きいと言える。

第3節 モンゴル帝国期の中国陶磁の変化

第1項 モンゴル帝国(元朝)以前の中国陶磁

モンゴルが中国に侵入する以前の中国陶磁は各地の窯ごとに、それぞれ独自に発展していた。

宋代(北宋(960 - 1127 年)、遼(907 - 1125 年)金(1115 - 1234 年)、南宋(1127 - 1279 年))は中国陶磁の黄金時代といわれ、各地で青磁、白磁の名品や多様な陶磁が生み出された。

青磁は、華南では「越州窯(のちに「龍泉窯」に移る)」、華北では「耀州窯」が著名。浙江省北部にあった「汝窯(じょよう)」や南宋の「官窯」も青磁の名窯であった。

白磁は、華北の「定窯」、華南の「景德鎮窯」が著名である。「定窯」では酸化炎焼成によるクリーム色の白磁が焼かれた。景德鎮は五代に始まり、元代以降、中国陶磁の中心的産地となる窯場であるが、宋代には青みを帯びた白磁(「影青(いんちん)」、「青白磁」とも称する)が主製品であった。

このほか、河南省を中心とする華北一帯には、陶質の胎土に白化粧をした倣白磁を焼く一連の窯があり、これらを総称して「磁州窯」という。「磁州窯」では、掻き落とし、象嵌、鉄絵などのさまざまな手法で加飾した、民窯ならではの創意に富んだ陶器が生産された。

また、南宋の時代になると福建省の「建窯」、江西省の「吉州窯」で黒釉の喫茶用の碗、いわゆる天目が製作された。これらの碗は特に日本で珍重され、日本の茶道文化に多大な影響を及ぼした。

第2項 青磁と龍泉窯

中国 3000 年のやきものの歴史の中で中国人が最もこだわりをもって作ったのは、青磁であった。

中国には青磁に関する逸話がいくつもあり「青磁は翡翠を粉に砕いて焼いた」とか「皇帝が雨の降りやんだ空の色『雨過天晴』の青さに魅せられ、同じような色のやきものを作することを命じた」とかあるいは「中東のキャラバンの親方にセラドンという者がいて、彼の運んでくる荷物の中に必ず中国の青緑色のやきものがあり、彼の名前がついた」といったものである。

翡翠の話は中国人の「玉(翡翠でできている)」への畏敬があり、中国の人々は玉に憧れ、人の手で玉を作り出そうとしていたのである。また、雨過天晴の話は青い色への憧れと同時に色調の美しさの基準を示し、またセラドンという親方の話は中近東では今でも青磁をセラドンと呼ばれ浸透しているほど、当時のキャラバンの移動する地域に青磁が大量に輸出されていたことを示唆している。

青磁と言ってもその青色の色調は窯の中で微妙に変化し、褐色から芝草色、青緑、粉青色とバリエティがある。時代や焼かれた地方により色味は異なり、前述の逸話にあるように最も良いとされているのは空色の青で「粉青色」とも呼ばれる。

青磁の始まりは紀元前 1500 年の殷の時代であると言われている。木灰を主とする釉薬に少し鉄分があることから、酸化により褐色に変化したものができたことが始まりであった。揚子江の河口近くで、六朝の末から唐、五代と少しずつ緑褐色系の発色のものの生産があり、やがてかなり肌合いが美しく、形も色々な青磁が作りだされるようになった。これが浙江省北部の「越州窯」であり、この窯で焼かれた磁器を「越州青磁」と呼ぶ。この「越州磁器」は、9 世紀になるとすでに輸出が始まり、東南アジアからエジプトにまで至った。宋代になると、陝西省や河南省などの北部で北方青磁と呼ばれる芝草色や、オリーブ・グリーン・カラーと呼ばれる色調のものが焼かれ、釉の下に型押しや片切りによって美しい花唐草紋や鳳凰文などがほどこされるようになった。ただ、この時代の北方の青磁は石炭を燃料にしていたため、熱はよくあがるが、焰が短く、まだ雨過天晴や粉青色と呼ぶような色味にはならなかった。

12世紀初頭の1127年、宋朝は北の蛮族におされ北の開封から南の杭州に首都を移した。この時に越州窯や龍泉窯をはじめ、北部地方の汝窯や耀州窯など各地から陶工が集められ、杭州郊外で宮廷使用専門の官用青磁が焼かれるようになる。そして殷以来 2000 年以上の時をかけ人口玉にふさわしい「粉青色」の青磁が誕生した。

南の青磁が北とのそれと比べ美しい色に焼きあげることができた要因は、薪に松を使用したためであった。松は石炭と比べると焰が長く、還元反応がよい状態で進んだのである。

北宋中期頃になると青磁製作の中心は浙江省南部の龍泉市周辺の窯に移り、南宋の時代から元代にかけて青磁の生産地として栄えた。これが「龍泉窯」である。そして、南宋の時代から元代、明代の初期までの約300年間、浙江省の龍泉窯における青磁の大量生産時代を迎えるのである。大量の青磁の生産を支えるため浙江省の松はどんどん切り払われ、省の境界を越え南の福建省にまで及んだ。窯跡は幾百に及び、龍泉に近い大きな窯などでは発掘調査が行われているが、未調査のものが山奥にまだたくさん残っていると言われている。

窯の移動があったため、時代により青磁の特色が異なっている。南宋官窯の青磁は胎土が陶器質で、器表面には胎土と釉の収縮率の差に起因する貫入が生じているのに対し、龍泉窯青磁は、胎土が磁器質で、貫入がほとんどなく、澄んだ青色を呈するのが特色である。



(出所：青磁下蕪瓶 | 収蔵品の紹介「出光コレクション」 | 出光美術館より)

図 31 重要文化財 青磁下蕪瓶 (せいじしもかぶらへい)、
龍泉窯、南宋(12～13 世紀)、高 23.1cm

この「重要文化財 青磁下蕪瓶 (せいじしもかぶらへい)」は、南宋官窯の特徴を示す青磁である。蕪状の胴部に竹節状の頸部がつき、高台の畳付に見える胎土は黒色であり、厚く施された粉青色の青磁釉は、表面には全体に貫入(ひび割れ)が走っている。本作は加島屋(広岡)家伝来、近世以前から日本に将来された官窯器として貴重なものである。

また、日本に於いては、龍泉窯青磁の瓶は茶席の花生(はないけ)として珍重され、布を打つ道具の砧に因み砧青磁(きぬたせいじ)と称されている。「下蕪形花生」(しもかぶらがたはないけ)、「鳳凰耳花生」、「筍形花生」などと名づけられている青磁の瓶は、その器形と釉色が日本人に好まれた。



(出所: [過去の展覧会 | 展覧会情報 | 大阪市立東洋陶磁美術館](#)より)

図 32 重要文化財 青磁鳳凰耳花生(せいじ ほうおうおみみはないけ)、
龍泉窯、南宋(13 世紀)、高 28.8cm

この「重要文化財 青磁鳳凰耳花生(せいじ ほうおうおみみはないけ)」は、作風から南宋の龍泉窯の産とされている。貫入がほとんどなく、澄んだ青色を呈する龍泉窯の特色をもっている。数ある鳳凰耳花生の中に「萬声」「千声」などの名品が知られているが、こちらも名品の1つとして丹波青山家に伝世したと言われている作品である。

第 3 項 景德鎮窯

中国の真ん中にあたる江西省、鄱陽湖(はようこ)の東岸に位置する景德鎮では 2000 年前の漢代からやきものの生産が始まったとも言われている。この湖の北部は揚子江と繋がっており、運輸に利便性のある土地柄であったことも景德鎮の発展の一因と考えられる。

また、中国では宮廷使用品を焼く命を受けることは、非常に質の高いものを焼ける証しであり、また大きな誇りであった。宋朝の景德帝のとき、宮廷にやきものを納めるようにこの窯に勅命が下った。それ以後、今日まで「景德鎮窯」という名称が使用されるようになり、明朝から清朝まで約400年にわたり、「官窯」として最高級品が生産されてきた。

この窯では宋代において、月の影を意味する「影青(いんちん)」と呼ばれる白磁が焼かれた。白の素地に透明釉を掛けた白磁で、白磁ではあるが胎土と釉薬になる磁土に鉄分が少量含まれることで釉薬が厚くなったところがわずかに青味を帯びる。器面の刻花唐草などの文様の縁の釉溜りの部分が青く見える美しさがある。



(出所: 白磁刻花牡丹文盤 | 景德鎮窯 | 収蔵品詳細 | 作品を知る | 東京富士美術館 (Tokyo Fuji Art Museum, FAM) より)

図 33 白磁刻花牡丹文盤、景德鎮窯、北宋(11-12 世紀)、
高 3.0cm、口径 24.2cm、底径 12.5cm

この「白磁刻花牡丹文盤図」は宋代の景德鎮の白磁で、見込みいっぱいゆったりと大柄な牡丹文を片切り彫りで表し、花卉には櫛目が施されている。外面は無文で、透明釉を施してあり、釉薬がたまった部分が濃く見える。ちなみにこの作品は底裏には目跡の痕跡がなく、口の先端の釉薬を剥ぎとって口を下にして、伏せて焼成したと考えられる。伏せ焼きの窯詰め方法は、景德鎮窯において、11 世紀末から始まり、12 世紀後半から増加する。

中国の窯にはいずれも盛衰があり時代ごとに中心となる窯があるが、この景德鎮窯は例外中の例外である。宋代の白磁、元代の染付(ブルー・アンド・ホワイト)、明代の色絵(五彩と呼ばれるカラフルなもの)、清代に至るとこれまでのあらゆる技法を駆使したものを焼いている。更に、粉彩(ふんさい)、琺瑯彩(ほうろうさい)、洋彩(ようさい)や、銅紅釉系の新しい技術を発展させた。多少の変化や断絶があったが 20 世紀になっても衰え

ず、中国国内のみならず海外の注文にも応じ、やきものの輸出は続けられている。1000年という長さで窯の火を消すことなく生産と輸出を続けている窯は世界でも類を見ない。

第4項 モンゴル帝国(元朝)支配後の中国磁器の変化

元代以降になると「龍泉窯」や「景德鎮窯」で生産された中国陶磁が世界各地へ広く輸出されるようになる。この時代の中国磁器の生産の中心はこの2つの窯であった。

そもそも元代以前の龍泉窯青磁は蓮弁紋以外にはあまり紋様がなかった。一方で景德鎮窯の青白磁や白磁は劃花紋や貼花紋など豊富な文様が施されているというそれぞれの特徴はあった。また、この頃の中国陶磁はどの窯のものを大きくても高さ30cm程度で、基本的に大形の製品は少なかった。

モンゴル帝国(元朝)の支配が始まった13世紀後半になるとこういった磁器に変化が生じるようになる。まず龍泉窯青磁は貼花紋などの装飾が豊かになり、大盤などの大形器種が出現する。

14世紀前半になると変化はさらに顕著になり、龍泉窯青磁は60cmを超える花瓶などの大形器種が出現し、瓶や壺、盤、鉢など大形製品が目立つようになる。装飾は貼花紋、劃花紋、刻花紋、鉄斑紋などが多用され、元時代の特徴とも言える馬上杯が登場する。一方、景德鎮窯の製品には白磁や青白磁のほかに、釉裏紅、鉄斑紋、鉄絵など新たな装飾技法が施された製品が見られるようになる。

14世紀中頃になると、龍泉窯青磁はそれほど大きな変化はないが、景德鎮窯では青花青磁が見られるようになり、壺、瓶、梅瓶、鉢、盤などの大形器種が目立つようになる。



(出所: [過去の展覧会](#) | [展覧会情報](#) | [大阪市立東洋陶磁美術館](#)より)

図34 国宝・飛青磁花生(とびせいじ はないけ)、龍泉窯、元、14世紀、高27.4cm

器表に鉄斑を散らし、その上に青磁釉を掛けたものを、日本人は「飛青磁」と称し茶具として珍重した。この「国宝・飛青磁花生(とびせいじ はないけ)」は玉壺春(ぎょっこしゅん)というふっくらとした胴部とひきしまった頸部の優美な姿に、舞い上がる蝶のような鉄斑が見所。龍泉窯の14世紀頃の特徴を示す磁器である。大坂の豪商鴻池家に伝世し、「寛政三年(1791) 道具改帳(二番蔵)」に「へ式拾三 飛青磁」と記載されているものに当てはまると考えられる。



(出所:文化遺産データベースより)

図 35 青磁唐草文馬上杯(せいじからくさもんばじょうはい)、龍泉窯、元～明(14～15 世紀)、高 13.0 cm、東京国立博物館蔵

また「青磁唐草文馬上杯(せいじからくさもんばじょうはい)」のような馬上杯が登場するのも、元代の特徴である。

更に14世紀中頃になると、龍泉窯青磁はそれほど大きな変化はないが、景德鎮窯では青花青磁が見られるようになり、壺、瓶、梅瓶、鉢、盤などの大形器種が目立つようになった。

こうした元時代に起こった器形の大形化、装飾の多用化、色彩装飾や青花の誕生などは、新たな支配者であるモンゴル人と、彼らとともに中国に入ってきた色目人(中央アジア、西アジア、ヨーロッパ人)の嗜好にあわせるために起こった変化であった。特に景德鎮窯の青花磁器や龍泉窯青磁の大形の番や鉢が元代中期頃に出現し、急速に流行した背景には、食物を大形容器に盛る草原の民の食習慣が影響していると言われている。

大型の磁器を焼くには相応の原料(胎土)や技術、設備(大きな窯や大量の良質な燃料)が必要である。形成にも非常に労力が必要であるが、磁器が大きくなればなるほど原料(胎土)の質の良さが求められる。また、乾燥や焼成の工程において均一に進みにくい
ため、歪みや割れ等が生じやすく、高度な技術が必要であったであろう。当然莫大な費用も必要で、非常に高価であったはずである。

私見ではあるが、モンゴル人や色目人の嗜好や食習慣に合わせたことはもちろんだが、大型の磁器を作らせ保有できることが権威を示すためのものになっていたとも考えられる。

第5項 青花磁器の誕生

景德鎮窯では14世紀の初頭から前半期には鉄顔料による釉下鉄絵、銅顔料による釉下彩の釉裏紅、コバルト顔料による釉下彩の青花(「チンハオ」、「せいか」)と、3種類の釉下彩磁器の生産が始まった。但し、青花の生産は他の2種より少し遅れ、至正様式(至正年間:1342~70年)と呼ばれる典型的な元代の青花磁器の完成は14世紀中頃かその少し前と考えられている。

青花とは「青い文様」の意味で、白地に青い紋様を表した磁器である。英語では「ブルー・アンド・ホワイト」、日本語では「染付」と呼ばれる。青花は釉下彩の一種で、釉下彩成形した器をいったん素焼きして、酸化コバルトを含む顔料で器面に絵や文様を描き(素地に直接絵付けをする)、その上から透明釉を掛け、高火度で還元焼成すると顔料が青色に発色する。この顔料を中国では「回青」または「回回青」(「イスラム圏の青」の意)、日本語では「呉須」という。他にも鉄絵具を用いた鉄絵や、銅呈色の釉裏紅(ゆうりこう)も釉下彩である。

青花に西アジアから輸入されたコバルト顔料が使用されていたことは分析結果から判明しており、青花誕生は西アジアの影響を重視する傾向が強い。景德鎮からアラビア文字銘の磁片が出土したことや、他の複数の元の青花磁器にアラビア文字の青花銘が確認され、元代後期に景德鎮の窯場にアラビア文字を書くことができる人間が存在したと考えられる。それも単なる文化的な影響ではなく、色目人が何らかの形で意図をもって青花磁器創成に関与した可能性もある。

白地に藍色の紋様はもともと西アジア地域で好まれた色彩構成であり、モンゴル人もまた天の色である青と真実や純潔を表す白を聖なる色として尊んだ。こうしたことからモンゴル統治下にある景德鎮で誕生した青花磁器は、コバルト顔料が西アジアなど海外から中国にもたらされたことだけではなく、当時の西アジア人とモンゴル人の美意識がかみ合うことで濃厚に反映され、西方からの強い影響を受けたと言える。



(出所: [大英博物館の魅力、再発見！【動物巡り編】](#) - 英国ニュース、求人、イベント、コラム、レストラン、
[ロンドン・イギリス情報誌](#) - 英国ニュースダイジェストより)

図 36 青花龍文象耳瓶、元、ロンドンのデイヴィッド財団蔵

この至正 11 年(1351 年)銘の「青花龍文象耳瓶(せいかうんりゅうもんぞうじへい)」一対は、世界的に知られる名品であり、元代青花の編年の基準作例である。器の肩に象頭形の双耳を有する大瓶で、至正 11 年に道観(道教寺院)に寄進された旨の銘が器の口縁の下の文様帯内に書かれている。中国画の筆遣いと西洋・イスラムの唐草文様が見事に融合している。

「鳳凰」は麟(りん)、鹿、蛇、魚、亀、鳥類が複合された霊鳥で「皇后」の象徴であり、一方の「龍」は猪、馬、鹿、ワニ、蛇、魚類が複合された霊獣で「皇帝」の象徴である。そのため大部分の官窯製の磁器には鳳凰と龍の文様が施されていた。また龍の描き方にもルールがあり、皇帝に献上する磁器の龍の爪は 5 本、貴族は 4 本、庶民は 3 本と定められていた。



(出所: [青花騎馬人物文壺](#) | 収蔵品の紹介「出光コレクション」 | 出光美術館)

図 37 青花騎馬人物文壺、景德鎮窯、元

この「青花騎馬人物文壺」は濃厚な青花で表された頸部の波涛文、肩部の牡丹唐草文、裾部の蓮弁文にはさまれた主文様として、元曲「破幽夢孤雁漢宮秋雜劇(はゆうむこがんかんきゅうしゅうざつげき)」のクライマックスが描かれている。主人公の王昭君(おうしょうくん)の入水自殺前後の情景。先頭の呼漢邪單于(こかんやぜんう)から最後尾の王昭君と2人の侍女まで、器腹を一続きに80%ほども使った構図。芝居好きの注文主が卓越した絵師に描きたい雑劇の実景を注文したと考えられる。元青花を焼造し始めた景德鎮の民窯の品。



(出所: [中国の陶磁器 - Wikipedia](#))

図 38 青花瓜竹葡萄文盤、元、上海博物館

そして、この「青花瓜竹葡萄文盤」は、盤の同心円と放射線状の区画を組み合わせた紋様構成が特徴。元代の青花磁器の紋様構成であるが、西アジアの陶器や金属器の紋様構成と酷似している。



(出所: [学芸の小部屋 -戸栗美術館-](#))

図 39 釉裏紅 菊唐草文 玉壺春瓶、景德鎮窯、明・洪武年間(1368～1398)、
高 32.2 cm

景德鎮では元代から明代初期にかけ、この「菊唐草文 玉壺春瓶」のような釉裏紅磁器が作られた。素焼きをした素地の上に、酸化銅を呈色剤とする顔料を用いて絵筆で文様を描き、その上に透明釉をかけて高火度で還元焰焼成したものである。

参考までに、同じ酸化銅を釉薬の中に溶かし込んだ鮮紅と呼ばれる紅釉も明代初期に作られるようになる。そもそも赤、緑、黄色などの色素は800度以上の高温になると変色してしまうため、窯で高温で焼き上げるカラフルなやきもの作りには技術が必要であった。今回は省くが、磁器において「赤」の発色はもうひとつの大きなテーマであった。

元代の青花磁器誕生の技術的背景には 14 世紀初頭頃の景德鎮磁器における鉄絵や釉裏紅などの釉下彩技術の導入が先駆けて行われていた。釉下彩磁器の誕生、特に青花磁器の誕生とほぼ同じ頃に、景德鎮窯では緑や赤の上絵を施した釉上彩磁器(紅緑彩磁器)や藍釉を全体に施し白い紋様を浮き出させた藍釉白花磁器、磁器の素地の

上にブルーの低温釉がかけられた孔雀釉磁器が誕生したが、その背景には支配者であるモンゴル人や色目人の嗜好の強い影響があったと考えられる。

元代に景德鎮窯で生み出された新しい色彩構成の磁器は、同時代のペルシャの陶器や西アジアのガラスの色合いと酷似している。例えば、青花磁器とペルシャの白釉藍彩や白釉藍黒といった陶器は白い地の上に藍色で図柄が描かれており一致する。同様に釉上彩磁器とミーナーイー陶器(ミナイ手陶器)や西アジアのエナメル彩ガラス、藍釉白花磁器(紅緑彩磁器)とペルシャの藍釉陶器やラジュバルディナ陶器、孔雀釉とペルシャの青釉陶器のように、元代に景德鎮窯で生み出された新しい色彩構成の磁器は、同時代のペルシャの陶器や西アジアのガラスの色合いと酷似している。単なる技術や意匠の影響ではなく、カラフルなイランの陶器やガラスを中国の磁器の技術で再現しようと、イランの工芸や美意識を理解した者が企画性をもって作り出したと考えられる。

先に述べたように、元代の景德鎮窯にアラビア文字を流暢に書ける人間がいたことは明らかで、景德鎮に派遣された色目人(主にムスリム)の官僚、または陶磁器の売買にあたった色目人の商人などが、西方渡来のコバルト顔料を景德鎮に持ち込み、元の青花の創生に密接にかかわった可能性も考えられる。

第4節 中国と世界の陶磁器を変える契機となったモンゴルの支配

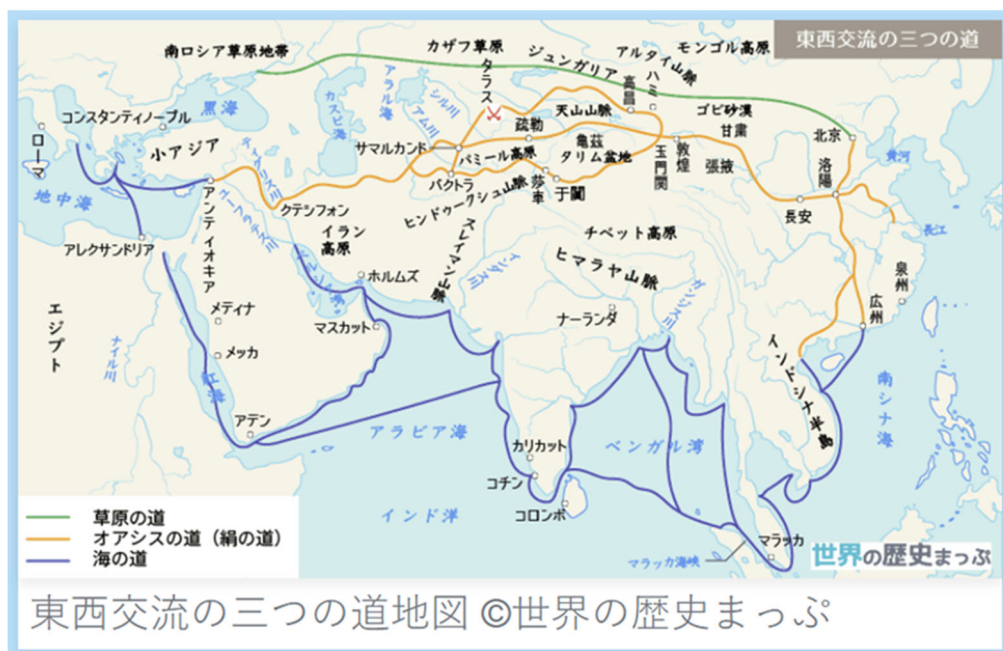
第1項 海の道(「陶磁の道」「海のシルクロード」)とモンゴル帝国(元朝)以前の陶磁流通

東アジアと西アジア・地中海世界をむすぶ貿易路は「シルクロード」と呼ばれ、中国から中央アジアの砂漠や草原、あるいは山脈を越えてペルシャ、それから地中海に通じる。実際にこの道が使われたのは7～8世紀までで、8～9世紀以降は海上交通が東西貿易の中心となったと言われている。

9～10世紀以降、重量物である大量の陶磁器や、香辛料が船によって東方世界から西アジア・ヨーロッパにもたらされるようになり、海路が主要な東西交流の動脈となった。様々な人や物資、芸術や思想がこの道を往来したと考えられる。

中国磁器の輸出がさかんになり始めたのは唐代の末だが、東西の世界を結ぶ海上貿易はかなり前から一般的に行われていた。紀元後1世紀前後からオリエント(地中海世界)ではインド洋を吹く季節風(モンスーン)を利用してエジプトからインドに向かう海路が開かれた。また紀元前2～1世紀にかけて東アジアでは中国東南部からインドシナ半島やマライ半島をまわりインド東海岸にいたる海路が開かれ、東西からの海路はインドで結ばれた。

中国と西域諸国との関係が複雑化し、陸路のシルクロードの往来に様々な困難が伴うようになると海上交通の重要性が増し、さらに7世紀にサラセン帝国(アッバース朝)が成立し貿易に乗り出すと海路の比重が重くなった。



(出所: [三つの道](#) | 世界の歴史まっぷより)

図 40 東西交流の三つの道

このような流れから9～10世紀頃から東西の船の往来が盛んになり、11～12世紀には造船技術の進歩、航海術の発達や羅針盤の応用により海上交通はより発達した。海上交通の発展は、重量があり壊れやすい陶磁器の輸出を陸路よりも容易にしたのである。

陸上のシルクロードを行き交った絹織物や香料などは有機物のため時間とともに風化し確認することは難しくなるが、やきものは破片となつて残るため遺跡や港などから発掘され、歴史や文化を解き明かす貴重な資料となっている。

陶磁が運ばれた海路は、「海のシルクロード(三杉隆敏氏が初めて提唱した)」あるいは「陶磁の道」とも呼ばれる。中国磁器が東西貿易路の主力商品となつてインド洋を核とする海路が「陶磁の道」となるのは、中国に成立した唐帝国の後期(9世紀)であり、西アジアに勢力を伸ばしたイスラム系の帝国が中国陶磁を求める求心力となつたためであった。

第2項 血縁が関わっていたモンゴル帝国期の陶磁流通の変化

モンゴルが中国全土を支配する前の南宋代に、すでに海上交通路による中国陶磁の輸出は盛んに行われており、日本、東南アジア、南アジア、西アジア、東アフリカ、地中

海地域に「龍泉窯青磁」、「福建陶磁」、「景德鎮陶磁」、「広東陶磁」などが輸出されていた。中国の北部を金朝に奪われていた南宋朝は、海上貿易による経済活動を重視した。金銀の海外流出を防ぐために対外貿易による決済は陶磁器や絹製品などで行うことを規定したこともあり、この時代に多量の中国磁器が海を渡って運ばれたのである。

クビライ・ハン(1215～94年、在位 1260～94年)が建てた元朝が 1278 年に南宋朝を降すと、南宋朝の海上貿易機構とルートは元朝に引き継がれた。元朝は、クビライ・ハンの弟であるフレグ(1216～65年、在位 1260～65年)が現在のイラン地域に建てたイル・ハン朝(1258～1353年)と友好的に結びついた。兄と弟がそれぞれ支配した両国は南宋の時代以来の海上の道を通じて密接な交流を行い、南宋代よりも更に膨大な量の中国陶磁が海上ルートを通じペルシャ湾に運ばれた。

イル・ハン朝の時代にペルシャ湾の交易拠点となったのは、キーシュとホルムズ(現在のホルムズ島上ではなく、ホルムズ島の大陸上の拠点「古ホルムズ」)である。中近東からエジプト、東アフリカの地域の遺跡では元代に入ると中国陶磁の出土が南宋の時代よりも増加するものの、地元産の陶器や土器の量が中国陶磁よりも多い。それに対し、古ホルムズの遺跡においては中国陶磁(中でも元代の龍泉窯青磁が多い)の量が中近東産の陶器や土器を上回っており、当時の中国との貿易の中心的な港湾都市であった可能性を示唆している。

同様にキーシュの中心的な都市遺跡のハリーレ遺跡でも、古ホルムズの港湾都市遺跡とほぼ同じ組成が確認されており、中国陶磁の輸入の拠点となったのがホルムズやキーシュであり、そこにもたらされた中国陶磁がイル・ハン朝の国内に流通するだけでなく、そこからアラビア半島、エジプト、東アフリカなど広大な地域に流通した可能性が考えられる。このような陶磁器の出土状況から 13 世紀末～14 世紀中頃に中国とペルシャ湾を結ぶ海上の物流ルートが極めて活発化しており、それは元朝とイル・ハン朝の兄と弟の血縁による友好関係に基づくものであった可能性が高い。

その他、ペルシャ湾と中国を結ぶ地域でも元代の中国陶磁の出土が多くみられる。例えば、インドネシアのトローラン遺跡やトゥバン遺跡、タイのスコータイ遺跡などに於いて同時期のペルシャ湾地域と同様の龍泉、福建、景德鎮という陶磁器組成が確認されている。元代に入った 13 世紀末頃から東南アジア、西アジア、東アフリカなどでは中国陶磁の出土量が激増し、その組成は龍泉青磁を主体に福建陶磁がそれに次ぎ、景德鎮磁器、広東陶磁が少量、稀に磁州窯計陶磁を含む。

一方で同時期に中国北部からモンゴルー帯の内陸部での中国陶磁の流通も活発化され、華北の磁州窯系陶と鈞窯系陶磁とともに華南の龍泉青磁、景德鎮磁器なども運ばれたことが遺跡などからわかっている。海上ルートと内陸ルートでは異なった組成の中国陶磁が流通していたことがわかる。

モンゴル帝国がユーラシア大陸の大部分を支配した時代に、グローバル規模で人とモノが大きく動き活発化され、社会や文化も大きく変化した。陶磁器も同様に東西地域で影響し合い、発展していったことの現れである。

モンゴル帝国がユーラシアの大部分を支配した時代は、世界的な規模で人と『モノ』の動きが活発化され、社会や文化が大きく変化した。この時代に中国陶磁はモンゴル人を主とした新しい支配者のもとで器形や器種、装飾技法を画期的に変化し、中国から西方に向けての輸出製品としてそれ以前にも増して重要な位置を占めるようになった。さらに元朝とイル・ハン朝を結ぶ海の道の活発化により、中国とペルシャ湾を結ぶ物流が高度に発達したのである。

本稿では、陶磁器というモノを研究材料として元代の陶磁器生産と流通の変化について述べた。こうしたモノを詳細に分析し、研究資料化することによって、人間の活動や交流の変化、さらには感性の変化、文化の変化などまでをも知ることができるのである。(荒川ら、2023、p.292)

第5節 ヨーロッパでの磁器の発展

第1項 欧州での中国趣味(シノワズリー、チャイニーズ・マニア)の背景

中国の陶磁器は異国(主にイスラム)の文化や技術と融合し、独自の発展を遂げた。エジプトのカイロ郊外にあるフスタート遺跡からは8世紀から19世紀まで、つまり唐代から清代のものまでの中国磁器の破片が大量に発見されている。また、紅海沿岸のアイダーブ海岸で中国磁器が散らばって発見され、古来より極東のはるか彼方のやきものがこの地域に届けられていたことが明らかとなった。

マイセンで磁器が作られるようになるまでの長い間、中国以外では磁器を作ることができなかったが、西欧諸国では中国のやきもの(磁器)への憧れが強く、上流階級の格や権力の誇示するものになり、こぞってコレクションするようになっていった。いわば欧州社会の磁器への渴望が、17、18世紀のヨーロッパにおける中国趣味(シノワズリー、チャイニーズ・マニア)の下地になったと考えられる。

第2項 中国磁器の輸出の変化

中国磁器の海外への輸出は、担い手と輸出先による内容が時代によって変化したことも特徴であろう。

9世紀中期～唐末、五代にかけては越州青磁が盛んに輸出された。

宋代になると、景德鎮や福建省などの白磁が主であった。

宋代末～元代は青磁や染付の大量輸出(天文学的な数と考えられる)が行われた。特に13世紀末～14世紀にかけて急激に中国磁器の輸出が増えたのである。トルコのトップカピ・サライ博物館の約3000点の青磁はほとんど元代のものであることも、特筆すべきであろう。

当時の交易の担い手は主としてアラビアもしくはペルシャ商人であり、彼らの趣味や意向に沿って磁器が作られ、輸出される各国が高価な中国磁器を購入する富と力を持っていたことを示している。インドネシアではシュリーヴィジャヤ王国およびジャバヒト王朝、インドではトゥグルク王朝、イラン・イラク地域ではモンゴル統治下のイル・ハン国、エジプトの 맘ルーク朝などいずれもイスラム世界の広がりとなっていた。中国磁器の世界への伝播は主にイスラム世界、西アジア中心であったと考えられる。

16 世紀になるとポルトガルやスペインの船団により大量の染付磁器がイスラム圏を超えヨーロッパへ大量に運ばれるようになる。これまでも中国磁器はカイロやイスタンブールから地中海、黒海を経由してヨーロッパへもたらされていたが、数が少なく非常に貴重であった。

輸出の担い手も輸出先も大きく変化し。特にオランダ東インド会社は磁器貿易に力を入れ、中国景德镇に大量注文した染付をヨーロッパへもたらした。これまでの中国やイスラム圏にはなかったチュリーン、ティーポット、塩皿、プレート、プラターンなどを注文し、17 世紀中期以降はオランダ東インド会社が中国磁器のヨーロッパへの輸入のイニシアチブをとり、景德镇でのヨーロッパ向けの磁器生産を増やしたのである。

第 3 項 中国趣味(シノワズリー、チャイニーズ・マニア)

17、18 世紀のヨーロッパにおける中国趣味(シノワズリー、チャイニーズ・マニア)のことを、「シノワズリー」というフランス語で表現されることが多いのは、中国磁器のコレクションのブームの中心がフランスであった証拠である。極東の中国趣味はヨーロッパで大きなブームだった。

当初の輸出品の主たるものは「芙蓉手染付」と呼ばれる皿や鉢に等間隔の書割りがあり、そのひとつひとつが芙蓉の花弁のようにになっている磁器である。極東に現れた武装帆船をカラック船と呼んだので、それにちなみ「カラック・ブルー・アンド・ホワイ」 「カラック・ウェア」と呼ばれている。コバルトで中国風の草花文水鳥文、中国衣装をつけた人物、山水文、船の絵などが描かれていた。また当時の絵画(静物画)にも数多く登場する。

初期のシノワズリーはこのような白地に藍色の文様ブームがであったが、やがてバロック調やロココ調の流行とともにカラフルなものが好まれるようになった。日本の伊万里焼、中でも柿右衛門などが好まれるようになる。

第 4 項 ついにマイセンで磁器が作られる

ヨーロッパの磁器への渴望は中国のみで生産できる、硬く、薄く、敲くとチンチンという涼やかな音がする磁器を自分たちで作ろうとする原動力となった。そしてついに 1708 年、ドイツのザクセン王国の首都ドレスデン郊外にあるマイセン窯で磁器を作ることに成功した。

当時のザクセン王フリードリヒ・アウグスト 2 世(強健王)は軍資金を捻出するために中国と同じような磁器を作ることを考え、錬金術師のヨハン・フリードリヒ・ベツガーと化学者の E・W・フォン・チルンハウゼンに磁器づくりを命じた。この当時、磁器は金と同じくらいの価値があったことを意味する。

ドレスデン郊外のマルディツで発見された磁土を使用して硬いやきものを焼くことはできたが、褐色であり半磁器風のものだった。そのため更に良い磁土を探し出し、ついに 1708 年 1 月 15 日に白い胎土の磁器を焼くことに成功したのである。成功の鍵はやはりカオリナイトだった。

ドレスデンの町の中のベヌースバスティにあった窯場を今も窯場のあるアルブレヒト城の場所に 1710 年に移し、「王立ザクセン磁器工場」を設立、国家事業としてヨーロッパ最初の磁器が生産された。更に 1725 年には染付磁器や色絵を製作できるようになる。二度の大戦を乗り越え、今日もなおマイセンでは磁器の生産が続いている。

シノワズリーの流行もあり、当初は中国風のデザインが好まれ、ティーポットやカップアンドソーサーに中国服とクーリー・ハットという帽子をかぶった人物像やパゴダ・デザインと通称する楼閣や東屋風の建物などが色絵や金彩で描かれた。時とともに中国風のものばかりではなく、オリジナルのデザインのものも作っていくようになり、マイセン窯無しではヨーロッパの食器を語ることはできない。

例えば、今なおマイセンには「ブルーオニオン」と呼ばれるコレクションがある。1739 年にクレッチマーが中国の染付の技法を生かし完成させた「ブルーオニオン(青い玉ネギ模様)」であるが、柘榴(ザクロ)を玉ネギと間違えたため、という説明が定説になっている。写實的に描かれた柘榴がやがて馴染み深い玉ネギに姿を変え、桃のような果物、そして竹がバランスよく配置されるようになった。組み合わせられた数の神秘と共にこの図柄そのものの中にも、中国伝来のおめでたい「象徴」が描かれている。



(出所:[ドイツの名窯マイセン 日本公式サイト|ブルーオニオン](#))

図 41 ブルーオニオンのケーキプレート

錬金術師のベツガーは、磁土と釉薬の調合を別々の人間に教えるなどして磁器製作の技術を守ろうとしたが、紆余曲折を経てヨーロッパ各地に技術が広く伝わり、たくさんの窯が作られることになった。詳細は省くが暗殺あるいは産業スパイのような画策がされるほどヨーロッパでは磁器への憧れが強かった。

例えば、フランスの「セーブル」、イタリアの「ジノリ」、イギリスの「ウェッジウッド」などが今なお残る名窯であり、たとえ磁器に対する知識がなくても多くの人に認知されているブランドである。当時これらの窯はいずれも「その国の王室」が後ろ盾となり発展した。それほど窯業には莫大な資金が必要であり、当時の磁器の価値の高さや磁器を保有することがステイタスであったことを示している。

第6節 モンゴル帝国の遺産としての陶磁器

8世紀末頃から中国の磁器は西アジアに盛んに輸出され、その質の高さと美しさは磁器の生産ができなかった西アジアの人々を魅了し続けた。

モンゴルがユーラシアの主要部分を支配した時期に、優れた中国の製磁技術でイラン地域をはじめとする西アジアの人々が好む色合いの磁器を作ろうと生み出されたものが、青花磁器や釉上彩磁器、藍釉白花磁器、孔雀釉磁器などである。その際に用いられた基本的な製磁技術は中国の伝統的な技術であり、中国風の紋様が多く使われている一方で、色彩や器形、紋様構成などは西アジアの工芸品を彷彿とさせるものが生み出されている。

この様にモンゴルによるユーラシアの支配が中国磁器の器形や紋様を大きく変革するきっかけとなり、この時代に中国から西アジアに大量に運ばれた龍泉窯青磁と景德鎮窯青花磁器がイランを中心とする西アジア陶器に多大な影響を与え、その形態や紋様を模倣した青釉陶器や白釉藍彩陶器が盛んに作られるようになった。

中国磁器の技術に、西アジアの青(コバルト)やデザイン、そして遊牧民の文化(特に食事の仕方)が相互に影響し合ったのだが、言い換えれば、モンゴルによるユーラシア大陸の支配が中国の磁器と西アジアの陶器とを相互に変革する契機となったと言える。そして、直接的に技術が伝わった背景はないが、ヨーロッパの磁器への憧れが磁器製作の推進力となり、特に染付(青い染付、青花)の技術とデザインは今尚そのブランドを代表するほどのデザインとなっていることを考えると、モンゴル帝国による東西地域の支配が現在に続く磁器の発展に寄与したとも言え、現代の磁器もモンゴル帝国の遺産と言ってもよいのではなだろうか。

第7節 結論

今後の課題の1点目は、ヨーロッパ北部と南部での陶磁器の発展の相違についてである。ヨーロッパ北部では現在まで続く窯が数多くあり、磁器製作の発展がめざましかった。

た。一方で、ヨーロッパ南部(地中海付近)では北部ほど磁器製作の機運は盛り上がりなかったようである。地中海地域はイスラム文化の影響を強く受けた地域であり、今も陶器が広く作られている。ヨーロッパ南部の陶器の製作に関することとヨーロッパ南北での陶磁器の発展の相違と文化的な背景について今回触れることができなかった。

また今後の課題の2点目は日本の磁器の発展についてである。明代の末期から清代初期にかけての混乱の中、1620～1683年頃は景德鎮での磁器の生産が止まり、オランダ東インド会社は磁器の買い付けができなくなった。そこで、朝鮮の陶工・李参平によって磁器生産が始まりかけた日本に、中国の代替として中国風の染付磁器を注文するようになる。この時期の日本の伊万里焼(正確には有田焼)はヨーロッパの注文を受け、本来の自分たちの趣味趣向ではなく、ヨーロッパの好みに合わせ磁器を制作していた。当初は中国風の染付であったが、やがてバロック調やロココ調の流行の影響からカラフルで金彩を施した柿右衛門タイプの伊万里焼が好まれるようになり、これらが数多くヨーロッパへ輸出された。

19世紀になるとジャポニズム(日本風)が印象派の画家たちにもてはやされるようになったが、これは中国趣味(シノワズリー)の派生であり、このような側面からも中国と日本とヨーロッパ(特にドイツやオランダ)が互いにそれぞれの流行や文化的・社会的な背景が影響し合って深く関係していたことが伺える。東西文化の交流を促した元(モンゴル)の影響が日本にも及んでいたとも言えるが、このことについて今回は多く触れることができなかった。

以上2点を今後の課題とし、後進に委ねたい。

第2章 シルクロードの歴史から見るツーリズムの起源

シルクロードは、ヨーロッパからアジアにわたる交易路のネットワークで、紀元前2世紀から15世紀半ばまで活発に機能していた。以下に、シルクロードの主なルートを示す。



(出所:World Public Economy Organization サイト)

図 42 シルクロード

この道がシルクロードと呼ばれるようになったのは、中国からの主要な輸出品であった絹に由来している。その歴史の中で、ほぼ完全に一つの国家によって制御されていた時期がある。6世紀には突厥帝国(トルコ・ハガネート)、13世紀第2四半期にはチンギス・ハンのモンゴル帝国、14世紀後半にはティムール朝により制御されていた。本稿では、モンゴル帝国やティムール朝がシルクロードをどのように制御し、そこを利用していたキャラバン商人がどのような行動をとっていたのかを研究し、ツーリズムの起源を考察する。

第1節 シルクロードの歴史

本節では、シルクロードのはじまりと繁栄について、第一期が漢とローマが併存した紀元前後数百年、第二期が隋朝、唐朝と突厥・東ウイグルとイスラム帝国が併存した6～9世紀、そして第三期がモンゴル帝国時代の13～14世紀と一般的にみなされている(森安、2020、p115)。その歴史について、第1項は「はじまり」を、第2項は「突厥時代からイスラム化」を、第3項は「モンゴル帝国時代」を、第4項は「ティムール朝時代」について記載する。

第1項 はじまり

シルクロードのはじまりは、紀元前2世紀に中国が中央アジアと外交関係を築いた頃に始まる。紀元前128～127年、漢王朝の大使である張騫は、匈奴に対抗する同盟を結ぶためにバクトリアへと旅立った。かつて匈奴と戦ったバクトリアの月氏族は同盟を拒否したが、張騫の旅は経済的に有益な結果をもたらした。彼の長期にわたる旅の中で、中央アジアの生活や文化が記録され、漢王朝が中央アジアとの貿易関係を確立する手助けとなり、シルクロードの初期段階が形成された。その後、2世紀になると、漢王朝はローマ帝国との協力を拡大した。最初に知られる両国の直接接触は166年に起こり、マルクス・アウレリウスの使者が中国に到着した。この時期がシルクロードの最初の本格的な時代とされており、最初の繁栄期とされている。

(Advantour <https://www.advantour.com/jp/silkroad/history-turkic-khaganate.htm>)

第2項 突厥時代からイスラム化

6世紀の後半には、アルタイから来たテュルクがセミレチエと中央アジアの人々とともに、歴史上初めてユーラシアの大草原と古代の定住文明の土地である、ソグドとブハラを統合して、突厥を形成した。ソグド商人に支えられたテュルクは、地中海への貿易において、ビザンティンのパートナーとなり、都市の成長は隋朝やペルシャとの貿易を復活させた。そして、膨大な量の絹、ビロード、その他の織物、ガラス製品、宝石、錦織、革製品が唐朝からビザンティンへと流れ、ブハラ、サマルカンド、タシケント、メルヴ、カシュガル、スィアブ、シムケント、トルファンに収められた。ソグド人は、その貿易植民地に沿って都市、宮殿、寺院を建設し、音楽、絵画、建築の流行を生み出し、祖国から遠く離れた場所に新しい宗教観を導入した。6～8世紀のソグド人商人、手工業者、農民の交易所や集落は、中央アジアの北東部、新疆、南シベリア、モンゴル、中国北部、西はクリミアに広がった。そして8世紀末から13世紀にかけて、中央アジア、ペルシャ、コーカサス、東ヨーロッパの一部、アフガニスタン、北インド、中央アジアの人々がアラビア人により征服されイスラム化が進んだ。

(Advantour <https://www.advantour.com/jp/silkroad/history-turkic-khaganate.htm>)

第3項 モンゴル帝国時代

13世紀の初頭に、チンギス・ハンに率いられたモンゴル民族が台頭し、ユーラシア全域にまたがる史上最大の騎馬遊牧国家を建国し、ここから一体感のある真の世界史が始まる。つまり歴史世界の「場」が、それまでの各「地域」・「文明圏」を越えて、初めてユーラシア世界全体へと拡大した(森安、2020、p64)。

シルクロードを征服しようと計画していたチンギス・ハンは、モンゴル人の軍事力では、すべてのルートを長く支配することは不可能であることを悟った。そのため、北のルートを

占領したチンギス・ハンは、南のルートに立っているアラビア人とトルコ人の都市を計画的に破壊し始めた。そうすることで、チンギス・ハンは自分の目の届かない場所での取引を止めようとした。中央アジア、ペルシャ、ユーラシアの草原地帯がチンギス・ハンの後継者によって支配された 13 世紀半ばから 15 世紀にかけて、モンゴル帝国の整備された駅伝網によって、ヒト・モノ・文化の交流は空前の盛況を呈した。シベリアから東ヨーロッパにかけてチンギス・ハンの孫、ベルケによって支配されたジョチ・ウルスでは、14 世紀から 15 世紀の間、国際貿易の大部分である中国からオトラルとホラズム、ヴォルガ地域、アゾフ、クリミア、ヨーロッパを経由して行く北の大陸間キャラバンルートのすべてを支配していた。モンゴルの支配は中国と地中海諸国との間のキャラバン貿易を活性化した。しかし、その貿易からのすべての利益はジョチ・ウルスに徴収された。ほとんどのキャラバンは、カスピ海から直接キャラバン、そこから黒海に移動してトランスオクシアナを回った。ホラズムはその北のルートの南側に位置し、地域と大陸間の物資交換の中継地点の役割を果たし続けていた。ウルゲンチは、市場があふれかえるもう一つの主要な貿易の中心地であった。

(Advantour <https://www.advantour.com/jp/silkroad/history-turkic-khaganate.htm>)

第 4 項 ティムール朝時代

中央アジア全体とペルシャからなるティムール朝の創始者であるアミール・ティムールは、モンゴル帝国の大成された広域・多民族支配のノウハウを継承し、特にシルクロードを制御するのに役立った整備された駅伝網をさらに発展させた。一方で、モンゴル帝国時代のセライ・ベルクの破壊とジョチ・ウルスを討伐し、中近東と極東を結ぶ北のルートを見直し、キャラバン貿易はすべて南に移した。中国から中東へのキャラバンは再びオトラル、タシケント、サマルカンド、バルフ、ヘラートを経由して向かうことになった。トランスオクシアナを経由する道路には、物資の流れが一斉に押し寄せ、航路の秩序が回復し、商人たちは織物、ガラス、金属製品を恐れずに運ぶことができるようになった。インドからはヒンドークシュとバルフを経由する道があり、キプチャク土地からシルダリヤ川を渡って、彼らは毛皮、革製品、布地を運んだ。東の黄河からのキャラバンルートは、中国から最も高価な商品である絹、宝石、瑪瑙、真珠、薬、磁器を運んだ。キャラバンに対してすべての都市と停泊地で関税と税金が引き上げられたが、領土内で商品が略奪された場合、その地域の管理者は損失の倍を補償し、ティムールにはその 5 倍の金額を支払っていた。すべてのキャラバン貿易ルートは、首都サマルカンドで合流し、この都市はアジアの十字路となり、大陸の中心地となった。ティムールの計画では、サマルカンドは彼の強力な力を十分に表現した世界で最も美しい都市になることになっていた。贅沢という点では、人間の想像力を超えるもので、今でも彼の力を見ることができる。

(Advantour <https://www.advantour.com/jp/silkroad/history-turkic-khaganate.htm>)

第2節 シルクロード貿易

本節では、シルクロード貿易について、第1項は「貿易品」を、第2項は「ソグド人」を、第3項は「キャラバン商人」を、第4項は「恩恵」を、第5項は「終着点」について記載する。

第1項 貿易品

シルクロード貿易の本質は奢侈品(贅沢品・威信財)貿易である。この点はとりわけ家畜の輸送力に依存する陸のシルクロードについて強調されねばならない。海の船と違って、馬やラクダなどの家畜では重いものは運べないから、陸のシルクロード貿易は軽くて高価な商品、すなわち奢侈品貿易となる。奢侈品の代表は絹織物であるが、ほかにも高級毛織物・高級綿布・毛皮・絨毯、金銀器・宝石類、香料薬品類や嗜好品など幾多の物品がある。それ以外の重要貿易品としては、重くて自分で動く奴隷と家畜がある(森安、2020、p116)。

第2項 ソグド人

ソグド人とは、印欧語族のイラン語派に属するソグド語を話し、現在のウズベキスタンを中心にタジキスタンにまたがる旧ソグディアナを故郷とする農耕都市民である。特に紀元後の一千年紀の中央～東部ユーラシアで国際商人・軍人・政治家・外交官・聖職者・芸能人などとして大活躍したが、1200年頃までにはペルシャ語やトルコ語を話す人々の集団に飲み込まれるようにして史上から消えていった(森安、2020、p 84)。

突厥と東ウイグルの支配時代(6～9世紀)のシルクロード貿易の担い手としてもっとも活躍したのはソグド商人である。ソグド商人の姿はそれ以前もあり、その後には後継者ともいべきソグド系のウイグル商人が活躍している(森安、2020、p108)。

ウイグル商人の特徴としては、「髪は巻いており、目は深く、眉はきれいで濃い。まつ毛のあたりから下には頬髭が多い」というまさしくコーカソイドの身体的特徴を表す記述があった。さらに10世紀以降、中国諸王朝に朝貢(実際は貿易)にやってきたウイグル商人には安・康・曹・石などソグド人特有の姓をもつ者が多い。西トルキスタンのソグド本国はすでに完全にイスラム化しているのであるから、これらウイグル商人の実体は、西ウイグル国に残ったかつてのソグド商人の後裔とみて間違いない(森安、2020、p163)。

第3項 キャラバン商人

紀元後一千年紀のシルクロードで大活躍したのは前項で記載したソグド商人であるが、その跡継ぎがウイグル商人であった。遊牧民であったウイグル人がすぐに商人になったわけではなく、事実上西ウイグル国人となったソグド商人の後裔が、異国からはウイグル商人と呼ばれたのである(森安、2020、p123)。

シルクロードを通じたヒトの移動によって奢侈品というモノだけでなく、さまざまな言葉・情報が行き交い、天文学・暦学・医学・薬学・製紙法・養蚕業・印刷術・音楽・舞踊・サー

カスなど、ありとあらゆる文化・字術・芸術が交流した。しかし、現実には過酷な自然環境や盗賊などの横行する危険な場所の往来であり、シルクロードを通じた交易はハイリスク・ハイリターンの営みであった(森安、2020、p124)。

榎一雄は「シルクロード国際貿易史の特質」と題して昭和 60 年正月に行った昭和天皇への御進講草案を残しているが、そこでは「途中の自然の厳しさ並びに人間的災害と申すべきことの存在」をシルクロード貿易の第一の特質とし、こうした困難と危険を避けるために「何十人或いは何百人かの団体を組み、数百頭の駱駝や馬に荷物も積み互いに協力して旅行の安全を図った」と述べ、このような形態のキャラバンを組んだことが第二の特質であるとしている。さらに第三の特徴としていわゆる朝貢貿易を挙げ、「朝貢は諸国諸民族の支配者が行うものでありますが、実際は支配者ばかりでなく、その支配者の一族或いはその国の有力者もこれに加わり」、「理に聡い商人達がこの制度を見逃す筈はございません」と述べている[榎 1993]。(森安、2020、p125)

つまり、キャラバンには国家間の公的なもの(公式の使節がいる)だけでなく、朝貢の権利をお金で買った地方有力者や商人たちが編成する私的なものもあったこと、キャラバンの過酷さは、断崖絶壁など道路の険悪、砂嵐、酷暑酷寒、水不足等の自然条件だけでなく、治安の乱れ、盗賊の来襲、警備の押し売り、関税の徴収などという人間的災害にも求められること、それゆえに個人や少人数の旅行者は、大規模で武装したキャラバンに参加するためキャラバンの団長に入会金を支払い、旅行中は絶対服従を誓ったという。一方、団長の方は、目的地や途中の立ち寄り先や旅程の大綱を示して団員を募り、一定数に達したところで好日を選んで出発する。団長には盗賊等の危険から団員を守ることをはじめ、おそらく取引などについての団員相互の紛争を防止する責任を負うなどの義務があった。目的地に着くと個人や少人数で参加した団員は、次の目的地に向かう別のキャラバンに応募して旅を続けたのである(森安、2020、p125)。キャラバン商人を示す。



(出所:風の旅行社サイト)

図 43 キャラバン商人

第 4 項 恩恵

シルクロード貿易の本質は軽くて高価な奢侈品の貿易だからといって、奢侈品の買えない一般庶民には無縁だったかという決してそうではない。多数のキャラバンの団員が宿泊すれば、旅館や民宿が儲かる。旅館では多くの一手がいるから雇用が生まれる。そして旅館にさまざまな食料・燃料を供給したり交換用の駄獣を納入したりする農民・牧民が儲かる。馬・ラクダの装備からバッグ・水筒まであらゆる旅行用品の販売・修繕をする商人・職人が儲かる。武器を売ったり修理したりする商人・職人が儲かる。酒屋と薬屋が儲かる。盛り場と売春宿が儲かる。クチャ・コータンには公認の売春宿さえあった。11世紀のガズナ朝に仕えたガルディージーがペルシャ語で著した歴史書にも言及があるように、コータンの売春婦はイスラム側にも知られていた。つまりキャラバンの往来によって、シルクロードの通っている各地方都市のローカルな経済は必ずや潤ったはずなのである。しかし、キャラバンの頻度や社会生活との関係の明確な記録は十分には残っていない(森安、2020、p129)。

キャラバンの宿泊場所はキャラバンサライと言われており、ナボイから 23km のところに、11 世紀のかつての壮大な宮殿、「皇帝の要塞」を意味するラバド・マリクキャラバンセライの遺跡がある。地元住民は残りのポータルを「ブハラ門」と呼びました。ラバド・マリクは、11～12 世紀にモヴァラウンナフルの土地を所有していた、カラハン朝のテュルク統治者の要塞化された草原の住居でした。モンゴルが中央アジアを征服した後の 13 世紀から、18 世紀の初めまで、ラバティマリクは貿易キャラバンが宿泊するためのキャラバンサライとしての役割を果たしていた。(National PR-centre

<https://uzbekistan.travel/ja/o/%E3%82%AD%E3%83%A3%E3%83%A9%E3%83%90%E3%83%B3%E3%82%B5%E3%83%A9%E3%82%A4%E3%83%A9%E3%83%90%E3%83%88-%E3%83%9E%E3%83%AA%E3%82%AF/> 2024 年 11 月 19 日)。



(出所:National PR-centre サイト)

図 44 ラバト・マリクキャラバンセライの「ブハラ」の門

第 5 項 終着点

シルクロードと日本との繋がりには数多くある。青銅器も鉄器も車輪も、あるいは馬も仏教も粉食文化も、中央ユーラシアのシルクロードによって中国にもたらされ、さらに朝鮮・日本に到達したものだ。前近代の日本文化は、稲作と発酵食品と漢字文化を中国から受け入れた以外、ほとんどがシルクロードの恩恵をこうむってできあがったと言える(森安、2020、p198)。

第 3 節 モンゴル帝国の遺産とツーリズム

本節では、モンゴル帝国の遺産からツーリズムの起源について考察する。第 1 項は「ツーリズムの定義」を、第 2 項は「ツーリズムの起源」について記載する。

第 1 項 モンゴル帝国の遺産

ティムールは、モンゴル・システムを尊重・踏襲した。例えば、チンギス・ハンが定めたとされるヤサ(群律)を奉じ、重大な国事はクリルタイ(大集会)を開いて協議・決定した。これに限らず、さまざまな面において、ティムール権力はモンゴル以来の方式を遵守した。ティムール朝という権力体は、その組織・運営・実行といった堅い側面において、モンゴ

ル帝国と一連の枠組みのなかに大きくはあったといってさしつかえない(杉山、2016、p277)。モンゴル帝国がシルクロードを制御するために駅伝網を整備させた。その駅伝網もティムール朝は継承し、シルクロード貿易を通して、文化や民族そして宗教の融合による更なる繁栄を成し遂げた。

青いタイルを敷き詰めた幾何学模様のイスラム建築と、抜けるような空の青が調和する古都サマルカンド。その美しさは「青の都」「サマルカンドブルー」などと称され、シルクロードの中心都市として栄えてきた。紀元前から文明の交差点として発展してきた街は、1220年にチンギス・ハンの攻撃により廃墟となった。街をよみがえらせたのは、ウズベキスタンの英雄アミール・ティムールである。ティムールはサマルカンドを帝国の首都とし、美術・建築技術の粋を集めてイスラム世界に名だたる都市へと復興させた。また、ティムールの孫のウルグ・ベクの指導のもと、東洋の科学の中心地としても発展。市内にはこうした中世の建築物や遺跡がいくつも現存しており、2001年にはシルクロードの交易によって栄えた「サマルカンド-文化交差路」としてユネスコの世界遺産に登録された。その中の、代表的な建造物が立ち並ぶレジスタン広場の画像を示す(クラブツーリズム

https://www.club-t.com/ct/kanko/guide/abroad/info/a_113/ 2024年11月19日)。

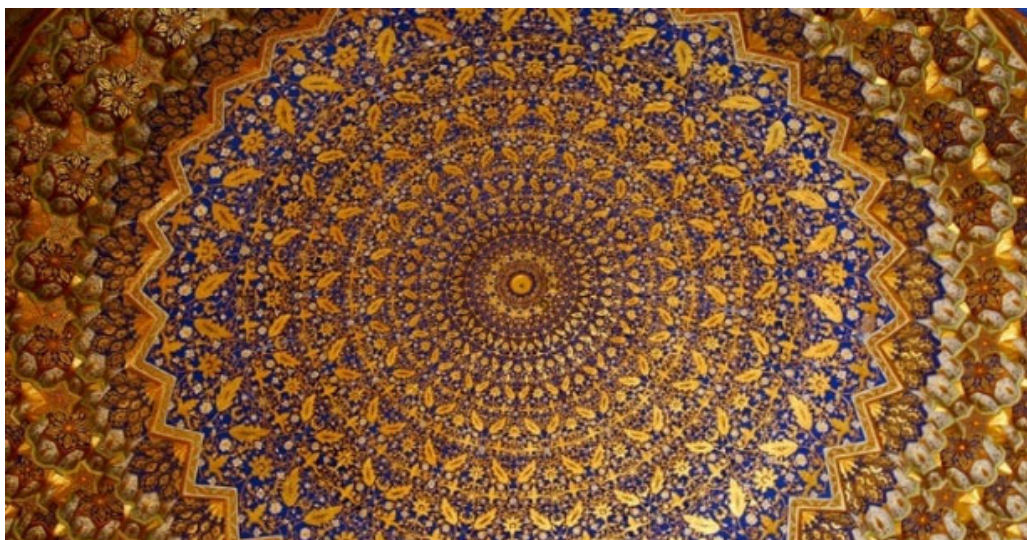


(出所:クラブツーリズムサイト)

図 45 レジスタン広場

レジスタン広場には3つの壮大なメドレセ(神学校)が並んでいる。ウルグベク・メドレセは皇帝ティムールの孫、ウルグ・ベクによって建てられたもので、この広場の最も古いメドレセである。ウルグ・ベク自身も天文学者で、数学と天文学の中心地であるこの場所で、自らも教鞭を取ったといわれている。シェルドル・メドレセは門に描かれたライオンのモチーフが有名。偶像崇拝を禁ずるイスラム教において、独特の存在感を放っている。ティラカリ・メドレセは「金で装飾された」メドレセ。その美しさは、サマルカンドの繁栄を体現しているともいえる。その魅力的な特徴は、モスクの天井に施された金色の装飾である。幾何学模様やアラベスクといった伝統的なデザインが織り込まれ、細部に至るまで精巧に作られた天井は見る者を圧倒する。日中、陽光が降り注ぎ、その光を反射して室内全体が黄

金色に輝く様子は、息をのむほどの美しさである。金色はイスラム建築において神聖さや豊かさ、天上の楽園を象徴する色とされている。ティラカリ・メドセの金色の天井は、このモスクが神聖な場所であり、学びと祈りの場として、いかにこの地の人々にとって大切な場所であったかを物語っている。ティラカリ・メドセの画像を示す(クラブツーリズム https://www.club-t.com/ct/kanko/guide/abroad/info/a_113/ 2024 年 11 月 19 日)。これらのティムール朝時代の建造物はシルクロードの交易によって栄えた首都サマルカンドに今も残っている。



(出所:クラブツーリズムサイト)

図 46 ティラカリ・メドセの天井

第 2 項 ツーリズムの起源

近代旅行の始まりは、17 世紀から 18 世紀にかけて、イギリスの貴族や豊かな上流階級の子弟の学業の終了時に、国際人としての教養を身につけるために行われたヨーロッパ大陸への旅行のことである。ヨーロッパ大陸周遊修学旅行ともいわれ、当時盛んに行われた。自らの意思で自発的に行われた旅行と言われている(安田、2021、p14)。

日本では旅行を指す際に、観光あるいはツーリズムという言葉を使用するが、どちらも同じ意味として扱われることが多い。ただ、厳密には、観光とツーリズムで意味が異なる。そして、経験できることも違う。ツーリズムは、英語の Tourism を語源とした言葉で、旅行全般を指す。つまり、観光よりも範囲が広い。そして、何らかのテーマがある旅行を指すことが多い(タビノト https://tabinoto.jp/column/article/00131493#google_vignette)。

国連世界観光機関(UNWTO)が「レジャー、ビジネス、その他の目的で、連続して1年を超えない期間、通常的生活環境から離れた場所を旅行したり、そこで滞在したりする人の活動」(UNWTO「観光統計に関する勧告 1993」)をツーリズムと定義付けている(安田、2021、p14)。

日本では、欧米の先進国から始まった個人の興味関心を探求する、そこでしかできない感動体験を求める多様なツーリズムが生まれ始めており、ニューツーリズムと呼ばれている。その分類にはエコツーリズムやグリーンツーリズム、カルチャーツーリズム、産業ツーリズムなどがある(安田、2021、p14)。

UNWTO が定めたツーリズムの定義にあてはめると、シルクロードを旅したキャラバン商人や旅人は、一種のツーリズムの体験者であると言える。シルクロード時代のツーリズムの特徴は、奢侈品(贅沢品・威信財)を中心にした貿易であり、旅の途中で豪華な建造物や壁画、奢侈品などに触れる体験や感動を得ていたと考えられる。時代は変わっても人間の本質は不変である。そこにツーリズムの起源があると考えられる。

第4節 結論

本節では、モンゴル帝国やティムール朝がシルクロードをどのように制御し、そこを利用していたキャラバン商人がどのような行動をとっていたのかを研究し、ツーリズムの起源を考察してきた。以下にまとめを記載する。

モンゴル帝国は、広域・多民族支配のノウハウ、特にシルクロードを制御するために整備された駅伝網を活用した。ティムール朝の創始者であるアミール・ティムールは、その駅伝網を継承し、シルクロードを通して文化や民族そして宗教が融合することで更なる繁栄を成し遂げた。その痕跡は、今もなおサマルカンド市内に中世の建築物や遺跡がいくつも現存しており、2001年にはシルクロードの交易によって栄えた「サマルカンド-文化交差点」としてユネスコの世界遺産に登録され、現在の旅人を魅了している。

近代ツーリズムの始まりは、17世紀から18世紀にかけてイギリス貴族や豊かな上流階級の子弟の学業終了時のヨーロッパ大陸周遊修学旅行と言われている。しかし、ツーリズムの定義によると、シルクロードを旅したキャラバン商人や旅人も、一種のツーリズムの体験者であり、旅の途中で豪華な建造物や壁画、奢侈品などに触れる体験や感動を得ていたと考えられる。ツーリズムの起源はシルクロードにあると考えられる。

最後に、本研究から一つの可能性を示したい。観光立国を掲げている日本は、古き良きに時代の建造物や様々な文化が魅力である。その魅力を残した上で、シルクロード貿易でキャラバン商人が果たした役割を、訪日外国人や在日外国人に担ってもらうことで、民族や文化そして宗教が融合し、新たな魅力を蓄積することができるのではないだろうか。その取り組みが、訪日外国人数の安定した増加をもたらし、観光産業が日本を支える基幹産業へと育成することに繋がるのではないだろうか。そして、この取り組みは在日外国人数の増加にも繋がり、日本が抱えている少子高齢化への対策になると言えるのではないだろうか。あくまでも仮説の域を出ない提言であるが、今回の研究を通してその現在の意義を上記の通り考察して、本研究を終えることとする。

第3章 モンゴル帝国の食文化

本章では、13世紀におけるモンゴル帝国の建国以来、その領地拡大とともに各地域との文化的な交流が行われた。ここでは、モンゴル帝国が食文化において近隣諸国及び後世に与えた影響について、近隣諸国の料理と比較して考察する。

第1節 モンゴル料理の特徴

モンゴル高原では古来より幾多の集団が主役の座を交代しながら遊牧の暮らしをしてきた。彼らの食生活は定住しながら農耕を基盤とする人々に比べると動物性の食材が中心であり、野菜類の接種が少ない。彼らは食生活を夏季/冬季とその季節によって変え、その中心は主に夏季に食される乳を原料にした食品類と、主に冬季に食される肉を原料にした食品類に区分される。また、その色を表して「白い食べ物」と「赤い食べ物」と呼んでいる。以下にその特徴を記す。

第1項 「白い食べ物」-乳製品

白い食べ物とは乳(五畜と呼ばれる家畜-羊、牛、馬、山羊、駱駝)を原料とした食品類(チーズ、ヨーグルト、油脂類)や飲料類(乳茶、馬乳酒など)。古くから発酵食品としてのたん白源の摂取に加え、乳茶などは生水の代わりとして水分補給の役割を果たしていた。乳製品の種類は原料、発酵工程、気候風土により様々であり、たん白、水分、脂分を十分に摂取することができたものと思われる。

また、小長谷(2005、p.121)によると、モンゴルのチーズはヨーロッパの多様なチーズと比較すると、熟成を必要としないので短時間で作られるが、最終的に何日も乾燥されることによって、保存食品として栄養を素早くとれること、また加工工程で「塩漬」がなく、塩辛くないので主食として大量に食べることができるなどが特徴である。微生物学的な見地から見るとモンゴルの乳製品はほぼ30種類であり、そのうち日常的なものは10数種類、現在ほぼ毎日食べられているのは5種類前後存在し、古くからの伝統的な食材が現在も喫食されているのが特徴である。

第2項 「赤い食べ物」-肉製品

乳製品が「白い食べ物」と総称されるのに対して、その肉類は「赤い食べ物」と言われる。

伝統的に夏季には多様な乳製品を食べ、肉類は日持ちのしない夏ではなく保存しやすい冬季にメインの食材となる。夏に肉を食するのは来客、宴席など一気に大勢で食べる時などである。その内訳は羊が約5割と圧倒的であり、その次が牛で約3割、残りがそ

の他、また馬肉は主に一部のエリア/民族(カザフ族)で限定的に喫食されている(小長谷、2005、p.166)。

その調理法は生食はなく「焼く」「煮る」「蒸す」がメインであり、古くは鍋がなくとも石焼や動物の体を皮の袋とみなして鍋代わり利用する調理法も存在した。また、保存食としてボルツという乾燥肉に仕立てスモークジャーキー風に食したり、肉節として刻んだり粉末にして「だし」として利用されている(小長谷、2005、p.193)。

羊の伝統的な解体法は「草原に一滴も血を流してはいけない」であり、これは「チンギス・カンのお触書として記されている草原の掟」(石井、1997、p.30)としてあることから、野菜類の摂取は少ないが、内臓、血などを余すところなく摂取することによりビタミン類などバランスの取れた栄養素が摂取されているものと考えられる。

第3項 香辛料

モンゴル料理は基本的に香辛料を使わない文化である。これはモンゴルの気候が影響していると考えられる。歴史的にモンゴル料理は塩以外の味付けを行わずに香辛料を用いない肉料理が卓越してきた。ヨーロッパへ東南アジア産の香辛料が導入されたのは、痛みかけた肉を調理するうえで香辛料が必要であったと推測されるが、このようなヨーロッパの肉食文化に対して、モンゴルでは冬は日中の最高気温は常に零下であり、肉が腐るという心配はなく、自然にチルド状態で保存できる。こうした環境に依存して肉を食べている限り、香辛料は必ずしも必要とはしなかった。よってモンゴル地区での香辛料の発達は限定的であったと思われる。また、塩以外には、ニラやネギなどモンゴル高原に野生している草類を調味に活用することもある。(小長谷、2005、p.159)

第4項 その他の食材

モンゴル料理では野菜類の摂取は少ないが、小麦を使ったボーズ(小麦粉の皮に挽肉を包んで蒸したもの)や麺類は食されモンゴル料理の代表となっている。小麦、大麦、キビ等はその地で農耕で栽培されたものと、貿易によってもたらされたものを使用している。

また、「黒韃事略」「元朝秘史」などの史料によると川魚の記載もあることから、魚肉は昔からモンゴルの河川や湖沼地域を中心に喫食されていたものと考えられる。

第2節 モンゴル帝国の食生活の特徴

第1項 動物源主体の食生活

南宋の彭大雅、徐霆が13世紀にモンゴル高原を旅した際の「黒韃事略」という見聞録によると、「その家畜は牛、馬、犬、羊、駱駝がいる」とある(犬は食用ではない)。後の部分に山羊も出てくるので現在の五畜である。それによると「普段は羊を食べ、牛がそれに続く。馬は大きな宴会以外は屠らない」とあり、食べ方については「焼いて食べるのが9割、煮て食べるのは2-3割、味付けは塩のみ」だという。鍋があまり普及していなかった当時は焼き料理が盛んだったのかも知れない。また、五畜以外にも半猟半牧であったモンゴル人にとって狩猟は重要な食料獲得手段であり、獲物としてウサギ、鹿、猪、タルバガ、アルザリ、ガゼルなどが挙げられている(白石、2015、p.187-188)。

このように、モンゴル帝国の食生活は家畜の畜酪で乳・畜肉類を食べ、かつ香辛料をあまり使わずに塩のみのシンプルなものであったと推察される。

代表的な料理の「羊の腿焼き」はチンギス・ハンが好んで食したとされており、言い伝えによれば、チンギス・ハンが戦争に明け暮れていた時に、料理人たちがすぐさま食を供するために丸焼きをやめて一番美味である腿だけを焼いて差し上げたのが始まりとされる(小長谷、2005)

第2項 草原での農耕作物

モンゴルの遺跡(アウラガ遺跡、カラコルム遺跡)の発掘による白石ら(2015)の調査によると、13-14世紀に栽培されていた穀物として小麦、大麦、キビが多く、また、モンゴル高原を旅した道教の師長春真人の弟子が記した「長春真人西遊記」には、チンギス・ハンの后妃の家ではキビや小麦粉などの穀類が食されていた事実が記されている。小麦粉は遠く天山方面から西域のキャラバン隊によって運ばれてきたものだという(白石、2015、p.202)。

また、小長谷(2010、p.9-138)によると、モンゴル高原における農耕の歴史は新石器時代に始まり、青銅器時代以降に発達する。青銅器時代から初期鉄器時代や匈奴のころになるとキビの実物が城塞址や墓などから発見されている。(白石、2015、p.202)

チンギス・ハンの祭祀をしていたと思われる跡地からも鉄製の武器を作っていた工場の跡と共に恐らく職人集団のための農地と思われる跡が確認されており、モンゴル高原でも歴史的に小規模な農耕は行われ続けていた。(小長谷、2005、p.253)

植物源は昔から栽培されていた小麦、大麦、キビなどと、貿易によってもたらされた小麦などの穀物類で賄われていたものと推察される。

第3項 宮廷料理

小長谷によると「宮廷料理は養生を念頭において皇帝に献じられるものであるから、コック長はそもそも医師でもある。」とある。そのノウハウは元代の医師忽思慧によって皇帝文宗に献上された薬膳の書「飲膳正要」という本にまとめられており、「当時のモンゴル人の料理が記されているばかりではなく、トルコ語、ウイグル語、ペルシャ語、アラビア語などが確認され、元代において広域的な食文化の交流があったことがわかる」。(小長谷、2005、p.199)

また、「そこには九五種の宮廷料理が紹介され、その中にはスープ、粉、羹、麺、粥、饅頭、焼餅などが紹介されているが、そのうち九割が羊肉や羊の臓物の料理で占められている」とあり、いかにその滋養が重視されていたかが容易にうかがわれる(小長谷、2005、p.199)。

以上のように宮廷料理は滋養を付けるための豪華な内容であるものの、材料は羊がメインであり、味付けも香辛料は少なく、塩中心のシンプルな料理であったと推定される。

そのようなモンゴル帝国の料理に対して近隣諸国の料理はどのような特徴を持っていたのか。ムガル帝国、オスマン帝国の料理を例として、その共通性及び相違性を考察する。

第3節 周辺諸国の料理の特徴

第1項 ムガル帝国の料理(北インド料理)

ムガル帝国の料理、今でいう北インド料理は、常に西からの異文化を受け入れる入り口となっていたせい一口では言えない多様な料理がある。特徴としては、ムガル宮廷で育まれた料理の数々-カシューナッツ、アーモンドのペーストやクリームなどを用いたコクのある料理であるが(小磯、2006、p.47)、その特徴は豊富な香辛料を様々な形で使うことである。香辛料とは生のハーブから植物の根、葉、種子などを乾燥させたもの、またそれを粉に引いたものなど様々である。インドでは乾燥させた香辛料をマサラと総称し、料理の香りづけに使われ、いわゆるカレーの調味料であるガラム・マサラに使われる香辛料は、コリアンダー、クミンシード、黒胡椒、シナモン、カルダモン、クローブが基本であり、これらのスパイスミックスが料理を特徴づけている。

小磯(2006、p.99)によると、発掘によって集められた資料によれば紀元前3千年後半に今日のパキスタンからインド北西部に栄えたインダス文明を担った人々は、大麦、小麦、レンズマメ、ヒヨコマメなどの豆類、牛や山羊、あるいはカモシカなどの各種動物の肉、ナツメを初めとする果物を食し、菜種、ゴマ、アマニなどの油脂植物からも油を採取していた。牛、羊、山羊、豚、鶏、水牛の骨が出土していることから、これらの動物も食していたと推察され、また魚も重要な食料であった模様である。

また、香辛料類は紀元前 3 世紀に南インドの一部を除いたインド統一を成し遂げたアショーカ王が多彩なハーブや香辛料をその原産地である地中海沿岸地方から導入したとされている。

そしておよそ紀元後 5 世紀ころには現在の形に近づいたと言われている。「マハーバータ」の中の食に関する記述によると、ミルク製品はヨーグルト、バター、バターミルクに加工され、日々の食生活に不可欠のものとなっていた。ヨーグルトは大麦やカラスミギとともに食されており、肉とともに調理されることもあった。牡牛や牝牛も祖霊祭の供え物とされ、普通に食べられていた。山羊や羊の肉はクシャトリアの家庭ではよく食べられていたらしい。米と肉を一緒に調理した料理などの記録も残っている。また、当時は森から採取した植物、果物、根菜も重要な食材であった。

所謂料理本と言われるものが 11 世紀以降各地で見られるようになる。12 世紀前半のソーメーシュヴァラ 3 世の「マーナソーッラーサ」は食の百科事典とも言える料理本であり、その中の「アンナボーガ(穀物料理)」の章には菜食や肉食料理のレシピも多数記載されている。

また、イスラムの影響が顕著に見られるようになるのは 8 世紀以降である。イスラムと一口に言ってもインドへはアラブの商人、中央アジアの兵、イランの役人など様々な人々が行き来した。それぞれの地域の食がインドの料理と出会い、影響しあい、より奥深く複雑な味わいを形成していったと考えられる。(小磯, 2006, p105-109)

以上のように、ムガル帝国の料理は古くから豊富な食材と香辛料を活かした料理を発展させながら、イスラムとの融合によりその特徴を作り出していったものと推察する。

第 2 項 オスマン帝国料理(トルコ料理)

今日のトルコの食文化、トルコ料理は中央アジアに起源を持つトルコ人たち、そして中央アジアから南下西進したトルコ人たちを迎えたイスラム世界の文化の伝統、また地中海、アナトリア、バルカンの食材が密接に融合し、交わり合う中で育まれてきた。そのような中でトルコ料理は確立されていったが、イスタンブールを得る前のオスマン帝国の食は素朴なものであったようである。15 世紀末に書かれたオスマン朝最古の年代記の 1 つには、ご馳走を物語るのに、ケバブと砂糖くらいしか登場しない。オスマン朝第 7 代メフメット 2 世がコンスタンティノープルを征服し、これを新たな帝都にしたのちに豊富な食材を用いた、より洗練された料理も発達し始めたようである(鈴木, 2003, p.49)。

乾燥した風土の中で育まれた料理は発酵食品としては乳を用いたヨーグルトが目立つくらいでその品ぞろえに乏しく、調味料も塩とハーブ、スパイスに頼るところが大きかった(鈴木, 2003, p.20)が、16 世紀に入ると遠くはインド、東南アジア方面などの遠方から帝都イスタンブールへ「海上の道」を通した交易により取り扱う食材が飛躍的に拡大しトルコ料理の基盤を作ったと考えられる。

第4節 三か国料理の共通性と相違性

以上、これらの地域の代表的な3か国(モンゴル帝国、ムガル帝国、オスマン帝国)の料理の歴史/特徴を簡潔に記載した。その中で、①塩調味料圏であること、②肉(特に羊肉)が多く食されており羊肉のスープなどがだしとして味質の向上に貢献していること、③乳製品が食用、飲料などで頻度多く登場すること、などの共通性はあるものの、モンゴル帝国の料理が極めて素朴な食文化であったのに対して、ムガル帝国、オスマン帝国の料理は、遥かに多くの食材やスパイス、ハーブ、香辛料類を多用しそのエリアで様々な交流を通して発展をしたものと考えられる。その違い、発展の主な要因として、

(1)、気候、エリア条件の違いからくる相違

気候条件による、肉の保存目的の香辛料の必要性の有無。気候条件の違いによる収穫作物の違い

(2)、遊牧民/定住民の生活様式の違いからくる相違

牧畜/農耕様式の違いにより飼育できる家畜や収穫できる農産物の違い

(3)、交易ネットワークの活用(海上の道(香辛料の道))

中国南海岸からインド洋を通りペルシャ湾、紅海の海の大動脈を通して多くの食素材が入手できた。「この海上の道は中国陶磁器をもたらす「陶磁の道」であるとともに「香料の道」であり」(鈴木 2003、p.119)、その食材の活用を追求したこと。

(4)、宗教的な影響

イスラム教定着後に独自の食文化が発展していったこと

などが挙げられる。

上記のようにイスラム帝国とムガル帝国、オスマン帝国の食文化を比較すると、イスラム帝国は香辛料の使用があまりなく塩中心の質素な味付けの食文化であった。それ故にその周辺諸国に与える影響力は少オスマン・トルコ、ムガル帝国、オスマン帝国は香辛料を使う必然性、農耕から取れる食材や海上交易を通して得られた食材の豊かさなどにより独自の食文化の発展がみられたものと考えられる。

以上、モンゴル帝国の食文化が味付けや料理/メニューで周辺地域に与えた影響は限定的と考えられるが、モンゴル帝国が領土拡大及びそのイメージがその他の地域での影響を与えた例について考察する。

第5節 その他エリアに与えた影響

第1項 朝鮮半島での肉食の普及

朝鮮半島ではそれまで肉食の習慣がなかったが、モンゴル帝国の征服の13世紀以降に肉食が普及していった。趙 阮によると「1260年モンゴルと高麗の和親締結後、高麗に仏教で禁止されていた肉食文化が流入した。」とあり、モンゴル帝国の征服を機に肉食が広まっていったと考えられる。

第2項 ヨーロッパの食文化への影響

ヨーロッパで主に食される「タルタルステーキ」の「タルタル」の語源はモンゴル系のタタール民族である。タルタルステーキは主には馬の生肉が用いられるが、モンゴルでは生肉は食べない。生で刻んで食べるという肉料理をタタール民族の残酷なイメージと合わせて作り出したのではないかという説とモンゴル帝国当時の遊牧民たちが、鞍の下に刀で細かく切った肉を入れた袋を置いて馬に乗り、自分の体重と馬の運動で潰してから味付けをして食べる食習慣がありそこから命名された(wikipedia)、という説など諸説あるが、これらもモンゴル帝国の食文化に与えた後世への影響と言えるのではないか。また、タルタルソースも細かく刻むという意味から同様のイメージで名前が定着したようである。

第3項 日本への食文化の影響

日本で「ジンギスカン」と呼ばれる焼肉料理は日本料理である。羊肉を利用することからモンゴルを想像させ、また、兜のような形状の鉄板を使用することから軍事力を想像させ、チンギス・ハンを想像させることから「ジンギスカン」と命名されたと推定される(小長谷 2005, p.163)。

また、乳飲料の「カルピス」は創業者である三島雲海がモンゴルで体験した乳製品「ジョウヒ」(クリーム状の酸っぱい食品)が元になっていると言われる。

第6節 結論

以上より、モンゴル帝国の料理はその素材や味付けのシンプルさゆえ、料理やメニューの「味付け」に与える影響は少ないが、征服地への肉食文化の普及や、モンゴルを想起させるような後世への「料理名への波及」など、一定の後世への影響はあるものと考察される。

おわりに

モンゴル帝国に関するアジアダイナミズム班の8年目のテーマ「モンゴル帝国の遺産」は、これまでになく研究対象となる地域、分野が広がった。ヨーロッパ、ロシアを除くユーラシア大陸全体に及ぶものとなった。モンゴル帝国自体が史上最大の領域国家なのであるから、後世に与えた影響が宏大なのは当然ともいえる。

それもあって、個々の地域での深掘りを試みたものの、総論の域に留まってしまったり、各論にこだわり過ぎたりした部分もあり、全体の統一感にも欠ける憾みはあるが、ゼミ生ひとりひとりの問題意識と、それに対する探求心により、現代の国際情勢の理解につながる一定の知見は得られたものと考えている。

第1部「モンゴル帝国とティムール朝」では、まず、モンゴル帝国衰退後に中央アジアから西アジアにまたがる空前の大帝国を築いた英雄ティムールが、モンゴル帝国の遺産をどのように受け継いだのかについて考察した。ティムール自身はチンギス・カンの子孫ではないが、その末裔の女性を妻とすることで統治者としての正統性を得た。モンゴル帝国の祖チンギス・カンの聖なる血統を継ぐ者が支配するという統治イデオロギー「チンギス統原理」である。ティムールはその遺産を得たばかりでなく、行政システム、軍制、銀本位制、税制などの統治システムも受け継いだ。さらに、ティムール朝滅亡後、その故地である現イランを中心とした地域に、モンゴルの影響がどのように残ったかについても考察した。

第2部「モンゴル帝国とムガル帝国」では、ティムールの子孫であるバーブルが、祖先の地中央アジアを追われて新天地インドに侵攻、支配し、英国の植民地となるまでムガル帝国としてインドの地を繁栄させた要因について考察した。「ムガル帝国」は「モンゴル帝国」の意とも言われ、モンゴル帝国の後継国家の要素も見出される。支配層がイスラム教徒、被支配民は主にヒンドゥー教徒という関係であったが、モンゴル帝国由来の寛容な宗教政策が帝国の繁栄を実現したとも考えられる。帝国後期に不寛容政策に転じると、衰退の途を辿ることとなった。

第3部「モンゴル帝国とオスマン帝国」では、一度はティムールに滅ぼされかかったオスマン帝国が、その後東地中海の覇権国家となり、ヨーロッパへの脅威となった経過を考察した。オスマン帝国はティムール朝のライバルであり、モンゴル帝国の直接的な後継国家ではないが、トルコ民族はもともと中央アジア起源であり、モンゴル帝国も「テュルク化」を経て大帝国となったのであるから、統治政策に共通点が多く見出される。オスマン帝国も成功した多民族、多文化共生国家であり、その強大な勢力からの回避がヨーロッパの大航海時代を拓く直接的原因となった。

第4部「モンゴル帝国と中国」では、遊牧民族が定住民族である漢民族を支配したメカニズムについて考察した。モンゴル帝国は元朝として漢民族を支配し、漢民族は一度は明朝として復興するが、再度遊牧民族である女真族の清朝の支配に屈する。「華夷思想」「中華思想」をもち、遊牧民族を文化の遅れた「夷狄」とみなす漢民族は、元朝、清朝と二度にわたって少数民族に支配されたのであるが、その時期に、今の中華人民共和

国の版図である広域支配と多民族支配が実現しているのである。その成功要因として、元朝、清朝が民族、出自にとらわれず人材を活用した点、また支配イデオロギーとして平和的な「チベット仏教」を採用した点に着目した。また、モンゴル帝国の統治機構、軍事、経済政策にはその後の中国に受け継がれたものが多い。

第5部「モンゴル帝国とシルクロード」では、東西世界をつなぐ重要な通商ルートであるシルクロードの歴史と機能について考察した。通商ルートは政治的に平和でなければ確保されない。その意味で、モンゴル帝国によって広域的に政治的安定が齎された「パクス・モンゴリカ(モンゴルの平和)」によってシルクロードの安全が保たれ、東西交易、文化交流が実現したのである。その歴史的意義を、陶磁器や食品の流通を中心に考察した。

いずれのテーマも、歴史探求にとどまるものではなく、現代の国際情勢の理解につながる。モンゴル帝国が実現した「経済の自由」「移動の自由」「宗教の自由」は、時空を超えて、世界平和と繁栄を導く普遍的価値である。多極化する世界にあって存在感を高めるインドも、ムガル帝国の版図と比べると、今は宗教対立によってインド、パキスタン、バングラデシュの3つの国に分かれているのであり、インド内部でも宗教対立が深刻となっている。現代中国も、元朝、清朝の「少数民族が多数民族を支配する」構造と逆になっており、チベットや新疆ウイグルでは民族的、宗教的な対立を抱えている。トルコも、イスラム教徒が多い国であるにも関わらず、NATO加盟国としてロシア・ウクライナ情勢に影響力を及ぼし、EU加盟まで模索しているのは、オスマン帝国時代の宗教的寛容政策に遠因が求められるかもしれない。そしてシルクロードの問題は、現代のシーレーンや中国の一路政策にも密接な関係があり、ツーリズムの起源とも考えられる。

また、フィールドワークでは、モンゴル大使館を訪問し、領事部長から直にモンゴル国の歴史と現状を伺うことができた。特に、近代史に翻弄されたモンゴルが、アイデンティティをチンギス・カンに求めていることについては興味深く、その後物議を醸した2024年9月のプーチンのモンゴル訪問の報についても問題意識をもって接することとなった。

さらに、中部大学の和崎聖日先生の講義により、中央アジアにおける遊牧民と定住民の相克、古代遊牧文化と続くイスラム化、さらにソ連支配の影響について、ウズベキスタン为例に、現代につながる貴重な情報と学術成果を知ることができた。本年度は現地に赴く調査ができなかったが、和崎先生が自身で撮影された貴重な現地映像に触れることができたのは、それに代わるものであった。本年度の研究は文献調査が中心となったが、バーブル帝の「バーブル・ナーマ」、雍正帝の「大義覺迷録」など、統治者の残した「肉声」を取り上げ、歴史をリアルに感じ取るよう心掛けた。

総じて、モンゴル帝国の統治の特長、「緩やかな支配」、人種、民族、出自にとらわれず人材を活用する「ダイバーシティ&インクルージョン」には、国際政治のみならず、ビジネス領域でも学ぶところが多い。

「モンゴル帝国の遺産」というテーマはあまりにも対象範囲が広く、課題也多岐にわたり、研究成果としては総花的になってしまった感はあるが、ゼミ生一同、世界の本質を掴むために必要な、過去から現代にわたる広い視座を養う機会になったと考えている。

フィールドワーク記録

フィールドワーク(1): モンゴル大使館

1) 開催日・場所

開催日 : 2024 年 8 月 20 日 15:00-17:00
場所 : 駐日モンゴル大使館
面談者 : 参事官・領事部長 ダワージャルガル
 : 三等書記官 マイチェチェグ・シェベグドルジ
 : 多摩大 金教授以下 7 名

2) 内容

モンゴル大使館の領事部長からの説明コンセプトは以下の 2 点

- (1) モンゴル国としてアイデンティティを歴史に求め、上げることに注力している。
- (2) モンゴルの歴史をみなさんに理解してもらいたい

1. モンゴル国では生徒にどのような歴史を教えているのか

① 義務教育の開始年齢

モンゴルでは、義務教育は 6 歳から開始されます。義務教育は 9 年間続き、6 歳から 15 歳までの子どもたちが対象です。(初等 5 年、中等 4 年) 高等中等教育は 3 年間行われ、その後は大学・専門学校に進学します。

社会主義時代の教育と現代の歴史教育の違いは以下の通り。

- 社会主義時代の教育(領事部長の世代)
 - 原始共産性
 - 奴隸制
 - 封建制
 - 資本主義
 - 社会主義
- 現代の歴史教育
 - 原始時代
 - 古代

- 中世
- 近世、近代
- 現代

② モンゴルの歴史とその始まり

歴史書ではあまり触れられないが、モンゴルの歴史は紀元前 3 世紀の匈奴(きょうど)時代から始まる。匈奴は分裂後、南と北に分かれ、北部の匈奴はハンガリー高原まで進出し、フン族と呼ばれていた。紀元前 209 年をモンゴル国の建国とし、この年を基にして建国年数を数えている。この年をモンゴル人は誇りに思っている。

③モンゴルの歴史研究と日本の関わり

日本ではモンゴルの歴史解明が盛んに行われている。なぜなら、古代のモンゴルには遺跡も文献もほとんど残っておらず、古代の出来事は中国の漢文歴史書に残されている。モンゴル人は漢字が読めないのに対して、日本人は漢字が読めるからだ。日本の歴史研究者 15 名が定期的に大使館で会合(シンポジウム)を開催している。

④チンギス・カンとクビライ・カーンの歴史

モンゴル国内では、大モンゴル帝国を築いたチンギス・カンとクビライ・カーンのことが大きく語られている。第二次世界大戦までは、元寇が日本への最初の侵略として語られていた。

⑤駅伝方式

軍人は一人当たり 10 頭の馬を所有し、乗り換えながら進軍した。これにより、移動と伝達のスピードが非常に速かった。

⑥チベット仏教と戦国時代

15 世紀から 17 世紀は戦国時代であり、チベット仏教の普及が進みました。モンゴル帝国の統一において、チベット仏教は欠かせない要素となった。

⑦領事部長としての苦勞

日本でモンゴル人が罪を犯した際、日本の法廷は通訳として内モンゴル人を使う。しかし、内モンゴル人は中国人であり、モンゴル人ではないため、領事部長はこの歴史認識が日本で不明確であることに強く憤慨しています。

⑧モンゴル国の存続

1644 年、清国ではモンゴル少数民族や満州民族の位置付けとして、清はロシアとの国境を接したくないと考え、ロシアも同様に間にクッションを置きたかったため、両国の利害が一致し、モンゴル国は存続した。

⑨モンゴルの独立と共産主義の影響

1911 年のモンゴル独立時、日本、アメリカ、ソ連に独立信任の要請使者を派遣したが、会えたのはソ連のみであり、ソ連からは尊重する旨の返事を受け取った。このことが、モンゴルが共産主義に近づく一因となる。

2. シルクロードの役割

①中国の絹とシルクロードの始まり

紀元前から、中国の絹はイランやインドで非常に人気があり、主要な貿易手段となっていた。

②フン族とシルクロードの支配

紀元前 200 年頃、フン族(匈奴)はシルクロード沿いの領土を確保し、その影響力を維持するために漢民族との戦争を行なった。その結果、南支線の西シルクロードは漢民族が、北支線の東シルクロードはフン族が占領した。フン族は中国から毎年 1 万反(約 92,400 メートル)の絹を受け取った。

③モンゴル帝国とシルクロードの整備

モンゴル帝国の勢力拡大に伴い、シルクロード沿いの地域が安定し、交通や通信が容易になった。チンギス・ハンはシルクロードを利用して世界貿易を規制しました。彼の法典「Ikh Zasag(イクザグ)」には、「たとえ敵国のものであっても、モンゴル人の領土を通過する貿易団を攻撃してはならない」と規定されており、商人は兵士によって保護され、宮殿で商品が高値で買い取られた。周辺国としてウズベキスタン、カザフスタン、トルクメニスタンが設立され、これらの「スタン」は親戚とされている。

④シルクロードの衰退

シルクロードは東西交易の主要ルートとなり、絹、陶磁器、スパイス、宝石がヨーロッパに運ばれ、金属製品、織物、ガラス製品がアジアに運ばれるなど、活発な交易活動が行われる。しかし、元朝の崩壊とともに強盗や虐殺が始まり、さらにクビライ・ハーンが中国からインドへの海運の道を開いたことや、バスコ・ダ・ガマのインド航路開設などにより、陸路から海路へのシフトが進み、シルクロードは次第に衰退していく。

3. 陶器はモンゴル帝国の文化、芸術の発展に寄与したのか？

陶器はモンゴル帝国においてツールであり、目的ではなかった。クビライ・ハーンは中国南部から職人を集め、生産を集中させた。陶器などの手工芸品の製造や貿易は国家として奨励され、300以上の工場が作られ、シルクロード発展の手段として活用された。

4. 徴税の仕組み

モンゴル帝国時代において、日本のような石高制の税収制度はあまり聞かれない。モンゴルは放牧民族であったため、税収制度の意味があまりなかったのではないかと考えられる。むしろ、敵地を侵略し、そのエリアを統治する長に統治を任せ、エリアごとに何らかの税制があったかもしれない。清の支配下においては、貢物として金銀を納める役務があったが、塩についてはあまり知られていない。西方では岩塩が有名であり、東方では湖が塩分を含んでおり、家畜が塩分補給のために利用していたと認識されている。税についてはモンゴルの口頭法の法典である「Ikh Zasag(イクザグ)」で調べると良いでしょう。

5. その他

① モンゴルの遺跡発掘

過去にモンゴル国内で発掘された遺跡が中国人によって売買された後、中国本土からモンゴル遺跡が出土したと宣伝されることがあった。また、盗難事件が多発したため、モンゴル国内では積極的に遺跡発掘が行われていない。

② 元寇 750 周年記念

九州では元寇 750 周年を迎え、国家シンポジウムを計画している。

③ モンゴル国の首都移転

モンゴル国の首都をウランバートルからカラ・コルムに移転する計画が進行中であり、この計画は隈研吾がデザインを担当している。

④ ウズベキスタン、インド大使館の訪問

モンゴルを研究テーマにして面談を要請しても、ウズベキスタンやインドの大使館では面談に応じないことが多い。

⑤ チンギス・カンの絵画

大使館にあるチンギス・カンの絵はコピーであり、原画は台湾にある。領事部長はたまに台湾に行って原画を見に行くことがある。

⑥ 名前の制度

モンゴル国では国民にファミリーネームを作らせる制度があるが、フン族の名前が多いため、効果がなく、制度の変更が必要とされている。

⑦ モンゴル国としてのアイデンティティ向上

モンゴル国は歴史、教育、文化、貿易などを通じて国力を向上させ、誇りを持って進めていくことに注力している。

フィールドワーク(2): 中央ユーラシアにおけるテュルク・モンゴル系遊牧諸部族の歴史と現在

1) 開催日・場所

開催日: 2024 年 11 月 2 日

場 所: 多摩大学九段サテライト(寺島文庫ビル 1 階「文庫 café みねるばの森」)

2) 内容

1. 講演の背景と自己紹介

- 和崎聖日先生
 - 中部大学人文学部所属、人類学・映像人類学・中央アジア地域研究が専門
 - 日本中央アジア学会の理事を務める

2. 映画「バフシ」について

- 37 分の映画を 35 分に編集
- ウズベキスタンのスルハンダリヤ州とジッザフ州が舞台
- イスラムの装いをしたテングリ信仰(シャマニズム)を扱う

3. ウズベキスタンの民族構成と言語

- ウズベク人が約 80%、タジク人が約 5%(2017 年統計)
- 実際はタジク人(ペルシャ系)が 20-30%、テュルク系ウズベク人が 60-70%程度
- 都市部はほとんどタジク人、村落部はウズベク人が多い

4. ウズベク人の分類

- 定住民系ウズベク人
- 旧遊牧民系ウズベク人
 - 13 世紀のモンゴル侵攻以前に定着したテュルク系諸部族
 - 15 世紀に侵攻し、20 世紀初頭に定住したウズベク部族(92 の部族連合)

5. ウズベクの語源と歴史

- 古代テュルク語の「öz(自分)」と「bek(君主)」から派生
- 14 世紀前半、ジョチ・ウルスの第 10 代君主ウズベク・ハンの名に由来

- ウズベク・ハンのイスラム改宗後、彼に従った遊牧諸部族の総称となる

6. 中央アジアの歴史的変遷

- 8 世紀からのイスラム化(南部から開始)
- 遊牧民の南下と定住化(6 世紀から 20 世紀まで)
- 中央アジア全体のテュルク化

7. 現代のウズベキスタン

- 1924 年に現在の国境が確定
- ソビエト時代の影響(歴史観、民族意識など)
- 独立後のアイデンティティ再構築

8. バフシについて

- 2 種類のバフシ:霊媒(主に女性)と叙事詩の語り手(主に男性)
- 旧遊牧民系ウズベク人の村にのみ存在
- イスラムとシャマニズムの融合

9. 中央アジアの言語と文化の多様性

- タジク語(ペルシャ語)とウズベク語のバイリンガル状況
- 都市や地域へのアイデンティティの重要性
- イスラム文明の中心地としての歴史的役割

10. チンギス・ハンとティムールの評価

- チンギス・ハンは現在のウズベキスタンでは否定的に描かれる傾向
- ティムールは独立後、国の英雄として扱われるようになった
- ウズベク部族の一部はチンギス・ハンの子孫を自称

11. アイデンティティの再構築

- イスラム教が第一のアイデンティティ
- 遊牧文化の再評価の動き
- テュルク系諸民族との連帯意識の高まり

12. 中央アジアの地政学的状況

- ロシアと中国の影響力への警戒
- テュルク系諸国との関係強化の動き

13. 顔立ちと民族的特徴

- 定住民系と旧遊牧民系で顔立ちに違いがある傾向
- モンゴル系、テュルク系、ペルシャ系の混血による多様性

14. イスラム教の影響

- 9-12 世紀:ペルシャ系の大思想家・学者の輩出
- 20 世紀初頭:イスラム改革運動の影響

15. 言語政策と民族意識

- 20 世紀初頭のテュルク語重視の動き
- 1924 年の国境確定時の言語状況

16. 中央アジアの地理的・文化的特徴

- イスラム文明の中心地としての役割
- 内陸アジアの一部としての側面
- 遊牧文化と定住文化の接点

3) Q&A セッションの質問と回答

1. Q: バフシというイスラムの衣をまとったシャマニズムは、モンゴル系で定住民になっていった人たちと地域的に一致するのか？

A: 基本的には別の地域に住み分けられている。村単位で住み分けがされており、方言や結婚の仕方も異なる。

2. Q: 92 もの部族があることに驚いた。差別的なものは根深くあるのか？

A: ウズベクナショナリズムの高まりにより、非ウズベク人が抑圧感を感じることもある。部族間でも互いに軽蔑し合うことがある。ただし、最近は遊牧文化の再評価の動きもある。

3. Q: バフシの家族の話の内容が似ているが、元々同じものを使って分かれていったのか？

A: 口頭伝承で昔から言い伝えられてきたものが、部族の分裂などで類似したり共通したりしている可能性がある。また、イスラム化の過程で共通のパターンができた可能性もある。

4. Q: アラル海周辺のエリアの重要性について。ウズベク人の形成過程は？

A: 13 世紀以前に定住した部族か、15 世紀以降に侵攻したウズベク族かが指標となる。定住民系ウズベク人の詳細な形成過程は不明確。

5. Q: 旧遊牧民系の顔立ちがモンゴル系に見えないのはなぜか？

A: 混血の可能性はある。また、テュルク系とモンゴル系で顔立ちが異なる場合もある。

6. Q: ウズベキスタンではチンギス・ハンをどう捉えているか？

A: 基本的には否定的に描かれている。ただし、ウズベク部族の一部は自分たちの祖先がチンギス・ハンだと主張する人もいる。

7. Q: チンギス・ハンの評価は旧ソ連時代からの流れなのか？

A: ソ連時代の歴史観が影響している可能性が高い。独立後もその傾向が続いているが、現在はアイデンティティの再構築の過程にある。

8. Q: イスラム教とタジク人の関係は？

A: サマルカンドやブハラなどの都市部のタジク人はイスラム文明の形成に大きく貢献した。現在でもイスラム教の中心地としての自負がある。

これらの質問を通じて、ウズベキスタンの民族構成、文化、歴史認識の複雑さがさらに浮き彫りになった。

4) 資料「中央ユーラシアにおけるテュルク・モンゴル系遊牧諸部族の歴史と現在」

多摩大学大学院寺島実郎ゼミ「アジアダイナミズム班」講義 (2024.11.2. 多摩大学九段サテライト)

中央ユーラシアにおける テュルク・モンゴル系遊牧諸部族の歴史と現在

和崎聖日(中部大学人文学部)

モンゴルに引き付けた本作の面白味

・イスラームの装いをした「テングリ信仰(シャマニズム)」



➤ 「テングリ」[モンゴル語]
↓ 「天」「天神」の意味
「タングリ」(tangri) [ウズベク語]
「天」「天神＝唯一神」の意味

・共通する遊牧部族の存在

バフシ(baxshi)

・旧遊牧民地域にいる存在

⇒ 定住民地域にはいない **原則**

・「バフシ」は2種類

① 霊媒 ⇒ 女性 **原則**

② 口承文芸・叙事詩の語り手 ⇒ 男性

原則

【出典】Mirzaev, To'ra. 2000. Baxshi // O'zbekiston milliy entsiklopediyasi. Toshkent: "O'zbekiston milliy entsiklopediyasi" Davlat ilmiy nashriyoti. 1-jild. B.653; 坂井弘紀「バフシとは」(http://akikokitamura.com/works/ec-rainbowafter_0227/ [2025年1月2日最終閲覧])など

本報告の対象／2017年「ユネスコ無形文化遺産」認定

【語源】諸説あり(古ウイグル語説「バフシ」、モンゴル語・ブリヤート語説「バフシャ、バグシャ」、サンスクリット語説「ブヒクシュ」、韓国語説「バクシ」、漢語説「博士」) ⇒ 漢語説が有力

アジア中央の内陸部

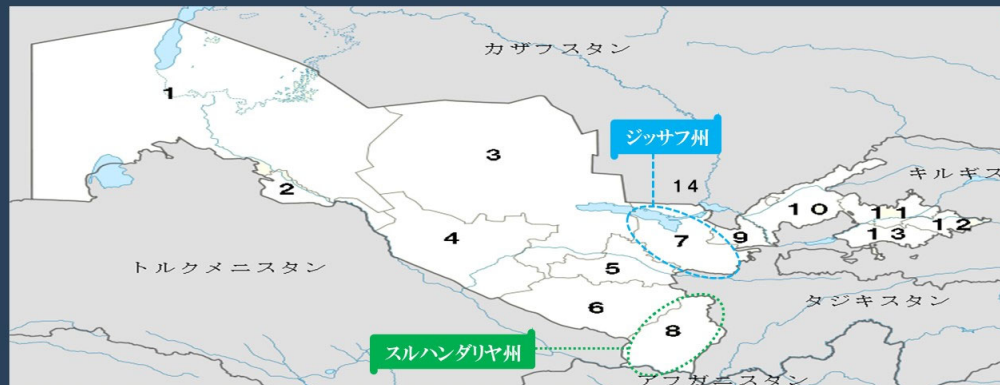


現代中央アジア諸国の原型の誕生(1924年)



【出典】<https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/pr/wakaru/topics/vol94/index.html> (2019年5月10日最終閲覧)

本映画の舞台



1. カラカルパクスタン自治共和国、2. ホラズム州、3. ナヴァーイー州、4. ブハラ州、5. サマルカンド州、6. カシュカダリヤ州、7. ジッザフ州、8. スルハンダリヤ州、9. シルダリヤ州、10. タシュケント州、11. ナマンガン州、12. アンディジャン州、13. フェルガナ州、14. タシュケント市
【出典: <https://i.ytimg.com/vi/68c23AZ5EM8/sddefault.jpg> [2011年1月10日閲覧]とに和崎が作成】

ウズベキスタンの民族構成(2021年)と言語

民族名	割合	思考言語
ウズベク人(テュルク系)	約84%	ウズベク語
タジク人(ペルシア系)	約5%	タジク語
ロシア人(スラヴ系)	約2%	ロシア語
カラカルパク人(テュルク系)	約2%	カラカルパク語
カザフ人、ウイグル人、クルグズ人、タタール人、高麗人、ウクライナ人、ユダヤ人など	約7%	様々な言語

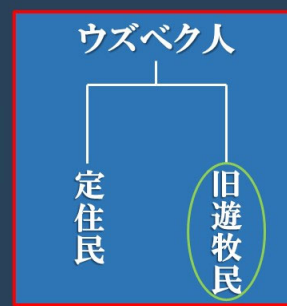
【出典】ウズベキスタン大統領府統計庁 (<https://www.mofa.go.jp/mofai/area/uzbekistan/data.html#section1> [2024年3月1日最終閲覧])

本映画での主役となる集団

・旧遊牧民系ウズベク人



①コンギラト部族、②ユズ部族



図「ウズベク人」の成り立ち

ウズベク人の顔立ちの違い — 定住民系(左)と旧遊牧民系(右) —



「旧遊牧民系ウズベク人」の下位分類

旧遊牧民系ウズベク人(以下にその一部を抜粋)

【出典】①②の解説文:小松久男『ウズベク』『中央ユーラシアを知る事典』p.79(2005年、平凡社)

② 15世紀にこの地に侵攻し、20世紀初頭に定住生活に移行したテュルク系部族、部族意識を残す

テュルク部族

カルルク部族

ラカイ部族

クラマ部族

カタゴン部族

ティムール
やバーブル
の出身部族

バルラス部族

ウズベク諸部族

① 13世紀のモンゴル侵攻以前にこの地に来たテュルク系諸部族、定住民と交わらず半遊牧、部族意識を残す

「ウズベク部族」の下位分類

・詳しくは「表」を参照

➡ 本映画の主演は特に
2番: ユズ部族 モンゴル系→テュルク化
6番: コンギラト部族 モンゴル系→テュルク化

- コンギラト部族は、チンギス・カンの曾祖父カブル・カン以来、モンゴル部族の姻族として有名。
- その一部が、現在のウズベキスタンの領土に相当する地域のうち、スルハンダリヤ州とサマルカンド州、カラカルパクスタン自治共和国に定着。

「ウズベク」(o'zbek)の語源

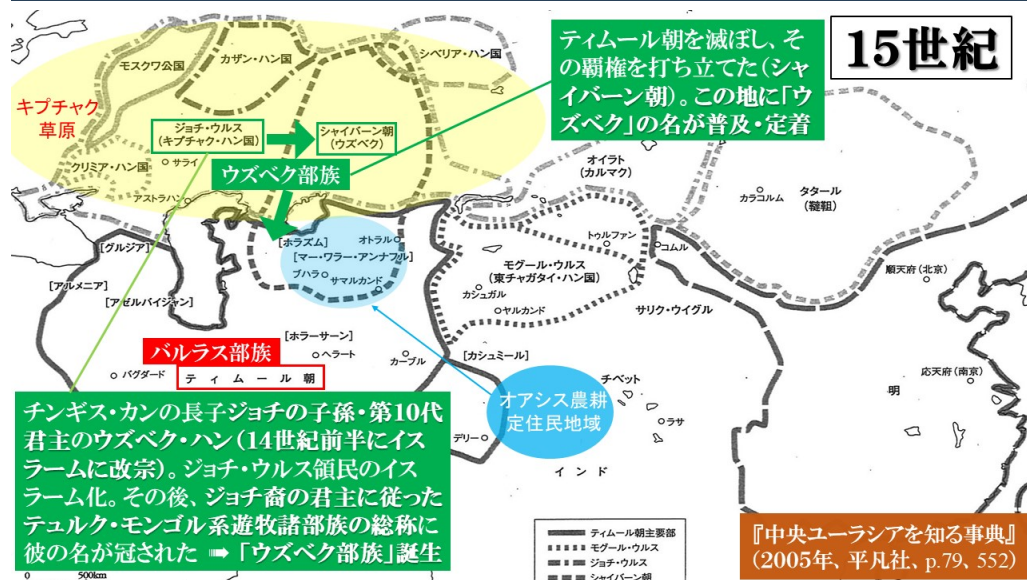
・ 古代テュルク語「スベク」(so'bek) 有力説

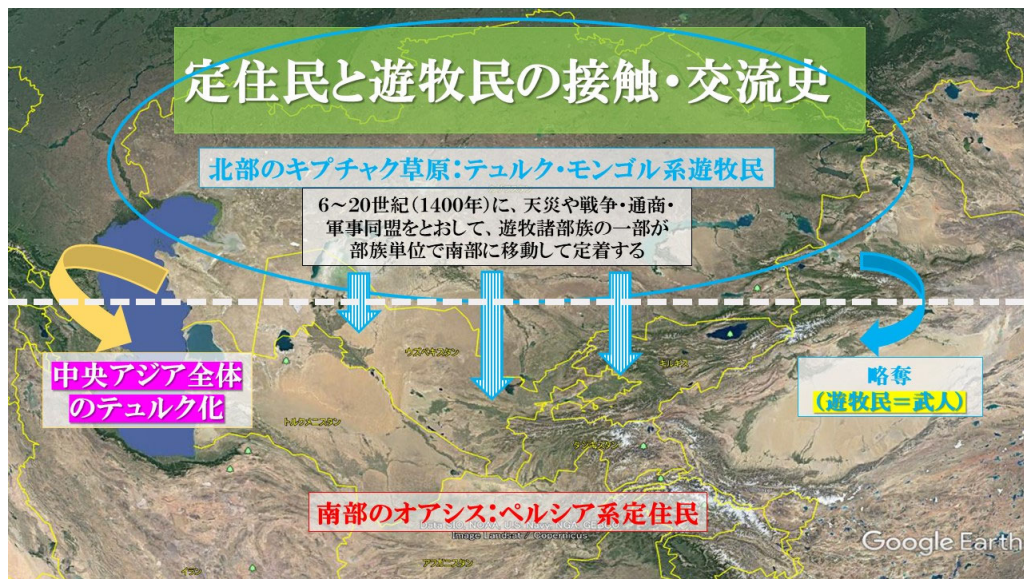
「ス・ベク」: 「ス」(so') = 軍隊、 「ベク」(bek) = 族長、 実践者

⇒ 軍隊の隊長を意味する

⇒ 時代と共に訛り、「スベク」→「ウスベク」(o'sbek) →「ウズベク」

Boboyor, G'aybulla va Farhod Maqsud. 2024. "O'zbek" etnonimi: Millatimiz nomi qanday paydo bo'lgan? // Vatan. 2-son. B.57-63 [民族名『ウズベク』: われらの民族名称はいつ登場したか?]





中央アジアのイスラーム化

・8世紀のアラブ人による征服が契機

① 中央アジア南部の定住民は9世紀までにはイスラーム化

⇒ 旧来の宗教(シャマニズム・ゾロアスター教・仏教等)が駆逐

② 中央アジア北部の遊牧民は後に9～20世紀にイスラーム化

⇒ イスラーム改宗が遅かった

シャマニズム的要素が社会慣行に色濃く残る

「イスラームという外套を着たシャマニズム」と解釈する学説もあり

参考文献一覧

【書籍】

1. Metcalf, Barbara D., Metcalf, Thomas R. 『A Concise History of Modern India 2nd Ed (Cambridge Concise Histories) 』(Cambridge University Press, 2006).
2. 何孝荣『明朝宗教』(南京出版社、2013).
3. 何其敏『中国明代宗教史』(人民出版社、1994).
4. 邱树森『中国回族史』(宁夏人民出版社、1996).
5. 姜公韬『中國通史・明清史・第二章・明太祖の開國規模』(九州出版社、2010).
6. 周燮藩『伊斯教在中国』(华文出版社、2002).
7. 张文德『明与帖木儿王朝关系史研究』(中华书局、2006).
8. 丁毅民『回回民族的来源和发展』(宁夏人民出版社、1983).
9. 陈垣『元西域人华化考[M]』(上海古籍出版社、2000).
10. 姚大力『追寻“我们”的根源:中国历史上的民族与国家意识』(三联书店、2018).
11. 杨怀中『伊斯兰与中国文化』(宁夏人民出版社、1995).
12. 李德洙等编写组『回族简史』(宁夏人民出版社、1978).
13. 荒川正晴 編『構造化される世界 14～19 世紀 (岩波講座世界歴史 11)』(岩波書店、2022).
14. 荒川正晴 編『モンゴル帝国と海域世界 12～14 世紀 (岩波講座世界歴史 10)』(岩波書店、2023).
15. 荒川正晴 編『西アジア・南アジアの帝国 16～18 世紀 (岩波講座世界歴史 13)』(岩波書店、2023).
16. 石濱裕美子『物語 チベットの歴史——天空の仏教国の 1400 年』(中公新書、2023).
17. 大塚修『普遍史の変貌 ペルシア語文化圏における形成と展開』(名古屋大学出版会、2017).
18. 小笠原弘幸『オスマン帝国 繁栄と衰亡の 600 年史』(中央公論社、2018).

19. 沖本克己・菅野博史 編『中国文化としての仏教-新アジア仏教史 08 中国Ⅲ宋元明清』(佼成出版社、2010).
20. 沖本克己・福田洋一 編『須弥山の仏教世界-新アジア仏教史 09 チベット』(佼成出版社、2010).
21. マルコポーロ・愛宕松男訳『東方見聞録』(平凡社、2000).
22. 愛宕松男・寺田隆信『モンゴルと大明帝国』(講談社、1998).
23. 辛島昇 編『南アジア史(新版 世界各国史 7)』(山川出版社、2004).
24. 川口琢司『ティムール帝国』(講談社、2014).
25. 菊池秀明『越境の中国史——南からみた衝突と融合の300年』(講談社、2022).
26. 木谷勤『帝国主義と世界の一体化 世界史リブレット 40』(山川出版社、1997).
27. 木下光弘『中国の少数民族政策とポスト文化大革命——ウランフの「復活」と華国鋒の知られざる「功績」』(明石書店、2021).
28. クロー、アンドレ『イスラーム文化叢書 3 ムガル帝国の興亡』(法政大学出版局 杉村裕史訳、2001).
29. 黒田勝彦、小林ハッサル柔子『文明の物流史観』(成山堂書店、2021).
30. ゲーテ、J.W.『西東詩集』(岩波書店、1962).
31. ツルティム・ケサン、正木晃『増補チベット密教』(ちくま学芸文庫、2008).
32. 小磯千尋・小磯学『世界の食文化 インド』(農文社、2006).
33. 小長谷有紀『世界の食文化 モンゴル』(農文社、2005).
34. 小長谷有紀『アジア読本 モンゴル』(河出書房新社、1997).
35. 小林亮介『近代チベット政治外交史——清朝崩壊にともなう政治的地位と境界』(名古屋大学出版会、2024).
36. 小松香織『オスマン帝国の海運と海軍』(山川出版社、2002).
37. 小松久男 編『新版世界各国史4 中央ユーラシア史』(山川出版社、2000).
38. 小松久男 編『中央ユーラシア史研究入門』(山川出版社、2018).
39. 坂本勉『未完のトルキスタン国家』(講談社、1996).
40. 沢田勲『匈奴 古代遊牧国家の興亡』(東方書店、1996、2015).
41. 白石典之『チンギス・カンとその時代』(勉誠出版、2015).
42. 杉山正明『遊牧民から見た世界史』(日本経済新聞社、1997).

43. 杉山正明『モンゴル帝国と長いその後 興亡の世界史 第9巻(2008)、講談社学術文庫(2016)』(講談社、2008、2016).
44. 杉山正明『「婿どの」たちのユーラシア』(講談社、2016).
45. 杉山正明『興亡の世界史 モンゴル帝国と長いその後』(講談社学術文庫、2016).
46. 杉山正明『モンゴル帝国の興亡(上、下)』(講談社、1996).
47. 杉山正明『モンゴルが世界史を覆す』(日本経済新聞社、2006).
48. 杉山正明『陸と海の巨大帝国 大モンゴルの世界』(角川選書 227、1992、1998).
49. 鈴木董『世界の食文化 トルコ』(農文社、2003).
50. 陳舜臣『世界の都市の物語 イスタンブール』(文春文庫、1998).
51. 寺島実郎 総監修『モンゴル帝国とユーラシア史: 社会人・大学院生・学生の目線からのグローバルヒストリー (多摩大学インターゼミ教育研究業績シリーズ)』(多摩大学出版会、2023).
52. 寺島実郎『人間と宗教——あるいは日本人の心の基軸』(岩波書店、2021).
53. 寺島実郎『大中華圏』(NHK出版、2012、2024).
54. 永田雄三『西アジア史 II 新版 世界各国史 9』(山川出版社、2022).
55. ネルー、ジャワーハルラール『父が子に語る世界史 3 ルネサンスから産業革命へ』(みすず書房 大山聰訳、2002).
56. 野田仁『露清帝国とカザフ＝ハン国』(東京大学出版会、2011).
57. 白寿彝『元代回教人与回教』(宁夏人民出版社、1983).
58. 羽田正『イラン史』(山川出版社、2020).
59. P.N、チョプラ『インド史』(法蔵館 三浦愛明訳、1994).
60. 平野聡『清帝国とチベット問題——多民族統合の成立と瓦解』(名古屋大学出版会、2004).
61. 平野聡『大清帝国と中華の混迷』(興亡の世界史 第17巻)講談社、2007).
62. 马明道『伊斯兰对中华文化之影响』(台湾中国文化大学出版社、1982).
63. 松下憲一『中華を生んだ遊牧民 鮮卑拓跋部の歴史』(講談社、2023、2024).
64. 間野英二『世界史リブレット人④⑥ バーブル ムガル帝国の創設者』(山川出版社、2013).

65. 間野英二『バーブル・ナーマの研究 I 校訂本』(松香堂、1995).
66. 三上次男『陶磁の道—東西文明の接点をたずねて—』(岩波書店、1969).
67. 三上次男 他『出光コレクションの名品から 陶磁の道』(出光美術館、2000).
68. 三杉隆敏『マイセンへの道 東西陶磁交流史』(東書選書、1992).
69. 森茂男 編『イランとイスラム 文化と伝統を知る』(春風社、2010).
70. 森安孝夫『シルクロード世界史』(講談社、2020).
71. 安田亘宏『インバウンド実務主任者認定試験公式テキスト』(一般財団法人全日本情報学習振興協会、2021).
72. 山川徹『カルピスを作った男』(小学館、2018).
73. 歴史学研究会『世界史史料 2 南アジア・イスラーム世界・アフリカ』(岩波書店、2009).
74. ロビンソン、フランシス『ムガル皇帝歴代誌インド、イラン、中央アジアのイスラーム諸王国の興亡』(創元社 月森左知訳、2009).
75. 早稲田大学モンゴル研究所(編)『モンゴル史研究——現状と展望』(明石書店、2011).

【論文】

1. Gier, Nicholas F. 『From Mongols To Mughals: Religious Violence In India 9th–18th Centuries』(University of Idaho, 2006).
2. Gopal, Mohan 『India & Mongolia in the Middle Ages - More Than Just a Connection』(Ancient History of Asian Countries, p.56–60, 2019).
3. Lefèvre, Corinne 『Beyond diversity: Mughal legal ideology and politics』(Law Addressing Diversity – Part2, Walter de Gruyter GmbH, p.116–141, 2006).
4. Naranzul, B. & Mendee, J. 『Why Are India And Mongolia Strategic Partners?』(Friedrich-Ebert-Stiftung Mongolia & Mongolian Institute for Innovative Policies, Mongolian Geopolitics, p.172–183, 2022).
5. Pradhan, RP 『Small is Not Vulnerable: India in Mongolia's Third Neighbour Dilemma』(Electronic Journal of Social and Strategic Studies, Volume 2, Special Issue IV, p.42–63, 2021).

6. Sood, Gagan D. S. 『A political sociology of empire: Mughal historians on the making of Mughal paramountcy』 (Cambridge University Press, Modern Asian Studies, p.1-42, 2021).
7. 乌云高娃『元朝统一多民族国家治理及启示』(中国社会科学报. 第2401期、2022).
8. 张文德『论伊斯兰教对中亚帖木儿王朝的影响』(贵州师范大学社会科学版. p.44、1995).
9. 张文德『论伊斯兰教对中亚帖木儿王朝的影响』(《历史档案》第1期、2007).
10. 薄音湖『北元与明代蒙古』(内蒙古大学学报. 第1期、1994).
11. 方铁『蒙元经营西南边疆的统治思想及治策』(中國邊疆史地研究 12 卷 1 期. p.15-23、2002).
12. 姚继荣『明代西北马政机构置废考』(青海师范大学学报. 第2期、1993).
13. 井谷鋼造『トルコ民族の活動とモンゴル支配時代』(山川出版社、「イラン史」p.47-105、2020).
14. 小笠原弘幸『オスマン王権とその正統性——血統、聖性、カリフ』(岩波書店、岩波講座世界歴史 13「西アジア・南アジアの帝国 16～18 世紀」、p.145-、2023).
15. 川口琢司『キプチャク草原とロシア』(岩波書店、岩波講座世界歴史 11「中央ユーラシアの統合—9-16 世紀」 p.275-302、1997).
16. 川口琢司『カラチュの時代—ティムール朝を中心に』(岩波書店、岩波講座世界歴史 10「モンゴル帝国と海域世界——一二～一四世紀」 p.295-311、2023).
17. 久保一之『ティムール朝とその後——ティムール朝の政府・宮廷と中央アジアの輝き』(岩波書店、岩波講座世界歴史第 11「中央ユーラシアの統合—9-16 世紀」 p.147-176、1997).
18. 久保一之、木村暁、井上治『ポスト・モンゴル期』(山川出版社、「中央ユーラシア史研究入門」p.111-151、2018).
19. 小谷汪之『ムガル帝国とマラーターの時代』(山川出版社、新版世界各国史 7「南アジア史」 p.232-272、2004).
20. 後藤裕加子『サファヴィー朝後期のシャーの移動と『統治の都』』(関西学院大学人文学会 人文論究 人文論究 64 (2), p.29-57、2014).
21. 小松香織『海運資料に見るオスマン帝国末期の社会変容』(早稲田大学イスラーム地域研究機構 イスラーム地域研究ジャーナル Vol. 5、p.43-50、2013).

22. 近藤信彰『サファヴィー帝国におけるシーア派法秩序の形成』(岩波書店、岩波講座世界歴史 13「西アジア・南アジアの帝国 16～18 世紀」p.85-113、2023).
23. 近藤信彰『近代イランにおけるテュルク的過去の参照』(山川出版社、新版 世界各国史 9「西アジア史 II」p.107-120、2023).
24. 島田竜登『構造化される世界——グローバル・ヒストリーのなかの近世』(岩波書店、岩波講座世界歴史 11「構造化される世界 14-19 世紀」p.3-62、2022).
25. 志茂碩敏『モンゴルとペルシア語史書——遊牧国家史研究の再検討』(岩波書店、岩波講座世界歴史 11「構造化される世界 14-19 世紀」p.249-274、1997).
26. 新藤義彦『モンゴル・タタールのロシア支配』(亜細亜大学アジア研究所 アジア研究所紀要 4 (1977 年)、p.129-150、1977).
27. 杉山正明『中央ユーラシアの歴史構図』(岩波書店、岩波講座世界講座 11「構造化される世界 14-19 世紀」p.3-89、1997).
28. ソウザ、ルシオ・デ、岡美穂子『奴隷たちの世界史』(岩波書店、岩波講座世界歴史 11「構造化される世界 14-19 世紀」p.131-160、2022).
29. 中見立夫、濱田正美、小松久男『中央ユーラシアの周縁化』(山川出版社、「中央ユーラシア史」 p.143-173、2000).
30. 羽田正『ペルシア語文化圏の形成と変容』(山川出版社、「イラン史」 p.106-159、2020).
31. 濱田正美『中央ユーラシアの「イスラーム化」と「テュルク化」』(山川出版社、「中央ユーラシア史」 p.277-341、2000).
32. 林佳世子『西アジア・南アジアの近世帝国』(岩波書店、岩波講座世界歴史 13「西アジア・南アジアの帝国—16～18 世紀」p.3-54、2023).
33. 藤田勉『米国とイランの対立が激化する歴史的背景』(公益財団法人資本市場研究会、「月間資本市場」2020-2 p.60-67、2020).
34. 堀川轍『モンゴル帝国とティムール帝国』(山川出版社、「中央ユーラシア史」 p.174-244、2000).
35. 真下裕之『ムガル帝国における国家・法・地域社会』(岩波書店、岩波講座世界歴史 13「西アジア・南アジアの帝国—16～18 世紀」p.115-144、2023).
36. 真下裕之『16 世紀前半北インドの Mug(・)ul について』(京都大学人文科学研究所 東方學報、第 72 冊 p.738-720、2000).
37. 松田孝一『モンゴル帝国の統治制度とウルス』(岩波書店、岩波講座世界歴史 10「モンゴル帝国と海域世界——12～14 世紀」 p.77-106、2023).

38. 宮原辰夫『北インドにおけるイスラーム諸王朝とその建築物 ―デリー・スルターン朝末期とムガル帝国初期を中心に―』(文教大学国際学部紀要 第26巻1号 p.85-117、2015).
39. 森達也『ユーラシア世界の中国陶磁流通』(岩波書店、岩波講座世界歴史 10「モンゴル帝国と海域世界―12～14世紀」 p.279-294、2023).
40. 守川知子『サファヴィー朝支配下の聖地マシュハド：一六世紀イランにおけるシーア派都市の変容』(京都大学文学部 史学研究会「史林」80-2 p.167-207、1997).
41. 矢崎正見『チベットに対する元朝の宗教政策』(立正女子大学短期大学部 研究紀要 第14集 p.56-64、2012).
42. 矢沢知行『モンゴル元朝治下の江南地域社会をめぐる諸論点』(愛媛大学教育学部紀要 第62巻 p.245-253、2015).
43. 山崎岳『アジア海域における近世的国際秩序の形成——一四・一五世紀の危機と再生』(岩波書店、岩波講座世界歴史 11「構造化される世界——14～19世紀」p.163-182、2022).
44. 山下範久『一四―一九世紀における「パワー・ポリティクス」——ポストモンゴルから自由主義的国際秩序までの帝国間関係の変容』(岩波書店、岩波講座世界歴史 11「構造化される世界——14～19世紀」p.63-96、2022).
45. 吉澤智也『記憶の経験値として生きるソフト・パワーの展開―21世紀のパクス・モンゴリカを求めて―』(日本国際情報学会誌 2巻1号 p.31-33、2017).
46. 四日市康博『ユーラシア・海域世界の東西交流におけるモンゴル・インパクト』(岩波書店、岩波講座世界歴史 10「モンゴル帝国と海域世界―12～14世紀」 p.40-76、2023).
47. ハーシェム・ラジャブザーデ『ラシードウッディーン・ファズルッラー・ハマダーニー ～三代のイル・ハーンに仕えたユダヤ系ムスリム知識人』(春風社、「イランとイスラム 文化と伝統を知る」p.68-82、2010).

【Web】

1. 趙阮『14世紀におけるモンゴル帝国の食文化の高麗への流入と変化 』
https://www.aisf.or.jp/sgra/wp-content/uploads/2017/03/9.%ef%bc%bbJ%ef%bc%bdtranslation_Kokushi2_Summa

- [ry_ChoWon%ef%bc%88%e8%b6%99%e9%98%ae%ef%bc%89.pdf](#)) 最終閲覧
日:2024.12.1.
2. National PR-centre 『キャラバンサライラバト-マリク』
(<https://uzbekistan.travel/ja/o/%E3%82%AD%E3%83%A3%E3%83%A9%E3%83%90%E3%83%B3%E3%82%B5%E3%83%A9%E3%82%A4%E3%83%A9%E3%83%90%E3%83%88-%E3%83%9E%E3%83%AA%E3%82%AF/>) 最終閲覧日:2024.11.19.
 3. World Public Economy Organaization 『シルクロード』
(<https://wpeo.ngo/ja/silk-road/>) 最終閲覧日:2024.11.19.
 4. Wikipedia 『タルタルステーキ』
(<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%BF%E3%83%AB%E3%82%BF%E3%83%AB%E3%82%B9%E3%83%86%E3%83%BC%E3%82%AD>) 最終閲覧日:2024.12.1.
 5. Wikipedia 『ティムール帝国の地図』
(https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Timurid_Empire_Map.png#/media/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Timurid_Empire_Map.png) 最終閲覧
日:2024.12.1.
 6. Wikipedia 『中国の陶磁器』 (<https://ja.wikipedia.org/wiki/>) 最終閲覧
日:2024.09.09.
 7. タビノート 『観光とツーリズムの違いとは』
(https://tabinoto.jp/column/article/00131493#google_vignette) 最終閲覧
日:2024.11.15.
 8. 風の旅行社 『河西回廊 西安とシルクロード石窟寺院 14 日間』
(<https://www.kaze-travel.co.jp/sr-sp-gs-01.html>) 最終閲覧日:2024.11.19.
 9. 化粧品成分ジャーナル 『体質顔料の解説と化粧品に使用される体質顔料一覧
| 化粧品成分オンライン』 ([https://cosmetic-ingredients.org/extender-
pigment/](https://cosmetic-ingredients.org/extender-pigment/)) 最終閲覧日:2024.12.19.
 10. 船橋茶文化資料室 『アメブロより「景德鎮:カオリン土と高嶺山」』
(<https://ameblo.jp/yuyu-chiba/entry-11916774800.html>) 最終閲覧
日:2024.12.19.
 11. 産業支援センターせと(ISCs) 『「県の石」に瀬戸の「カオリン」が選ばれました！
|』 (<https://www.isc-seto.com/cgi-bin/buisiness/index.cgi?id=314>) 最終閲覧
日:2024.12.19.
 12. 大阪市立東洋陶磁美術館 『過去の展覧会』
(<https://www.moco.or.jp/exhibition/past/?e=197>) 最終閲覧日:2024.12.19.

13. 英国ニュースダイジェスト『大英博物館の魅力、再発見！【動物巡り編】大英博物館の魅力、再発見』(<https://www.news-digest.co.uk/news/features/16634-animals-in-british-museum.html>) 最終閲覧日:2024.12.19.
14. セラミックス博物館『日本のやきもの/もっと詳しく』(<https://www.ceramic.or.jp/museum/yakimono/contents/genryou.html>) 最終閲覧日:2024.12.19.
15. 富士産業株式会社『カオリン kaolin 』(<https://www.fuji-ind.jp/products/kaolin>) 最終閲覧日:2024.12.19.
16. Wikipedia『カオリナイト - Wikipedia』(<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AB%E3%82%AA%E3%83%AA%E3%83%8A%E3%82%A4%E3%83%88>) 最終閲覧日:2024.12.19.
17. 出光美術館『青花騎馬人物文壺 | 収蔵品の紹介「出光コレクション」』(https://idemitsu-museum.or.jp/collection/ceramics/chinese_ceramics/04.php) 最終閲覧日:2024.12.19.
18. Wikipedia『中国の陶磁器』(<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%AD%E5%9B%BD%E3%81%AE%E9%99%B6%E7%A3%81%E5%99%A8>) 最終閲覧日:2024.12.19.
19. 公益財団法人 戸栗美術館『学芸の小部屋』(<https://www.toguri-museum.or.jp/gakugei/back/0911.php>) 最終閲覧日:2024.12.19.
20. 世界の歴史まっふ『三つの道 |』(https://sekainorekisi.com/world_history/%e4%b8%89%e3%81%a4%e3%81%ae%e9%81%93/) 最終閲覧日:2024.12.19.
21. マイセン『ドイツの名窯マイセン 日本公式サイト|ブルーオニオン』(<https://www.meissen-jp.com/products/blueonion/>) 最終閲覧日:2024.12.19.
22. 東京富士美術館『白磁刻花牡丹文盤 | 景德鎮窯 | 収蔵品詳細 | 作品を知る | 東京富士美術館 (Tokyo Fuji Art Museum, FAM) 』(<https://www.fujibi.or.jp/collection/artwork/01523/>) 最終閲覧日:2025.1.19.
23. 陶祖 李参平窯『陶祖 李参平窯 | 陶祖 李参平窯』(<https://toso-lesanpei.com/>) 最終閲覧日:2025.1.19.
24. 文化遺産データベース『文化遺産データベース』(<https://bunka.nii.ac.jp/db/heritages/detail/567416>) 最終閲覧日:2025.1.19.

最終発表スライド

第16期インターゼミ(社会工学会)アジアダイナミズム班

最終発表(2024年12月7日) @寺島文庫



Agenda

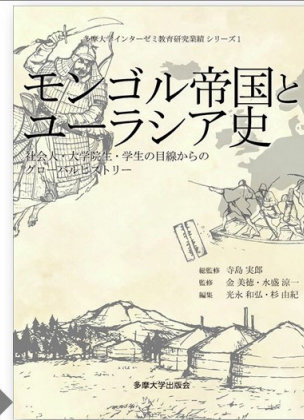
1. 振り返り (2017年～2023年 論文のテーマ)
2. 研究目的・方法
3. 2024年度の研究テーマ
4. 研究対象
5. 研究結果
6. フィールドワーク
7. まとめ

1. 振り返り（2017年～2023年 論文のテーマ）

モンゴル帝国史の7年間の研究（今年で8年目！）

年度	タイトル	頁数
2017	モンゴル帝国のユーラシア興隆史	107
2018	モンゴル帝国の興隆と衰退	244
2019	モンゴル帝国と朝鮮半島	84
2020	パンデミックのユーラシア史とポストコロナ	118
2021	倭寇とモンゴル帝国史～海洋の渡海民と大陸の遊牧民～	106
2022	華人華僑とモンゴル帝国史	81
2023	モンゴル帝国の衰退から見る宗教と統治	89

659



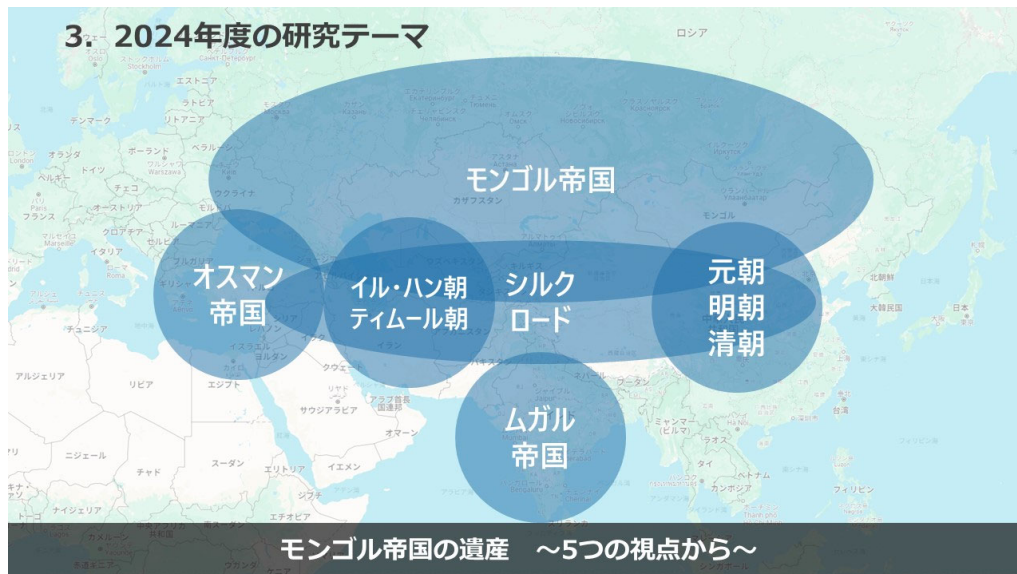
2023年度はモンゴル帝国が衰退していく過程で、帝国の東と西でモンゴルの支配を覆した明とロシアに着目し、それぞれの権力の交代に宗教が大きな影響を与えたことを研究した

2017年度～2021年度の論文が書籍として出版された
(2023/3/30発売 全240頁)

2. 研究目的・方法

- ✓ アジア班が目指す論文は、歴史の視点から「**現代的意義**」を見出す
- ✓ 「**文献研究とフィールドワーク**」を中心に研究活動を行う
- ✓ フィールドワークは「**モンゴル大使館**」や「**専門研究者**」にヒアリングを行う

3. 2024年度の研究テーマ



4. 研究対象：歴史年表

年代	モンゴル・北東アジア史	中国史	中央・西アジア史	インド史	日本史
8-13世紀	1155年 チンギス・カン誕生 1206年 チンギス・カン即位 モンゴル帝国建国 1227年 チンギス・カン死去 1260年 フビライ・カン即位	960年 北宋建国 1126年 金が北宋を滅ぼす 1127年 南宋建国 1234年 モンゴルが金を滅ぼす 1271年 国号を元に改称 1279年 元が南宋を滅ぼす	1260年 チンギス・カンの孫のフレグがイル・ハン朝を建国		894年 遣唐使廃止 1185年 鎌倉幕府成立 1274年 文永の役 1281年 弘安の役
14-16世紀	1368年 元がモンゴルに退く(北元) 1449年 オイラートのエセン・カン 明の英宗を捕虜に(土木の变) 1482年 騷擾タタン・カン即位 1542年 騷擾アルタン・カン即位	1368年 朱元璋が明を建国 1402年 永楽帝即位(靖難の変) 1405年 鄭和の大遠征開始 1572年 万暦帝即位	1353年 タガイ・テムルの死によりイル・ハン朝滅亡 1370年 ティムールがサマルカンド征服、 ティムール朝建国 1393年 バグダードを攻略 1398年 デリーへ遠征 1405年 明への遠征途中で死去 1501年 イスマーイール1世が サファヴィー朝建国 1507年 ティムール朝滅亡(モンゴル系の支配が終了) 1587年 サファヴィー朝 アッバス1世即位	1483年 バールブルの誕生 1504年 バールブルがカーブルを征服 1526年 第1次バニーバルットの戦い ムガル帝国建国 1530年 バールブル死去 1556年 アクバル即位 1564年 シズヤ(人頭税)廃止	1338年 室町幕府成立 1350年 倭寇が高麗の各地を襲う(倭寇の活動が激化) 1419年 応永の外寇 1467年 応仁の乱 1587年 豊臣秀吉(バレン)追放令
17-18世紀		1616年 後金を建国(女真族ヌルハチ) 1636年 国号を清に改称(ホンタン) 1644年 清の中華支配開始(李自成により明が滅亡、清の順治帝と摂政(ドルゴン入関)) 1662年 康熙帝即位 1689年 清とロシア：ネルチンスク条約を結び国境確定 1722年 雍正帝即位 1735年 乾隆帝即位 1759年 清、新疆を併合	1736年 サファヴィー朝 滅亡 1796年 ガージャール朝 建国	1600年 イギリス東インド会社設立 1605年 アクバル死去 1658年 シャー・ジャハーン：タージ・マハル完成 1679年 シズヤ(人頭税)復活 1757年 プラッシーの戦い	1603年 江戸幕府成立 1639年 鎖国 1612年 キリスト教禁止令

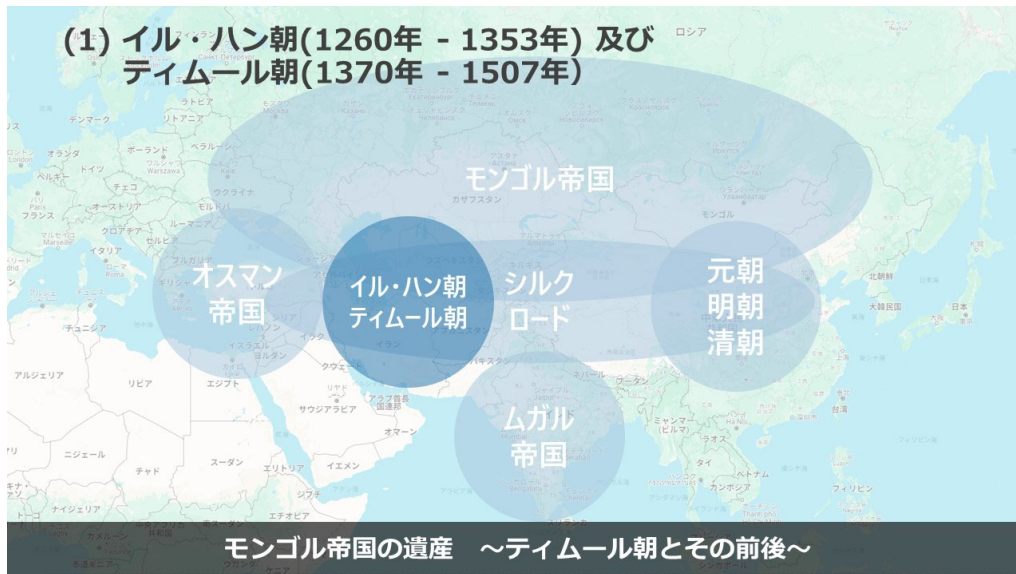
4. 研究対象：歴史年表

年代	モンゴル・北東アジア史	中国史	中央・西アジア史	インド史	日本史
19-20世紀	1911年 ボグド・ハーン政権誕生 1924年 モンゴル人民共和国成立 1931年 満洲事変 1939年 ノモンハン事件	1840年 アヘン戦争勃発 1850年 太平天国の乱勃発 1874年 光緒帝即位、西太后摂政 1894年 日清戦争勃発 1911年 辛亥革命 1912年 清が滅亡 中華民国成立 1937年 盧溝橋事件(日中戦争勃発) 1947年 国共内戦勃発 1949年 中華人民共和国成立	1804年 第一次ロシア・ペルシャ戦争 1826年 第二次ロシア・ペルシャ戦争 1828年 トルコマンシェイ条約 1906-1911年 イラン立憲革命 1921年 コサック旅団のレザー・ハーンがクーデター 1925年 ハーンが皇帝に即位、パフラヴィー朝発足 1979年 イラン革命により(パフラヴィー朝崩壊、 イラン・イスラム共和国 成立)	1803年 第2次マラータ戦争勃発 1813年 茶以外のインド貿易の独占権喪失 1817年 第3次マラータ戦争勃発 1853年 鉄道開通 1857年 インド大反乱(シパヒーの反乱) ムガル帝国が事実上滅亡 1858年 イギリス東インド会社解散 インド帝国がイギリスの直接統治下に置かれる 1947年 インド・パキスタンがイギリスから独立 1950年 インド共和国が成立	1858年 米修好通商条約 1868年 明治維新 1894年 日清戦争勃発 1904年 日露戦争勃発 1910年 韓国併合 1941年 真珠湾攻撃(太平洋戦争勃発) 1945年 敗戦 1972年 日中国交正常化

5. 研究結果



(1) イル・ハン朝(1260年 - 1353年) 及び ティムール朝(1370年 - 1507年)



モンゴル帝国の遺産 ～ティムール朝とその前後～

モンゴル帝国の遺産 ～イル・ハン朝とティムール朝に見るモンゴルの支配～

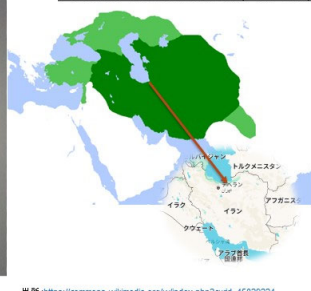
中央・西アジアは16世紀初頭までモンゴル系の政権が続き、モンゴル帝国流の統治が行われた



出所：ティアライタナショナル

出所：愛媛大学教育学部紀要 第62巻 245～253

ティムール朝の版図と現代のイラン(ーはテヘラン)



イラン地域の政権の推移



モンゴル帝国からティムール朝に至る統治システム変遷の考察

- ティムール朝は、通貨の税、税制などモンゴル帝国の統治手法を受け継いだ
- 塩での税と取引のシステムも引き継いだ。絹も追加し商業の活性化を狙った
- 遊牧民の軍事力と定住民による行政の統合をはかった

イラン地域のモンゴル系支配と、その影響

- イル・ハン、ティムールと続いたモンゴル系支配時代、広く芸術家や職人が集められ独自の融合文化が発展した
- ティムール朝後の非モンゴル政権でも十二支など一部でモンゴル流が受け継がれた
- 近代以降は、モンゴル支配の影響はほとんど残らなかった

研究者：阿達歌洋、杉田記

10

ティムール朝：モンゴル帝国からティムール朝に至る統治システム変遷の考察

研究テーマ

- モンゴル帝国繁栄時の統治システム(行政、社会、経済)はどうか形成され、ティムール朝では、どう継承されたのか考察する

研究結果概要

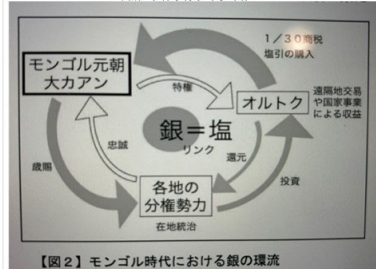
- モンゴル帝国では支配体制としてチンギス・カンに直隸するケシク(近衛軍団)が中央政府として存在し、商業を千戸(ミンカン)グループを配置し、統治を進めた。
- 千戸(ミンカン)は百騎、十騎と各長で構成され、遊牧民集団体制を敷いていた。
- モンゴル帝国では銀を共通の財産とする徴税・財政体制であった。
- コビライ王朝時に塩を商業税として採用し、塩の取引券(塩引と呼び高額な紙幣の役目)を販売し、政府収入とした。主要都市、港を通過する際の通過税があったが、撤廃し、物流を促進し、交通網を整備・維持する。
- ティムール朝では塩にさらに絹を追加し商業、経済発展に繋げる

結論：モンゴルの遺産

- ティムール朝は、モンゴル帝国の税制のいくつかの側面を引き継ぎ、特に帝国の安定と財政を強化するために、土地の収穫高に基づく地租(ハラージュ)や、都市部の商業活動に対する税を導入し、税制を改革。
- ティムール朝は、遊牧民の伝統的な軍事力と定住社会の行政機構の統合を進める。
- 紙幣としての塩の取引券価値が下がった際、塩や紙幣の価値低下は、商業と経済に深刻な影響を与え、経済的混乱が社会不安を助長し政権の寿命に影響を及ぼすことになった。



出所：ティアライタナショナル



出所：愛媛大学教育学部紀要 第62巻 245～253

著者：阿達歌洋

11

イル・ハン朝とティムール朝: イラン地域のモンゴル系支配と、その影響

研究テーマ

➤ 現代のイランとその周辺は、イル・ハン朝、次いでティムール朝とモンゴル系が支配した。モンゴル支配はイラン地域にどのような影響を残し、残らなかったか

研究結果概要

- ・イル・ハン朝、ティムール朝ではペルシア系の官僚や大臣が多く活躍し、モンゴル系為政者はペルシアの知識や技術を活用し共存した。モンゴル帝国と共通する
- ・イル・ハンのガザルやティムールは各地から職人や芸術家を都に集め、ペルシア語歴史書、建築や学校など独自の融合イスラム文化が発展
- ・サファヴィー朝はモンゴル系ではない定住民の宗教団体から発展したが、遊牧民系部族が軍事面を支え、ペルシア語を使う都市民が行政面を担当する構造はそれ以前のモンゴル系政権と共通。行政文書で十二支の使用や、王の尊称「シャー」、地域の呼び名「イラン」はイル・ハン朝から取り入れたもの。
- ・一方、イスラム教シーア派(十二イマーム派)を国教と定め、王宮を建てて即位式や祭祀を行うなど、遊牧文化から定住文化へ徐々に変化していった。サファヴィー朝は現代のイランの基を作ったとされる
- ・近代以降は、モンゴル支配は過去の歴史の一部と認識され影響はほとんど残らず、19世紀に入り英仏露など列強との不平等条約や列強間の駆け引きに翻弄された

結論: モンゴルの遺産

- ✓ 13-16世紀のイラン地域では、モンゴル系の支配の下でペルシア系の大臣や官僚が活躍した構造がモンゴル帝国と共通する。その後も十二支や王の尊称が受け継がれた
- ✓ 東西の交通の要衝でもあるイラン地域では、モンゴル系支配時代に広く芸術家や職人が集められ、独自の融合文化が発展した
- ✓ 近代以降は、モンゴル支配の影響はほとんど残らなかった

ティムール帝国の版図と現代のイラン(→はテヘラン)



出所: https://commons.wikimedia.org/w/index.php?title=Timurid_Empire&oldid=45029224

イラン地域の政権の推移



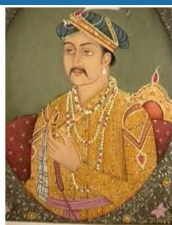
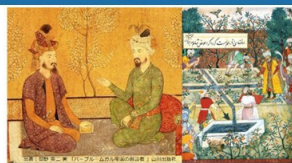
著者: 杉田紀 12

(2) ムガル帝国 (1526年 - 1539年、1555年ア - 1858年)

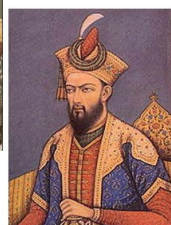


モンゴル帝国の遺産 ~ムガル帝国~

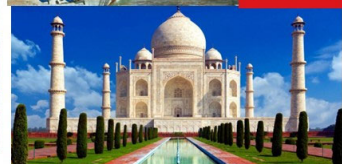
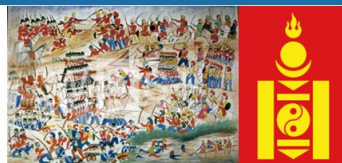
ムガル帝国は、モンゴル帝国の統治システムや軍事技術を基盤としながらも、チンギス・ハン(母方)よりティムール(父方)の血統を大切にし、イスラム文化とインドの伝統を融合させた独特の文明を築いた



3代目アクバル帝



6代目アウラングゼーブ帝



モンゴル帝国がムガル帝国(インド)に与えた影響

ムガル帝国創設者・バーブルからみるインドとモンゴル帝国の考察

- ・回想録は中央アジア遊牧民出身の傑作として継承
- ・インド侵攻のモンゴル帝国の踏襲はティムールの影響
- ・ムガル帝国の名称は英雄の子孫という後世の概念表明

宗教政策から見るムガル帝国の繁栄と衰退

- ・帝国には多様な人を受け入れる宗教的寛容性が重要
- ・より厳格なイスラム政策が多様な帝国を衰退させた
- ・非ムスリムに寛容的な政策が支配能力を喪失させたか

- ・多様な人を受け入れる文化が帝国を反映
- ・大規模帝国の維持の難しさ、長期戦争による衰退
- ・第3の隣国としてのインド(文化的、精神的、政治的)

研究者: 佐々木真友美、須貝直行、高秀柄

14

ムガル帝国: ムガル帝国創設者・バーブルからみるインドとモンゴル帝国の考察

研究テーマ

➤ ムガル帝国の創設者・バーブルに焦点をあて、なぜインドを征服したのか、モンゴル帝国の影響は受けているのか、受けていたとすればムガル帝国創設と影響の関係性は何かを探る。

研究結果概要

- ・バーブルが残した回想録『バーブル・ナマ』には、恋愛や野心といった心情、飲酒などの秘すべき体験を率直に綴っているほか、当時の政治、経済、社会、文化、活動地点の地理的状況も記述されている。
- ・バーブルは政治的手腕、軍事才能、人道的寛容性、文化的影響力がある人物であると分かる。
- ・長所が少ないと評価したインドへの侵略理由には、経済的、潜在的な豊かさであることから当初は略奪目的だったが、中央アジアの拠点を進められなくなった必要があったこと、インド制（ローディー朝）のイスラーム教徒から支援要請があったこと、ティムールの遠征の帰途を再開した可能性があったと考えられる。
- ・切った腹の首を添えて「首の塔」による征服の見せしめなど、チンギス・カンやティムールといった祖先たちの伝統的な制圧方法を自然に取り入れている。
- ・ムガルはモンゴルを指すが、ムガル朝皇国を指すのみでなく、種類にかかわらず北西高地からの侵入者全般について北インドの住民が用いた俗称であり、ムガル帝国が成立した時代の北インドは、モンゴルやチンギス・カン家との系譜の繋がりが普遍される中央アジアのような社会環境ではなかった。

結論：モンゴルの遺産

- ✓ 「首の塔」などのモンゴル帝国の支配の方法の踏襲は、モンゴル帝国の直接的な影響ではなく、ティムール朝から無意識に伝統として引き継がれたものであった。
- ✓ バーブルの回想録『バーブル・ナマ』は、中央アジア遊牧民族出身の君主が残した稀有の回想録で、チンギス・カンとティムールの末裔によるインド征服のエピソードとして世界に傑作として残った。
- ✓ ムガルという名称は、北インドの住民が用いた北西高地からの侵入者全般についての他称であり、ムガル朝そのものやモンゴル人の帝国という意味は持たないが、偶然にも後世ではモンゴル帝国との関連を連想させるものとして定着した。名称は用いた者たちの概念表明であり、ムガル帝国はモンゴル帝国の子孫による建国という概念であることを示す。



著者：佐々木直友美 15

ムガル帝国: 宗教政策から見るムガル帝国の繁栄と衰退

研究テーマ

➤ ムガル帝国の宗教政策とは何だったのか。それは指導者によってどのような違いがあったのか。

研究結果概要

- ・ムガル帝国3代皇帝のアクバル帝はジズヤ(人頭税)の廃止、自らヒンドゥー教徒の王女と結婚し、ヒンドゥー教徒でも高級官位や将軍に任命するなど、融和政策を行い、イスラーム教・ヒンドゥー教の宗教的対立を超えた新しい「神の宗教」(ディーネ=イラーヒ)を自ら説き、インドの統一統治権を実現しようとした。
- ・ムガル帝国6代目皇帝のアウラングゼーブ帝は、アクバル帝の融和政策を放棄し、イスラーム教の立場を明確にしジズヤを復活させ、ヒンドゥー寺院のモスクへの建て替えなどを強行し、それに反発したヒンドゥー教徒に対する弾圧を行った。また、ムスリムに対しては価格の2.5%、ヒンドゥー教徒に対しては5%がけられていた物品入市税をムスリムにだけ免除した。
- ・非融和的政策は非ムスリムから反感を買い、マラーター王国やシク教などの勢力が反旗を翻した。

結論：モンゴルの遺産

- ✓ 結果的に融和政策をとったアクバル帝はムガル帝国を繁栄させ、非融和政策を行ったアウラングゼーブ帝は結果的にムガル帝国を衰退させたことから、融和政策を正しいと見て良いのか。むしろ非ムスリムに寛容的な政策が支配能力の喪失を起し、ムガル帝国の衰退を招いたのではないのか。
- ✓ イスラーム帝国はイスラーム法を広くイスラーム法による統治によって秩序を安定させてきたが、ムガル帝国ではそれが出来なかったため、秩序が不安定になった。



3代目アクバル帝

6代目アウラングゼーブ帝

著者：高秀柄 16

ムガル帝国: モンゴル帝国がムガル帝国（インド）に与えた影響

研究テーマ

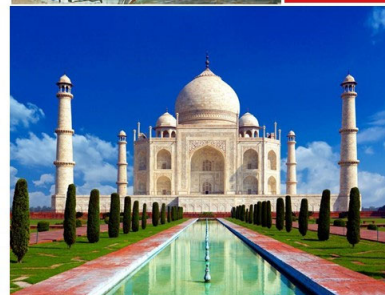
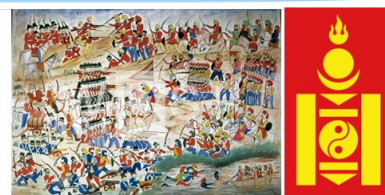
➤ モンゴル帝国からムガル帝国を経由し現代のインドに与えた影響はどのようなものか？宗教的、政治的、文化的な視点から研究を行う

研究結果概要

- ・モンゴル帝国とムガル帝国の宗教的寛容性
- ・モンゴル帝国の統治システムが現代インドの国家形成に与えた影響
- ・タージ・マハルから見る文化的融合
- ・ムガル帝国の衰退から見る現代インドへの系譜
- ・ソヨンボ文字から見るインドがモンゴルへ与えた影響

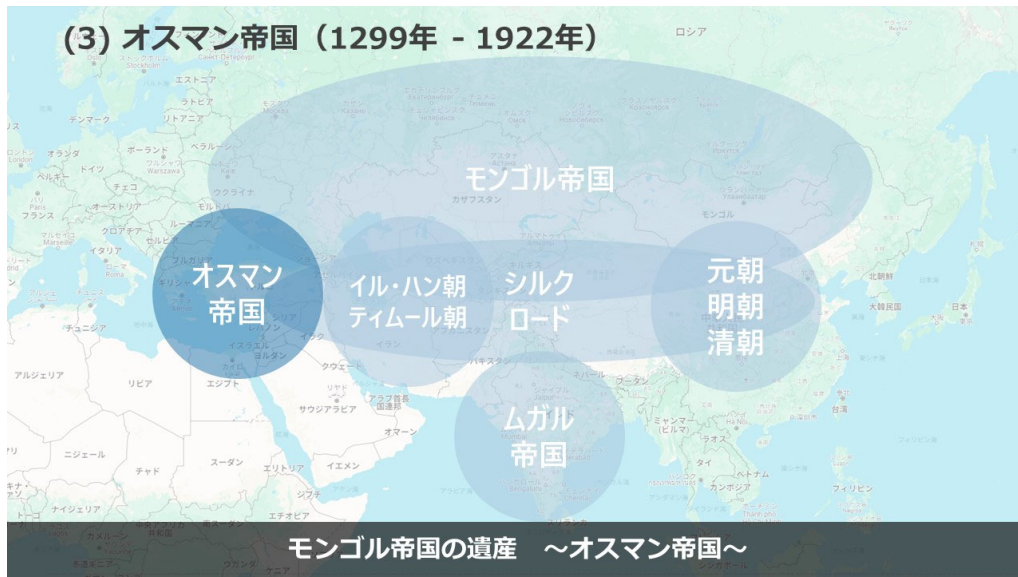
結論：モンゴルの遺産

- ✓ モンゴル帝国とムガル帝国に共通する多様な人を受け入れる文化(宗教的寛容性)が帝国を反映させた
- ✓ ティムールの血統がムガル帝国の統治の正統性の源泉として重要視され、統治の実践や軍事戦略への影響があった
- ✓ モンゴル帝国が支配したセメルシャから、建築知識の要素が広まりムガル建築(タージ・マハル)に影響を与えた
- ✓ 長期の戦争による財政負担、過度の課税、そして国際貿易の変化により、帝国の経済基盤が揺らいだ
- ✓ インドとモンゴルの間の文化的、精神的、政治的な相互影響がある



著者：須貝直行 17

(3) オスマン帝国 (1299年 - 1922年)



モンゴル帝国の遺産 ～オスマン帝国～

モンゴル帝国の遺産 ～オスマン帝国～

オスマン帝国は600年以上も世界の中心であり続けた。オスマン帝国の在り方は、住民の均質化をめざすのではなく、必要とされる能力を持った人々を、その文化的背景にかかわらず活用する柔軟な専制と、強靱な経済・軍勢力、その両方を支えたのは海運の存在があった。

1. 広大な領土

2. オスマン帝国の大砲

3. 大航海時代の幕開け

4. ダイバーシティ国家(人種・宗教・職種)

人種・民族	宗教	主な職種
トルコ人	イスラム教 (スンニ派)	スルタン、パシヤ、ウラマー、軍指導者、官僚
アラブ人	イスラム教 (スンニ派)	学者、医師、商人、官僚
クルド人	イスラム教 (スンニ派)	農民、兵士、商人
ギリシャ人	ギリシャ正教	商人、職人、農民
アルメニア人	アルメニア教会	商人、職人、医師
ユダヤ人	ユダヤ教	商人、金融業者、職人、医師
スラヴ人	東方正教会	農民、兵士、職人

モンゴル帝国から逃げて小アジアにできたオスマントルコの繁栄と海運

- ・ 数回の征服活動が続いた後、強固な国力を築いてからは、世界の中心であり続けた
- ・ 成功要因は、ダイバーシティ国家
- ・ オスマン帝国がなければ、大航海時代はこなかった。

オスマン帝国の起源と衰退、文化形成に関する考察

- ・ 多文化共生と都市の発展：イスタンブールは、様々な民族が共存し、文化的な融合が進んだ都市
- ・ 軍勢力と領土拡大：火薬や大砲の技術革新を取り入れ、軍勢力を拡大した
- ・ 貿易と経済の繁栄：重要な貿易ルートを支配し経済的に大いに繁栄した。

研究者：倉元貴子、吉川

オスマン帝国:モンゴル帝国から逃げて小アジアにできたオスマントルコの繁栄と海運

研究テーマ

➢ オスマン帝国はかつてモンゴル帝国から逃げて小アジアにできた小さな国であった。混沌とした時代に、小国から帝の出し、領土を拡大し大帝国へと駆け上がったオスマントルコ。小国からスタートしたオスマントルコは、どうして世界的な覇権を握っていったのか、通商、貿易の観点から、成功した海運のゴア・コンピニョスと、組織プロビンスについて明らかにする。

研究結果概要

- ・ オスマン帝国は、14世紀にトルコ人がつくったオスマントルコ帝国は、イスラム教で、最初は小アジアに広がる小さな国であったが、徐々に領土を広げ地中海、黒海に到達した。
- ・ 人種・民族の多様性：オスマン帝国は、多様な民族が共存し、文化的な融合が進んだ都市
- ・ 軍勢力と領土拡大：火薬や大砲の技術革新を取り入れ、軍勢力を拡大した
- ・ 貿易と経済の繁栄：重要な貿易ルートを支配し経済的に大いに繁栄した。

結論：モンゴルの遺産

- ✓ オスマントルコ帝国では、海運は、貿易だけでなく、軍事的戦略性においても、軍事的な優位性を保つなど、領土拡大や外交政策において重要な役割を果たしていた。
- ✓ トルコの起源とモンゴル帝国の関わりは非常に深く、モンゴル帝国の支配と影響を受けながら、トルコ民族は中央アジアからアナトリア半島へと移動し、独自の国家を築き上げた。この過程で学んだ知識や技術が、後のオスマン帝国の成立と繁栄に大きく寄与した。トルコの歴史におけるモンゴル帝国の影響は、現代のトルコ文化にもその名残を残している。

1. 広大な領土

2. ダイバーシティ国家

3. 大航海時代の幕開け

オスマン帝国: オスマン帝国の誕生と衰退、文化形成に関する考察

研究テーマ

オスマン帝国が誕生してから、その地域に根付いた、政治形態や宗教体制について考察していく。

研究結果概要

- 1299年に誕生して、飛び鳥を落とす勢いで成長をしていったオスマン帝国。
- 17世紀には東はアゼルバイジャン西はモロッコ、南はイエメン、北はハンガリーまで支配し最大勢力を誇った。
- 多民族国家で宗教の自由化が謳われてはいたがイスラム教が主体となっていた
- オスマン帝国ではミレット制をしき、多民族&多宗教の統治をおこない経済マンでも繁栄を築いた。

結論: モンゴルの遺産

- ✓ オスマン朝はすべての文字がアラビア語だったが、トルコ系民族が多かったためトルコ語も普及した。そこで生まれたものがトルコ=イスラーム文化である。
- ✓ オスマン帝国ではスルタン制を用いており、二聖都の保護者があった。ここでの二聖都は「メッカ」「メディナ」を指す。



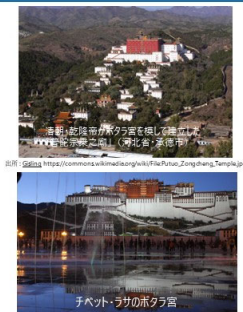
著者: 吉川侑希 21

(4) 中国 (元朝、明朝、清朝: 1636年 - 1912年)



モンゴル帝国の遺産 ~中国~

モンゴル帝国の国家戦略「宗教の自由」「移動の自由」「経済の自由」がダイバーシティ&インクルージョンを実現し、その後の多民族統治を可能にした



中国歴史朝代演進図



No.	時期	アムル朝	明-アムル朝	明-アムル朝	元朝
1	1369年	1369年	1369年	1369年	1369年
2	1369年	1369年	1369年	1369年	1369年
3	1369年	1369年	1369年	1369年	1369年
4	1369年	1369年	1369年	1369年	1369年
5	1369年	1369年	1369年	1369年	1369年
6	1369年	1369年	1369年	1369年	1369年
7	1369年	1369年	1369年	1369年	1369年
8	1369年	1369年	1369年	1369年	1369年
9	1369年	1369年	1369年	1369年	1369年
10	1369年	1369年	1369年	1369年	1369年
11	1369年	1369年	1369年	1369年	1369年
12	1369年	1369年	1369年	1369年	1369年



モンゴル帝国、清朝共通の統治理念としての「チベット仏教」

- 宗教の自由が多民族を包摂した広域統治に寄与した。
- 中でも「チベット仏教」が重要な役割を果たした。
- 仏教の「救済」理念が平和的統治に結びついた。

モンゴル帝国が中国の多民族・多宗教に与える影響

- 複数の政治勢力で分裂状態の中国を再統合した。
- モンゴル族・回回族を含む多民族国家を形成した。
- 中国と西・東南アジアの文化・経済交流に貢献した。

モンゴル帝国の軍事力、経済政策が後世に与えた影響

- モンゴル帝国が遊牧騎馬国家から継承した歴史。
- モンゴル帝国が継承し進化した国家戦略。
- モンゴル、清が現代に残した遺産。

研究者: 宮沼孝隆、馬幸玉、山中真太郎

23

中国：モンゴル帝国が中国の多民族・多宗教に与える影響

研究テーマ

- 中国地域におけるモンゴル帝国多民族・多宗教政策の特徴
- 元朝・ティムール朝に対する中国人の評価・残された遺産

研究結果概要

- 1) 中国の地域統一におけるモンゴル帝国の意義
→ 中国の歴史の本では、「元」が中国歴史上の一つの王朝として記載
- 2) 中国の多宗教・多民族融合におけるモンゴル帝国の意義
・ 元朝の多宗教政策による中国のイスラム教
・ 元朝の第一階級「モンゴル族」と第二階級「回回族」
- 3) 中国の文化交流・繁栄におけるモンゴル帝国の意義
・ 中国と西文化の交流と発展
・ 言語の交流・貿易交流（ティムール王朝と明朝まで含む）

結論：モンゴルの遺産

1. 中国人にとって、モンゴル帝国といえば「元朝」であり、中国歴史の王朝の一つとして、地域統一における偉大な王朝であった。
2. 中国の多宗教・多民族の共存と融合の時代を作り、中国文化と西アジア・東南アジアの文化の交流・経済発展に大きく貢献した時代である。

残された課題：

- ・ 中国と日本を含む他国との評価の比較。
- ・ 初代グローバル時代としてモンゴル帝国の戦略の深堀。

中国歴史朝代演進図

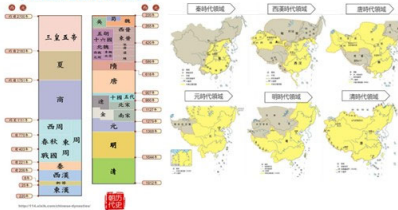


表1 ティムール王朝と明朝の貨物貿易の一部抜粋

No	時期	ティムール王朝	明-ティムール王朝	<実録>
1	1387年	馬15頭；駱駝2頭	白金18錠	185巻p3
2	1389年	馬205頭	白金1100錠	197巻p5
3	1390年	馬670頭		199巻p2
4	1394年	馬300頭		244巻p3
5	1395年	馬212頭	紙幣	239巻p5
6	1396年	馬240頭	紙幣	244巻p2
7	1396年	馬1095頭	紙幣	245巻p7
8	1409年	西馬550頭	彩巾（布類）	97巻p8
9	1419年	西馬・ライオン	白金・金銀製品・磁器	210巻p1
10	1456年	駱駝7頭・馬247頭等	白金など	236巻p2
12	1490年	駱駝・馬等		36巻p2

著者：馬幸玉

24

中国：モンゴル帝国、清朝共通の統治理念としての「チベット仏教」

研究テーマ

- 元・清朝の諸民族を包含した「大きな中国」支配には、「チベット仏教」が重要な役割を果たしたのではない。
- なぜ「チベット仏教」はチベットのみならずモンゴル族、満洲族等に広く受け入れられたのか。
- 異民族王朝である元・清朝は、チベット仏教をどのように漢族支配に利用したのか。

研究結果概要

- ・ チベット仏教は、モンゴル帝国の後継国家にとって「チンギス統原理」と並ぶ統治理念だった。
- ・ フビライ・カーンと、彼が降伏した「国師」チベット高僧パズパとの関係が後世の政教相互依存モデルとなった。
- ・ 清朝第2代皇帝、ホンタイジは、服属させたモンゴル・チャハル部から、伝国師（政治権威）とパズパ（製作の仏像（宗教権威））を継承、自らをモンゴル帝国の正当な後継王朝と位置づける。
- ・ 清朝第6代皇帝、乾隆帝はチベット高僧よりフビライ・カーンの転生、文殊菩薩の化身と認定、その権威で内陸アジア遊牧民と漢族中華世界をともに支配、全盛期を現出。（その象徴が長城の北、承德・避暑山荘（熱河離宮）と外八廟）

結論：モンゴルの遺産

- ✓ モンゴル帝国は「宗教の自由」を認めたが、「チベット仏教」を統治理念の基礎に据えた。
- ✓ 清朝はモンゴル帝国の実績を継承し、「チベット仏教」を統治イデオロギーに利用。特に、漢民族の考える「華夷秩序」の克服に使った。
- ✓ モンゴル帝国、清朝はともに仏教の「救済」思想を政治の根幹に位置付け、多民族統治に効果を上げた。



清朝・乾隆帝がポタラ宮を模して建立した「普陀宗乘之廟」（河北省・承德市）

著作：Gerd Eichmann https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Putuo_Zongcheng_Temple.jpg



チベット・ラサのポタラ宮

著作：Gerd Eichmann https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Lhasa-Potala-nachts-16-mit_Springbrunnen-2014-gje.jpg

著者：菅孝尚

25

中国：モンゴル帝国の軍事力、経済政策が後世に与えた影響

研究テーマ

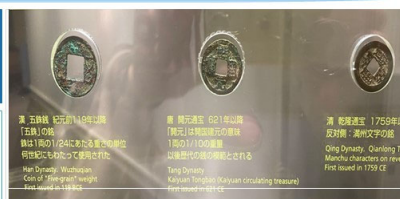
- 遊牧騎馬軍隊を有し世界最大帝国となったモンゴル帝国の軍事力、経済政策が清、現代の中国にどのような影響を与えてきたか。

研究結果概要

- ・ モンゴル帝国が「世界史の分水嶺」と言われる由縁を過去から遡り、現代に向けて清を経由した影響を与えたのかを考える。
- ・ スキタイ国家、ペルシア帝国、匈奴、拓跋国家、キタイ帝国がモンゴル帝国に繋いだ軍事力と経済を基礎とした国家体系について言及する。
- ・ モンゴル帝国がそれらを引き継ぎユーラシア大陸全体を巻き込み進化させた海と陸の経済戦略。
- ・ モンゴル帝国が支配した領土とほぼ同じ領域を統治することになる異民族王朝の清が華夷思想と近代化に直面しジレンマに苛まれた問題が現代の中国に及ぼす影響について考察する。

結論：モンゴルの遺産

- ✓ モンゴル帝国が遊牧民族から受け継いだ国家戦略、軍事力を背景にユーラシア大陸規模の海と陸の経済発展に大きく貢献し、現代の世界経済の基礎を形成した。
- ✓ 「海と火器の時代」に突入し、大航海時代、産業革命を経て圧倒的な軍事力を持つ近代西洋と元の後を引き継いだ異民族王朝、清との出会いが現代の様々な領土問題等の遺産を残した。



出所：横浜ユーラシア文化館より著者撮影

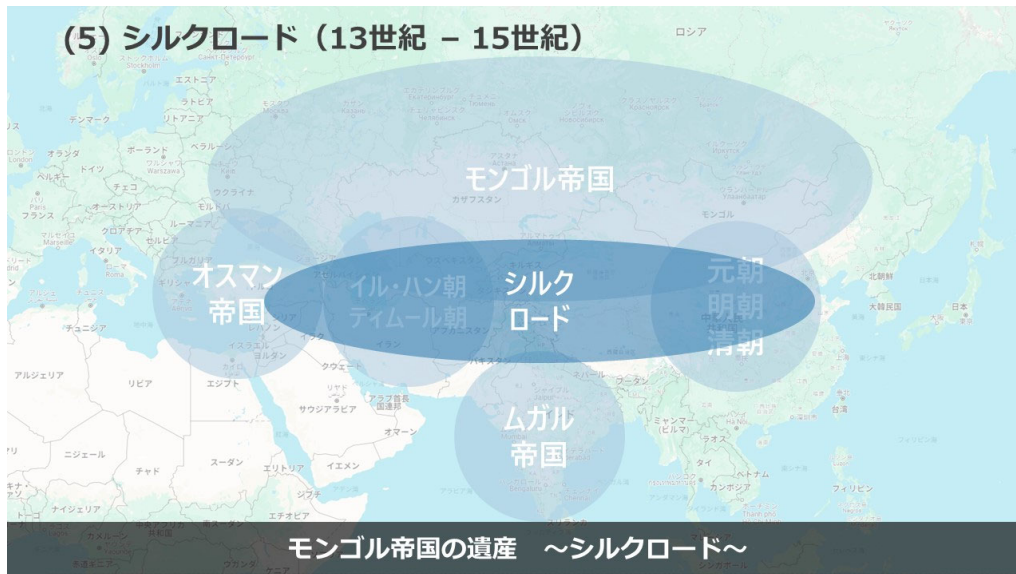


出所：横浜中華街「開天廟」より著者撮影

著者：山中真太郎

26

(5) シルクロード (13世紀 - 15世紀)



モンゴル帝国の遺産 ～シルクロード～

シルクロードが現在に影響を与えたもの ～陶磁器・建造物・食文化～

宋の時代は青磁、白磁の名品が数多く生み出された



定窯白磁印花牡丹盤
定窯白磁印花牡丹盤は、宋の時代には名品として知られていた。この盤は、定窯で生産されたもので、牡丹の花を印花で表現している。



磁器はヨーロッパへ、染付(青花)はブランドの代表的な技術として発展



青花磁器は、宋の時代には名品として知られていた。この磁器は、青花で描かれた花や鳥の文様を特徴としている。

元に入ると青花磁器が発展。また、輸出先である西アジアの需要に応じた大型化



青花磁器文様大瓶 元 1351年 ロンドン、ドイツヴィクトリア博物館 (Wikipediaより)



磁器はヨーロッパへ、染付(青花)はブランドの代表的な技術として発展



青花磁器は、宋の時代には名品として知られていた。この磁器は、青花で描かれた花や鳥の文様を特徴としている。



キャラバン商人 出所：風の旅行社サイト



サマルカンドのレギスタン広場 出所：クラブツーリズムサイト



出所：朝日新聞GLOBE+



出所：VOICE of MONGOLIA

モンゴル帝国の交易ネットワークが世界の文化や芸術の発展に寄与した

- ・モンゴル帝国の東西支配が交易を活性化(陸・海)
- ・陶磁器は「海のシルクロード」で世界中へ運ばれた
- ・「マイセン」や「ロイヤルコペンハーゲン」の代表的なデザインとして染付(青花)が引き継がれている

シルクロードの歴史からツーリズムの起源を考察する

- ・シルクロードはティムール朝を繁栄させた。
- ・キャラバン商人は文化/民族/宗教の交流に貢献した。
- ・この研究成果を日本への提言に繋げました。

モンゴル帝国が食文化において近隣諸国及び後世に与えた影響

- ・周辺諸国に与えた「味付け」の影響は限定的。
- ・征服地の肉食文化の普及や料理名称での影響は残る。
- ・民族性、地域性、気候の違いから独自に発展。

研究者：小柳夢理、二本柳誠一、佐藤力

28

シルクロード:モンゴル帝国の交易ネットワークが世界の文化や芸術の発展に寄与した

研究テーマ

【海のシルクロード】

- モンゴル帝国の広大な支配領域と活発な交易活動は陸路だけでなく海路にも広がり、貿易のみならず文化や芸術の発展に寄与した。中でも陶磁器の発展と世界(特にヨーロッパ)への伝播と、現在につながる技術について考察した

研究結果概要

- ・モンゴル帝国は13世紀から14世紀にかけて東西貿易路を支配し、交易を活性化させた
- ・ユーラシア大陸全体に広がる広大な交易ネットワーク内陸部はオゴイ・ハン時代に整備された駅伝制(ジャムチ)、海上では杭州(南宋時代の臨安)、泉州、広州などの貿易港。また大連河により南部にある経済の中心地江南と北部にある首都の大都が結ばれ、これらの交通網によりペルシア湾、インド洋、東アジア、エジプトなどへ交易が広がった
- ・当時、磁器は中国でしか作られず、貴重品であり世界で珍重されていた
- ・磁器は貴重品のため陸路での運搬よりも海上輸送が選んでおり、遠隔地や沈没船からの発掘で世界で発見されていたことがわかる。この海路は《海磁の道》や《海のシルクロード》と呼ばれている
- ・このような交易が東西世界の相互の文化的交流を促進した。アラビア世界(西方)からコリントブルー(藍料)が中国(東方)にもたらされ、染付技術が磁器に用いられるようになった

結論：モンゴルの遺産

- ✓ 元代の磁器「青花」＝白地に青の文様を表した磁器の発展。青花は「青い文様」で、英語では「ブルー・アンド・ホワイト」、日本語では「染付」という
- ✓ 元代には西アジアから輸入されたコプリット顔料が使用されており、この顔料を中国では「回青」または「回回青」(「イスラム圏の青」の意)、日本語では「呉須」という
- ✓ 青花は釉下彩の一種。成形した器をいったん素焼きし、酸化コプリットを含む顔料で器面に絵や文様を描く。その上から透明釉を掛けて高火度で還元焼成すると顔料は青色に発色する
- ✓ 釉下彩の技法は唐時代の長沙窯に先例があるが、元時代の景徳鎮窯から盛んになった
- ✓ モンゴルによる東西交流の世界へ磁器を伝播させ、中国でしか作られなかった磁器がヨーロッパで作られるようになるが、今なおその技術が使われ、この染付技術を伝統的に使用しているのが「マイセン」や「ロイヤルコペンハーゲン」といったブランドである

宋時代は青磁、白磁の名品が数多く生み出された



定窯白磁印花牡丹盤
定窯白磁印花牡丹盤は、宋の時代には名品として知られていた。この盤は、定窯で生産されたもので、牡丹の花を印花で表現している。

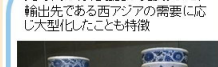


磁器はヨーロッパへ、染付(青花)はブランドの代表的な技術として発展



青花磁器は、宋の時代には名品として知られていた。この磁器は、青花で描かれた花や鳥の文様を特徴としている。

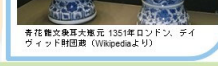
元時代は青花磁器が発展。また、輸出先である西アジアの需要に応じた大型化したことも特徴



青花磁器文様大瓶 元 1351年 ロンドン、ドイツヴィクトリア博物館 (Wikipediaより)



磁器はヨーロッパへ、染付(青花)はブランドの代表的な技術として発展



青花磁器は、宋の時代には名品として知られていた。この磁器は、青花で描かれた花や鳥の文様を特徴としている。



磁器はヨーロッパへ、染付(青花)はブランドの代表的な技術として受け継がれている



青花磁器は、宋の時代には名品として知られていた。この磁器は、青花で描かれた花や鳥の文様を特徴としている。

著者：小柳夢理

29

シルクロード: シルクロードの歴史からツーリズムの起源を考察する

研究テーマ

【陸のシルクロード】

➤ モンゴル帝国やティムール朝がシルクロードをどのように制御し、そこを利用していった商人がどのような行動をとっていたかを研究し、ツーリズムの起源を考察する。

研究結果概要

- ・シルクロードはモンゴル帝国の整備された駅伝網によって発展し、ヒト・モノ・文化の交流が空前の盛況を呈した。
- ・ティムール朝はモンゴル帝国から駅伝網を継承し、シルクロード貿易を通してサマルカンドを文化交差点として繁栄させた。
- ・シルクロード貿易は、軽くて高価な奢侈品(パシ)品(絹製品・威信財)貿易であった。
- ・シルクロードは過酷な自然環境や盗賊などの横行する危険な場所の往来であり、キャラバン隊を編成して安全性を高めていた。
- ・旅の途中で立ち寄る土地には、キャラバンサライ(宿泊施設)が作られ、道中必要になる雑貨や武器などを扱う商人や職人が集まり集っていた。
- ・シルクロードは奢侈品だけではなく、文化や民族、宗教などが融合することによって、人々を魅了する建造物などを後世に残し、今も旅人を魅了している。



キャラバン商人(風の旅行社サイトより)

結論: モンゴルの遺産

- ✓ ティムール朝はモンゴル帝国の整備された駅伝網を継承し、シルクロードを通して文化や民族そして宗教が融合することで更なる繁栄を成し遂げた。
- ✓ その原動力は、今もなお世界遺産として後世に引き継がれ、現在の旅人を魅了している。
- ✓ 近代ツーリズムの始まりは、17世紀から18世紀にかけてイギリス貴族や豊かな上流階級の子弟の学業終了時のヨーロッパ大陸周遊修学旅行と言われている。
- ✓ ツーリズムの定義によると、シルクロードを旅したキャラバン商人や旅人もその定義に該当すると思われるため、ツーリズムの起源はシルクロードにあると考えられる。
- ✓ 観光立国を掲げている日本は、古き良きに時代の建造物を残した上で、キャラバン商人の代替として訪日外国人や在日外国人によって文化や民族そして宗教が融合することで新たな魅力を獲得することができると考えられる。
- ✓ そして観光産業が日本を支える基幹産業へと育成することに繋がる可能性を提言したい。



サマルカンドのレジスタン広場(カフツーリズムサイトより)

著者: 二本柳誠一 30

シルクロード: モンゴル帝国が食文化において近隣諸国及び後世に与えた影響

研究テーマ

➤ モンゴル帝国が食文化において近隣諸国及び後世に与えた影響について、近隣諸国の料理と比較して考察する

研究結果概要

1. モンゴル料理の特徴

- ・乳製品(白い料理)と肉製品(赤い料理)を素材とし、味付けは塩中心で香辛料はあまり使わない料理
- ・昔から羊/牛肉と乳製品中心の料理。富強料理も滋養重視の考え方

2. 周辺諸国料理(ムガル帝国、オスマントルコ帝国)との共通性と相違性

- 共通性: ①塩味調味料、②肉(特に羊肉)が多くスープなどがだしとして味質の向上に貢献、③乳製品が食用/飲料などで多く登場
- 相違性: 周辺諸国料理はスパイス、香辛料、油を多用
- 理由として、①機構、エリア条件の違いからくる相違、②遊牧民/定住民の生活様式の違いからくる相違、③交易ネットワークの活用(海上の道・陸路の道・香料の道)、④宗教的な影響

3. その他諸国に与えた影響

- ・朝鮮半島への肉食文化の普及/料理名への影響(タルタルステーキ、ジンギスカン、等)



出展: 朝日新聞GLOBE+

出展: wasabee.co.jp



出展: VOICE of MONGOLIA

結論: モンゴルの遺産

- ✓ モンゴル帝国の料理は素材が限定されていることや味付けのシンプルさゆえ、料理やメニューに与えた影響は限定的
- ✓ 一方で、征服地への肉食文化の普及や、モンゴルを想起させるような「料理名への波及」など、一定の後世への影響はあるものと推察される

著者: 佐藤力 31

6. フィールドワーク(1)

モンゴル大使館

実施日: 8月20日(火) 15:00~17:00

研究者: 参事官・領事部長(ルンダ・ダワジャルガル)、三等書記官(マイツェグ・シハグドルジ)

フィールドワーク(1) モンゴル大使館



モンゴル大使館訪問

- 面談日時 : 8月20日(火) 15:00~17:00
- 面談者 : 先方2名 参事官・領事部長(ルンダ・ダワ・ジャルガル)、三等書記官(マイツェツェグ・シヘ・ゲドルジ)
当方7名 学部生(高), 大学院生(阿達, 佐々木, 菅沼, 二本柳), 指導教員(金, 平石)
- 意見交換内容: モンゴル帝国設立後の、ティムール朝、ムガル帝国への歴史変遷について
 - ①モンゴル国学校では生徒にどんな歴史を教えているのか?
 - ②シルクロードの役割としてどのような文化交流であったのか? 衰退する時期はあったのか?
 - ③陶器はモンゴル帝国の文化・芸術の発展に寄与したのか?
 - ④徴税の仕組みはあったのか、銀・塩・絹等徴、国に収める仕組みは変わっていったのか?



33

フィールドワーク(1) モンゴル大使館



モンゴル大使館 領事部長(ルンダ・ダワ・ジャルガル氏) 説明コンセプト 2点

1. モンゴルとしてのアイデンティティを歴史に求め向上する

2. モンゴルの歴史をみなさんに理解してもらいたい

フィールドワーク(1) モンゴル大使館



モンゴルから見た歴史認識や多民族国家の特徴など、幅広く学ぶことが出来た

①モンゴルの教育と歴史

義務教育は6歳から15歳まで9年間
歴史教育は社会主義時代と現在で異なる

【社会主義時代の教育】	【現代の歴史教育】
原始共産性	原始時代
資本主義	近世・近代
奴隷制	古代
社会主義	現代
封建制	中世

②モンゴルの歴史研究と日本

日本人は漢字が読めるため、モンゴルの歴史解明が盛んに行われている

モンゴルには遺跡や文献が残っておらず研究も進んでいないが、中国の漢文で記された歴史書に残されている。漢字の読める日本人で歴史解明の研究が進んだ(モンゴル人は漢字を読む文化がない)

③日本人の歴史認識

“モンゴル国”と“内モンゴル”の違い歴史認識不足

モンゴル人が罪を犯した際、日本の法廷は通訳に内モンゴル自治区の人材を採用することがあるが、実際は中国人であり、方言が強く正しい通訳できない。日本の司法の歴史認識が不明確であることに強く憤慨している。

④シルクロードの繁栄と衰退

モンゴル帝国の勢力拡大に伴い地域が安定化し繁栄、元朝の崩壊と共に海路へシフト

チンギス・칸はシルクロードを利用し世界貿易を規制・保護し重要な貿易路として繁栄。元朝の崩壊と共にフビライ・칸の頃、陸路から海路へのシフトが進んだ

35



6. フィールドワーク(2)

中央アジアにおけるテュルク・モンゴル系遊牧諸部族の歴史と現在

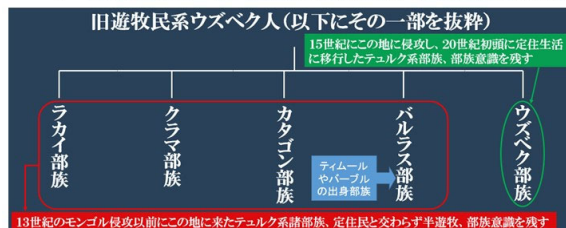
実施日：11月2日（土）16:30～18:00

研究者：和崎聖日（わさき せい）中部大学人文学部准教授

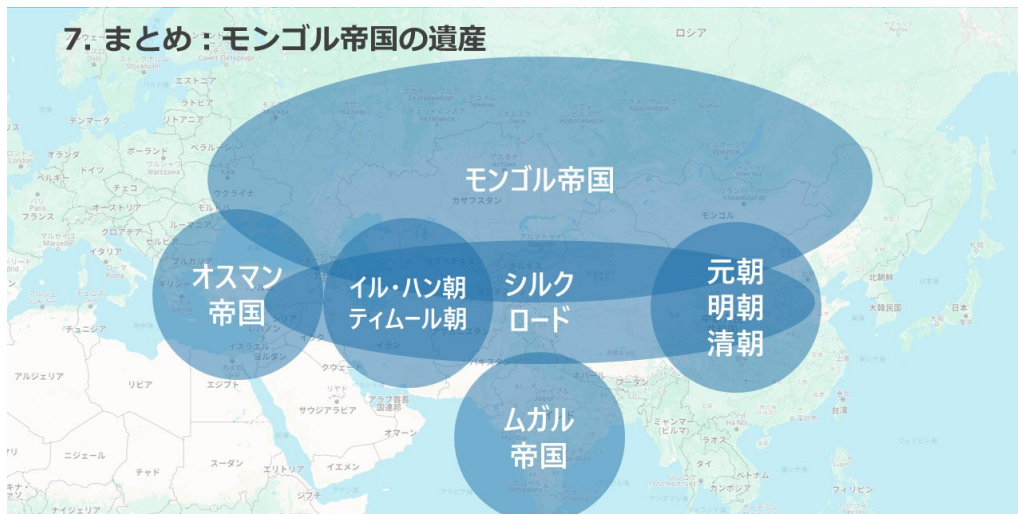
共著『中央ユーラシア文化事典』、『イスラーム文化事典』など

フィールドワーク(2) テュルク・モンゴル系遊牧諸部族の歴史と現在

- 宗教と文化
 - 「 Tengri信仰（シャマニズム）がイスラームに融合
 - 一部でシャマニズムの要素が残存
- 中央アジアの形成
 - 1924年の民族・協定国境界画定でウズベク人などの民族が創出
 - それ以前は宗教と生活様式（定住/遊牧）をもとにして帰属意識
- ウズベク人の特徴
 - 定住民系と遊牧民系に分かれ、部族意識が強い
 - コングラト部族など、モンゴル帝国時代からの歴史を持つ
- イスラーム化の進展
 - 南部定住民は8～9世紀にイスラーム化
 - 北部遊牧民は9～20世紀にかけて改修しシャマニズムの影響が残る



7. まとめ：モンゴル帝国の遺産



モンゴル帝国の遺産を5つの視点から研究し、現代的意義を探究

7. まとめ：モンゴル帝国の遺産

**【シルクロード(陸・海)】
世界貿易**

- モンゴル帝国が可能にした東西貿易路により、モンゴルの文化そのものではなく、**各地の陶磁器・建築・技術・食文化**などが広範囲に伝播した
- (例)中国の陶磁器技術が、現代の欧州の染付に影響を与えた

**【元朝・明朝・清朝】
中国**

- モンゴル帝国の国家戦略であった**宗教・移動・経済の自由が多民族統治を可能にした**
- 今で言う「ダイバーシティ & インクルージョン」といえる

**【ムガル帝国】
インド**

- ムガル帝国のモンゴル帝國的な統治は、ティムール朝の子孫として引き継いだもので、**モンゴル帝国を直接に意識してはいなかった**
- 「ムガル」は北からインド地域への侵入者全般を指す語で、当初「モンゴル」の意味はなかった

**【イル・ハン朝・ティムール朝】
イラン、ウズベキスタン**

- 中央・西アジアでは**16世紀初頭までモンゴル系の政権が続き**、モンゴル帝国流の統治が行われた。モンゴル支配の影響は残ったが、近代以降は薄れた

**【オスマン帝国】
トルコ**

- トルコ民族は、モンゴル帝国を逃れ独自の国家を築いた
- 現代のトルコ文化には、**モンゴル帝国の影響の名残がある**

モンゴル帝国の遺産を5つの視点から研究し、現代的意義を探究

7. 今後の研究課題

ティムール朝

- 紙幣としての塩の取引権価値の下落が与えた影響について(阿達)
- 近代から現代にかけてのイランでは過去のモンゴル系の支配をどうとらえているか(杉)

ムガル帝国

- モンゴル帝国とムガル帝国の政治的影響(佐々木)
- インドの多様な民族性について(須貝)

オスマン帝国

- オスマン帝国の各時代の君主(スルタン)について(倉元)

元朝・明朝・清朝

- 現代中国におけるチベット問題について(菅沼)
- モンゴル帝国の意義における国間の評価比較(禹)
- 現代の中国における清から引き継いだ領土問題(山中)

シルクロード

- 後世に建造物などを残したシルクロードの時代ごとの特徴(二本柳)
- 染付(青花)以外の磁器の世界へ広がりや、有田焼など日本の陶磁器の発展における中国磁器の影響(小柳)

40

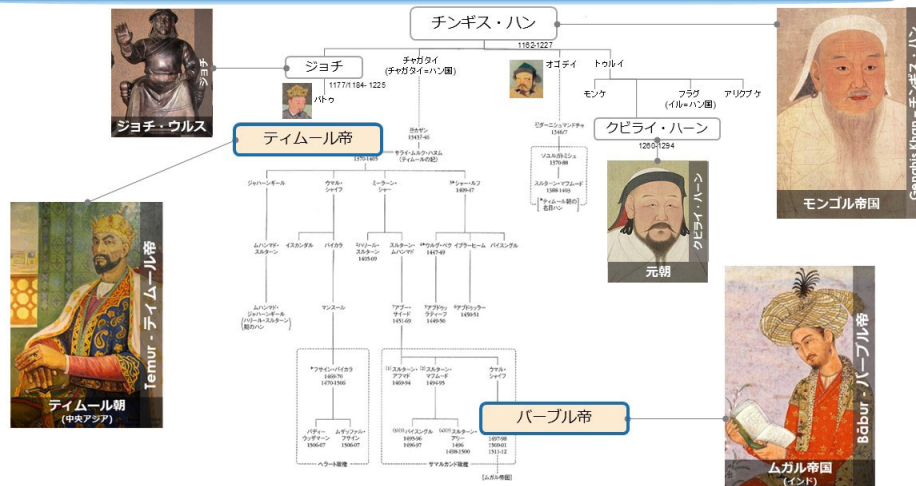
ご清聴ありがとうございました

第16期
インターゼミ(社会工学会)
アジアダイナミズム班

学部生 : 高、吉川
大学院生 : 阿達、禹、倉元、小柳、佐々木
須貝、菅沼、杉、二本柳、山中
佐藤
指導教員 : 金美徳、平石隆司

appendix

モンゴル帝国の血縁：一部抜粋



出所: <https://ethnos.takoff.info/ChingizGnlg.html>

参考文献 -1

【書籍：計72件】

1. Metcalf, Barbara D., Metcalf, Thomas R. 『A Concise History of Modern India 2nd Ed (Cambridge Concise Histories)』 (Cambridge University Press, 2006)
2. 何孝宗 『明朝宗教』 (南京出版社, 2013)
3. 何其敏 『中国明代宗教史』 (人民出版社, 1994)
4. 邱何森 『中国回族史』 (宁夏人民出版社, 1996)
5. 姜公韬 『中国通史・明清史・第二章・明太祖の開国規模』 (九州出版社, 2010)
6. 周慶藩 『伊斯教在中国』 (中文出版社, 2002)
7. 张文德 『明与帖木儿王朝关系史研究』 (中华书局, 2006)
8. 丁毅民 『回回民族的来源和发展』 (宁夏人民出版社, 1983)
9. 陈垣 『元西域人华化考[M]』 (上海古籍出版社, 2000)
10. 荒川正晴 他 『構造化される世界 14～19世紀 (岩波講座世界歴史11)』 (岩波書店, 2022)
11. 荒川正晴 他 『モンゴル帝国と海域世界 12～14世紀 (岩波講座世界歴史10)』 (岩波書店, 2023)
12. 荒川正晴 他 『西アジア・南アジアの帝国 16～18世紀 (岩波講座世界歴史13)』 (岩波書店, 2023)
13. 石濱裕美子 『物語 チベットの歴史——天空の仏教国の1400年』 (中公新書, 45017)
14. 小笠原弘幸 『オスマン帝国 繁栄と衰亡の600年史』 (中央公論社, 2018)
15. 沖本克己・菅野博史編集 『中国文化としての仏教・新アジア仏教史08 中国唐宋元明清』 (佼成出版社, 40422)
16. 沖本克己・福田洋一編集 『須弥山の仏教世界・新アジア仏教史09 チベット』 (佼成出版社, 40269)
17. マルコポーロ・愛宕松男訳 『東方見聞録』 (平凡社, 2000)
18. 愛宕松男・寺田隆信 『モンゴルと大明帝国』 (講談社, 1998)
19. 幸島昇 他 『南アジア史 (新版世界各国史 7)』 (山川出版社, 2004)
20. 川口琢司 『ティムール帝国』 (講談社, 2014)
21. 菊池秀明 『越境の中国史——南からみた衝突と融合の300年』 (講談社, 2022)
22. 木谷勤 『帝国主義と世界一体化 世界史リフレット40』 (山川出版社, 1997)
23. 木下光弘 『中国の少数民族政策とポスト文化大革命——ウランフの「功績」と華国録の知られざる「功績」』 (明石書店, 44228)
24. 久保一之、木村暁、井上治 『ポスト・モンゴル期』 (山川出版社, 2018)
25. クロー、アンドレ 『イスラーム文化叢書 3 ムガル帝国の興亡』 (法政大学出版局 杉村裕史訳, 2001)

参考文献 -2

26. 黒田勝彦、小林ハッサル柔子『文明の物流史観』（成山堂書店、2021）
27. ゲーテ、J.W.『西東詩集』（岩波書店、1962）
28. ツルティム・クサン、正木晃『増補チベット密教』（ちくま学芸文庫、39569）
29. 小磯千尋・小磯亨『世界の食文化 インド』（農文社、2006）
30. 小長谷有紀『世界の食文化 モンゴル』（農文社、2005）
31. 小長谷有紀『アジア統本 モンゴル』（河出書房新社、1997）
32. 小林亮介『近代チベット政治外交史——清朝崩壊にともなう政治的地位と境界』（名古屋大学出版会、45323）
33. 小松喬織『オスマン帝国の海運と海軍』（山川出版社、2020）
34. 小松久男 他『新版世界各国史4 中央ユーラシア史』（山川出版社、2000）
35. 坂本勉『未完のトルキスタン国家』（講談社、1996）
36. 沢田勲『匈奴 古代遊牧国家の興亡』（東方書店、1996、2015）
37. 白石典之『チンギス・カンとその時代』（勉誠出版、2015）
38. 杉山正明『遊牧民から見た世界史』（日本経済新聞社、1997）
39. 杉山正明『モンゴル帝国と長いその後 興亡の世界史 第9巻(2008)、講談社学術文庫(2016)』（講談社、2008、2016）
40. 杉山正明『『騎どの』たちのユーラシア』（講談社、2016）
41. 杉山正明『興亡の世界史 モンゴル帝国と長いその後』（講談社学術文庫、2016）
42. 杉山正明『モンゴル帝国の興亡(上、下)』（講談社、35205）
43. 杉山正明『モンゴルが世界史を覆す』（日本経済新聞社、2006）
44. 杉山正明『陸と海の巨大帝国 大モンゴルの世界』（角川選書227、1992、1998）
45. 鈴木董『世界の食文化 トルコ』（農文社、2003）
46. 陳舜臣『世界の都市の物語 イスタンブール』（文春文庫、36039）
47. 寺島実郎 総監修『モンゴル帝国とユーラシア史: 社会人・大学院生・学生の目線からのグローバルヒストリー（多摩大学インターゼミ教育研究業績シリーズ）』（多摩大学出版会、2023）
48. 寺島実郎『人間と宗教——あるいは日本人の心の基軸』（岩波書店、44501）
49. 寺島実郎『大中華圖』（NHK出版、2012、2024）
50. 永田健三『西アジア史 II 新版 世界各国史9』（山川出版社、2022）

45

参考文献 -3

51. ジャワーノリル・ネルー『父が子に語る世界史3 ルネサンスから産業革命へ』（みすず書房 大山轉訳、2002）
52. 野田仁『露清帝国とカザフ＝ハン国』（東京大学出版会、2011）
53. 白寿彝『元代回教人と回教』（宁夏人民出版社、1983）
54. 羽田正『イラン史』（山川出版社、2020）
55. P.N.チョプラ『インド史』（法蔵館 三浦愛明訳、1994）
56. 平野聡『清帝国とチベット問題——多民族統合の成立と瓦解』（名古屋大学出版会、38169）
57. 平野聡『大清帝国と中華の混迷』（興亡の世界史 第17巻）講談社、39356）
58. 弓明道『伊斯坦対中華文化之影響』（台湾中国文化大学出版、1982）
59. 松下薫一『中華を生んだ遊牧民 鮮卑拓跋部の歴史』（講談社、2023、2024）
60. 間野英二『世界史リフレット人⑧ パープルムガル帝国の創設者』（山川出版社、2013）
61. 間野英二『パープル・ナマの研究1校訂本』（松書堂、1995）
62. 三上次男『陶磁の道—東西文明の接点をたずねて—』（岩波書店、25416）
63. 三上次男 他『出光コレクションの名品から 陶磁の道』（出光美術館、36617）
64. 三杉隆敏『マイセンへの道 東西陶磁交流史』（東書道書、33878）
65. 森安孝夫『シルクロード世界史』（講談社、2020）
66. 安田巨宏『インバウンド実務主任者認定試験公式テキスト』（一般財団法人全日本情報学習振興協会、2021）
67. 山川徹『カルピスを作った男』（小学館、2018）
68. 橋本中『伊斯坦と中国文化』（宁夏人民出版社、1995）
69. 李德海等編寫組『回族通史』（宁夏人民出版社、1978）
70. 歴史学研究会『世界史史料2 南アジア・イスラーム世界・アフリカ』（岩波書店、2009）
71. フランシス・ロビンソン『ムガル皇帝歴代誌インド、イラン、中央アジアのイスラーム諸王国の興亡』（創元社 月森左知訳、2009）
72. 早稲田大学モンゴル研究所(編)『モンゴル史研究——現状と展望』（明石書店、2011）

46

参考文献 -4

【論文: 計42件】

1. Gier, Nicholas F. 『From Mongols To Mughals: Rreligious Violence In India 9th-18th Centuries』(University of Idaho、2006)
2. Gopal, Mohan 『India & Mongolia in the Middle Ages – More Than Just a Connection』(Ancient History of Asian Countries, p56-60., 2019)
3. 姚大力『元朝在中国 历史上的意义』(、2018)
4. 張文德『明与中亚帖木儿帝国的礼仪往来』,西域研究, p.9-39、2005(3))
5. 乌云高娃『元朝統一多民族国家治理及启示』(中国社会科学报. 第2401期、2022)
6. 張文德『论伊斯兰教对中亚帖木儿王朝的影响』(贵州师范大学社会科学学报. p44、1995)
7. 薄音湖『北元与明代蒙古』(内蒙古大学学报. 第1期、1994)
8. 方鉄『蒙元经营西南边疆的统治思想及治策』(中国邊疆史地研究 12卷1期. p15-23、2002)
9. 姚建榮『明代西北马政机构置废考』(青海师范大学学报. 第2期、1993)
10. 井谷綱造『トルコ民族の活動とモンゴル支配時代』(山川出版社、『イラン史』p.47-105、2020)
11. 小笠原弘幸『オスマン王権とその正統性——血統』(岩波書店、岩波講座世界歴史 13『西アジア・南アジアの帝国 16～18世紀』、2023)
12. 川口琢司『キプチャク草原とロシア』(岩波書店、岩波講座世界歴史 11『中央ユーラシアの統合—9～16世紀』p.275-302、1997)
13. 川口琢司『カラチュの時代—ティムール朝を中心に』(岩波書店、岩波講座世界歴史 10『モンゴル帝国と海城世界——二～四世紀』p.295-311、2023)
14. 久保一之『ティムール朝とその後——ティムール朝の政府・宮廷と中央アジアの構造』(岩波書店、岩波講座世界歴史第11『中央ユーラシアの統合—9～16世紀』p.147-176、1997)
15. 小倉汪之『ムガル帝国とマラーターの時代』(山川出版社、新版世界各国史7『南アジア史』p.232-272、2004)
16. 後藤裕加子『サファヴィー朝後期のシャーの移動と統治の都』(人文論究, vol. 64, no. 2, page. 29-57、2014)
17. 小松喬織『海運資料に見るオスマン帝国末期の社会変容』(イスラーム地域研究ジャーナル Vol. 5、2013)
18. 近藤信彰『サファヴィー帝国におけるシーア派法統の形成』(岩波書店、岩波講座世界歴史 13『西アジア・南アジアの帝国 16～18世紀』、2023)
19. 近藤信彰『近代イランにおけるデュルルの過去の参照』(山川出版社、新版世界各国史9『西アジア史 II』p.107-120、2023)
20. 島田竜登『構造化される世界——グローバル・ヒストリーのなかの近世』(岩波書店、岩波講座世界歴史 11『構造化される世界 14-19世紀』p.3-62、2022)
21. 志茂碩敏『モンゴルとパルシア語史書——遊牧国家史研究の再検討』(岩波書店、岩波講座世界歴史 11『構造化される世界 14-19世紀』p.249-274、1997)
22. 新藤義彦『モンゴル・タタールのロシア支配』(アジア研究紀要 4(1977年)、p.129-150、1977)
23. 杉山正明『中央ユーラシアの歴史構図』(岩波書店、岩波講座世界歴史 11『構造化される世界 14-19世紀』p.3-89、1997)
24. ソワフ、リュック・デ、岡美穂子『奴隷たちの世界史』(岩波書店、岩波講座世界歴史 11『構造化される世界 14-19世紀』p.131-160、2022)
25. 中見立夫・濱田正美・小松久男『中央ユーラシアの周縁化』(山川出版社、『中央ユーラシア史』p.143-p.173、2000)

47

参考文献 -5

26. 羽田正『ペルシア語文化圏の形成と変容』(山川出版社、「イラン史」p.106-159、2020)

27. 濱田正美『中央ユーラシアの「イスラーム化」と「テュルク化」』(山川出版社、「中央ユーラシア史」p.277-p.341、2000)

28. 林佳世子『西アジア・南アジアの近世帝国』(岩波書店、岩波講座世界歴史13『西アジア・南アジアの帝国—16～18世紀』、2023)

29. 藤田勉『米国とイランの対立が激化する歴史的背景』(公益財団法人資本市場研究会「月間資本市場」2020-2 p. 60-67、)

30. 堀川敏『モンゴル帝国とティムール帝国』(山川出版社、中央ユーラシア史 p.174-p.244、2000)

31. 真下裕之『ムガル帝国における国家・法・地域社会』(岩波書店、岩波講座世界歴史10『モンゴル帝国と海域世界—12～14世紀』p.115-148、)

32. 真下裕之『16世紀前半北インドのMug(・Jul)について』(東方学報 京都第72冊 : 738-720頁、2000)

33. 松田孝一『モンゴル帝国の統治制度とウルス』(岩波書店、岩波講座世界歴史10『モンゴル帝国と海域世界—12～14世紀』p.77-106、2023)

34. 宮原辰夫『北インドにおけるイスラーム諸王朝とその建築物—デリー・スルターン朝末期とムガル帝国初期を中心に—』(文教大学国際学部紀要第26巻1号 p.85-117、2015)

35. 森達也『ユーラシア世界の中国陶磁流通』(岩波書店 岩波講座世界歴史10『モンゴル帝国と海域世界—12～14世紀』p.279-294、2023)

36. 守川知子『サファヴィー朝支配下の聖地マシュハド：一六世紀イランにおけるシーア派都市の変容』(京都大学文学部、史学研究会「史料」80-2 p.167-207、1997)

37. 矢崎正見『チベットに対する元朝の宗教政策』(立正女子大学短期大学部 研究紀要 第14集 p.56-64、2012)

38. 矢沢知行『モンゴル元朝治下の江南地域社会をめぐる諸論点』(愛媛大学教育学部紀要 第62巻 2 4 5～2 5 3、2015)

39. 山崎岳『アジア海域における近世的国際秩序の形成——一四・一五世紀の危機と再生』(岩波書店、岩波講座世界歴史11『構造化される世界—14～19世紀』p.163-182、2022)

40. 山下範久『一四—一五世紀における「パワースポリティクス」——ポストモンゴルから自由主義的国際秩序までの帝国間関係の変容』(岩波書店、岩波講座世界歴史11『構造化される世界—14～19世紀』p.63-96、2022)

41. 吉澤智也『記憶の経験値として生きるソフト・パワーの展開—21世紀のバクス・モンゴリカを求めて—』(日本国際情報学会誌 2巻1号 p.31-33、2017)

42. 四日市康博『ユーラシア・海域世界の東西交流におけるモンゴル・インパクト』(岩波書店 岩波講座世界歴史10『モンゴル帝国と海域世界—12～14世紀』p.40-76、2023)

参考文献 -6

【Web: 計8件】

1. 趙然『14世紀におけるモンゴル帝国の食文化の高麗への流入と変化』(https://www.aist.or.jp/sgra/wp-content/uploads/2017/03/9.%ef%bc%bbj%ef%bc%bdtranslation_Kokushi2_Summary_ChoWon%ef%bc%88%e8%b6%99%e9%98%ae%ef%bc%89.pdf) 最終閲覧日:2024.12.1

2. National PR-centre『キャラバンサライバトマリック』(https://uzbekistan.travel/ja/o/%E3%82%AD%E3%83%A3%E3%83%A9%E3%83%90%E3%83%B3%E3%82%B5%E3%83%A9%E3%82%A4%E3%83%A9%E3%83%90%E3%83%88-%E3%83%9E%E3%83%AA%E3%82%AF/) 最終閲覧日:2024.11.19

3. World Public Economy Organization『シルクロード』(https://wpeo.ngo/ja/silk-road/) 最終閲覧日:2024.11.19

4. Wikipedia『タルタルステーク』(https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%Bf%E3%83%AB%E3%82%Bf%E3%83%AB%E3%82%B9%E3%83%86%E3%83%BC%E3%82%AD) 最終閲覧日:2024.12.1

5. Wikipedia『ティムール帝国の地図』(https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Timurid_Empire_Map.png#/media/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Timurid_Empire_Map.png) 最終閲覧日:2024.12.1

6. Wikipedia『中国の陶磁器』(https://ja.wikipedia.org/wiki/) 最終閲覧日:2024.09.09

7. タビノート『観光とツーリズムの違いとは』(https://tabinoto.jp/column/article/00131493#google_vignette) 最終閲覧日:2024.11.15

8. 風の旅行社『河西回廊 西安とシルクロード石窟寺院14日間』(https://www.kaze-travel.co.jp/sr-sp-gs-01.html) 最終閲覧日:2024.11.19

年間スケジュール 春学期

回	日付	議題	発表者	文献調査・フィールドワーク	備 考	議事録担当
1	2024/4/13	・自己紹介 ・今年度テーマ方向性			・春学期スケジュール確定 ・参考文献) モンゴル帝国と長いその後	
2	2024/4/20	・参考資料を読んだ問題意識発表(1)	杉、二本柳、佐々木	モンゴル帝国と長いその後	・メンバー確定	杉
3	2024/4/27	・ゼミ長・副ゼミ長確定 ・問題意識発表(2)	菅沼、阿達、小柳、高、馬	モンゴル帝国と長いその後	・連絡用Classroom作成 (須貝) ・共同作業用Google Drive設定 (杉) ・過去資料共有 (杉)	須貝
4	2024/5/11	・問題意識発表(3)	山中	モンゴル帝国と長いその後	・研究計画発表準備開始 (ゼミ長・副ゼミ長)	小柳
5	2024/5/18	・問題意識発表(4) ・研究計画発表へ向けたスケジュール共有	須貝 二本柳	モンゴル帝国と長いその後	・役割分担確定	二本柳
6	2024/5/25	・問題意識集約 ・テーマ案検討	ディスカッション			佐々木
7	2024/6/1	・テーマ案確定 ・フィールドワーク案確定 ・発表資料骨子検討	〃			高
8	2024/6/8	・研究計画発表資料確定 (最終調整) ・発表リハーサル	〃	・大使館訪問調整 ・研究者インタビュー調整	・発表役割&予演日程確定	倉元
9	2024/6/15	・研究計画発表				佐々木
10	2024/6/22	・中間発表準備	ディスカッション	個人テーマ研究報告	大使館訪問・研究者インタビュー調整	阿達
11	2024/6/29	・中間発表準備	杉、倉元、	〃	〃	菅沼
12	2024/7/6	・中間発表準備	菅沼	〃	〃	馬
13	2024/7/13	・中間発表準備	山中、佐々木 二本柳、高	〃	〃	山中
14	2024/7/20	・中間発表準備	阿達、馬	〃	〃	須貝
15	2024/7/27	・中間発表準備	須貝、小柳	〃	〃	小柳
16	2024/8/29-30	・合宿・中間発表				二本柳

年間スケジュール 秋学期

回	日付	議題	発表者	文献調査・フィールドワーク	備考	議事録担当
1	2024/9/21	・自己紹介 ・春学期成果共有	全員 二本柳		秋学期スケジュール確定 最終メンバー確定	二本柳
2	2024/9/28	・追加メンバー問題意識発表	佐藤	個人テーマ研究報告	インタビュー調整	佐々木
3	2024/10/5	・進捗報告／論文作成	高、須貝	"		高
4	2024/10/12	・進捗報告／論文作成	小柳、倉元	"		倉元
5	2024/10/26	・進捗報告／論文作成	山中、菅沼、吉川	"		阿達
6	2024/11/2	・研究者インタビュー ・論文作成	全員	フィールドワーク	和崎聖日先生（中部大学）	菅沼
7	2024/11/9	・進捗報告／論文作成	阿達、杉、禹	個人テーマ研究報告		禹
8	2024/11/16	・発表資料検討 ・進捗報告／論文提出	佐々木、二本柳、佐藤	"	論文提出 11/16_15:00格納	山中
9	2024/11/30	・発表資料完成 ・論文調整	全員		発表資料 11/22_24:00格納 予演実施	杉
10	2024/12/7	・最終発表日 ・論文調整	全員 会場：九段下		発表資料 12/5_12:00提出 発表時間：7分 質疑応答：5分	須貝
11	2024/12/14	・Active Learning発表祭	全員 会場：多摩大学		発表時間：0分 質疑応答：0分	小柳
12	2024/12/21	・年内論文提出	全員 会場：九段下		論文提出 12/21_18:00提出（12/20提出完了） 論文最終調整（平石先生一休裁整え・内容精査）	高
13	2024/1/11	・論文最終調整	全員		論文最終調整（平石先生一各自へフィードバック） 1/11～1/23個人調整	倉元
14	2024/1/25	・論文最終提出 ・懇親会17:00～	全員		論文提出 1/25_16:00提出（1/24提出完了）	ー

2

THANK YOU



52

執筆担当

表 9 執筆担当

目次	執筆担当
はじめに	菅沼孝陽
第Ⅰ部 モンゴル帝国とティムール朝	—
第1章 モンゴル帝国からティムール朝に至る統治システム変遷	阿達敏洋
第2章 中央・西アジアにおけるモンゴル系の支配と現代イランへの影響の有無	杉由紀
第Ⅱ部 モンゴル帝国とムガル帝国	—
第1章 ムガル帝国創設者バーブルから見るインドとモンゴル帝国	佐々木真友美
第2章 宗教政策から見るムガル帝国の繁栄と衰退	高秀柄
第3章 モンゴル帝国がムガル帝国に与えた影響	須貝直行
第Ⅲ部 モンゴル帝国とオスマン帝国	—
第1章 モンゴル帝国から逃げて小アジアにできたオスマン・トルコの繁栄と海運	倉元貴子
第2章 オスマン帝国の起源と衰退及び文化形成	吉川侑希
第Ⅳ部 モンゴル帝国と中国	—
第1章 中国から見るモンゴル帝国の遺産	禹幸玉
第2章 モンゴル帝国と清朝共通の統治理念としてのチベット仏教	菅沼孝陽
第3章 モンゴル帝国の軍事力・経済政策が後世に与えた影響	山中眞太郎
第Ⅴ部 モンゴル帝国とシルクロード	—
第1章 モンゴル帝国の交易ネットワークと陶磁器の発展	小柳愛理
第2章 シルクロードの歴史から見るツーリズムの起源	二本柳誠一
第3章 モンゴル帝国の食文化	佐藤力
おわりに	菅沼孝陽
フィールドワーク記録	—
フィールドワーク(1): モンゴル大使館	阿達敏洋
フィールドワーク(2): 中央ユーラシアにおけるテュルク・モンゴル系遊牧諸部族の歴史と現在	須貝直行

謝辞

最後に、本論文を作成するにあたり、インターゼミ主宰の寺島実郎学長をはじめとする多くの先生方、卒業生より、毎回のゼミにおいて高い視座と広い視野から多くの助言をいただきました。

アジアダイナミズム班の指導教員である金美德教授、平石隆司特命教授には、テーマ設定から文献研究、論文執筆に至るまでの研究の大きな指針と共に、モンゴル帝国史のみならず、アジア・ユーラシア史およびグローバル・ヒストリーから紐解く現代的意義、現代に生きる私たちが持つべき視座についてきめ細かい指導をいただきました。

この場を借りて、本論文を執筆するにあたりご協力いただいた全ての皆さまに感謝の意を表します。誠にありがとうございました。

2025 年 1 月 25 日

多摩大学インターゼミ(社会工学研究会)アジアダイナミズム班一同

以上